R813.4
Ka57a
(7)

始

R
8134
KA57

簡野道明 著

增修 故事成語大辭典

東京 明治書院

大正
1.10.9
内交

序

古文

我[illegible]揭[illegible]而[illegible]而[illegible]陸[illegible]
[illegible]曰[illegible]讀[illegible]陸[illegible]義
[illegible]而[illegible]而[illegible]而[illegible]而[illegible]觀典[illegible]
[illegible]而[illegible]林料[illegible]閑[illegible]而[illegible]

復讀百回也又云本
於漢書六字一探杜詩
雲漢也破萬卷如吾
神筆是教曰杜子美
至寶之法在是矣

嘗六人稱杜詩韓文無
一字沒來歷也以我
讀之始買三家村國文
經義之俗讀之指爲上
爲用讀法有爲不博通

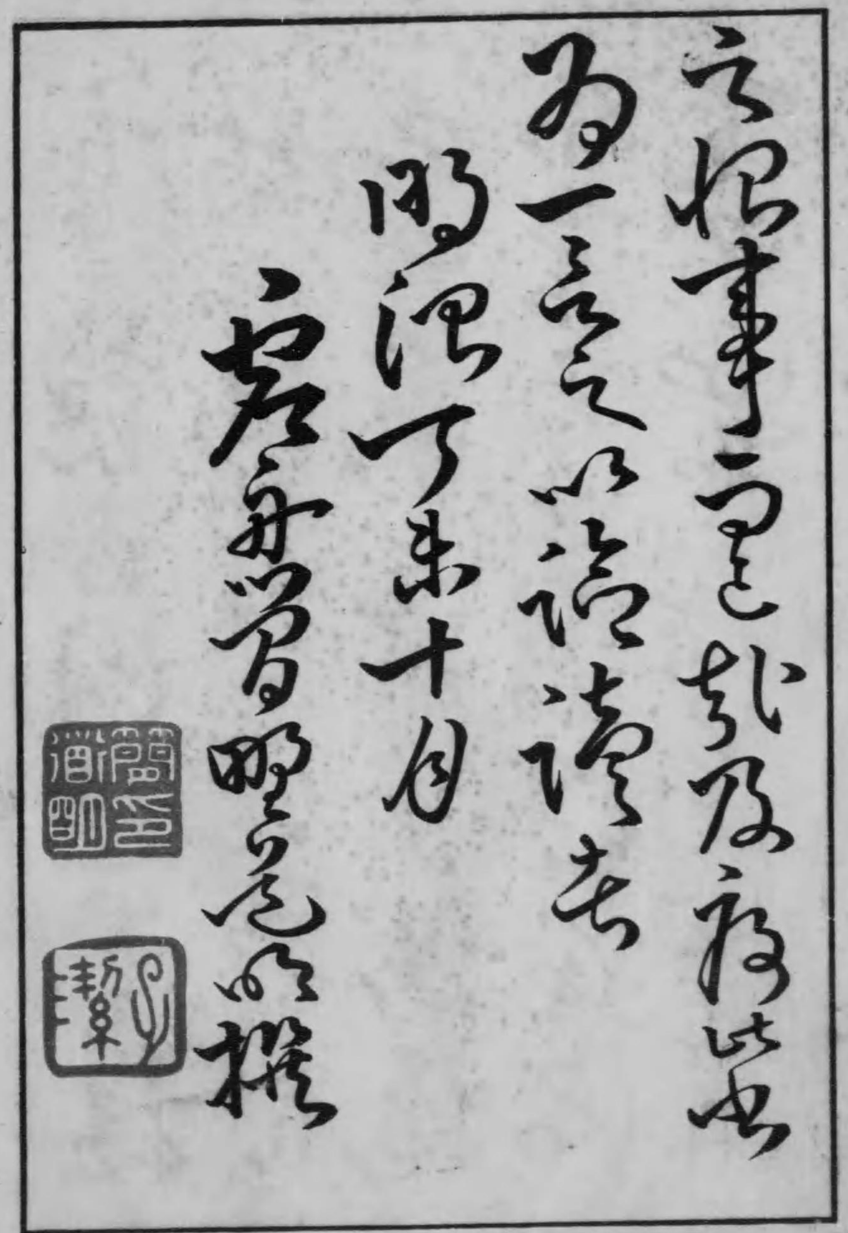
濂洛關閩諸儒輩出
知所以化人之理
托先儒白石鵝湖之
說而作忠文仍復之
弓冠之求或家藏文抵

生徒家多無能知之
生知者無能一貫學業
文之淵深學問之高
可以未學科舉成生徒
而能專用力於此亦

故之和化之文以日篇義
孫之源性也乃不揮
播味與二子和集
然只作生事勉出切
子集注二字每篇一

所指之戒云何
僧以不修習不切世務
僧安如安樂加之色衰用
一切後來不識諸之迦
此和須陀洹者之所文

意云觀者固強不是指
當來法中之法強和尚
和尚以決陀羅尼猶
不第四之法四法
乃至和尚強法義耳



増修故事成語大辭典發行について

本書一たび世に出でてより、幸に大方の激賞を辱うし、通邑大都に論なく、十室の邑三家の村に至るまで、普く本書の流傳を見ざることなきに至りしは、予の深く光榮とするところなり。爾來六星霜、予はこの光榮を失墜せざらんことを期し、夙夜本書の修補に盡瘁して、維れ日も足らず、新に增補すべき原稿、裒然として積みて山を成すに至れり。されども悉く之を網羅して刊行せんか、印刷校正のみにても、多くの歲月を費さざるべからず。かくては讀書子が焦眉の急需に應ずる能はざるの憾あり、遠水の近火を救ふこと能はず、巧遲の拙速に若かざる所以を思ひ、今姑く其中に就きて、必須の成語

凡五千を甄擇して、拾遺中に加へ、増修故事成語大辭典と題し、茲に重刊して以て大方垂眷の盛意に答へんとす。若しそれ自ら揣らず、集めて本書の大成を期せんことは、更に拮据努力して數年の後を竢たんとす。

大正元年十月

例言

一歐陽永叔が、作文三多の訣を說くや、看多を以て第一に置きしものの、その平生讀書に勤めたるを知るべし。而かもなほ、歐九不甚讀書の譏を免れ得ざりき。古來文籍の多き、浩として煙海の涯涘なきが如し、一一博渉して、其の淵源を窮めんことは、豈容易の業ならんや。是に於てか歷代類書韻書の選あり、以て操觚者の用に供す。其の書の主なるもの、唐に藝文類聚・北堂書鈔あり。宋に太平御覽・册府元龜・事文類聚・玉海あり。明に山堂肆考・三才圖會、清に淵鑑類函・子史精華・佩文韻府等ありと雖も、いづれも皆卷帙浩瀚にして、人人の力購ひ致し易からず。縱令、致し得るも、蒙士は之を讀むに苦む。讀むに苦むと、致し易からざるとは、初より書なきと何ぞ擇ばん、これ本書の世に出づる所以なり。

一本書、收むる所ろの故事成語は、天文・歲時・地輿・職官・政治・禮制・音樂・

人倫・文學附文具・學術・武功・兵器・人品附形體・人事・閨閣・交際・技藝・釋道・靈異・飲食・寶貨・衣服・器用・宮室より、花木竹石・禽獸蟲魚等に至るまで、苟くも支那文學に關渉せるものは、徧く之を網羅し、兼て主要なる經史子集の解題と、傑出せる文人墨客の事畧とを撰錄したり。

語句の排纂は、五十音順に從ひ、且つ音訓ともに、すべて從來の假名遣法に準據せり。卷末別に頭字の總畫によりて引くべき字畫索引を添へたり。

一本書、稿を起してより茲に七星霜、博觀約取、夙夜覃精せしと雖もなほ檢尋の未だ遍からず、校讎の未だ精からざるものもあらん。將に他日を期して重訂增補するところあらんとす。讀者幸に之を諒せよ。

明治四十年十月

字音略表

（本書檢索上特に誤り易きもののみを示す）

アフ 押狎鴨 凹

オウ 歐嘔鷗甌謳 應

ヲウ 嫗溫 甕 翁滃蓊 泓

ワウ 王枉汪往旺 皇凰 黃横

アウ 奥襖燠 媼 央泱殃鞅盎鴦 鴦鸚櫻罌 鏖

エン 燁曄 葉

エウ 幺幼窈 窅 杳 夭妖殀 要腰 遙搖謠 姚陶 曜耀

ヨウ 用甬俑傭踊 容溶蓉榕 雍擁饔 邕雝 癰 鷹膺 蠅 孕 媵

ヤウ 陽揚楊暘煬瘍颺 羊佯洋痒養恙樣 瓔

カフ 合蛤閤袷洽恰 盍闔 甲匣狎 峽

コウ 口扣叩勾苟拘狗鉤駒 后垢鉤 孔吼 工江扛杠肛紅虹疋訌功攻貢鴻 公 洪 閧 倥控崆 後 寇 厚 侯喉 興 溝篝 姮恒肯 弘 彀

クワウ 光洸恍晃滉 皇湟惶徨遑蝗篁 黃廣 潢簧横 壙曠 獷纊 荒 宏閎 轟 嶸 盲

カウ 高槁稿 蒿 篙 皜 縞 藁 毫 豪 膏 告浩皓誥 敖傲 嗷 聱 鼇 羔 餻 羹 皐 槔翱 皐好 號 耗 昊 顥 杲 暠 岡剛綱 鋼 庚康慷糠 亢伉沆吭抗坑阬航 骯 仰昂 向 香 衡行荇桁 更哽梗 硬鯁 享 幸倖悻 耕 耿 鏗 墝磽 硜 肴 殼 膠轇 爻 夾 佼咬效劾狡絞 郊校挾較鮫 考孝 巧 虛 降絳 慕

キヤウ 匡筐 狂俇誑 況恍晃 强襁繦 彊疆 薑 鄉嚮響 姜 享 行 竟鏡 杏

キヨウ 共供拱恭蛬 興 恐蛩 興 矜 喝 凝 凶兇匈胸

ケウ 喬僑嬌橋矯轎 堯澆曉 翹驍 敎 竅 徼 繞

ケフ 夾俠挾狹莢鋏頰愜篋 脅協 業

サウ　早阜皂草　造慥　曹漕糟遭　操燥澡藻
　　譟　蚤搔騷　嫂艘　竈　棗　掃　倉創蒼
　　傖滄槍瘡蹌　臧藏贓　桑顙　壯莊妝裝
　　葬　爪爭筝諍　相想箱霜廂孀　巢勦
　　雙
ソウ　窗聰聰總　忽葱　宋　宗崇淙綜　走送
　　奏湊腠輳　叟廋瘦　藪　叢　漱嗽　曾
　　僧增層憎楢甑蹭贈繒
サフ　雨挿　雜　匝
○
シヤウ　章障彰樟　昌倡娼唱菖猖猩圖　尚徜敞
　　嘗裳賞商常掌　將奬漿蔣醬　牆薔　庠
　　祥詳翔　匠　餉　上　傷瘍觴　相湘
　　情精（漢音セイ）晶　襄瀼壤穰讓釀　象　猩
　　城　狀　淨
シヨウ　鍾踵衝鐘　從慫縱蹤　舂惷　松鼜頌
　　仍　冗　承誦　稱勝證　茸　耗　悚
　　竦乘　剩　升昇　丞拯烝蒸　澠繩
セウ　召招沼邵昭照韶紹詔　小少抄鈔肖峭
　　哨消悄梢稍硝宵逍蛸霄銷　焦僬噍憔
　　蕉樵燋譙醮　鷦　笑　椒　擾　燒蕘繞饒
セフ　蕭簫嘯瀟蟭
　　妾接　攝囁懾　捷婕睫　摺慴　渉　浹
　　燮　葉　囁
○
タウ　刀叨忉　滔稻韜　濤擣檮禱　陶淘萄
　　唐塘糖饄　堂瞠螳　棠當黨儻　桃逃　到
　　倒　悼棹　道導　湯蕩盪　丁　宕　討
　　嗷　啁　啁　島　撓　饕　戀　纛
タフ　答塔　沓踏　納（一音ナフ）　搨躡
トウ　東凍棟　童僮潼撞幢瞳　同洞恫桐筒銅
　　動慟　通桶　冬　擊　彤　統　董　豆荳
　　逗頭鬪　透　兜　寶　投　殺　抖　登橙燈
　　磴鄧鐙　滕藤謄騰藤　等　偸　踰
○
チヤウ　長倀悵帳張脹漲　丈杖杖　場暢腸　鬯
　　剌　娘　頂　町　聽　鄭（以上四字漢音テイ）
チヨウ　重　冢塚　寵　澄　徵懲
テウ　兆佻挑誂晁寵眺　岩迢超貂髫　凋彫蜩
　　調雕鵰　朝潮　鳥蔦　嶋　趙　弔　刁　肇
　　釣　糶　蝶
テフ　喋蹀牒蝶　沾帖貼　疊

ナウ　囊　惱腦瑙碯
ナフ　納衲（二字漢音ダフ）
ノウ　能　農濃
○
ハウ　方仿彷防妨坊放芳房昉訪舫髣　旁滂
　　搒榜磅謗　亡妄忘忙芒茫邙氓　包抱泡
　　庖　怠胞袍鮑飽　保堡葆　寡褒　賓　報
　　邦梆　尨厖　彭澎　棚萌　望　暴　冒帽
　　烹　眈旄　鴇　蚌　茅　卯　貌　甍
ハフ　法　乏
ホウ　逢峯烽蓬篷蜂鋒縫蠭封　封　奉俸捧棒
　　鳳　龐　豐　蠭　剖掊部（一音ア）　牟眸　矛
　　蝨　謀　抔　朋崩繃鵬　蠭　泛（一音ハン）　貿
　　戀（漢音ハウ）　賵
○
ヒヤウ　平評　病屏（四字漢音ヘイ）
ヒヨウ　冰　馮　憑
ヘウ　票僄剽摽漂標熛瘭標縹瓢飄　杪秒眇
　　渺　猋飈　豹　表　淼　苗　廟　麃　儦　瀌
　　藐邈（以上二字一音バク）

マウ　孟猛　罔網輞魍　毛　盲　妄　莽（以上二字漢音バウ）
モウ　蒙濛朦曚艨
○
リウ　流琉旒　留溜雷騮　柳　隆　龍（一音リヨウ）
リフ　立笠粒
○
ラウ　浪狼琅閬　郎朗廊瑯　老　勞　牢　潦
　　醪
ラフ　臘蠟躐　蠟
ロウ　隴攏櫳瓏籠聾　聾　樓　蔞　瘻　螻　髏　弄
　　漏　陋
○
リヤウ　良粮　量糧　梁粱　涼掠諒　兩魎　亮
　　領（漢音レイ）
リヨウ　龍（リウ又リユウ）　凌陵稜（一音ロウ）　菱蔆
レウ　僚寮燎遼療鷚　了　料　聊　寥蓼
レフ　獵躐（一音ラフ）　鬣

増修故事成語大辭典目次

ア……一　イキ……二　ウ……七七　エエ……九五　オヲ……一一二　カ……一一三　キ……二〇七　ク……二六六　ケ……三三〇　コ……三七〇　サ……四三〇　シ……四七九　ス……六〇〇　セ……六〇九　ソ……六八〇　タ……七〇七　チ……七七〇　ツ……八二三　テ……八五五　ト……八九一　ナ……九三一　ニ……九四六

ネ……九五九　ノ……九六〇　ハ……九六六　ヒ……九六九　フ……一〇四七　ヘ……一〇九四　ホ……一一五六　マ……一一八三　ミ……一二四四　ム……一二五六　メ……一二六三　モ……一二八二　ヤ……一二九七　ユ……一三一八　ヨ……一三五六　ラ……一三八一　リ……一三八三　ル……一四五六　レ……一四九五　ロ……一四七九　ワ……一四九四

拾遺

ア……一五九　イキ……一五二九　ウ……一五四四　エエ……一五四九　オヲ……一五九九　カ……一五六二　キ……一五八三　ク……一六〇七　ケ……一六二一　コ……一六五九　サ……一六九九　シ……一七七三　ス……一七七三　セ……一七一六　ソ……一七二一　タ……一七二四　チ……一七四六　ツ……一七五五　テ……一七九六　ト……一七六三　ナ……一七六八　ニ……一七九三　ネ……一七七六　ノ……一七七七　ハ……一七七八　ヒ……一七七九　フ……一七九二　ヘ……一七九八　ホ……一八〇〇　マ……一八〇四　ミ……一八〇八　ム……一八一三　メ……一八一四　モ……一八一九　ヤ……一八二三　ユ……一八二五　ヨ……一八二七　ラ……一八三一　リ……一八三三　ル……一八三九　レ……一八四一　ロ……一八四四　ワ……一八四七

増修 故事成語大辭典

簡野道明著

ア

【哇哇】 小兒の聲、歐陽修の句に「兒曹助喙聲――」また笑ふ聲をいふ、元包經に「言唯唯、笑――」

【啞啞】 鳥の聲なり、淮南子の原道訓に「鳥之――」また李白の句に「鼇飛――枝上啼」笑語の聲をいふときは、音アク 啞爾とも用ふ(啞啞)を見よ。

【嗚呼】 感歎するとき發する辭なり、譽むるにも、歎くにも通じて用ふ、字典にいふ「經史ニ、於戲・於虖・嗚虖・嗚嘑・於乎ハ相通ズ、皆歎辭ナリ」と、この中にて於戲は、後世は、主として、はれの時、ほむる辭にのみ用ふれども、古は必ずしも然らず、善惡ともに通じて用ひたり、嗟は咨嗟咏歎するなり、嗟乎と連用しても意は同じ、吁は驚くなり、疑怪の辭なり、噫は哀痛の聲にて「ハッアア」と急切に嘆ずるなり、嗚呼は平かにして長く、噫は意重し、惡は音ヲ、驚嘆の聲、コレハシタリ、何事をいふぞと嘆ずるなり、於は嗚・烏と通ず、されども於は一字にても用ふれども、嗚・烏は一字はなしては用ひず、

【哀哀】 かなしき貌、詩經小雅蓼莪篇に「――父母」

【曖曖】 暗き貌、屈原の離騷に「時――其將罷兮」註に「――ハ昏昧ノ貌」また晏子春秋に「星之昭昭不如月之――」陶淵明の詩に「――遠人村、依依墟里煙」

【藹藹】 盛多の貌、楚辭に「讒夫――而曼著兮」また詩の大雅の「――王多吉士」この註には「濟濟ナリ」とあり、また香ふ貌、楚辭に「懷椒聊之――兮」

【靄靄】 雲の集りたなびく貌、陶淵明の句に「停雲――」

【萋萋】 草木の盛なる貌、詩經曹風候人篇に「萋兮萋兮、南山朝隮」一解に――は、雲興る貌、一說に萋は讀んで鬱となすと、音ウツ、朝隮とは雲氣の升るをいふ、

【愛、屋烏ニ及ブ】 (屋烏ノ愛)を見よ、

【愛ヲ割ク】 めづる心をさき去ること(割愛)を見よ、

【哀哽】 かなしみて、聲ひせぶ、南史に「左右莫不――」

【愛玉】 類書纂要に「人ノ女ヲ稱シテ令愛トイヒ、又ーート モイフ」

【阿育】 また阿輸迦・阿輸柯ともいふ、无憂王と譯す、はじめ殘忍にして因果を知らず、八萬四千の夫人を殺す、後ち道に入りて八萬四千の塔を造りて之を償ひきといふ、

【愛願】 いつくしみかへりみる義、恩眷に同じ、楊脩書に「由ーー之隆」

【哀嗟】 かなしみなげく、孫楚の句に「追慕先軌、感想ー」

【哀子】 親の忌中に在る子を稱す(孝子)を見よ、

【愛日】 冬の日なり、駱賓王の詩に「溫煇凌ーー、壯氣驚寒氷」と(畏日)を見よ、また日時を惜む義、吳志の吳王五子孫和傳に「志士ーノー惜力」とまた孝子ーノーといふは、親に事ふるの日は久しからざればなり、揚子法言に「敬時愛日當盡孝」

【愛シテハソノ醜ヲ忘ル】 人は相愛するの極、そのみにくき點に氣付かざるものなるをいふ、陳に醜人あり、名は敦治、儺麼、推頹、廣眼垂肩、唇薄く鼻昂り、皮膚皺黑、陳侯之を悅び、外は國を治めしめ、內はその身を制せしむ、後ち楚に使し、辭令惡しく、貌醜なるを以て、楚王大いに怒り、兵を促がし陳を伐ち、三月にして滅せり、人言ふあり、敦治貌陋にして以て人を駭かすに足り、語拙にして以て國を喪ふに足る、陳侯は愛して其の醜を忘ると謂ふべしと、呂氏春秋卷の十四遇合を參看せよ、

【愛執】 佛語、愛の情に執着するをいふ、愛着ともいふ、

【喝人柳下ニ陰ヲ借ル】 人のおかげをうくるに喩ふ、書言故事に「庇ヲ人ニ求ムルヲ、喝人柳下ニ陰ヲ借ルトイフ」と、註に「喝ハ心中ノ熱ナリ、心熱ノ人、陰ヲ柳下ニ借ルヲイフナリ」と、淮南子に「武王喝人ヲ柳下ニ蔭シ、天下懷ク」

【愛染】 佛語、佛經に、明王の一、三目六臂にして、頂に獅子の面あり威怒の相をなす、

【優然】 彷彿たる貌、さもにたり、禮記の祭義に「祭之日入レ室ーー必有見乎其位」と、疏に「ーーハ微見ナリ」

【靉靆】 雲の盛なる貌、たなびく、また雲の日を覆ふ貌、轉じて明かならざる貌、木華の海賦に「ーー雲布」また老眼鏡をいふ、洞天清錄に「ーー老人不辨細書、以此掩目則明」と、清の田霖の詩に「花飛兩目苦昏矇、把卷惟宜坐日中、ーー一雙新上額、挑燈猶作蠹書蟲」

【欸乃】 船うたをいふ、卓氏藻林に「棹舡ノ聲」とあり、柳宗元の詩に「漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘燃楚竹、烟消日出不見人、ーー一聲山水綠」とあり、康熙字典に「唐ノ元結ニーーー曲アリ」と、一說ーーをオウアイと讀むといふは非なるべし、乃一音ダイ、

【埃墨】 黑き色のほこり、油煙などの如きもの、孔子家語に「有ーーー墮甑中」

【愛蓮ノ說】 宋の周茂叔の作る所ろ、曰く、

「水陸草木之花、可愛者甚蕃、晉陶淵明獨愛菊、自李唐來、世人甚愛牡丹、予獨愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻翫焉、予謂菊花之隱逸者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也、噫菊之愛、陶後鮮有聞、蓮之愛、同予者何人、牡丹之愛、宜乎衆矣」古文標準に曰く「濂溪先生ハ、道學ノ宗師ナリ、ソノ蓮花ヲ愛スルハ、君子ノ德アルニ取ル、衆人ノ愛ニ異レリ、學者コノ文ヲ玩味シ、當ニ其ノ旨ヲ悟ルベシ」

【泱泱】 深廣の貌、詩經に「瞻彼洛矣、維水ーー」また弘大の聲なり、左傳に「美哉ーー乎、大風也哉」また雲の盛んに起る貌、文選に「天ーー以垂雲」

【鞅鞅】 泱泱に同じ、情の滿足せざるをいふ、史記絳侯世家に「此ーー者、非少主臣」また淮陰侯傳にも「居常ーー羞與絳灌等列」

【嚶嚶】 鳥の互に和ぎ鳴く聲、詩の小雅に「鳥鳴ーー」爾雅の釋訓に「ーーハ相切直也」註に「ーートシテ鳥鳴クハ、朋友ノ切磋シテ相正スニ喩フ」

【燠休】 休或は咻に作る、氣を以て溫むるなり、轉じて人の困窮をめぐむをいふ、左傳昭三年に「民人痛疾、或ーーー之」の註には「ーー痛念聲」とあり、燠は一音ウまたはヲ義は同じ、

【鶯梭】 うぐひすの機の「ヒ」をやる如くに、枝から枝へと飛びかふをいふ、梭は機の「ヒ」なり、張養浩の句に「柳岸ーー巧織藍」

【殃咎】 殃は神またはの天のとがめ、ーーは禍なり、左傳に「哀樂失時、ーー必至」

【拗强】 がまんにして、ねぢけたるをいふ、拗戾に同じ、朱子語類に「王臨川、天資亦有ーー處」臨川は安石の號、

【鶯花海】 海は百川のあつまるところ、それより物の一處にあつまるに喩へていふ、抱朴子に「許下人物之海也」とあり、又歌舞管絃の繁華なる都を歌吹海といふ、ーーーとは百花盛に開き、黃鶯があちこちに亂れ

啼く春景の十分なる處をいふ、齊東野語に見ゆ、また陸游の詩に「錦城梅花海、十里香不斷」

【鏖糟陂裏ノ叔孫通】 駿臺雜話「忠厚のこゝろ」の條に見ゆ、書言故事に「俗言齷齪、鏖糟鄙俚、東坡戲程頤曰、頤可謂鏖糟鄙俚叔孫通、聞者笑之」とあり、また成語字彙に西湖志餘を引きて不潔の義となす、宋元通鑑には「枉死市之叔孫通」とありて鏖糟陂裏とはなし、但し鏖糟陂は地名なり、呂希哲の傳講雜記に「都城西南十五里、有地名鏖糟陂、土人惡之、自易其名曰好草坡」とあり一說に鏖糟陂裏は贋物(ニセモノ)の義といふ、叔孫通は漢の高祖に仕へ、禮樂を修め朝儀を起し、惠帝の世、宗廟の儀法及び諸制を定む、程伊川屢禮法の事をいふを以てかくは譏りたるなり、

【鞅掌】 鞅は猶ほ荷の如し、掌は物を捧ぐるをいふ、負荷捧持して儀容を爲すに暇あらず、故に容を失ふ貌とす、詩經に「王事——」とあり、今俗語に、事の煩はしさを以て、鞅掌と爲すは此に本づく、

【櫻筍廚】 秦中歲時記に「長安四月已後ハ、堂廚ヨリ百司廚ニ至ルマデ之ヲ——トイフ」

【鏖戰】 みなごろしにするたゝかひ、全力をつくして決戰する義、唐書に「勇往決——」

【罌粟】 「ケシ(馬頭米囊花)」を見よ、

【櫻桃】 (櫻桃)を見よ、

【鸚鵡】 格物論に「——ハ能言ノ鳥ナリ、慧性アリ、朱喙鉤吻、翠頂金眼、玄項碧羽頓足翠尾ニシテ言語音圓滑ナリ、白キ者ヲ秦吉了ト名ヅク、——ニ似テ腦ニ黃肉冠アリ、マタ時樂鳥アリ、丹首紅臆、朱冠絲翼、鶯領文背揉ユルニ五色ヲ以テス、——ト狀同ジ、ソノ心聰慧主ヲ護シ恩ニ報ユ、鳴クトキハ則チ天下太平ナリ、皆嶺南ニ產ス」圓機活法に「蔡相確新州ニ貶セラル、侍兒名ハ琵琶隨ヘリ、——アリ甚ダ慧ナリ、公每ニ響板ヲ扣ケバ、ソノ名ヲ傳呼ス、琵琶卒シテ後、アヤマリテ響板ニ觸レシニ、——猶ホ傳呼シテ已マズ、公悒々トシテ樂マズ、詩アリイフ、——言猶在、琵琶事已非、傷心瘴江水、同渡不同歸」と(綠衣使者)を參看せよ、

【阿吽】 梵語、息の出入の義、吽一に坎に作る、

【鸚鵡杯】 潛確類書卷の九十一に、謝氏詩原に「金母召群仙、宴于赤水、命謝長珠、鼓拂雲之琴、舞驚波之曲、座有碧玉——、白玉鸚鵡杓、杯乾則杓自挹、欲飲則杯自舉、故太白詩云、鸚鵡杓、——、非指廣南螺杯杓也」また南州異物志に「鸚鵡螺狀如覆杯、頭如鳥頭、向其腹視、似鸚鵡、故以爲名」また梁簡文集にいふ「車渠屢酌、鸚鵡驟傾、車渠鸚鵡皆指酒盃、俗傳車渠爲杯、注酒滿過一分不溢」

【鸚鵡能ク言フモ飛鳥ヲ離レズ】 禮記の曲禮に「鸚鵡能言、不離飛鳥、猩々能言、不離禽獸、今人而無禮、雖能言、不亦禽獸之心乎、夫惟禽獸無禮、故父子聚麀」とあり、聚は猶ほ共の如し、麀は獸の牝をいふ、

【嚶鳴】 鳥の互に相和して鳴くをいふ、詩經の小雅に「鳥鳴嚶々」と、轉じて朋友の互に切磋するにもいふ、

【啞咽】 しやくりなき、元稹の句に「啼兒屢——」

【青ハ藍ヨリ出デテ藍ヨリモ青シ】 青色は藍より出づれども、藍よりも優れて青し、以て弟子の師より優るに喩ふ、荀子の勸學篇に「君子曰ク、學ハ以テ已ム可カラズ、青ハ之ヲ藍ヨリ取ツテ而シテ藍ヨリモ青シ、冰ハ水之ヲナシテ而シテ水ヨリモ寒シ」

【閼伽】 梵語にて佛に奉る水、又は香水をいふ、翻譯名義集二に「阿伽此云水云々」、和名鈔十三に「——梵語也、漢言僧勃、蒸煮雜香、以其汁供養佛也」二中歷第三佛堂具に「禮盤、——、金鼓、鐘——盛水器也、同盛香水器也」とあり、もとは器の名なるを、轉じて水にいへり、閼は阿にも作る、

【阿衡】 阿は倚なり、衡は平なり、天下人民の倚りて平かにする所ろ、殷の時の宰相なり、一說に、伊尹の號なりと、書經の太甲に「惟嗣王不惠于——」また史記の魏世家に「魏雖得——之佐、曷益乎」また通志の氏族略に「伊尹湯ノ——トナル、子孫因リテ以テ氏トナス」と、——の才は、宰相となる才をいふ、

【阿香車】 雷車に同じ、法苑珠林に「晉ノ義興ノ人、姓ハ周、永和年中ニ郭ヲ出デテ行ク、未ダ村ニ至ラズシテ日暮ル、道邊ニ一新草屋アリ、一女子ノ門ヲ出デテ望ムヲ見、周便チ寄宿センコヲ求ム、女爲メニ火ヲ然シ、食ヲ作ル、一更ニ至ルコロ、外ニ小兒ノ阿香ト喚ブ聲アルヲ聞ク、女應ジテ曰ク諾ト、尋イデ云フ、官汝ヲ喚ビテ雷車ヲ推サシムト、女乃チ辭シ去ル、夜遂ニ大雷雨ス、周明朝ニ至リテ宿セシ處ヲ視レバ、乃チ是レ一新塚ナリキ」とあり、この事は、續搜神記にも見ゆ、

【阿監】 宮女の長をいふ、監宮ともいふ、長恨歌に「椒房——青娥老」の註に「——ハ宮女ヲ掌ルモノ、阿ノ音アク」とあり、

【颺ラズ】 醜容なり、左傳に「今子少不颺」颺或は揚に作る、裴度の自題像贊に「爾身不長、爾貌不揚、胡爲將胡爲相」

【秋】 圓機活法に「秋ヲ三秋・九秋・素秋・素商トイヒ、秋

ノ天ヲ旻天トイヒ、秋ノ風ヲ、商飈・凄風・悲風トイヒ、景ヲ澄景トイヒ、時ヲ霜辰トイヒ、節ヲ素節トイフ」爾雅に「秋ヲ白藏ト爲ス」月令に「其帝少昊、其神蓐收」と、潘安仁が詩に「清商應秋至」また魏の文帝の燕歌行に「秋風蕭瑟天氣涼、草木零落露爲霜」漢の武帝秋風辭に「秋風起分白雲飛、草木黃落分雁南歸」宋玉の九辯に「悲哉秋之爲氣也、蕭瑟分、草木搖落而變衰」歐陽修の秋聲賦に「秋之爲狀也、其色慘淡、煙霏雲斂、其容清明、天高日晶、其氣慄烈、砭人肌骨、其意蕭條、山川寂寥」鶡冠子に「斗柄西指而天下皆秋」月令に「孟秋之月、律中夷則」

【阿魏】 舶來藥品の名、植物の脂にて、木に採ると、草に採るとの二種ありといふ、ーーは印度邊の語なるべし、

【啞啞】 言笑和適の貌、易經の震卦に「笑言ーー」註に「ーハ笑語ノ聲ナリ」

【喔喔】 雞のなく聲、白居易の句に「ーー十四雛」喔咿に同じ、

【喔咿】 雞の聲、韓愈の句に「天星牢落雞ーー」また强ひてへつらひ笑ふ貌、楚辭の卜居に「吾將ーー嚅唲、以事婦人乎」咿喔とも用ふ、

【惡客】 下戸をいふ、堅瓠集に曰ふ、留青日札に「黃山谷酒ヲ飲マザル者ヲ以テーートナス、蓋シ人ノ清興ヲ敗ルヲ以テノ故ナリ」

【惡漢】 「ワルモノ」をいふ、漢は男の義、輟畊錄に「今人、賤丈夫ヲ謂ツテ、漢子トナス」

【握奇經】 一卷、兵家に屬す、舊本、風后撰すと題す、漢の公孫宏の解、晉の馬隆述讚、漢書藝文志にも、隋志、唐志にも、皆この書を載せず、宋志に至りて始めて著錄せり、その文を考ふるに後人の僞作たること疑なし、されども、その言具さに條理あり、流傳すること四五百年、談兵者の祖とする所たり、故に簡明目錄、この書を兵家の首に出せり、

【惡月】 荆楚歲時記に「五月ハ俗ニーート稱シ、禁忌多シ、牀薦席ヲ曝シ、及ビ屋ヲ蓋フヲ忌ム」

【握月擔風】 (月ヲ握リ風ヲ見よ、

【惡言口ヨリ出ダサズ、苟語耳ニ留メズ】 鄧析子に「一聲而非、駟馬勿追、一言而急、駟馬不及、故惡言不出口、苟語不留耳」

【偓促】 齷齪に同じ、「コセック」また握齱に作る、楚辭に「ーー談於廊廟、今」また史記酈生傳に「皆握齱自用、不能聽大度之言」

【齷齪】 短く狹き貌、字彙に「急促局蹐ノ貌」とあり、「イソガシクコセック」義、文選の樂府の放歌行に「小人自ーー、安知曠士懷」小人は器量淺小なれば、曠士即ち胸の廣き大人の心を知るを得ずとなり、

【惡事千里ニ傳ハル】 人の善をば掩ひかくし、人の惡をば探りあらはすは、世俗の情なり、故に好事は彼に障へられて、其の門を出てず、惡事は彼に露されて、忽ち千里に傳はるとなり、事文類聚に「好事不出門、惡事傳千里」

【惡小ナルヲ以テ之ヲ爲スコト勿レ】 蜀志の劉先主傳の注に「先主遺詔敕後主曰、勿以惡小而爲之、勿以善小而不爲、惟賢惟德、能服於人、汝父德薄勿效之」

【偓佺】 列仙傳に「ーー槐里採藥人也、食松實、形體生毛四寸、能飛行捷步」

【渥丹】 顏色の赤くつやあるをいふ、秦人、莊公を美むる詩に「顏如ーー、其君哉」歐陽修の秋聲賦にも引けり、

【握符ノ尊】 天子の位をいふ、本朝文粹十四、紀在昌の文に見ゆ、文選三の東都賦に「握乾符、闢坤珍」とあり、註に「握ハ持ナリ、乾符ハ赤伏ナリ」とあり、後漢書班固傳の註に「乾符坤珍ハ天地ノ符瑞ヲ謂フナリ」

【惡木ニ蔭セズ】 管子に「夫士懷耿介之心、不蔭惡木之枝」惡木尙恥之、況與惡人同處」と、尸子に「孔子至於勝母、暮矣、而不宿、過於盜泉、渴矣、而不飲、思其名也」とあると義同し、

【擧グルコトハ鴻毛ノ如ク、取ルコトハ遺ヲ拾フガ如シ】 (擧如鴻毛、取如拾遺)極めて易きをいふ、漢書の梅福傳に「擧秦如鴻毛、取楚如拾遺」

【亞槐】 我が國にて大納言の一名に用ふ、周禮に「面三槐、三公位焉」とあり、昔、周の世に、朝廷に植ゑたる「エンジュ」の木に面して三公の坐位せしにより、三公の位を三槐また台槐といふ、亞は次なり、大納言は三公に亞ぐ官なるを以てかくいふ、

【阿嬌】 嬌はこびてなまめかし、ーーはうつくしき女兒をいふ、輟耕錄に「關中以兒女爲ーーーーこまた女の名字に用ふ、漢武故事に「若得ーー當以金屋貯之」

【蛙鼓】 蛙のむらがり鳴く聲をいふ、花鏡に「蛙ノ性、好ンデ坐シテ、脰ヲ以テ鳴ク、子ヲ生ムヿ最モ多シ、一蛙鳴ケバ百蛙皆鳴ク、ソノ聲甚ダ壯ナリ、ーート名ツク、秋ニ至レバ則チ聲ナシ」(兩部ノ鼓吹)を參看せよ、

【亞歲】 冬至をいふ、宋書に「魏晉ハ冬至ノ日、萬國及ビ百僚ノ稱賀ヲ受ク、因ツテ小會ス、其ノ儀、歲朝ニ亞グ」

【荇】（荇菜）を見よ、

【麻ノ中ノ蓬ハタメザルニ自ラ直シ】 十訓抄第五に見ゆ、荀子勸學篇に「蓬生麻中不扶自直」とあるによる、說苑の說叢篇にも「蓬生麻中不扶自直、白沙入泥與之皆黑」とあり（蓬麻中ニ）を見よ、

【阿閣黎】（——）を見よ、

【亞子】 次男をいふ、類書纂要に「次息・季子・——並次子之稱」とあり、但し季子は末の子をもいふ、

【啞子】 啞は痴に同じ、ものいふとのできぬ人「オシ」王君玉雜纂に「——做手勢」

【蛙市】 耕餘錄に「晚蛙聚リ鳴ク、之ヲ——トイフ、吳中夏月亦蚊市ノ語アリ」と、葛長庚の夏夜宿水館詩に「——無聲萬籟沉」また方岳の詩に「池塘水滿蛙成市、門巷春深燕作家」

【阿戎】 通鑑の齊紀の胡三省の註に「晉宋閒ノ人多ク從弟ヲ謂テ——トナス、唐ニ至リテ猶ホ然リ、杜甫ノ於從弟位宅守歲詩ニ守歲——家、是ナリ」とあり、通雅に「王思遠、小字——、爲王晏從弟」とあるに本づく、

【足ヲ躋ゲテ待ツ】 足をつまだてゝ事の到るを待つなり、漢書高祖紀に「大臣內畔、諸將外反、亡躋足待也」

【足ヲ重ネ目ヲ仄ツ】 恐るゝことの甚しき狀をいふ、漢書汲黯傳に「令天下重足而立、仄目而視」

【足ヲ裹ム】 おそれて進まざるをいふ、史記范睢傳に「杜口裹足莫肯嚮秦耳」

【足城市ヲ履マズ】 隱者をいふ（林逋）を見よ、

【朝ニ辭ス白帝彩雲ノ閒】 李白の早發白帝城と題する七絕の起句なり、曰く「朝辭白帝彩雲閒、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山」詩の大意は、朝に蜀の白帝城を發船して、江陵までかへるに、僅に一日閒に過ぎず、千里の遠きを如何にしてかく速に還りしぞといふに、兩岸の山に猿が一聲啼く、その聲の未だ住まらざる閒に、わが乘れる輕舟は千萬重の峽閒を經過するなり、かく舟行の駛きにあらざれば、迚も千里の遠きを一日には還らるべきにあらずと、猿聲を以て舟行の迅疾を形容す、最も妙なり、この詩轉結を以て前の句を解するの法なり、起承、白といひ彩といひ、千といひ一といふ、修辭の巧を見るべし、

【朝ニハ富兒ノ門ヲ控ク】 杜甫の詩に「朝控富兒門、暮隨肥馬塵」とあり、富兒とは、金滿家をいふ、その門を控きて媚びへつらふなり、肥馬塵は、權勢の人の乘りたる馬の塵にて、その後に隨行して、氣にいらんことを求むるをいふ、

【朝ニ道ヲ聞キテ夕ニ死ストモ可ナリ】 論語に「子曰、朝聞道夕死可矣」の註に「道トハ事物當然ノ理、苟モ之ヲ聞クヲ得ルトキハ、生キテハ順ヒ、死シテハ安ンジ、復タ遺恨ナシ、朝夕ハ甚ダ其ノ時ノ近キヲイフナリ」と、程子曰く「人ハ以テ道ヲ知ラザルベカラズ、苟モ道ヲ聞クコトヲ得バ、死スト雖モ可ナリ」

【朝夕ヲ謀ラズ】 事の極めて急迫にして、かんがへ慮るの暇なきをいふ、戰國策に「朝不謀夕、無一日之積」

【亞相】 御史大夫なり、南史に「劉毅位居——、我ガ國にて大納言の唐名とす、亞は次なり、

【阿闍黎】 梵語「——耶」の略、和尙に亞くところの僧をいふ、大藏法數に「梵語ノ阿闍黎ハ、華ニハ軌範トイフ、其ノ能ク人ノ軌範ト爲ルヲイフ」「アザリ」ともいふ、

【阿修羅王】 阿修羅は、佛說に六界の一、略して修羅ともいふ、——は佛經の神の名、力强くして能く梵天帝釋と權を爭ひて鬪ふといふ、軍記などに「——ノアレ廻ル如ク」などとあり、

【亞字欄】 亞の字の形に連ね作りたる欄干

【阿誰】 いづれの義、何人と定めざるの辭なり、また何誰に作るものあり、三國志龐統傳に「先主曰、向者之論、阿誰爲失」

【阿世】 世俗に媚びへつらふをいふ（曲學——）を見よ、

【亞聖】 亞は次なり、亞父の亞に同じ、孟子顏子を——といふ、——とは、聖人に次ぐ大賢人をいふ、

【汗ヲ反ス】 一たび命令したることを、又舊にもどし、廢して行はざるにいふ、轉じて約に背く義にも用ふ、歐陽修の文に「明命已行、固無容于反汗」とあり（反汗）を見よ、

【汗ヲ揮ヒ雨ヲ成ス】 人の群聚雜鬧せるさまをいふ、僧巒の苦熱行に「萬人揮汗翻成雨、口噪喉乾隘塵土」

【阿僧祇】 佛經の語、無數と譯す、無限の長時閒をいふ（肩摩）を見よ、語なり、金剛經新註に「——ハ無數時ト翻ス」と、智度論に「僧祇ハ秦ニハ數トイヒ、阿ハ秦ニハ無トイフ、問フ幾時ヲ——ト名ヅク、答フ天人中ニ能ク算數ヲ知ル者モ、數ヲ極メテ知ルコト能ハザル、是ヲ——ト名ヅク」

【阿娜】 美女の柔弱（タヨヤカ）なる貌、文選洛神賦に「華容——令我忘餐」

【價ヲ飾ラズ】 ことさら價を高くして、人を欺かざるをいふ、家語に「孔子爲政三月鬻羔豚者不飾價」

【價ヲ二ニセス】 (不二價)買人によりて價を上下せざるをいふ、孟子に「許子ノ道ニ從ハヾ、則チ市ノ賈貳ニセズ國中僞リ無ケン、五尺ノ童ヲシテ市ニ適カシムト雖モ、之ヲ欺クコトアルナケン」とあり、賈は價に同じ、五尺の童とは、幼小無知なるをいふ、また後漢書に「韓康伯、藥ヲ成都ノ市中ニ賣ル三十年、價ヲ二ニセス、天下之ヲ賢トス」

【寇ニ兵ヲ藉シ、盜ニ糧ヲ齎ス】 (藉寇兵而齎盜糧)寇敵に、兵器を借し、盜賊に糧食を與ふるは、其害益甚しきをいふ、史記の李斯傳に、李斯上書シテ曰ク、臣聞ク、吏、客ヲ逐ハンコトヲ議スト、竊ニ以爲フニ過テリ、(中略)今乃チ黔首ヲ棄テ、以テ敵國ニ資シ、賓客ヲ却ケテ以テ諸侯ヲ業ク、此レ所謂寇ニ兵ヲ藉シテ、而シテ盜ニ糧ヲ齎ラス者ナリ」とあり、齎は持せ遣るなり、

【頭剃ルヨリ心ヲ剃レ】 俚諺なり、六道講式に「適〻剃頭不剃心染衣不染心可恥恥」と、慈鎮の歌に「何故に捨てける身ぞと折々はすがたに恥ぢよ墨染の袖」とあるも意は同じ、

【中ラズト雖モ遠カラス】 大學に「心誠求之雖不中不遠矣未有學養子而后嫁者也」とあり、誠心より求むるときは、目的に正中せざるまでも、大なる閑違はなきをいふ、

【紫陽花】 灌木の名、初夏に花開く、韻語陽秋に「山花アリ、色紫ニシテ氣香バシク、穠麗ニシテ愛スベシ、人ソノ名ヲ知ルナシ、白樂天ソノ名ヲ標シテ紫陽トイヒ、之ヲ紀スルニ詩ヲ以テス」

【軋軋】 車のきしる聲、轉じて櫓聲などにも用ふ、溫庭筠の詩に「——搖槳聲」咿軋に同じ、

【遏雲ノ曲】 歌聲のすぐれて妙なるをいふ、列子に「薛譚學謳於秦青、未窮青之技、自謂盡之矣、遂辭去秦青弗止、餞於郊衢、撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲、薛譚乃謝求反、終身不敢言歸」とあり、類書纂要にも「秦青善歌、響遏行雲」とあり、太平記卷の二に引用せり、

【斡旋】 類書纂要に「斡旋ハ、猶ホ周旋ノゴトシ」と、蘇轍ノ祭司馬丞相文に「二二卿士代天——」

【壓倒】 他を壓したふして、下風に立たしむると(元白ヲ——ース)を見よ、

【壓條】 とりきをする、花鏡に「分栽——」とあり、條は枝なり、

【壓尾】 すべて物の終尾をいふ、宋の楊萬里の詩に「紅千紫百何曾夢、——桐花也作塵」また婪尾といふ語あり、——と義同じ、同人の詩に「破除婪尾暑、領略打頭清」とあり、婪一に藍の字に作るもあり、

【閼逢】 爾雅釋天に「太歲在甲曰——」

【遏密】 きびしくとめる義、書經に「四海——八音」

【集大成】 成は樂の一終にして、樂を奏するに、衆小成を集めて、一大成とするをいふ、孟子に「孔子謂之集大成」は、孔子が伊尹・伯夷・柳下惠の如き群聖の事を集めて、一大聖の事と爲したるは、猶ほ樂を成す者が、衆音の小成を集めて、一大成と爲すが如きをいふ、衆小成とは、樂に金・石・絲・竹・匏・土・革・木、の八音あり、この中の一音のみを獨奏するときは、その一音に自ら始あり、終あるをいふ、一大成とは、八音を合奏するとき、始めに金を擊ちてその聲を宣べ、終りに石を擊ちて、その韻を收め、八音能く調和して、始終するをいふ、

【羮ニ懲リテ虀ヲ吹ク】 懲戒に過ぐるをいふ(羮ニ懲リタル者)を見よ、

【阿堵物】 錢の異稱なり、晉書の王衍傳に「衍ガ妻ノ郭氏、聚歛ヲ喜ム、衍其ノ貪鄙ヲ疾ム、故ニ口未ダ嘗テ錢ヲ言ハズ、妻之ヲ試ミント欲ス、婢ヲシテ錢ヲ以テ牀ヲ遶ラサシメテ、行クコトヲ得ザラシム、衍早起シテ錢ヲ見ル、婢ニ謂ツテ曰ク、此ノ阿堵物ヲ舉ゲテ去レ」とあるに本づく、阿堵とは、方言にて、這所の義、俗語、「アレ」「アノ」

【婀娜】 (婀娜)を見よ、

【穴熊ノ猛キ獲物ノ類ナラデ賢キ人得タル例】 (呂尙)を見よ、

【兄タリ難ク弟タリ難シ】 (兄タリ難ク)を見よ、

【嫂爲メニ炊ガズ】 戰國策に「蘇秦始將連衡說秦王、書十上而說不行、資用乏絕、去秦而歸、妻不下紝、嫂不爲炊、父母不與言」

【阿房宮】 秦の始皇帝の築きし宮の名、史記の秦本紀三十五年に「始皇オモヘラク咸陽ハ人多クシテ先人ノ宮庭小ナリト、乃チ朝宮ヲ渭南ノ上林苑中ニ營作セントシ、先ヅ前殿ヲ阿房ニ作ル、(阿ハ山ノ曲、房ハ旁ナリ)東西五百步南北五十丈、上ニハ萬人ヲ坐セシムベク、下ニハ五丈ノ旗ヲ建ツベシ、周馳シテ閣道ヲ爲ル、殿下ヨリ直チニ南山ニ抵ル、南山ノ顚ニ表シテ以テ闕トナス、複道ヲツクリ阿房ヨリ渭ヲ渡リ、之ヲ咸陽ニ屬ス、宮未ダ成ラズ、更ニ令名ヲ擇ビテ名ヅケ

ントス、天下之ヲ——トイフ」括地志に「——マタ阿城トイフ、雍州長安縣ノ西北十四里ニ在リ」と、唐の杜牧の——賦あり、參看せよ、

【阿防羅刹】 梵語、獄卒なり、牛頭人首にして、兩脚は牛蹄なり、力能く山を排す、剛鐵劍を持せりといふ、

【相敬スルコト賓ノ如シ】 (郤缺)を見よ、

【阿鼻地獄】 阿鼻は梵語にて無閒と譯す、佛經に、八熱地獄の第八、苦を受くること閒斷なき義、

【亞匹】 「トモガラ」「タグヒ」蜀志に「亮之器、能理政、抑亦管蕭——」

【相見ル何ゾ晩キヤ】 事文類聚前集卷の二十九に、漢武紀を引きて「主父偃等書奏、天子召見謂曰、公等皆安在、何相見之晩也、拜爲郎中、主父偃尤親幸、一歲中凡四遷爲中大夫」と、また錦字箋に、史記を引きて「魏其・灌夫兩人相引重、相得驩甚、無厭恨相見晩也」

【阿父】 父を親みて呼ぶなり、阿母・阿兄・阿弟・阿妹の阿は皆親みて呼びかくる辭なり、阿は從ひちかづく義、

【亞父】 亞は次ぐなり、之を尊ぶこと父に次ぐなり、史記の項羽本紀に「項王即日因ツテ沛公ヲ留メテ與ニ飲ム、項王項伯ハ東嚮シテ坐シ、——ハ南嚮シテ坐ス、——トハ范增ナリ」

【扇】 揚子方言に「扇ハ關ヨリシテ東ハ、之ヲ箑トイヒ、關ヨリシテ西ハ之ヲ扇トイフ」と、世本に「武王翣ヲ作ル」と、古今注に「舜廣ク視聽ヲ開キ、賢人ヲ求メテ自ラ輔トシ、五明扇ヲ作ル、云々」裴啓の語林に「諸葛武侯、白羽扇ヲ持シテ、三軍ヲ指揮ス」と(仁風)を參看せよ、

【仰ギテ天ニ愧ヂズ、俯シテ地ニ愧ヂズ】 (俯仰天地)にを見よ、

【押後兵】 「オサヘ」の兵、紀効新書に「——二十五名、各用長短器」

【棟】 (棟花)を見よ、

【凹凸】 (凹凸)を見よ、

【逢ハ別ノ始】 俚諺なり、佛書に「會者定離」の語あり、白氏文集に「合者離之始、樂兮憂所伏」

【葵】 仰ぐ日の略ならんか、種類多し、花黄なるを蜀葵または黄葵といひ、花の小なるを錦葵といふ、說文に「黄葵ハ常ニ葉ヲ傾ケ日ニ向ヒ、ソノ根ヲ照サシメズ」

【阿芙蓉】 (鴉片)を見よ、

【脂ニ畫キ氷ニ鏤ム】 (畫脂鏤氷)内にその實なくして、外をかざるは、勞して益なきに喩ふ、鹽鐵論に、内其ノ質ナクシテ、外其ノ文ヲ學ブハ、脂ニ畫キ、氷ニ鏤ムガ若シ、日ヲ費シテ功ヲ損ス」

【敢テ後レタルニアラズ馬進マザルナリ】 論語雍也篇に「子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也」と、伐とは功に誇るをいふ、軍後を殿といふ、戰敗るゝときは殿後となるを功とす、門とは魯の國門なり、一說に、後は音讀、猶ほ殿の如しと、孟之反が自らその功を掩ひ隱さんとて、馬の進まざるに託したるなり、この事實は、左傳哀十一年に見えたり、

【鴉片】 罌粟(ケシ)の實、又は蕾を刺してその汁を取り乾して製す、麻醉の劇藥なり 阿芙蓉また阿片とも書く、——烟草は、——を加へて製したる烟草、支那人の好みて吸ふもの、人身に害あり、

【鴉片戰爭】 英吉利の印度を蠶食せしより、東洋の商權は終にその手に歸し、東印度商會は清朝の特許を受けて鴉片烟を輸入し、宣宗の中世に至りては、その輸入益〻盛んとなり、その害毒を流すこと甚しかりしかば、湖廣總督林則徐上書してその弊害を論ず、宣宗よつて則徐を廣東に遣して兩廣の總督となす、則徐英商に令してその所藏の鴉片を燒棄し、かつその通商を禁ぜり、尋で英艦廣東に來寇し、香港を攻め、通商の復舊を强請せしも許されざりき、而るに當時英國の内閣は、侵掠政策を主とせしかば、遂に大に戰艦を發して來り、舟山乍浦を下し、寧波を犯し、大に清兵を破れり、時に英將モリソン渤海に入り書を贈りて和を議し、且つその地方の形勢を察す、宣宗直隷總督琦善と兩江總督伊里布とを廣東に遣して和を議せしめ、琦善を兩廣の總督となし、則徐の職を褫へり、然るに英艦また浙江を侵し、廣東を擾しゝかば、宣宗大いに怒りて伊里布・琦善の職を褫いて、再び則徐を用ひ、且つ皇弟綿瑄親王を大將軍となし、兵を率ゐて廣東に赴かしむ、英人曰く、兵を六十清里外に斥け、銀六百萬兩を納れなば、兵を收めんと、よつてその言の如く兵を斥けたりしかば、英兵も亦廣東を去れり、然るに英の後援軍印度より來りてその勢大いに振ひければ、遂に廣東廈門を占領し進んで楊子江に入り吳淞を下す、總兵陳化成戰ひて之に死す、英兵鎭江を攻め下し、南京も亦將に危からんとせしかば、宣宗、伊里布を起し、欽差大臣耆英と共に南京に赴き、英將に會して和を議せしめ、互に條約を訂結し、賠償金二千百萬兩を支出し、香港を割讓し、上海・寧波・廈門・福州・廣東の五港を開くことを約して事全く平ぎぬ、時に道

光二十二年(我が紀元二千五百〇二年)なり

【阿保】 阿は倚なり、保は養なり、倚賴して養育せらるゝ義、漢書宣帝紀に「——之功」

【阿瑪港】 今の澳門なり、支那廣東省の一小半島にして葡萄牙に屬す、

【阿彌陀】 梵語、無量壽と譯す、佛經に「如來ノ名、淨土ノ中ニ坐ス」といふ、阿は無なり、彌陀は量なり、光明照無量、壽命數限無量、大小弟子無量、補處無量の四義を以て名つく、或はいふ、拔苦のためには無量光といひ、與樂のためには無量壽といふと、

【網呑舟ノ魚ヲ漏ス】 (網呑舟)を見よ、

【晻靄】 晻は暗なり、「モヤ」の爲めに日光おほはれて明かならざる義、翳鬱といふに似たり、楚辭に「揚雲霓之——矣」

【晻曀】 空がくもりてくらし、姚希孟の句に「自——而晃耀」曀は翳なり、

【晏嬰(節儉】 劉氏人譜に「晏嬰齊ノ相タリ、身節儉ヲ守リ、車敝レ馬羸ル、齊ノ大夫桓子曰ク、此レ君ノ賜マ隱スナリト、晏子曰ク、臣君ニ用ヒラレ、貴キニ登ルニ及ビテ、父ノ族ハ車ニ乘ラザル者ナク、母ノ族ハ衣食ニ足ラザルモノナク、妻ノ族ハ凍餒スルモノナク、齊國ノ士、臣ヲ待ッテ火ヲ擧グル者三百人、此ノ如クニシテ君ノ賜ヲ隱ストスルカ、君ノ賜ヲ彰ハストスルカト」史記管晏列傳に「嬰字ハ平仲、節儉力行ヲ以テ齊ニ重ンゼラル、一狐裘三十年、豚肩豆ヲ掩ハズ」

【案ヲ擧ゲテ眉ニ齊シウス】 夫を敬ふとの篤きをいふ、後漢書梁鴻傳に「鴻字ハ伯鸞節介ヲ尙ブ、妻德耀名ハ孟光ト與ニ霸陵山中ニ隱居シ耕織ヲ以テ業ト爲シ、詩書ヲ詠ジ琴ヲ彈ジ、以テ自ラ娛ム、吳ニ至リ人ノ爲メニ賃舂ス、歸ル每ニ孟光爲メニ食ヲ具シ饋ル、敢テ仰キ視ズ、擧案齊眉」

【晏駕】 天子の崩ぜしをいふ、晏は晚なり、天子崩ぜらるゝも、臣子の心なほ宮車當におそく駕して出づべしと思ふ義に取る、史記范雎傳に「宮車一日——是事之不可知者」晚駕ともいふ、同じ、

【暗合】 其の事あるを知らずして、自ら符合するをいふ、晉書山濤傳に「濤不學孫吳、而暗與之合」また暗を闇に作る、陸機の文賦に「必所擬之不殊、乃闇合乎曩篇」

【琵琶魚】 俗に鮟鱇と書く、東海に多く產す、形扁圓にして、盤の如く、肉厚く腹大に、尾細長くして全體琵

琶に似たり、肉は冬春を美なりとす、骨は甚だ「ヤハラカ」なり、

【晏起】 朝おそくおきること、禮記に「孺子早寢——」

【安期生】 古の長壽の人なり、抱朴子に「————賣藥海邊、瑯琊人傳世見之、(瑯琊は郡の名、山東に屬す、瑯琊の人、子孫世々相傳へてその藥を賣るを見る)計已千年」萬姓統譜に漢人とし「抱朴子ト號ス、始皇與ニ語ルコト、三日三夜之ヲ異トス」とあり、

【行脚】 諸國を巡歷して佛道を修行するをいふ、祖庭事苑に「——者、謂遠離鄉曲——天下、脫情捐累尋訪師友、求法證悟也」と、遊僧・雲水僧皆同じ、草木子に「程渠南、僧信道元ト齋ヲ同ジクシテ蕈ヲ食フ、道元、渠南ニ、蕈ノ詩ヲ賦センヿヲ請フ、聲ニ應ジテ四句ヲ作リテイフ、頭子光々脚似丁、秖宜豆腐與波菱、釋迦見了呵々笑、煮殺許多——僧ト、聞者絕倒ス」

【行宮】 行在に同じ、吳都賦に「閒梁岷有陟方之館、——之基歟」

【般紅】 赤くしてすこしく黑みを帶びたるをいふ、杜詩に「——瑪瑙盤」とあり、左傳成二年の註に「赤黑ヲ般ト」

【行在】 天子の行りて居る所なり、蔡邕の獨斷に「天子以天下爲家、不以京師宮室居所爲常、則當乘車輿以行、天下車輿所至去處、皆曰——」と、史記の衛青傳に「四建詣——所」と、建は蘇建なり、通鑑綱目集覽に「天子四海ヲ以テ家トナス、故ニ行クニ乘輿トイヒ、止ルニ——トイフ」

【按察】 しらべ考ふ、北史に「——無實」

【晏子春秋】 單に晏子ともいふ、八卷あり、史記の列傳に「晏平仲嬰ハ、齊ノ靈公・莊公・景公ニ事ヘテ節儉力行ヲ以テ重ンゼラル」と、されどこの書は、嬰の自撰にあらず、劉向・班固は之を儒家に列し、柳宗元・晁公武・鄭樵等は之を墨家に入る、紀昀曰く「書中嬰ガ遺事ヲ述ブ、魏徵ガ諫錄、李絳ガ論事集ノ流ニシテ、書ヲ著シ說ヲ立ツル者ト迥カニ別ナリ、之ヲ儒家ニ列スルハ宗旨ニ於テ固ヨリ非ナリ、之ヲ墨家ニ列スルハ、體裁ニ於テ亦未ダ允ナラズ、改メテ傳記ニ隸スレバ、ソノ眞ヲ得ルニ庶カランカ」と、この說可なるに似たり、晏子の文は、古にして能く婉なり、華にして麗ならず、古文中の正を得たる者なり、淸の孫星衍に、音義二卷あり、參考の資とすべし、

【晏子ノ御】 史記列傳に「齊ノ相晏子(名は嬰出デテ行ク、ソノ御ノ妻門閒ヨリ窺フニ、ソノ夫、大蓋ヲ擁シ、

駟馬ニ策チ、意氣揚々トシテ自得セリ、既ニシ御者家ニ歸ル、妻去ラント請ヒテ曰ク、晏子長六尺ニ滿タザルモ身齊國ニ相トシテ名諸侯ニ顯ハル、妾ソノ志ヲ觀ルニ常ニ以テ自ラ下ルモノアリ、今子ハ長八尺、乃チ人ノ僕御トナリ、自ラ以テ足レリト爲ス、妾是ヲ以テ去ランコトヲ求ムルナリト、ソノ後チ御者自ラ抑損ス、晏子怪ミテ之ヲ問フ、御者實ヲ以テ答フ、晏子薦メテ以テ大夫ト爲ス」

【安車蒲輪】 老人を祝して——の寵といふ、資治通鑑に「上使使者奉——束帛加璧、迎魯申公、既至、問治亂之事、公年八十餘、對曰、爲治者不在多言、顧力行何如耳」と、安車は坐乘の車、蒲輪は、蒲を以て輪をつゝみ、轉ずるも、地と抗せずして安穩なるを得、禮記曲禮に「適四方、乘安車」

【杏】 (杏花)を見よ、

【晏如】 晏然に同じ、安泰の貌、魏志に「曹植上疏求自試曰、方今天下一統、九州——云々」

【暗誦】 そらよみ、蜀志に「悉——無滯」

【安石出デズンバ、蒼生ヲ如何セン】 (謝安)を見よ

【晏然】 晏は安に同じ、安泰の意、史記魯仲連傳ニ「梁王安得——而已乎」

【安息香】 安息は國名、今の波斯、この國の香料、熱帶地の樹の脂を取り、かため作る、松脂に似て赭黃色なり、

【安宅正路】 安宅は仁に、正路は義に喩ふ、孟子に「仁人之安宅也、義人之正路也、曠安宅而弗居、舍正路而不由、哀哉」

【顯難】 明かならざる貌、楚辭に「彼日月之照明兮、尙——而有瑕」また劉向の九歎に「望舊邦之——兮」

【暗中摸索】 くらやみで、さぐり求むる義、國史纂異に「唐ノ許敬宗、性輕忽ナリ、人ヲ見ルモ、多ク之ヲ忘ル、或人之ヲソシリシカバ、曰ク常人ノ名ノ聞エザル者ハ、記憶シ難シ、若シ曹植、劉公幹、沈約、謝靈運ニ遇ハヾ、————スルモ、亦識ルベシ」と、敬宗は太宗の時の十八學士中の一人なり、

【安堵】 堵は牆なり、牆内に安んじ居るをいふ、史記高祖紀に「吏民皆——如故」また文選の陳琳の書に「百姓——、四民反業、安一に案に作る、次條を見よ、

【案堵故ノ如シ】 案は次第なり、堵は牆堵なり、民の次第を按じ、牆堵の中に安んじ居らしむること、故の如くなるをいふ、史記高祖紀に「諸吏民皆案堵如故」一本案を安に作る、

【安ニ居テ危ヲ思フ】 安逸の日に於て、危難の至らんことを思ひて忘れざる義、左傳に「書曰居安思危、思則有備、有備無患」

【鹽梅】 (鹽梅)を見よ、

【晏平仲】 (晏嬰ノ)(晏子春秋)を見よ、

【安歩以テ車ニ當ツ】 戰國策に見ゆ、齊人顏蠋の語、安歩とは徐々として歩行するをいふ、安歩の樂は、以て車に乘るの樂にあつる義、善ク窮ニ)を見よ、

【按摩】 「アンマトリ」經史摘語に曰く、漢書藝文志また春秋繁露に「有——法、以手揑病處也」

【按問】 「シラベタヅネル」宋史ニ「就第——」

【安祿山ノ亂】 唐の玄宗在位已に久しく、漸く奢侈宴樂を好む、李林甫の相となるに及んで、專ら帝意を迎へ、其の聰明を壅蔽す、是に於て賢臣多く朝を去り、國政やや亂る、ついで安祿山を信任するに及びて、唐室遂に大に壞る、安祿山は、胡人なり、帝の寵妃楊氏及び其の左右に結託して、帝の信任を得、平盧・范陽・河東の三節度使を兼ね、陰に異志を懷く、楊國忠、李林甫に代りて相となるに及んで、もと祿山と隙あり、祿山遂に反し、大軍を率ゐて南に下る(皇紀千四百十五年)時に太平已に久しく、兵備完からざりしかば、祿山起るに及んで、河北の諸州皆風を望んで賊に降る、賊軍遂に河を渡りて洛陽を陷れ、進んで西長安を犯す、官軍之を潼關に防ぎて大敗し、玄宗は蜀に奔り、位を太子に傳ふ、長安賊の爲めに陷れられ、祿山は洛陽に都して帝と稱す、太子賊を避けて位に靈武(甘肅の靈州)に即く、之を肅宗となす、郭子儀・李光弼等の諸名將、來り會し回紇西域の援兵も亦至り、軍勢大に振ふ、この時河北・河南の地、皆賊軍に沒す、ひとり顏眞卿平原(山東省濟南府陵縣)に據り、其の從兄顏杲卿常山(直隸正定府)に據り、張巡許遠は睢陽(河南歸德府)を固守せしを以て賊軍遂に山東江淮の地を略する能はず、勢漸く盛り、而して內訌も亦發す、祿山その少子を愛し嗣となさんとせしかば、長子安慶緒怨んで之を弑す、幾ならずして其の將史思明、又慶緒を殺して帝と稱す、思明も亦その少子を愛して、其の長子史朝義の弑する所となる、官軍之に乘じて先づ長安を復せしかば肅宗及び上皇玄宗都に歸り、諸將を遣りて河の南北を平げしむ、肅宗崩じて代宗立つ、回紇の援兵を得、諸道の兵と共に、史朝義を破り、洛陽を復す、賊軍大に懼れ、朝義を殺して官軍に降る、是に於て內亂始めて平ぐ、時に皇紀千四百廿三年なり、

【安和】 温和に同じ「オダヤカ」漢書に「爲人——」また靜かにしてあたゝかき義、十洲記に「天氣——、芝草常生」

【雨】 釋名に「雨ハ、水ノ雲從リ下ルナリ、雨ハ輔ナリ、言フココロハ、時ヲ輔ケテ生養スルナリ」と、元命包に「陰陽和シテ雨トナル」と、爾雅に「小雨ヲ霢霂トイフ、雨三日以上ヲ霖トイヒ、久雨ヲ霕トイヒ、暴雨ヲ凍雨トイヒ、時雨ヲ澍雨トイフ」と、また纂要に、「疾雨ヲ驟雨トイヒ、徐雨ヲ零雨トイヒ、雨久シキヲ苦雨トイヒ、亦愁霖トイヒ、雨水ヲ潦トイフ云々」杜詩に「雷聲急送千峯雨」と、孟子に「天油然作雲、沛然下雨」と、東觀漢記に「蟻封穴戶、大雨將至」と、家語に「孔子將ニ遠ク行カントス、從者ニ命ジテ蓋ヲ持セシム、已ニシテ果シテ雨フル、巫馬期問ウテ曰ク、旦ニ雲ナシ、而ルニ夫子命ジテ雨具ヲ持セシム、敢テ問フト、子曰ク、昨暮月畢ニ宿セリ、詩ニ云ハズヤ、月離於畢、俾滂沱矣ト、是ヲ以テ之ヲ知レリト」歸田集に「黃梅及ビ木犀雨最モ書畫ヲ傷ル」荆楚歲時記に「八月ノ雨、コレヲ豆花ノ雨トイフ」と、列仙傳に「赤松子ハ、神農ノ時、雨師トナル」と、また歲時記に「六月ニ、三時ノ雨アル、田家以テ甘澤トナシ、邑里相賀ス、故ニ喜雨トイフ」

【雨一犁】 犁は犂に同じ「スキ」また耕なり、一「スキ」耕すに適する雨をいふ、朱熹の詩に「好雨當春過一犁」馮辰の詩に「東風花外錦鳩啼、喚起西山——」

【雨ヲ禱ルニ神ヲ祀ラズ】 晏子春秋に「齊ノ景公ノ時、大ニ旱ス、群臣ヲ召シ問ウテ曰ク、天久シク雨フラズ、寡人山靈ニ禱ラント欲ス、可ナランカト、晏子進ンデ曰ク、此レ祀ルベカラズ、益ナキナリ夫レ山靈ハ石ヲ以テ身トナシ、茅ヲ以テ髮トナセリ、天久シク雨フラズンバ、髮將ニ焦ゲントシ、身且サニ爇ケントス、彼獨リ雨ヲ欲セザランヤト、景公曰ク、吾河伯ヲ祀ラント欲ス、可ナランカト、晏子曰ク、夫レ河伯ハ、水ヲ以テ國トナシ、魚鱉ヲ以テ民トナセリ、天久シク雨フラズンバ、百川必ズ竭キン、彼獨リ雨ヲ欲セザランヤト、景公曰ク、然ラバ則チ奈何セント、晏子曰ク、請フ宮殿ヲ避ケ、郊ニ暴露シ、山靈河伯ト共ニ、其憂ヲ憂ヒ、其幸ヲ幸トセン、必ズ雨アラント、景公乃チ野ニ出デテ暴露シ、膳ヲ減ズルコト三日、果シテ大雨ス」

【雨ヲ冒シ韭ヲ剪ル】 韭は「ニラ」成語考に「冒雨剪韭郭林宗之款友情殷」と、註に「郭林宗友ノ來ルヲ見、夜、雨ヲ冒シ韭ヲ剪リ、餅ヲ作リテ以テ待ツ」これより友の來訪するを喜びて款待するに用ふ、韭は韮に同じ、

【飴ヲ含ミ孫ヲ弄ブ】 事文類聚に「後漢明德馬皇后云、吾爲天下母、而身服大練、食不求甘、欲率下也、但吾當含飴弄孫、不能復關政」詳しくは後漢書の馬皇后紀を見よ、

【雨詩ヲ催ス】 杜甫の詩に「片雲頭上黑應是雨催詩」

【雨車軸ノ如シ】 雨滴の大なることを、喩へて車軸と云ふ、長阿含經に「漸降大雨滴如車軸」また法苑珠林の劫量篇に「注大洪雨其滴甚麤、或如車軸、或復如杵」

【雨ソボフル宵云々】 井上文雄の「古戰場を弔ふ文」に見ゆ、唐の李華の弔古戰場文に「往往鬼哭、天陰則聞」また杜子美兵車行にも「君不見青海頭、古來白骨無人收、新鬼煩寃舊鬼哭、天陰雨濕聲啾啾」などあるにより、

【雨塊ヲ破ラズ】 あめしづかに降りてつちくれをやぶらざるは、太平の象なり、鹽鐵論に「太平之時、雨不破塊、而一雨必以夜」

【雨ニ沐ヒ風ニ櫛ル】 (風ニ櫛リ)を見よ、

【雨ハ歇ム楊林東渡ノ頭】 (故人ノ家ハ)を見よ、

【危ヲ見テ命ヲ授ク】 危難に臨みて、其の生を惜まず、一命を抛ちて、君のために竭すをいふ、論語の憲問に「子曰、見利思義、見危授命」授くとは持して人に與ふる義、

【危キコト朝露ノ如シ】 史記の商君傳に「君危若朝露、尚將欲延年益壽乎」と、漢書の蘇武傳に「人生如朝露、何久自苦如此」と、註に「朝露日ヲ見ル片ハ則チ晞ク、人命ノ短促ナルモ亦此ノ如シ」

【危キコト虎ノ尾ヲ蹈ムガ若シ】 書經の君牙に「心ノ憂危、若蹈虎尾、春ノ氷ヲ涉ルガ若シ」の註に「虎ノ尾ヲ蹈ムガ若シトハ、其ノ噬マンコヲ畏ル、春ノ氷ヲ涉ルガ若シトハ、其ノ陷ランコトヲ畏ル」

【危キコト累卵ノ如シ】 (危如累卵)卵を累ぬるは、隕れて碎け易し、其の危きと、之に似たるを言ふ、史記范雎傳に「秦王之國、危於累卵、得臣則安」

【過ヲ補ヒ遺ヲ拾フ】 君德の闕けたるを補ふの義、漢書汲黯傳に「出入禁闥、補過拾遺」

【過ヲ文ル】 論語子張篇に「子夏曰、小人之過也、必文」とあり、文は飾るなり、過をとりつくろひてよきやうに言ふなり、これ過を改むるに吝なるなり、

【過ヲ觀テ斯ニ仁ヲ知ル】 過失を觀察して、其の厚きに失する者は、其の人の仁なることを推知せらるとの義、論語に「人之過也、各於其黨、觀過斯知仁矣」黨は類なり、

【過チテ改メザル、是ヲ過トイフ】（過而不改、是謂過矣）論語の衛靈公篇の語、人は過失なしとせず、たゞ能く改むれば過なき前にかへる、改めざるときは、その過は遂に成りて眞の過となるなりとて、過を改むるに憚るなかれと戒めたまひしなり、左傳にも「人非聖人、誰無過、過能改、善莫大焉」とあり、

【過チテハ則チ改ムルニ憚ルコトナカレ】（過則勿憚改）論語の學而篇の語、註に「憚ハ畏難ナリ、自ラ治メテ勇ナラザレバ、則チ惡日ニ長ズ、故ニ過アルトキハ、則チ當ニ速ニ改ムベシ、畏レ難リテ、苟モ安ズ可カラザルナリ」

【阿諛】おもねりへつらふ義、史記封禪書に「——苟合之徒自此興」

【阿羅漢】梵語阿は不なり、羅漢は生なり、佛の稱號、後世の中に、更に生ぜざる者といふ義、略して羅漢とのみいふ、十六羅漢、五百羅漢、

【新ニ沐スル者ハ必ズ冠ヲ彈ク】其の身を潔くする者は、外物の汚がさんことを惧るゝに喩ふ、史記屈原傳に「新沐者必彈冠、新浴者必振衣安能以身之察々、受物之汝々者乎」と察々は清潔なり、汝々は、垢塵を蒙むるをいふ、荀子に「新浴者振其衣、新沐者彈其冠」人之情也」

【阿蘭若】阿蘭那・阿練若ともいひ、蘭若・練若とも略稱す、寺または僧庵の義なり、翻譯名義集に「或ハ阿練若ト名ヅク、大論ニハ、遠離處ト飜シ、薩婆多論ニハ、閑靜處ト飜ス云々」また無諍・寂靜處などとも譯す、人家を離れて閑寂なる處の義なり、

【霰】爾雅に「雨雪雜ハリ下ルヲ霰トイフ」と、釋名に「霰ハ星ナリ、水雪相搏チ、星ノ如ク散ズルナリ」と、詩經の小雅に「如彼雨雪、先集維霰」

【蟻】格物論に「蟻ハ穴居卵生、白黑黃赤大小數種アリ、大蟻ハ俗ニ呼ビテ蚍蜉トナス、小ナル者ハ、齊人呼ビテ蟻蛘トナス、マタ翅アリテ飛ブ者アリ云々」莊子に「蟻慕羶、焦氏易林に「蟻封穴戶、大雨將集」

【或ハ賊ヲウツノ笏トナル】（或爲擊賊笏）文天祥正氣歌の中の句なり（段秀實）を見よ、

【有レドモ無キガ如クス】論語泰伯篇に「曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友嘗從事於斯矣」と、吾友とは顏子を斥す、顏子の彼我の心なく度量の大なるを美めたるなり、有無虛實は皆才德をさす、

イ 井

【匜】手を洗ふに用ふる器、柄の中に道ありて以て水を注ぐべきもの、唐書百官志に「盥則奉匜」

【彝】宗廟の常器なり、左傳の襄十九年に「取其所得以作彝器」の註に「彝ハ常ナリ、鐘鼎ハ宗廟ノ常器タルヲ謂フ」と、また廣韻に「酒尊ナリ」と、——ハ酒を盛る尊の總名なり、

【遺愛】古人仁愛の後世まで遺るをいふ、左傳昭二十年に「及子產卒、仲尼聞之出涕曰、古之——也」註に「子產愛セラルヽ古人ノ遺風アリ」

【遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹テヽ聽ク】（香爐峯ノ雪）を見よ、

【委蛇】なゝめにゆく貌、焦氏易林に「——循河、至北海涯」逶迤を見よ、また委曲自得の貌とも注す、詩經の召南に「退食自公、委蛇——」

【依依】柔弱の貌、詩經に「昔我往矣、楊柳——」また離るゝに忍びざる義、楚辭に「志繽繽兮——」元好問の梨花海棠詩に「——如有意、脈脈不得語」

【依韋】漢書禮樂志に「五音六律——響昭」註に「——ハ諧和シテ相乖離セザルナリ」

【依違】判然と決せず、依るが如くにして、依らず、違ふが如くにして違ひもせざるをいふ、漢書谷永傳に「展意無所——」

【怡怡】和ぎ悅ぶ貌、論語鄉黨篇に「逞顏色——如也」逞は放なり、また同書子路篇に「兄弟——」

【訑訑】自得の貌、淺はかの心よりして、自ら其の智を足れりとして、善言を嗜まざる貌、孟子に「——之聲音顏色、距人於千里之外」訑訑また詑詑に作る、同じ、

【猗猗】美くしく盛んなる貌、詩經の衛風に「綠竹——」傳ニ「——ハ美盛ノ貌」とあり、班固の西都賦にも「曄曄——」とあり、

【猗違】依違に同じ、事を決せざるをいふ、漢書孔光傳に「——者連歲」

【唯唯】人の言をうべなふ敬語「ハイ〳〵」といふに同じ、戰國策に「范雎曰、——」轉じて人の言に少しもさからはざる義に用ふ、史記に「諸大夫朝徒聞——不聞周舍之諤々」

【逶迤】邪行（ナヽメニユク）なり、淮南子に「河——、故能遠、山陵遲、故能高」別に委迤・委移・委蛇に作る、同義

なり、

【逶移】 長き貌、楚辭に「遵曲江之——分」

【韡韡】 光明の貌、また華の盛んにあきらかなる貌、詩の小雅に「棠棣之華、鄂不——」鄂は、鄂然として、外に見はるゝ貌、

【伊優】 屈曲佞媚の貌「オモネリヘツラフ」貌、趙壹の窮鳥の詩に「——北堂上、骯髒倚門邊」

【夷猶】 猶豫なり「タユタフ」楚辭に「君不行兮——」

【異域】 外國をいふ、後漢書に「立功——」以取封侯」

【異域鬼】 外國にて死するをいふ、李陵の書に「生爲別世之人、死爲——」

【遺佚】 放棄するをいふ、孟子に「——而不怨」

【伊尹】 有莘の野に耕す、殷の湯王、幣を以て三たび之を聘せしかば、遂に幡然として起ち、湯を相け夏を伐ちて民を救ひ、天下を以て己の任となし、一夫もその所を獲ざれば、曰く、時予の辜なりと、湯崩じて、其の孫太甲立ちしが不明なりしかば、尹之を桐宮に放ち、憂に居ること三年、之をして仁に處り義に遷らしめ、卒に令主たらしむ、孟子その聖の任なる者と稱せり、沃丁の時卒して亳に葬むらる、

【卣】 酒を盛る一種の尊、彝より小さく、罍より大いなり、故に中尊といふ、詩經の大雅に「秬鬯一——」

【優渥】 恩澤のゆたかに洽きをいふ、詩の小雅に「上天同雲、雨雪雰々、益之以霢霂、既優既渥、既霑既足、生我百穀」と、優、渥、霑、足は、皆潤のゆたかにあまねき意、文選の註に「——ハ厚キナリ」と、天恩——などと用ふ、

【油油】 和らぎ謹む貌、禮記の玉藻に「三爵而——以退」爵は「サカヅキ」また水の流るゝ貌をいふ、楚辭に「——湘江長流汨兮」また禾黍のつやある貌、東晳の補亡詩に「厥草——」

【呦呦】 說文に「鹿鳴ノ聲」と、詩經の小雅に「——鹿鳴、食野之苹」

【幽幽】 深く遠き貌、詩經の小雅に「——南山」

【悠悠】 憂ふる貌、詩經の小雅に「——我思」また單になが く思ふ貌にも用ふ、また遠き貌、詩經の鄘風に「驅馬——」また行く貌、詩の大雅に「——南行」また眇邈として期りなき貌、詩經の王風に「——蒼天」また閑暇の貌、詩經の小雅に「——旆旌」

【優優】 ゆつたりとして和らぎたる貌、寬裕の意、詩經の商頌に「敷政——」

【優游】 閑暇の貌、詩の大雅に「——爾休矣」また自得の

貌、東都賦に「於是百姓、莫不——而自得、玉潤而金聲」また決しかぬる貌、漢書兒寬傳に「今將舉大事、——數年」

【由由焉】 自得の貌、孟子に「——與之偕而不自失焉」また喜悅の貌、

【優游不斷】 「グヅ〳〵」して決斷なきなり、漢書元帝紀の贊に「牽制文義、——」

【友于】 兄弟のなかよきをいふ、また單に兄弟の義とす、書經に「惟孝友于兄弟」とあるに由る、陶潛の詩に「一欣侍溫顏、再喜見——」また杜甫の詩に「山鳥山花吾——」とあるは、花鳥を兄弟の如くに親み愛する義、

【誘掖】 たすけみちびく義、誘は前に在りて導くをいひ、掖は傍に在りて扶くるをいふ、詩の陳風衡門の序に「——其君」

【幽咽セル泉ノ流】 太平記卷四に見ゆ、白樂天の琵琶行に「幽咽泉流水下灘、水泉冷澁絃凝絕云云」の句あり、琵琶の音曲の美妙なるを稱せし語なり（琵琶行）を見よ、

【遊衍】 あそびて自ら恣にするをいふ、詩の大雅に「及爾——」

【幽ヲ闡ク】 （闡幽）闡は明なり、隱幽なる者を開發して、明かならしむる義、易の繫辭下傳に「夫易彰往而察來、而微顯——」

【幽塏】 塏は小高くして濕り氣なき地、——は、靜かなる岡をいふ、王陽明の句に「移居喜——」

【游閑公子】 富みて衣食の憂なき、優游閑暇の人をいふ、漢書貨殖傳に「有——之名」

【遊嬉】 あそびたのしむ、陸游の句に「阡陌恣——」

【悠久】 はるかに久しきと、長久に同じ、禮記に「——所以成物也」

【有脚陽春】 陽春はあたゝかき春にて、萬物を發生せしむ、到る處に恩惠を施すこと、陽春の物を煦むるが如きをいふ、開元遺事に「宋璟、郡ノ太守トナリ、民ヲ愛シ物ヲ恤ム、時人咸——トイフ」

【幽居】 獨り靜かにくらすと、禮記の儒行に「——而不淫」

【游魚出デテ聽ク】 琴の音の妙なるに、魚までが浮び出て聽くをいふ、荀子の勸學篇に「伯牙鼓琴、六馬仰秣、瓠巴鼓瑟、游魚出聽」

【游居常アリ、必ズ有德ニ就ク】 管子の弟子職に見ゆ「志無虛邪、行必正直、游居有常、必就有德云々」常と

は常所なり、就〻有德」とは仁者に就き親むをいふ、

【熊渠虎ヲ射ル】（熊渠射）虎韓詩外傳ニ「熊渠子、夜行シ、寢石ヲ見テ伏虎ト爲シ、弓ヲ彎キ之レヲ射ル、金ヲ沒シ羽ヲ飲ム、下リ視テ其ノ石ナルヲ知ル、因ッテ復タ之レヲ射ルニ、矢摧ケテ迹無シ」

【遊宦】遠方へ行きて仕官すること、陸機の句に「——久不歸」

【憂患ニ生ジ安樂ニ死ス】（生於憂患死於安樂）孟子告子篇に出づ、人の生命は憂患に出でて、死亡は安樂に由るをいふ（入テハ則チ）を參看せよ、

【右契】證書をいふ、戰國策に「操——而爲公責德於秦魏之王」また禮記に「獻粟者執——」と（左契）を見よ、

【雄雞自ラ其ノ尾ヲ斷ツ】（雄雞自斷其尾）左傳の昭二十二年に「賓孟、郊ニ適キ、雄雞ノ自ラ其ノ尾ヲ斷ツヲ見ル、之ヲ侍者ニ問フ、曰ク、自ラ其ノ犧タランコトヲ憚リテナリ」註に「其犧牲ト爲リ、宗廟ニ奉ゼラレンコトヲ畏ル、故ニ自ラ殘毀スルナリ」

【由蘖】由一に旁に作る、木の條を生ずるをいふ、蘖は傍生なり、書經の盤庚に「若顛木之有——」

【游闕】游車にして、戰車の闕を補ふ者をいふ、猶ほ游軍といふが如し、左傳宣十二年に「使潘黨率——四十乘從唐侯以爲左拒」

【游俠】死を輕んじ義を重んずる人をいふ「オトコダテ」文選に「——之雄也」任俠・豪俠皆同じ、

【莠言】莠は醜なり「ミグルシキ」言なり、詩の小雅に「好言自口、——自口」

【游言】無根の言をいふ、禮記に「大人不唱——」

【牖戶ヲ綢繆ス】患難を未萌に防ぐをいふ、詩の豳風鴟鴞に「迨天之未陰雨、徹彼桑土、綢繆牖戶、今女下民、或敢侮予」迨は及なり、桑土は桑根なり、綢繆は纏綿補葺なり、牖は氣を通ずる處、戶は出入する處なり、徹は取なり、詩の意は、鳥の言に托し、我れ天の未だ陰雨せざる時に先ち、往いて桑根を取り、以て巢の隙穴を纏綿補葺し、之をして堅固ならしめ、以て陰雨の患に備ふるときは、此の下土の民、誰か敢て予を侮る者あらんやと云ひ、以て王室を愛する爲めに、豫め患難を防ぐの意に比せり、

【有扈氏】昔、夏と同じく姒姓の國にして、今の陝西省西安府鄠縣の地、

【熊虎ノ將】勇猛なる將帥をいふ、三國志に「周瑜曰、劉「備梟雄之姿、而有關張——之」「關張は關羽・張飛、

【雄材大略】英雄の材、遠大の略をいふ、漢書武帝紀に「如武帝之——不改文景之恭儉以濟斯民」

【有巢氏】太古の君長の名、木を構へて巢を爲り、木實を食ふ、

【宥坐ノ器】（欹器）を見よ、

【幽思】獨り深く思ふこと、鮑昭の詩に「歎息空房婦、——坐自傷」

【疣子】「イボ」（赤痣）を見よ、

【逌爾】笑ふ貌、班固の答賓戲に「主人——而笑」註に「——ハ顏色ノ寬舒ナル貌」と、逌然に作る、同じ、

【雄姿】すぐれてつよき姿容をいふ、三國志に「陳登曰、——傑出有霸王之略、吾敬劉玄德」

【猶子】禮記檀弓上篇に「兄弟之子猶子也」とあり姪をいふ、

【游子】卓氏藻林に「漢雋ニ、出游シテ外ニ在ル者ヲイフ」漢書高帝紀に「——悲故鄉」唐の孟郊の——吟に「慈母手中絲、——身上衣、臨行密々縫、意恐遲々歸、難將寸艸心、報得三春暉」

【遊絲】「イトユフ」なり、沈約の詩に「——映空轉」（野馬）

【有終】終を全うする義、易の謙の卦に「謙亨君子——見よ、吉」詩經に「靡不有初、鮮克有終」

【有識ノ哂】哂は音シン、あざけり笑ふ、見識のある人のあざけり、隋書に「頗爲有識所哂」

【游子ナホ殘月ニ行キナヤム云々】東關紀行に見ゆ、これは彼の孟嘗君の函谷關に行きなやみ、從者の鷄鳴のまねをなして、纔に免るゝことを得たる史記の故事に本づき和漢朗詠集に引きたる、賈島が曉の賦に「佳人晝飾於晨粧、魏宮鐘動、遊子猶行於殘月、函谷鷄鳴」の句によれるなり。清少納言の、この故事によりて「夜をこめて鳥のそらねはかるとも世に逢阪の關はゆるさじ」とよめることは人の知るところなり、（函谷ノ鷄鳴）を見よ、

【幽人】隱者なり、易經に「履道坦坦、——貞吉」と北山移文に「或默——長往」

【雄心】壯志に同じ、阮瑀爲曹公與孫權書に「大丈夫——、能無憤發」

【遊刃餘地アリ】事を處するに迫らずして宜しきを得るに喩ふ、莊子の庖丁解牛の條に「今臣之刀、十九年矣、所解數千牛矣、而刀刃若新發於硎、彼節者有閒、而刀刃者無厚、以無厚入有閒、恢々乎其於遊刃、必有餘地矣」（庖丁牛ヲ）を參看せよ、

【遊將】 遊軍の「タイシャウ」兵衡に「——遊兵ハ、常ニ在ツテ、不時ニ用ヲ候ツ」

【優柴】 十分にほめすゝむるをいふ、南史に「今區宇寧晏、宜加——」

【右手ニ圓ヲ畫キ、左手ニ方ヲ畫ケバ、兩ナガラ成ルコト能ハズ】 一時に兩事を兼ね行ふべからざるに喩ふ、韓非子に「右手畫圓、左手畫方、不能兩成」とあり、隋書に「劉炫眸子精明、視日不眩、左手畫方右手畫圓、口誦目數、耳聽五事同舉、無所遺失」

【幽峻】 「オクブカクシテケハシ」南史に「每有所遊、必求其——」

【右職】 高官をいふ、漢書循吏傳に「文翁以爲——」古

雋考略に「——ハ樞要ノ官」

【游食】 ぶら〳〵と遊びて食ふ義、荀子の成相に「臣下職莫——」

【幽棲】 世俗の外に在りて、閑かなる境に心やすくくらすと、杜甫の句に「——地僻經過少、棲一に栖に作る、同じ、

【油然】 雲の盛なる貌、孟子の梁惠王篇に「天——作雲、沛然下雨」

【逌然】 自得の貌、史記趙世家に「列侯——」註に「寬緩ナリ」と列子に「終身——不知榮辱之在彼也在我也」また笑ふ貌にも用ふ、逌爾に同じ、

【遊仙窟】 唐の張文成が仙窟に遊びたることを記した支那小說、和版あり、

【遊仙枕】 開元遺事に「龜茲國ヨリ枕一枚ヲ進メ奉ル、其ノ色瑪瑙ノ如クニシテ、溫潤玉ノ如ク、製作甚ダ工ナリ、之ヲ枕ニシ寢ヌレバ、則チ十洲・三島・四海・五湖盡ク夢中ニ在リテ見ユ、帝、因ツテ——ト號ス、後チ楊國忠ニ賜フ」

【游道】 交游に同じ、史記陳丞相世家に「齎用益饒——日廣」

【有道ノ碑】 後漢書郭泰傳ニ「泰辛ス、四方ノ士千餘人皆來リ會ス同志ノ者、乃チ共ニ石ニ刻シ碑ヲ立ツ、禁邕文ヲ爲ル、既ニシテ盧植ニ謂ツテ曰ク、吾碑銘ヲ爲ル多シ、皆德ニ慙ヅルアリ、惟郭有道（有道ハ泰ノ字）ノ碑文ノミハ、媿ヅル色ナシト」

【幽探】 山水の景を奥ぶかく、尋ねさがすと、蘇軾の句に「輕棹極——」

【雄斷】 事を斷ずるに、ぐづ〳〵せざるをいふ、後漢書光武紀に「明明廟謀、赳赳——」

【有智無智校ブレバ三十里】 智愚の差、甚しきをいふ、

事類全書に「後漢ノ楊脩、字ハ德祖、太尉震ノ玄孫、學ヲ好ンデ俊才アリ、丞相曹操ガ主簿トナル、語林ニ曰ク脩江南ニ至リ、曹娥ノ碑ヲ讀ム、碑背ニ八字アリ、曰ク黃絹幼婦、外孫齏臼ト、操解セズ、脩ニ問ヒテ曰ク、卿知ルヤ否ヤト、脩曰ク之ヲ知レリト、操曰ク且ラク言フナカレ、朕ガ之ヲ思フヲ待テト、行クコト三十里、乃チ之ヲ得タリ、脩ヲシテ解セシム、脩曰ク黃絹ハ色絲、色絲ハ絕ノ字、幼婦ハ少女、少女ハ妙ノ字、外孫ハ女子、女子ハ好ノ字、齏臼ハ辛ヲ受ク、受辛ハ辭ノ字ト、操曰ク、一ニ朕ガ意ノ如シト俗ニイフ、有智無智校三十里」とあり、齏は辛き物を擣くをいふ、

【雄張】 猶ほ熾盛の如し、勢の强さをいふ、後漢書班超傳に「于寘王——南道」

【遊女】 娼妓なり、「ウカレメ」詩の周南漢廣篇に「漢有遊女、不可求思」思は語の辭なり、

【優寵】 すぐれたるいつくしみ、後漢書に「帝每——之」

【伊鬱】 氣のふさがりて舒びざる義、班彪の北征賦に「永——其誰愬」一に鬱伊に作る、同じ、

【友悌】 弟をいつくしみ、兄に順ふをいふ、兄弟なかよさ義、唐書に「孝慈——」

【游偵】 偵は伺ひ探る義、——は、しのびて敵狀を伺ふもの「マハシモノ」左傳に「諜者曰——」

【雄圖】 すぐれたるはかりごと、偉略に同じ、晉書武帝紀贊に「決神算於深衷、斷——於議表」

【郵亭】 書を傳達する舍をいふ、今の驛遞の如し、「漢書平帝紀ニ「因——書以聞」また宿驛をいふ、故事瓊林に「境上行書ノ舍ナリ、今ノ驛館ヲイフ」

【尤侗】 字は同人、更に展成と字す、悔庵また艮齋と號し、晚に西堂老人と號す、長州の人、康熙己未鴻博に擧げられ、檢討を授けらる、著すところの西堂雜組傳へて禁中に入る、章皇帝稱して眞才子となす、翰林に入る、聖祖稱して老名士となす、聯句を堂楹に刻して曰く、眞才子章皇天語、老名士今上玉音と、天下その榮遇を羨み李青蓮に比すといふ、西堂全集餘集一百四十三卷あり、

【褎トシテ充耳ノ如シ】 褎は笑多き貌、充耳は紞なり、唯褎然と笑ふのみにて、耳を塞ぎて聞かざるが如きをいふ、詩の邶風に「叔兮伯兮、褎如充耳」一解に褎は盛服なり、大夫褎然として、脅盛の服ありて、稱ふ能はざるなりと、紞は音タン瑱（ミヽフサギ）を懸くる「ヒモ」

【有年】 年は五穀のよく熟すること、——は豐年の義、春秋の桓公三年に「——」註に「五穀皆熟書」——」とあり、

【優報】 「ユタカナルムクヒ」南史に「朝議——之」豐報に同じ、

【油幕ノ遊】 天寶遺事に「長安ノ貴游子弟、春時花圃ノ中ニ遊宴供帳ス、行クニ隨ヒ、載スルニ油幕ヲ以テス、或ハ陰雨ニ遇ヘバ、則チ油幕ヲ以テ之レヲ覆ヒ、歡ヲ盡シテ歸ル」(——)を見よ、

【有髮僧】 (——)

【雄飛】 男兒の奮起するに喩ふ、雄鳥の奮起して、衆雌を服する如きをいふ、後漢書に「趙溫字ハ子柔、蜀郡成都ノ人、初メ京兆ノ郡丞ト爲ル、歎ジテ曰ク、大丈夫當ニ雄飛スベシ、安ンゾ能ク雌伏セント、遂ニ官ヲ棄テテ去ル、歲饑エタルトキ、家糧ヲ散ジテ窮餓ヲ賑シ、活スルトヿロ萬餘人後チ遂ニ三公ニ至ル」

【熊羆士】 勇猛なる士をいふ、書經に「亦有——之——不二心之臣」

【熊貔ノ士】 勇猛なる兵士をいふ、書經の牧誓に「尙桓桓如虎如貔如熊如羆于商郊」とあるに本づく、貔は虎の屬、執夷ともいふ、

【熊羆夢ニ入ル】 男子を生む祥なり、詩經の小雅斯干に「吉夢維何、維熊維羆、維虺維蛇」また「大人占之、維熊維羆、男子之祥、維虺維蛇、女子之祥」とあるに本づく、大人は大卜の屬、占夢の官なり、熊羆は陽物、山に在り、强力壯毅男子の祥なり、虺蛇は陰物、穴處し、柔弱にして隱伏す、女子の祥なり、

【雄風】 すぐれてつよき風をいふ、宋玉風賦に「此特大王之——也」また威風の義、柳宗元詩ニ「——呑七澤」

【游服】 日常游戲の時の服をいふ、左傳に「——而逆之」

【尤物】 尤は異なり、多くはすぐれたる美婦をいふ、左傳の昭二十八年に「叔向申公巫臣氏ニ娶ラント欲ス、(中略)其ノ母曰ク、吾レ之ヲ聞ク、甚ダ美ナルハ必ズ甚ダ惡シキコトアリ、(中略)夫レ——ハ以テ人ヲ移スニ足ル有リ、苟モ德義ニアラザレバ、必ス禍アラント」

【幽昧】 かすかに暗きこと、屈原の離騷に「路——以險隘」

【優孟ノ衣冠】 史記の滑稽傳に「楚ノ相、孫叔敖、優孟ノ賢人ナルヲ知ルヤ、善ク之ヲ待ツ、病ミテマサニ死セントスル片、ソノ子ニ屬シテ曰ク、我死ナバ汝必ズ貧困ナラン、往イテ優孟ヲ見テ、我ハ孫叔敖ノ子ナリトイヘト、居ルコト數年ソノ子窮困ス、乃チ父ノ遺命ノ如ク優孟ヲ見テシカイフ、優孟即チ孫叔敖ノ衣冠ヲ爲シ、掌ヲ抵ツテ談語ス、歲餘ニシテ孫叔敖ニ像ル、楚王ノ左右別ツ能ハズ、莊王見テ大ニ驚キ、以テ孫叔敖復生ズトナシ、以テ相トナサント欲ス、優孟曰ク、請フ歸リテ婦ト之ヲ計ラント、三日ノ後、優孟復來リ、王ニ白シテ曰ク、婦言フ、楚ノ相トナルナカレ、孫叔敖ハ楚ノ相トナリ、忠ヲ盡シ廉ヲ爲シ、楚王以テ霸タルヲ得タリ、而ルニ死シテ、ソノ子立錐ノ地ナク、貧困甚シ、必ズ孫叔敖ノ如クナルハ、自殺スルニ如カズト、是ニ於テ莊王優孟ニ謝シ、乃チ孫叔敖ノ子ヲ召シテ之ヲ寢丘四百戶ニ封ジ、以テソノ祀ヲ奉ゼシム云々」この故事よりして、その實なくして外面を虛飾することに用ふ、また俳優が忠臣などに擬する如きにも用ふ、

【有無ヲ交易ス】 我に餘り有る所ろの物を以て、我に無くして他に餘りある所ろの物と易ふるなり、史記越世家に「此天下之中、交易有無之道通爲生可以致富矣」唐書龜茲傳に「貿遷有無、商賈樂也」とあるも同じ、管子にも「以其所有易其所無、買賤鬻貴」

【幽冥】 かすかにくらし、冥土の義に用ふ、漢書の劉歆傳に「——而莫知其原」

【幽明】 幽は冥土、明は現世、禮記の祭義に「以別——」

【遊冶郎】 たはれ男をいふ、放蕩ムスコ、妖冶の女態をなし、色を賣るもの、李白の採蓮曲に「岸上誰家——三三五五映垂楊」

【由余】 周の人、兵法六篇を著す、秦の穆公、その謀を用ひ、地を拓くこと千里、遂に西戎に霸たり、

【猶豫】 ぐづ〳〵して決せざるなり、楚辭に「心——而狐疑兮」漢書ノ高后紀に「計——未有所決」ノ註ニ「猶ハ獸ノ名ナリ。善ク木ニ登ル、性疑慮多シ、常ニ山中ニ居ル、忽チ聲アルヲ聞クトキハ、即チ人ノ來リテ己ヲ害センコトヲ恐レテ、每ニ豫ノ樹ニ上ル、久クシテ人無シ、而ル後チ敢テ下ル、須臾ニシテ又上ル、此ノ如クスルコト屢ナリ、故ニ決セザル者ヲ——ト稱ス」と、猶與に同じ、一解に豫も疑多き獸の名なりと、

【游豫】 帝王の游幸をいふ、孟子梁惠王下に「夏諺曰、吾王不遊、吾何以休、吾王不豫、吾何以助、一遊一豫、爲諸侯度」朱註ニ「豫ハ樂ナリ(中畧)王者ノ一遊一豫ハ、皆恩惠ノ以テ民ニ及ブアリ、而シテ諸侯皆法ヲ取ル、敢テ事ナクシテ漫遊シ以テ其ノ民ヲ病マシメザルナリ」

【猶龍】 史記の老子傳に「孔子去ツテ弟子ニ謂ツテ曰ク、鳥ハ吾レソノ能ク飛ブヲ知ル、魚ハ吾レ能クソノ游グヲ知ル、獸ハ吾レソノ能ク走ルヲ知ル、走ル者ハ

以テ罔ヲ爲スベシ、游グ者ハ以テ綸ヲ爲スベシ、飛ブ者ハ以テ矰ヲ爲スベシ、龍ニ至リテハ吾レソノ風雲ニ乘ジテ天ニ上ルヲ知ル能ハズ、吾レ今日老子ヲ見ル、其猶龍邪」

【幽靈】 冥鬼なり、文選の謝惠連の祭古冢文に「——髣髴、歆我犧樽」

【夷懌】 夷は安なり、悅なり、——はよろこぶ義、詩經に「我有嘉客、亦不——」

【夷悅】 「ヨロコブ」家語に「四海之舟輿所」及、莫不——、——怡悅に同じ、

【怡悅】 「ヨロコブ」陶弘景の句に「只可自——」

【異苑】 十卷、宋の劉敬叔撰す、記するところ皆神怪の事、詞を遣る簡古にして意態具足す、唐人小說の冗沓なるに似ず、

【韋偃】 唐の畫家なり、畫史彙傳に「鑒ノ子京兆ノ人蜀ニ居ル、山水竹樹人物花鳥、思、高クシテ格、逸ナリ、馬ヲ畫クヱ筆法磊落揮霍振動ス、家學ヲ受ケ習ヒ、父ニ過グルコト遠キコト甚シ」歷代名畫記に、偃を鷗に作る、一說に偃は鑒の子なりといふ、鑒は鑒の弟なり、

【韋應物】 (韋蘇州ガ)を見よ、

【韋ヲ佩ビ自ラ緩クス】 韓非子に「西門豹之性急、故佩韋以自緩、董安于之性緩、故佩弦以自急」韋は「ヲシカハ」柔かなるものなればなり、董安于は萬姓統譜に「趙簡子、使治晉陽、民樂其政」とあり、

【扆ヲ負フ】 扆は屏風なり、屏風を坐背に立てゝ、南面するは王者の位なり、淮南子に「負扆而朝諸侯」また漢書西域傳に「天子負鼎依」の依は、扆に通ず、

【帷ヲ下ス】 漢書に「董仲舒爲博士、下帷講誦、三年不窺園」帷は「トバリ」後世は私塾を開き教授する義とす

【頤ヲ支ヘテ坐ス】 「ホヽヅエ」をつきて坐す、白居易の詩に「薄晚支頤坐」頤は「アゴ」なり、

【衣ヲ千仞ノ岡ニ振フ】 文選左思の詩に「振衣千仞岡、濯足萬里流」世塵を脫し去りて志を高尙にする義、

【頤ヲ朶ル】 (朶頤)頤頷を朶れ動かして物を食はんと欲するさまなり。猶ほ垂涎といふが如し、易の頤卦に「觀我朶頤」強國が弱國を幷呑せんとするなどに用ふ、

【頤ヲ解ク】 (解頤)を見よ、

【彝ヲ秉ル】 (秉彝)詩の大雅烝民に「民之——、好是懿德」彝は常なり、五常の道を執りて失はざるをいふ、

【威ヲ霽ス】 怒の解くるをいふ、漢書魏相傳に「心善其言、爲霽威嚴」また唐書魏徵傳に「徵每犯顏進諫、雖逢太宗怒甚、徵神色不變、上爲之霽威」の註に「霽ハ止

ナリ

【衣ヲ拂フ】 (拂衣)投袂と同じ、奮ひ起つの狀なり、左傳に「——從之」

【遺ヲ拾ハズ】 遺は「オトシ」物なり、他人のおとしたる物を拾ひて私有せざる義、史記に「孔子與聞三月(中略)男女行者、別於塗、塗不拾遺」また同書に「齊威王曰、吾有臣種首者、使備盜賊、則道不拾遺」

【意ヲ防グ城ノ如クス】 (防意如城)城の敵をふせぐ如く、私意の生ずるを防ぎやぶる義、富弼の座屏に書せし句に「守口如瓶——」朱熹の敬齋箴にも見ゆ、

【衣ヲ振フ千仞ノ岡】 (振衣千仞岡)世說に「宋景文云、左太冲詩、——、濯足萬里流、使人飄々有世表意」

【椸架】 「コロモカケ」說文に「衣架ナリ」と、禮記の曲禮に「男女不同——衣架」とも書く、

【懿戒】 懿は美なり、善なり、「ヨキイマシメ」國語の楚語に「於是乎作——自儆」韋昭曰く「懿は讀ンデ抑トナス」と即ち詩經の抑の詩是れなり

【威海衞】 山東省登州府文登縣に屬す、淸國政府はこの地を北洋水師の根據地として、對岸の旅順口と共に渤海の咽喉を扼せしが、明治二十七八年の戰役に、我が兵の爲めに占領せられ、水師は全く滅びて、提督丁汝昌は自殺せり、然るに英國は日本の撤兵を待ちて淸國に迫り、北部支那に於いて適當の軍港を得んため、竝に通商を保護せんために、かの旅順口が露國の租借に屬する期間、——及び附近水面を租借するの條約を締結せり、時に淸の光緒二十四年(我が明治三十一年)なり、

【衣桁】 衣架なり、脫ぎたるきものをかけ置く具、二ツの柱の上に橫木をわたして作る、古樂府東門行に「還親桁上、無懸衣」杜詩に「翡翠鳴——」衣架椸、皆同じ

【夷考】 夷は平なり、平かに考ふる義、孟子に「夷考其行、而不掩焉者也」

【夷岡】 「タヒラカナルヨカ」夏侯湛の句に「登——以廻眺」

【韋皐再世ノ緣】 剪燈新話の翠々傳玉笙女兩世因緣の註に「唐韋皐遊江夏、見一青衣名王笙、未及破瓜之年、約自待、我五年而嫁、因留玉指環一枚、經五年不至、玉笙乃絕食而殞、後五年韋皐得一歌姬、以玉笙爲號、中指有肉隱起、無異玉環也、云々」また宣室志にいふ「劒南節度使韋皐、旣生一月、召群僧會食、有一胡僧貌甚陋、旣食、韋氏命乳母出嬰兒、請群僧祝其壽、胡僧忽謂嬰兒曰、別久無恙乎、嬰兒若有喜色、衆皆異

之、胡僧曰、此乃諸葛武侯之後身耳、吾往歳在劒門、與此子善、今聞降于韋氏、吾故不遠而來、韋氏因以武侯字之云々」

【作麼】 葛原詩話に「作麼生ト句尾ニ用フルコト甚ダ多シ、句頭ニ用ヒタルハ、楊廷秀ガ端午後頓熱ノ詩ニ只今新暑已熇然、——禁當六月天、マタイフ終更猶半歳、——度居諸、マタ瑞香ノ詩ニ斜來大笋束仍攢、——開時色兩般トアリ」また怎の字一字にても「イカンゾ」また「イカンカ」と譯す、

【怒ヲ遷サズ】 甲に怒りしことを、乙に移さゞるをいふ「ヤツアタリ」をせざる義、論語に「不遷怒、不貳過」

【怒ハ逆德ナリ】 史記の主父偃傳に「怒者逆德也、兵者凶器也、爭者末節也、古之君一怒、必伏尸流血、故聖王重行之」怒のつゝしむべきを戒めたるなり、

【怒レル髮冠ヲ衝ク】 (怒髮)を見よ、

【依稀】 猶ほ彷彿といふが如し「ボンヤリ」としたる貌、劉禹錫の詩に「南國江山舊帝畿、宋臺梁館尙——」羅鄴の詩に「惟有夢魂南去日、故鄉山水路——」

【依歸】 猶ほ倚賴の如し、書經に「我先王亦永有——」また韓愈の閔己賦に「昔顏氏之庶幾兮、在隱約而平寬、有至聖而爲之——兮、又何不自得於艱難」

【威儀】 をも〳〵しく則るべきをいふ、左傳に「北宮文子云、有威而可畏謂之威、有儀可象謂之儀」また詩經の邶風にも、——棣棣不可選也」

【異卉】 卉は衆艸の總名、——は、めづらしき草なり、珍卉・奇卉皆同じ、西京雜記に「獻名果——三千餘種」

【偉器】 衆にすぐれて大いなる器量ある人、後漢書に「高明必爲——」

【欹器】 孔子家語に「孔子觀於魯桓公之廟、有——焉、此爲宥坐之器、孔子曰、吾聞宥坐之器、虛則欹、中則正、滿則覆、明君以爲至誡、故常置之於坐側」と、荀子の註に「宥ハ右ト同ジ、人君坐右ニ置キテ以テ戒ト爲スベキヲイフナリ」と、また一解に宥は、勸なり、勸戒の器なりと「ジフブンハイ」

【意氣】 氣概に同じ、江表傳に「太史慈勇有膽略、貴重然諾、一以——許知己、死亡不相負」

【意氣自如】 意氣故の如くにして、少しも變らざるをいふ、漢書李廣傳に「吏士皆無人色、而廣——益治軍事」

【威儀棣棣】 威儀に富みて、閑ひ習ふ貌、詩の邶風に「——不可選也」選は簡擇なり、威儀に、一の不善なく、また得て簡擇取舍すべからず、自ら反して闕くる

所ろなき義、

【意氣揚揚】 揚揚はあがり高ぶりて自得する意、史記の晏嬰傳に「晏子ノ御者大蓋ヲ擁シ、駟馬ニ策チ、——トシテ、甚ダ自得セリ」

【委曲】 委細の義、猶ほ詳悉といふが如し、鮑照の詩に「備聞十帝事、——兩都情」

【異曲同工】 (同工異曲)を見よ、

【郁郁】 文章の盛なる貌、論語八佾篇に「——乎文哉」

【煜煜】 光りかゞやく貌、梁簡文帝の詠朝日詩に「團團出天外、——上層峰」

【軍ヲ見テ矢ヲハグ】 俚諺なり、晏子春秋に、晏子の齊の景公に對へたる語に「愚者多悔、不肖者自賢、溺者不問墜、迷者不問路、溺而後問墜、迷而後問路、譬之猶臨難而遽鑄兵、噎而遽掘井、雖速亦無及已」とあるに本づく、說苑の說叢篇には越石父の言とす、されども脫文ありて解し難し、越石父は晏子の上客たりし人なり、

【鬻子】 一卷、舊本題して周の鬻熊撰すと爲す、今の傳ふる所ろは殘闕本なり、唐の逢行珪註と書す、書中第十四の篇目あるを以て、崇文總目に、十四篇と爲す、今の本は、其の著錄の目に因るのみ、其の實は二・三・四五・六・七・八の篇目ありて、一・九・十・十一・十二・十三の

六篇を缺き、每篇寥々たる數言あるのみ、漢志道家に、——二十二篇、班固曰く、名は熊、周の師と爲り、文王以下焉に問ふ、周封じて楚の祖と爲すと、凡そ子書の世に傳はりて最も先なる者は、惟——と爲す、知らざるべからず、漢志また小說家に、——說十九篇あり、班固は、以て後人の加ふる所ろと爲すときは、小說の——は、僞書と爲すなり、然れども今傳ふる所ろの——は、其の書概ね修身治國の術を擧げ、其の實は、雜家者流の言なり、老莊淸淨の旨と迥に殊なり、然れども漢志以下諸史及び諸家目錄は、皆、舊に仍りて道家に列し是正する者あるなく、名實相違ひ、考證家紛紜聚訟するのみ、是の書華州鄭縣尉逢行珪註と題し、卷首に序及び進書の表文あり、永徽四年十一月日と書す、則ち行珪は唐の高宗の時の人なるを知る、

【燠煖】 燠も煖なり「アタヽカシ」穀梁傳の疏に「無冰書時——也」

【郁李】 和名「ニハウメ」庭に植うる灌木、高さ二三尺、枝は叢生す、葉は「スモヽ」に似て小さく、互生す、春、葉閒に五瓣の花開く、大さ四分ばかり、白色にして紅邊甚だ美なり、實圓く、仲夏に赤く熟す、食ふべし、

【郁離子】 二卷、明の劉基著す、儒家類に屬す、學津本

を善とす、

【衣冠】 ——を着くる貴人をいふ、猶ほ搢紳といふが如し、漢書游俠傳に「所到——懷之」南史梁文獻皇后傳に「后生武帝將產之夕、后見庭內、若有——陪列焉」また李白の鳳凰臺詩に「吳宮花艸埋幽徑晉代——成古丘」

【池】 說文に「池ハ陂ナリ」と、また曰く「池ハ治ナリ、孔安國曰ク、水ヲ停ムルヲ池トイフ」と、禮記月令の註に「水ヲ蓄フルヲ陂トイヒ、地ヲ穿チ水ヲ通ズルヲ池トイフ」と、禮記の禮運に「城郭溝池以爲固」と、文選に「蛟龍得雲雨、終非池中物也」昆明池を參看せよ、

【畏敬】 かしこみうやまふ、易經に「人皆——」

【遺計】 遺は失なり、計を失ひ誤る義、後漢書桓榮傳に「慮無——」

【渭橋】 今の陝西省西安府の東北五十淸里に在り、

【貽厥】 孫をいふ、詩經に「貽厥孫謀」とあるに本づく、貽はのこし遺るなり、厥は其なり、南史の到溉傳に「溉孫藎早聰慧、溉每和御詩、上輒手詔戲曰、得無——之力乎」

【牲ヲ殺シ血ヲ耿ル】 太平記卷の九に見ゆ、禮記の注疏に「凡ソ盟フ者ハ旣ニ詛シテ牲ノ左耳ヲ割キ、珠盤玉敦ヲ以テ血ヲ盛リ、載書ヲ爲ル、書成リテ諸侯共ニ血ヲ耿リテ書ヲ讀ム、盟ヲ主ル者、牛耳ヲ執リ、然ル後、坎ヲ掘リテ牲ヲ埋ム、載書ヲ加ヘテ之ヲ埋ム、言フ心ハ、盟ニ背ク者ハ、此牛ノ如クナラシムトナリ」

【彝憲】 彝は常なり、憲は法なり、——は常法をいふ、書經に「永弼乃后于——」

【韋賢】 字は長孺、魯國騶の人、質朴篤學、號して鄒魯の大儒と稱す、累官して大鴻臚となる、漢の宣帝立ちて、謀議に與るを以て、爵關內侯を賜ひ、位丞相に至り、扶陽侯に封ぜられ、節侯と謚す、子は玄成、

【違言】 「サカラフコトバ」左傳に「鄭息有——」鄭息は二國の名、また道に違ふ言をもいふ、管子に「——不存口」

【韋玄成】 字は少翁、漢の平陵の人、賢の子、初め父の任を以て郎となり、五經諸儒と石渠閣に襍論す、元帝の朝相に拜し侯に封ぜらる、父子俱に明經を以て相に至りしを以て、諺にいふ「遺子黃金滿籯、不如敎子一經」と、子の彪、孝行純至、學を好みて洽聞なり、官司徒に至る、

【韋弦ノ佩】 氣質を變化し身を修むる訓戒とすることに借り用ふる語、韓非子に「西門豹性急、故佩韋以自緩、董安于心緩、故佩弦以自急」とあるに本づく、韋は「ナメシガハ」にて柔かなるもの、弦は弓の「ツル」にて急しきもの、佩は「オビモノ」とするなり、

【咿唔】 讀書の聲なり、宋の黃山谷の夜聞對牕孫元忠誦書戲作竹枝歌といふ詩に「南牕讀書聲——北牕見月歌竹枝」とあり、唔咿——共に同じ、また伊吾に作る、同じ、

【圍棊】 圍機活法に「博物志云、堯造——以敎子丹朱、或云舜以子商均愚故作——以敎之、其法非智者不能也」と爛柯を參看せよ、

【懿公鶴ヲ好ム】 衛ノ懿公を見よ、

【異口同音】 多人數同一に聲を發するをいふ、普賢經に「——敎於行者淸淨六根」

【醫國】 國語に「平公疾アリ、秦伯醫和ニ之ヲ視セシム文子曰ク、醫ハ國家ニ及ブカト、對ヘテ曰ク、上醫——其次救人、固醫官也」

【展座】 天子のゐましどころ、居るに——と稱し、行くに乘輿と稱す、

【韋莊】 字は端己、唐の京兆杜陵の人、乾寧元年の進士、李詢兩川宣諭和協使となるや、辟して判官となす、中原多故なるを以て王建に依らんと欲す、建辟して掌

書記となす。尋いで召して起居舍人となす、建、表して之を留む 後ち建に相たり、著すところ浣花集十卷補遺一卷あり、その詩音節頗る高亮、五代に在つて鐵中の錚々となす、

【葦巢】 依るところ堅固ならざれば、その身も安からざるに喩ふ、莊子に「葦末之巢、水風可敗」とあり、故にまた葦巢之悔ともいふ、荀子の勸學篇にも「南方有鳥焉、名曰蒙鳩、以羽爲巢、而編之以髮、繫之葦苕、風至苕折、卵破子死、巢非不完也、所繫者然也」蒙鳩は、ヨシキリ」舊注には、鶺鴒なりとあり、苕は葦の秀でたるもの、

【遺策ナシ】 「ハカリゴト」周到にして「オチド」なき義、曹植の王仲宣誄序に「筭無遺策、畫無失理」

【聊カ以テ責ヲ塞グ】 やつと己の責ふさぎをするのみ、通鑑に「韓侂胄國ニ當ル、言官敢テ事ヲ言ハズ、但泛ク君德時事ヲ論ズ、或人之ヲ問フ、則チ愧謝シテ曰ク、聊以塞責」

【井渫ヘテ食ハレズ】 渫は音セツ、浚なり、井を浚へ治めて、清潔にするも、汲み用ひられず、才能ありて、施爲に切なるも、明主の用ふる所ろとならざるに喩ふ、易の井卦に「井渫不食、爲我心惻」

【石】 物理論に「土ノ精ヲ石トナス、石ハ氣ノ核ナリ、氣ノ石ヲ生ズルハ、猶ホ人ノ筋絡ノ爪牙ヲ生ズルガ如キナリ」と、釋名に「礫ハ小石ナリ、磊ハ衆石ナリ、琅玕ハ石ノ珠ニ似タルナリ、碔砆ハ石ノ玉ニ似タルナリ、星隕チテ石トナリ、水沫浮石トナル 石ノ解散スルヲ泐トイフ云々」又いふ「地ハ石ヲ以テ骨ト爲ス」と呂氏春秋に「石可破也、而不可奪堅、丹可磨也、而不可奪赤也」(奇石ヲ)また(望夫石)を參看せよ、

【委積】 少しく積むを委といひ、多くつむを積といふ、儲蓄の義、周禮に「門關之——、以待施惠」

【異時】 他時、又は異日といふに同じ、漢書司馬相如傳に「——嘗通爲郡縣矣」

【頤使】 「アゴで「サシヅ」して使ふ義、漢書の賈誼傳に「今陛下力制天下、——如意」

【石ヲ抱キテ淵ニ入ル】 韓詩外傳に「申徒狄非其世、抱石而沈于河」と、また二程全書にいふ「釋氏其實是愛身放不得、故說許多、譬抱石沈河、以其重愈沈、終不道放下石頭、惟嫌重也」と、またこの語、說苑・佛名經等にも出づ、太平記卷の一に引けり、

【石ヲ吐シテ羊ト成ス】 仙術を得たるなり 神仙傳に「黃初平、年十五、家羊ヲ牧セシム、道士アリ、其ノ良謹ナルヲ見テ、便チ將キテ金華山ノ石室ノ中ニ至ル、四十餘年、復タ家ヲ念ハズ、其ノ兄初起之ヲ索メテ見ルヲ得ズ、後市ニ道士ノ善クトスル有ルヲ見ル、乃チ就イテ之ヲ占フ、道士曰ク、金華山中ニ牧羊兒アリ、是レ卿ノ弟カ非カ、初起卽チ道士ニ隨ヒ尋ネ見ル、兄弟悲喜シ、羊何ニカ在ルト問フ、初平曰ク、近ク山東ニ在リト、初起往イテ視ル、了ニ羊ヲ見ズ、但ダ白石無數ヲ見ル、還ツテ曰ク羊ナシト、初平曰ク。羊在ル耳、但ダ兄自ラ見ズト、便チ俱ニ往キ、初平、叱叱羊起キヨトイフ、是ニ於テ白石皆起チテ羊數萬頭ト爲ル」成語考に「叱石成羊黃初平之得仙」

【石ヲ拜ス】 (奇石)を見よ、

【石ヲ枕ニシ泉ニ嗽グ】 太平記卷二十に見ゆ(石ニ嗽ギ)を見よ、

【石玉ヲ韞ミテ山潤フ】 內に學德あるものは、自ら外に發して文をなすに喩ふ、陸機の文賦に「石韞玉而山輝、水懷珠而川媚」一本に暉を潤に作る、康熙字典には、暉を輝に作る、

【衣食足リテ則チ榮辱ヲ知ル】 人は飢寒の患なくして始めて心も高尙になり、榮を榮とし辱を辱とし身を修め、德に進むことを得との意、管子に「倉廩實則知禮節、衣食足則知榮辱」また漢書の食貨志にも「衣食足知榮辱、廉讓生而爭訟息」

【異日】 他日に同じ、漢書の高帝紀の註に「師古曰ク、——ハ猶ホ往日ト言フガゴトキナリ」とあれども、小學の外篇に「異日何ヲ以テカ祖宗ニ地下ニ見エンヤ」とあるは、後日を指す、必ずしも日の前後にかゝはらず、

【畏日】 夏の日なり、左傳に「趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也」の註に「冬日可愛、夏日可畏」と、蘇軾の詩に「明窓——曉先暾、高柳鳴蜩午更喧」

【石ニ漱ギ、流ニ枕ス】 (漱)石枕流まけ惜みの强さにいふ、晉書に「孫楚字ハ子荆、太原ノ人、才藻卓絕、爽邁不羣、陵傲スル所ロ多ク、鄉曲ノ譽ヲ缺ク、年四十餘、始メテ鎭東軍事ニ參シ、馮翊ノ太守ニ終ル、初メ楚少キ時隱居セント欲シ、王濟ニ謂ツテ曰ク、當ニ石ニ枕シ流ニ漱ガント欲ストイフベキヲ、誤リテ漱石枕流トイフ、濟曰ク、流ハ枕スベキニアラズ、石ハ漱グベキニ非ズト、楚曰ク、流ニ枕スル所以ハ、其ノ耳ヲ洗ハント欲ス、石ニ漱グ所以ハ其ノ齒ヲ礪カント欲スルナリ」と、さすがにうまく對へたれば、國語の「サスガ」に流石の字を充て用ふ、

【石伏】 杜父魚の和名、形「ハゼ」に似て三四寸許、肥大

なり、頭大きく、口ひろくして扁く、鱗細かし、色は淡黄色にして黒斑あり、清き瀨の小石間に棲む、腹に圓き鰭ありて石に吸ひつき、水上に浮ばず、一名「カハカジカ」

【伊人】 伊は彼なり、猶ほ彼の人といふが如し、詩經秦風に「所謂——、在水一方」

【異人】 すぐれたる奇特の人、漢書公孫弘傳贊に「羣士慕嚮、——竝出」また不思議なる仙人の類、江賦に「挺——乎精魄」

【懿親】 懿は美なり、父子兄弟などの美しき親みをいふ、左傳僖二十四年に「富辰曰、兄弟雖有小愆、不廢——」

【偉人】 偉は大なり、世に傑出したる人をいふ、魏書に「此三公者、乃一代之——也」

【維新】 國政の革新をいふ、詩の大雅に「文王在上、於昭于天、周雖舊邦、其命維新」とあるに本づく、

【彙進】 彙は類なり、類を以て朝廷に進む義、歐陽修の詩に「朝廷清明天子聖、陽德——群陰剝、群小——は、多くの小人が類を以て朝に進み仕ふるをいふ、

【以心傳心】 (心ヲ以テ)を見よ、

【衣裳】 說文に「上ナルヲ衣トイヒ、下ナルヲ裳トイフ」と、釋名に「衣ハ依ナリ、人ノ依リテ以テ寒暑ヲ庇フ所以ナリ、裳ハ障ナリ、自ラ障蔽スル所以ナリ」と、易の繫辭に「黃帝堯舜垂——而天下治」詩の鄘風に「綠衣黃裳」

【意匠】 心に工夫を凝す義、杜甫の丹青引に「——慘澹經營中」

【石破天驚】 唐の李賀の詩に「女媧煉石補天處、石破天驚逗秋雨」

【韋述】 弘機の曾孫、唐の人、進士に擧げらる、宋之問曰く、童子何を業とすると、述曰く、性書を嗜む、撰するところの唐春秋三十篇、恨むらくは未だ畢らず、他は惟命のまゝなりと、宋之問曰く、もと茂才を求めて乃ち遷固を得たりと、遂に第に上り、起居舍人に遷る、玄宗の朝、史官に任ずる二十年、書二萬卷を蓄ふ、古草隸帖、祕畫古器圖譜、備はらざるところなし、弟逈、廸、學業亦述に亞ぐ、

【移書】 人に告知する「フレブミ」漢書薛宣傳に「——顯責之移文に同じ、

【遺緒】 先人の遺しおきし事業をいふ、緒は事業なり、——は遺業といふに同じ、書經に「守文武成康之——」

【衣食足リテ榮辱ヲ知ル】 (衣食足リテ)を見よ、

【渭水】 甘肅省蘭州府渭源縣の西南なる山谷に發し、陝西省同州府華陰縣の北に至りて黃河に入る、

【蔬蕤】 盛んなる貌、東都賦に「羽蓋——」また草木の華の盛んに垂れかゝれる貌、東方朔七諫に「上——以防露兮」また李白詩に「蘭——兮紅芳」また麗草といふ草の別名、

【異數】 常數と異りて特別の禮遇を受くる義、左傳に「名位不同、禮亦——」とあるに本づく、

【遺世】 遺は忘なり、世間の事をすべて忘るゝ義、蘇東坡の赤壁賦に「遺世獨立羽化而登仙」

【異世同調】 古今調を同うするをいふ、謝靈運の詩に「誰謂古今殊、異世可同調」

【韋昭】 雲陽の人、三國の吳の時、累官して高陵亭侯に封ぜらる、昭少より學を好み、老に到りて倦まず、嘗て吳書を撰す、華覈曰く、昭の吳に在るは、亦漢の史遷なりと、

【依然】 「モトノマヽ」南史沈文季傳に「其郡——猶有故情」韋嗣立の詩に「偶來伊水曲、谿嶂各——」

【怡然】 和ぎ樂む貌、陶潛の桃花源記に「黃髮垂髫竝——自樂」杜甫の詩に「——共携手、恣意同遠步」また和ざ順ふ貌、杜預の左傳釋例序に「——理順」

【渭川】 竹の多く生ずる地、史記の貨殖傳に「——千畝竹、其人與千戶侯等」

【蔚然】 蔚は草木の「コンモリ」と茂れる貌、州の名のときは音ウツ歐陽修の醉翁亭記に「望之——而深秀者、瑯邪也」一解に蔚は讀んで鬱となす、音ウツ、

【伊川先生】 (程頤)を見よ、

【夷則】 十二律の一、禮記の月令に「孟秋ノ月、律ハ——ニ中ル」また史記律書に「——ハ陰氣ノ萬物ヲ賊フライフナリ、其ノ十二子ニ於ケルハ、申ト爲ス」

【遺俗】 昔よりのこれる「ナラハシ」孟子に「其故家——」

【韋蘇州ガ野渡無人舟自橫】 駿臺雜話の「一日の澤」の條に見ゆ、韋蘇州は名を應物といふ、長安京兆の人、少にして三衛郎をもて、玄宗帝に仕ふ、累遷して蘇州の刺史となる、性高傑、所在香を焚き地を掃ひて坐す、その詩冲澹閑遠、人之を陶潛に比して陶韋と稱す、全集十卷あり、この句は全集八の卷、滁州西澗の題にて、「獨憐幽草澗邊生、上有黃鸝深樹鳴、春潮帶雨晚來急、——」とあり、この詩實景とたがへる由は、唐詩品彙の四十七に、歐陽子の說を引きて「滁州城西乃

是豐山、無西湖、獨城北有一湖水、極淺不勝舟、又江潮不到、豈詩人務在佳句而實無此景耶」とあり、

【猗儺】 柔順なり「タヲヤカ」詩の檜風に「——其枝」

【衣帶中ノ贊】 (文山ガ)を見よ、

【韋帶ノ士】 貧賤の士をいふ(布衣韋)を見よ、

【唯諾】 みな應ずることば、禮記曲禮に「慎——唯は速かにして恭しく、諾は緩かにして慢かなり、また、父命呼唯而不諾」

【韋駄天】 佛法守護の神なり、武裝して劍を持す、金光明經鬼神品の中に「韋駄天神アリ、コレハ梵語、此ニハ智論ト翻ス、靈威要略ニイフ、天神姓韋諱琨、南方天王八將之一臣也、四王合三十二將、而爲其主、生知聰慧、早離塵欲云々」魔王佛舍利を奪ひて逃く、此の神追躡して之を取る、故に俗に疾く走る神とす、

【虎杖】 根を藥とし、血痛墮撲を治すれば、疼取の義ならんといふ、古名多遲宿根草にて春生ず、新芽は形ウド」の如く煮て食ふべし、莖の高さ丈餘に至り、圍み二三寸に至るあり、中は空しくして節あること竹の如く杖とすべし、葉は互生し、圓く長くして一尖あり、夏、葉閒に小花、穗をなして集りひらく、紅白二種あり、

【夷坦】 坦は、平なり、寬なり、——は心の平らかなるをいふ、南史に「胸襟——、有士君子之操焉」

【異端】 異端は聖人の道にあらずして、別に一端を爲すこと楊子墨子の如きをいふ、論語の爲政篇に「子曰攻乎異端斯害也已」猶ほ釋氏の佛書を內典とし、儒書を外典とし、佛道の外は、すべて之を外道といふが如し、

【維持】 維は「ツナグ」なり、つなぎて保持する義、于寶晉紀總論に「賴道德典刑以——之也」

【旖旎】 盛なる貌、詩經に「——其華」また旌旗の風に從ふ貌、柳宗元の詩に「——附幽墀」また雲の貌、漢書揚雄傳に「乘雲蜺之——兮旖旎」に旃に作る、同じ、

【一葦】 小艇なり「コブネ」詩の衞風河廣篇に「誰謂河廣——抗之」赤壁賦にも見ゆ、

【一游一豫】 (游豫)を見よ、

【一衣帶水】 帶の如きせまき水をいふ、錦字箋に「陳ノ後主荒淫度ナシ、隋ノ文帝曰ク、豈限ルニ——ヲ以テシテ之ヲ拯ハザルベケンヤト 乃チ陳ヲ伐ツ」

【一一】 逐一といふが如し、詳密の義、韓非子に「南郭處士請爲齊宣王吹竽、宣王悅之、廩食以數百人、湣王立好——聽之、處士逃」

【韋仲將】 (凌雲觀)を見よ、

【意中ノ人】 我が思ふ者、また戀しくおもふ人、陶淵明の句に「念我——」

【一葉落チテ天下ノ秋ヲ知ル】 一葉とは梧(アヲギリ)の一葉なり、一葉の落つるを見て、天下の秋を知る、凡そ事物其の始の小なるを見て、其の終の大なるを察すべきに喩ふ、淮南子に「小ヲ以テ大ヲ明カス、一葉ノ落ツルヲ見テ、歲ノ將ニ暮レントスルヲ知ル、瓶中ノ氷ルヲ見テ、天下ノ寒キヲ知ル」とあり、李子卿の秋蟲賦に「一葉落今天地秋」とあり、易に「履霜而堅氷至」とあるも、意は同じ、

【一葉目ヲ蔽ヘバ太山ヲ見ズ】 鶡冠子の語なり、曰く、「夫耳之主聽、目之主明、一葉蔽目、不見太山、兩豆塞耳、不聞雷霆」

【一牛鳴地】 牛の聲の達する程の距離ある地なり、五車韻瑞に「佛書ニ——ヲ以テ去ルコト五里トス」とあり、この五里は我が三十町位なり、牛鳴の聞ゆるとしては稍遠きに過ぎたり、或はこの里は、周禮の五家を鄰となし、五鄰を里となすの里なるか、

【一行阿闍利ノ火羅國ニ流サル】 太平記卷二に見ゆ、佛祖統記三十卷に「一行張公謹之孫也、初從普寂落髮、開元三年詔入見、咨出世法及安國撫民之道、時號天師云々」また編年通論十五卷に「開元十五年十一月己丑、禪師一行、寢疾于華嚴寺、帝親候問、遂沐浴端坐而逝、春秋四十有五、帝哭之哀甚、輟朝三日」と見えた、り、師は佛道に精通せしのみならず、曆數天文に於ても發明するところ多し、卒して大慧禪師と謚せらる、火羅國へ流されたること詳かならず、火羅國は西域記に觀貨羅國といふ、

【一軍】 周禮の地官に「五師爲軍」の註に「萬二千五百人ヲ軍トナス、周ノ制、天子ハ六軍諸侯ノ大國ハ三軍、次國ハ二軍、小國ハ——」

【一月三舟ノ喩】 三の舟あり、一は停り、一は南に行き、一は北に行く、南に行く舟は、月南に隨ひ來ると思ひ、北に行く舟は、月北に隨ひ來ると思へども、停りたる舟は、月を移動せずと見る、如來の智慧は周く照せども、衆生の緣に由りて、見佛の不同あるに喩へたるなり、大藏法數に「見如來有去住相、法身之體本无去住也、一月喩佛、三舟喩世閒衆生見佛不同、是名一月三舟喩也」

【一言ニシテ非ナル、駟馬モ追フ能ハズ】 (一言而非、駟馬不能追)說苑に見ゆ、論語に、駟も舌に及ばずとあるに同じ、駟は一乘四馬にて四頭立の馬車なり、人の

一言口より出でてその言非なれば、四頭立の馬車を驅りて追ふもとりかへし出來ずとの義、

【一言以テ之ヲ蔽フ】 一言にして其の義を言ひ盡すをいふ、論語に「詩三百一言以蔽之、曰、思無邪」

【一山】 (一寧)を見よ、

【一食頃】 食事する閒にて暫時の義、法華經に「六十小劫喩如一食頃」

【一字千金】 文字の非常に價値あるをいふ、晉書に「不貴勇而貴忍、此眞――――之兵法也」と、この語は蓋し呂不韋が著すところの呂氏春秋を咸陽の城門に置き、千金をその上に懸けて、一字を增損し得る者には、この金を與へんと令したる故事に本づく、

【一實圓頓】 天台宗の敎をいふ、天台宗の所依とする法華經は、諸法實相の意を明かにし、理智共に圓滿の妙法にして速疾頓成の實敎なり、

【一日之ヲ暴テ十日之ヲ寒ス】 孟子の告子篇に「雖有天下易生之物也、一日暴之、十日寒之、未有能生者也」とあり、以て心を修養するには一日も閒斷あるべからざるに喩ふ、

【一日三秋ノ思】 思慕の切なるをいふ、詩經王風采葛に「彼采蕭(カハラヨモギ)兮、一日不見如三秋兮」三秋は九ヶ月なり、

【一日ノ計ハ朝ニ在リ】 (四計)を見よ、

【一日ノ長】 少しばかり優る義、唐書王珪傳に「臣于數子有一日之長」とあり、また論語の「以吾一日長乎爾毋吾以也」は、吾年少しく汝より長ずるを以て遠慮して言ひ難しとする勿れの義にて、稍異り、

【一事成ル無シ】 何ひとつ出來たることなきをいふ、王中の句に「一事無成兩鬢絲」とあり、鬢は髮なり、何も成るとなくして空しく老い、髮のみ白くなりたりとの意、

【一字ノ師】 一字の敎を施すをいふ、陶岳の五代補に「鄭谷袁州ニ在リ、齊己詩ヲ携ヘテ之ニ詣ル、早梅ノ詩アリ、云フ前村深雪裏、昨夜數枝開ト、谷曰ハク、數枝ハ早キニアラズ、一枝ニ如カズト、齊己覺エズ下拜ス、是ヨリ士林谷ヲ以テ一字ノ師トナス」

【一人】 天子をいふ、さて國語にて一の人は攝政關白たる人をいひ、一の上は左大臣をいふ(一人慶アレバ)を見よ、

【一仞】 周の尺にて八尺を仞といふ、漢書賈誼傳に「鳳凰翔於千仞」次條を參看せよ、

【一尋】 周禮地官媒氏の註に「八尺を尋といひ、尋に倍スルヲ常トイフ」と、小爾雅には「四尺ヲ仞トイヒ、仞ニ倍スルヲ尋トイフ」

【一樹ノ蔭ニ宿リ、一河ノ流ヲ汲ム】 太平記卷二に見ゆ、諺艸に「一樹の蔭にやどり、一河の流を汲むも、皆これ他生の緣といふ事、昔白拍子の謠物なり」とあり、說法明眼論に「或處一村宿一樹下、汲一河流、一夜同宿、一日夫妻皆是先世結緣」とあり、

【一樹百穫】 人物を養成する利をいふ、管子に「一年之計、莫如樹穀、十年之計、莫如樹木、百年之計、莫如樹人、一樹一穫者穀也、一樹十穫者木也、――――者人也」

【一臺二妙】 晉書に「晉ノ衛瓘字ハ伯玉、武帝ノ時ニ、尙書令ニ拜セラレ、侍中ヲ加ヘラル、性嚴整ニシテ、法ヲ以テ下ヲ御ス、瓘學問深博ニシテ、文藝ニ明習ス、尙書郎索靖ト、俱ニ草書ヲ善クス、時ニ――――ト號ス、漢ノ末ニ、張芝亦草書ヲ善クセリ、論者謂フ、瓘ハ伯英ノ筋ヲ得、靖ハ伯英ノ肉ヲ得タリト」伯英は芝の字、

【一諾】 ひとたび「ウケアフ」義、漢書に「曹丘生揖季布曰、楚諺曰、得黃金百斤、不如季布一諾」

【一團ノ和氣】 性理大全の、程明道の下に「上蔡謝氏曰、先生坐如泥塑人、接人則渾是一團和氣」

【一陣ノ風】 太平記卷二に見ゆ、陣は「ツラナル」風が一しきり「サッ」と吹き來るをいふ、それよりかくる程のはかなき我が身と感ずるにも用ふ、

【市ニ歸スルガ如シ】 歸依する者衆く、先を爭ひて至るなり、孟子に「仁人也、不可失也、從之者、如歸市」

【市ニ虎アリ】 讒言も、たび重なれば人を惑はすに至るに喩ふ、戰國策魏策に「龐葱、太子ト邯鄲ニ質タリ、魏王ニ謂ツテ曰ク、今一人言フ、市ニ虎アリト、王之ヲ信ズルカト、王曰ク否ト、二人市ニ虎アリト言フ、王之ヲ信ズルカト、王曰ク寡人之ヲ疑フト、三人市ニ虎アリト言フ、王之ヲ信ズルカト、王曰ク寡人之レヲ信ズト、龐葱曰ク、夫レ市ニ虎ナキハ、明ラカナリ、然リ而シテ三人之ヲ言ヘバ虎ヲ成ス、今邯鄲ハ大梁ヲ去ルコト市ヨリ遠シ、而シテ臣ヲ議スルモノ三人ヨリモ過グ、願クハ王之ヲ察セヨト」

【一人出給フ事容易カラズ】 太平記卷二に見ゆ、鈔に「白氏文集ニ、吾君不遊有深意、一人出兮不容易、六宮從兮百司備、八十一車千萬騎、此ノ意ニ據リテ書ケルカ」と、一人とは天子をいふ、書經湯誥に「嗟爾萬方有衆明カニ予一人ノ誥ヲ聽ケ」とあり、品字箋に「一人ハ君ナリ、予一人ハ天子ノ自稱ナリ」

【一人虚ヲ傳フレバ萬人實ヲ傳フ】 朝野僉載に「一犬吠形、千犬吠聲、一人傳虚、萬人傳實」と、一人虚言を傳ふれば、萬人之を事實として傳ふるをいふ、

【一人慶アレバ、萬民之ニ頼ル】 (一人有慶萬民頼之) 上、一人即ち天子の善惡は、下萬民の苦樂に關す、故に君主は其の擧止を愼重にすべしとの意、書經呂刑の語、一人は國文にては「イチジン」とよみならはせり、

【一人當千】 武勇の特にすぐれたるをいふ、北史唐邕傳に「强幹一人當千」また李陵答蘇武書に「彼兵再戰、一以當千」などあり、涅槃經にも「有大力士、其力當千、故此人稱一一一一」

【一人ノ手ヲ以テ天下ノ目ヲ掩ヒ得難シ】 李鄴が讀李斯傳といふ詩の句なり、曰く「欺暗常不然、欺明當自鬱、難將一人手、掩得天下目」

【一寧】 一山と號す、宋の理宗の淳祐七年台州に生る、姓は胡氏、幼にして僧となり、律を應眞に、天台を延慶に學ぶ、すでにして之を厭ひ、禪を頑極に學び補陀山に居る、時に元の世宗、弘安の大敗を憤り、名僧を遣して說かしめんとし、我が正安元年强られて太宰府に來る、執權北條貞時疑ひて游偵となし、伊豆の修善寺に置く、一寧晝夜誦經悠然として道を樂む、或人貞時に說いて曰く、寧公は彼の國の望士、來ること抑逼に出づ、且つ沙門は福田なり、元に在つては元の福、我が國に在つては我の福なりと、貞時これによりて建長寺の主となす、尋いで圓覺寺に住す、正和二年後宇多天皇の勅によりて京都の南禪寺の主となり、文保元年七十一歲を以て寂す、上皇贈るに國師の號を以てせらる、一寧兼ねて書畫を善くす、遺蹟少なからず、島頼賢の碑亦その筆なり、

【一念三千】 吾人の一念中には三千の法界を具へたりとの義、止觀に「夫一心具十法界、一法又具十法界、百法界一界具三十種世間、百法界具三千種世間、此三千在一念心」と見え、弘決に「唯圓即觀一念三千三諦具足」とあり、十法界とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛をいふ、

【一年ノ計ハ穀ヲ樹ウルニ如クハナシ】 (一樹百穫) を見よ、

【一年將ニ盡キントスル夜、萬里未ダ歸ラザル人】 唐の戴叔倫の除夜宿石頭驛詩の前聯なり、曰く「旅館誰相問、寒燈獨可親、一年將盡夜、萬里未歸人、寥落悲前事、支離笑此身、愁顏與衰髮、明日又逢春」と、除夜旅人の感懷寫し出して妙なり、

【一年虚シク秋ヲ渡ル】 八月十五夜に、月無きをいふ、古詩に「此夜若無月、一年虚度秋」此夜とは八月十五夜なり、

【鳶尾草】 葉一尺許、扁布して繁茂す、「ヒアフギ」の葉に似て深綠なり、春夏の交、莖を出すこと一尺許、頂に花あり「カキツバタ」に似て、紫碧にして深紫の點あり、また白花淡黃褐花あり、

【一物アレバ一累ヲ添フ】 事物に關係を多くすれば、したがつて煩累を增すをいふ、經祖堂雜志に「頃年斎兩鶴、既乏專人、看顧朝放暮收、不免關心、(中略) 羽翮再完、一旦飛去、自是遂省一事、以此知有一物則添一累也」宋高僧傳に「莫加一物而買一累」

【一別三春】 別後三年を經るをいふ、杜甫の詩に「一別星橋夜、三移斗柄春」

【一木烏ゾ能ク大廈ヲ支ヘン】 一人の力にては天下の頽勢を支へ持し難きに喩ふ(大廈將に顚レントス)を見よ、

【一毛ヲ拔キテ天下ヲ利スルヲモ爲サヾルナリ】 (拔一毛而利天下不爲也) 一筋の毛を拔く如き、少しの事をして、天下を利することをもなさずとの義、孟子に「楊子取爲我、拔一毛而利天下不爲也」列子に「伯成子高不以一毫利物」と、また「禽子問楊朱曰、去子體之一毛以濟一世、汝爲之乎、楊子曰、世固非一毛之所濟」

【一網打盡】 罪人などを一時にすべて除き去る義、宋史仁宗紀に、杜衍同平章事たり、務めて僥倖を裁す、會衍が壻蘇舜欽進奏院を監す、故紙を鬻ぎし公錢を以て、神を祠り妓を召し客を會す、御史中丞王拱辰素より衍等が所爲を便とせず、よつてその事を攻む、罪を得る者數人、拱辰喜んで曰く吾一網打去盡矣と、衍相たること七十日にして罷めぬ、

【一鳴人ヲ驚カス】 (一タビ鳴ケバ) を見よ、

【一目ノ羅ハ以テ鳥ヲ得ベカラズ】 淮南子に「一目之羅、不可以得鳥、無餌之鈎、不可以得魚、遇士無禮、不可以得賢」とあり「アミ」の目一つにては何ぞ鳥を得ん、餌なき「ハリ」何ぞ魚を得ん、されば兵書に香餌之下有懸魚ともいへり、それと同じく賢人を得んと思はゞ禮を盡して招致すべしとなり、

【一陽來復】 陰極まりて陽生ずるなり、十月は極陰の月、十一月に至りて、一陽初めて生ず、易の復の卦の本義に「復ハ陽復シテ下ニ生ズルナリ、剝盡スレバ、則チ純坤十月ノ卦トナル、而シテ陽氣已ニ下ニ生ズ、之

ヲ積ンデ日ヲ踰エテ、然シテ後ニ一陽ノ體始メテ成リテ來復ス、故ニ十有一月其ノ卦ヲ復トナス、其ノ陽既ニ往テ復リ反ルヲ以テ、故ニ亭ルノ道アリ」と、成語考に「冬至ニ一陽生ズ、是ヲ以テ日晷初メテ長シ」

【一夜征人盡ク鄉ヲ望ム】 唐の李益(字は君虞、官禮部尚書たり)の夜上受降城聞笛と題する七絶の結句なり、曰く「回樂峯前沙似雪、受降城外月如霜、不知何處吹蘆管、一夜征人盡望鄉」回樂峯前、沙は白くして雪に似、受降城外、月は寒くして霜の如し(以上對句を用ふ)かゝる荒涼たる夜にあたりて、何れの處にか蘆管を吹く聲のさえわたりて聞ゆるあり、轉た悲愴の情を動かし、征戍の人、盡く思鄉の念に堪へずと、風調淵亮として誦すべし、この詩は中唐七絶の第一なりといふ、さもあるべし、

【一由旬】 一踰繕那に同じ、法華經に「菩提樹下敷師子座高一一一」と見ゆ、また无量壽經の註に「其一一一有四十里」と、一解に八俱盧舍を一踰繕那とす、一俱盧舍は二里なれば、一踰繕那即ち一一一は十六里なりと、また西域記には「三十里なりとし、その一里は三百歩なりといへり、

【伊陟】 伊尹の子、殷の太戊の時、父につぎて相となる、亳に祥あり、桑穀共に朝に生ず、一暮にして大さ拱なり、陟曰く、妖は德に勝たず、君其れ德を修めよと、太戊先王の政を修む、三日にして祥桑枯死す、殷道復た興り、號して中宗と稱す、祥とは妖怪なり、

【韋陟】 字は殷卿、唐の萬年の人、安石の長子、弟斌と俱に秀敏、常童に異り、文辭を善くし、楷書に工なり、一時知名の士、皆與に游ぶ、開元中喪に居り、門を杜ぢて出でざる者八年、洛陽の令に調せらる、宋璟歎じて曰く、盛德遺範盡く此に在りと、陟常に五彩箋を以て書記を爲り、侍妾をして之を主らしめ、陟は唯名を署するのみ、自ら謂ふ書する所ろの陟の字、五采の桑雲の如しと、時人之を慕ひ、郇公の五雲體と號せり、郇公とは父に襲ぎて郇國公に封ぜられたればいふ、

【遺直】 古の直なる者の遺風あるをいふ、左傳に「仲尼曰、叔向古之一一也」

【一利ヲ興スハ一害ヲ除クニ若カズ】 淵鑑類函卷の六十四に「元耶律楚材爲相、每陳民生休戚、辭色懇切、太宗嘗曰、汝又欲爲百姓哭耶、楚材每言興一利不若除一害、生一事不若減一事、人以爲名言」

【一旅】 詩經の小雅に「我師我旅」の箋に「五百人ヲ旅トナス」とこれ周の制なり、

【一力】 一人の僕をいふ、晉の陶潛の傳に「潛、彭澤ノ令トナル、家累ヲ以テ自ラ隨ヘズ、一一ヲ送リ、其ノ子ニ書ヲアタヘテ曰ク、汝旦夕ノ費、日ニ給シ難シト爲ス今コノ力ヲ遣ハシ、汝ガ薪水ノ勞ヲ助ク此レモ亦人ノ子ナリ、善ク之ヲ遇スベシト」

【一犂ノ雨】 犂は犂に同じ、たがへすなり、耕すに都合よき、ひとふりの雨(雨一)を見よ、

【一蓮托生】 同じ蓮華の上に俱に托生をする義、佛說に、彌陀の稱號を唱ふる人々は、死して極樂に行き、同じ蓮華の上に生るといふ、

【一臠ノ肉ヲ嘗メテ一鑊ノ味ヲ知ル】 一端を見て全體を推知し得るをいふ、淮南子に「嘗一臠肉知一鑊之味懸羽與炭、而知燥濕之氣」臠は「キリミ」鑊は鼎の大にして足なきもの、

【一ヲ擧ゲテ三ヲ反ス】 (擧一反三)一を擧げ示されば、自ら反して、他の三事を察するをいふ、蔡邕別傳に「蔡邕與李則遊學、時在弱冠、性通敏一一一一」論語に「擧一隅不以三隅反、則不復也」とあるに本づく、不復とは、再び告げ敎へざる義、

【一ヲ得テ十ヲ忘ル】 記憶力のうすきをいふ、陸游の句に「得一忘十眞堪哈」

【一ヲ聞テ十ヲ知ル】 論語に「回也聞一以知十、賜也聞一以知二」の註に「一ハ數ノ始、十ハ數ノ終、二ハ一ノ對ナリ、顏子明睿ノ照ス所ロ、始ニ即キテ終ヲ見ル、子貢推シ測リテ知ル、此ニ因ツテ彼ヲ識ル云々」とあり賜、姓は端木、字は子貢、

【逸ヲ以テ勞ヲ待ツ】 逸は安なり、勞は疲勞なり、我居ながら安逸して、敵の遠く來りて疲勞するを待つなり、孫子の軍爭篇に「以近待遠、以逸待勞、以飽待饑、此治力者也」

【一个】 个は獨なり、また箇に通ず、一个は、一夫と同じ、書經に「如有一一臣」

【一介】 介は草芥の芥に同じ、微小の義、孟子に「非其義也、非其道、一一不以與人、一一不以取諸人」また介は人または下男の義にも用ふ、左傳に「不使一一行李告于寡君」一介の行李は、一人の使者なり、

【一向】 「ヒタスラ」の義、一意之に向ひて他を顧みざるなり、鍾會の檄蜀文に「蓄力待時、併兵一一」

【一家ヲ機杼ス】 (機杼一家)一派の文章を作るをいふ、北史に「祖瑩嘗テ人ニ語ツテ曰ク、文章須ラク自ラ機杼ヲ出シ、一家ノ風骨ヲ成スベシ、何ゾ能ク人ト共ニ生活ヲ同クセンヤト」類書纂要に「文章ノ奇異ナル

ヲ、一家ヲ機杼ストイフ」

【一家言】 自ら主唱せる一派の論なり、史記自序傳に「略以拾遺補藝、成一家之言」

【一家團圞ノ樂】 一族圓坐の樂なり、親子兄弟など、家族の和合して樂むをいふ、傳燈錄の居士龐蘊の偈に「有男不婚、有女不嫁、大家團圞頭、共說無生話」虛堂錄の註に「團圞ハ、相聚リテ圓坐スルナリ」圞は欒の正字、

【一紀】 十二年なり、國語に「蓄力——」また書經の畢命に「既歷三紀」

【一揆】 揆一に同じ、揆は度なり、其の度を同うするをいふ、孔安國の尙書序に「雅詁奧義、其歸——」

【一貴一賤交情乃チ見ハル】 史記の鄭當時の傳に「漢ノ文帝ノ時、下邽ノ翟公、廷尉ト爲ル、賓客門ニ塡ツ、廢セラルヽニ及ビ、門外雀羅ヲ設クベシ、後チ復タ廷尉トナル、賓客往カント欲ス、翟、其ノ門ニ大書シテ曰ク、一死一生、乃チ交情ヲ知リ、一貧一富乃チ交態ヲ知リ、一貴一賤、交情乃チ見ハルト」

【一邱一壑】 一邱に栖み、一壑に釣して世外に高棲する義、世說の品藻下に「晉ノ明帝謝琨ニ問フ、君自ラ庾亮ニ何如ト謂ヘルト、答ヘテ曰ク、端委廟堂、使百僚準則、臣不如亮、——自謂過之」とあり詳しくは晉書の謝琨傳を見よ、端委とは禮服なり、陸機の七徵に「棄時俗而不狥、甘漁釣于一壑」また王勃の文ニ「——同阮籍于西山」

【一簣ヲ以テ江河ヲ障フ】 (以一簣障江河)簣は草を織りてつくる、土を盛る器、一簣の土を以て楊子江や黃河の水を障へとめんとするをいふ、以て微力を以て大亂を定めんとするに喩ふ、漢書何武王嘉傳に「武嘉區々——、用沒其身」また後漢書張儉傳論に「儉以區々一掌而獨涇江河」とあるも同意なり、

【一饋ニ十タビ起チテ以テ天下ノ民ヲ勞フ】 (一饋十起、以勞天下之民)夏の禹王が民政に心を用ひ、一度の食事の閒にも、十回も起ちて萬民を慰めいたはりたるなり、饋とは食を尊者に進むる義、詳しくは史記を見よ、禹王の此の行は、周公が「一沐三握髮、一飯三吐哺、起以待士」と同じ心なり、

【逸居】 なまけて暮らすこと、孟子滕文公上に「飽食暖衣——而無教、近禽獸」

【一舉手一投足】 少しの骨折をいふ、韓愈の應科目時、與人書に「如シ有力ノ者、其ノ窮ヲ哀ンデ而シテ之ヲ運轉セバ、蓋シ——ノ勞ナリ」

【一擧兩得】 類書纂要に「學ヲ爲シテ文字ヲ看ルニ、心ヲ虛クシテ靜ニ看レバ、即チ涵養究索ノ功、一擧シテ兩得ス」とあり一事を擧げて兩益を得る義、

【一軀】 佛菩薩の像を數ふるにいふ、宋高僧傳に「彌勒像——」とあり、日本書紀に「金銅釋迦佛像——」

【逸群】 群衆に過ぐるをいふ、蜀志諸葛亮傳に「亮少有逸——之才、英霸之器」また張祜の詩に「酒興曾無敵、詩情舊——」

【安ンゾ一室ヲ事トセン】 (大丈夫)を見よ、

【安ンゾ毛錐ヲ用ヒン】 毛錐は筆の異名、筆硯を要せずとの義なり、五代の史弘肇、後晉に仕へて、宿衞を典どる、嘗て曰く、朝廷を安んじ、禍亂を定むるには、直ちに須らく長槍大劍を用ふべし、毛錐子の如き、安んぞ用ふるに足らんやと、

【一快壻】 書言故事に「後魏ノ劉延明、十四ニシテ博士郭瑀ニ就キテ學ブ、弟子五百餘人、瑀ニ女アリ壻ヲ選ブ、意延明ニ在リ、一席ヲ設ケテ曰ク、吾ニ女アリ——ヲ覓メント欲ス、誰カ此ニ坐スル者ソ、吾當ニ妻スベシト、延明衣ヲ奮ヒテ坐シ、曰ク延明ソノ人ナリト、瑀遂ニコレニ妻ス」

【一塊肉】 血統を受けたる「ヒトカタマリ」の肉の義、南宋の帝昺紀に「此ニ至ル者ハ、正ニ趙氏——ノ爲メノミ」と、——は帝昺を指す、趙氏即ち宋の天子の血を受けて僅に存ずる所ろの帝昺を立てんが爲めなりとの意、

【一貫】 貫は通なり、一理萬事に貫通する義、論語に「子曰、吾道一以貫之」

【逸言】 逸口と同じ、過言なり、書經に「罔有——」また「其發有逸口」

【一犬影ニ吠ユレバ、百犬聲ニ吠ユ】 一犬の影を見て吠ゆれば、其の聲を聞きて、百の犬皆吠ゆるなり、一人虛言を傳ふれば、萬人之を實事として傳ふるに喩ふ、潛夫論に「一犬吠影、百犬吠聲、一人傳虛、萬人傳實」一本に影を形に作る、

【一卷石】 ひとかたまりの石、中庸に「今夫レ山ハ——ノ多キナリ、其ノ廣大ニ及ビテヤ、草木之ニ生ジ、禽獸之ニ居リ、寶藏興ル」卷は區なり、

【逸口】 書經に「其發有——」と、逸は過失なり、——は失言をいふ、

【一口ニ出ヅルガ如シ】 衆人の言、一も異なる所ろなきをいふ、戰國策に「左右俱曰、無有如出一口矣」

【一狐裘三十年】 史記晏嬰傳に「齊晏子名嬰、字平仲、事

景公ニ以節儉力行重ニ於齊ニ——————、豚肩不掩ヘ豆ヲ」と、一枚の狐の「カハゴロモ」三十年閒も著用し、神に供ふる豚の肩肉も豆（タカツキ）の類を掩はざる程の小片を用ひたるは、節儉の至なり、禮記檀弓に「有若曰、晏子——————、晏子焉知禮」

【一刻千金】 最も愉快なる時を形容する語、蘇軾の春夜の詩に「春宵一刻直千金、花有清香月有陰、歌管樓臺聲寂々、鞦韆院落夜沈々」聲は一本に人に作る、

【一壺天】 費長房の故事によりて、一つの小天地、または別世界の義に用ふ（壺中ニ天地）を見よ、

【一切】 大凡の義、悉皆なり、史記の李斯傳に「請——逐之」註に「利刀ヲ以テ物ヲ切ルニ斷タザル者ナキガ如シ」と、法華經の「——衆生」とあるも同義なるべし、

【一茶頃】 茶一椀をのむ位の、寸閒をいふ、名物六帖に癸辛雜識を引きて曰く「天裂凡——————乃合」

【軼事】 軼は逸に通ず、散逸してあまねく世に知られざる事實をいふ、史記に「論其——」

【逸詩】 ぬけてつたはらざる詩をいふ、史記の伯夷傳に「睹軼詩可異焉」の註に「軼ハ音逸、三百篇ニ編入セズ、故ニ——トイフ」と、軼と逸とは通ず、

【一死一生乃チ交情ヲ知ル】（一貴一賤）を見よ、

【一子出家スレバ七世ノ父母皆佛道ヲナス】 太平記卷の十三に見ゆ、盂蘭盆經に「乞願、便使現在父母壽命百年無病、無一切苦惱之患、乃至七世父母離餓鬼苦得生天人中福樂無極」と、これ七世の父母まで離苦得脫するをいふ、また心地觀經に「一日一夜出家修道二百萬刼不墮惡趣常生善處」と、これ己一身の得益をいふ

【一襲】 「ヒトカサネ」上の衣と下の裳との具りたるを襲といふ、通鑑に「趙烈侯賜公仲連衣二襲」の註に「上下皆具ハルヲ襲トイフ」

【一身都是膽】 膽の極めて大なるをいふ、三國志の蜀志趙雲傳に、趙雲が寡兵を以て曹操の大軍を破りしとき、劉備之を稱して「子龍——————也」といへり、子龍は、趙雲の字、この語、元史趙璧傳にも見ゆ、

【一心不亂】 心を一點に凝定して亂れざるをいふ、阿彌陀經に「執持名號若一日（中略若七日————」

【一將功成リテ、萬骨枯ル】 一將が功名を成すには、萬卒が命をすてたる結果なるをいふ、唐の曹松の己亥歳と題する詩に「澤國江山入戰圖、生民何計樂樵蘇、憑君莫奏話封侯事、一將功成萬骨枯」澤國とは水澤多き國の義にて黄巢の掠めたる荆楚江淮等の地をいふ、この詩は己亥の歳の事實を敍したるなり、唐の僖宗乾符六年冬、黄巢が嶺南に在りしに士卒疫にて死したるもの十中三四に及びければ、その徒これに北に還りて大事を圖ることを以てし、北のかた襄陽に趨きたり、この時山南東道節度使劉巨容は、江西の招討使曹全晸と兵を合し、拒ぎ破りて江陵に至る、或人巨容に賊を窮追して盡すべきことを勸む、巨容曰く、國家は喜みて人に負く、急あれば將士を存撫し、官賞を愛せざるも、事無きときは之を棄て、或は罪に行ふ、故に賊を留めて富貴の資とするに如かずと、衆乃ち止む、これによりて賊勢また振ふ、この事實を詠ぜしなり、起承は澤國一帶の江山は戰圖に入り、腥風慘憺、生民は日々惴々として心穩かならず、されば如何なる計をもつてか樵蘇を樂みて安らかに生を營まん、迚も出來ざることなり、轉結は兵禍の慘毒は此の如く至つて大なり、君にたのむ戰功を立てて諸侯に封ぜられんなどいふ事を話る勿れ、一將が功を成就して封侯の賞を博するには、萬人の士卒の生命を失はしむべければなりと、結句七字特に警拔を覺ゆ、

【一倡三歎】 倡は唱と同じ、歌句を發するなり、琴音一たび唱へて、僅に三人之に和するをいふ、禮記の樂記に「一倡而三歎、有遺音者矣」とあり、宗廟に於て奏する瑟音は質素にして好むもの少けれども、其の中には不盡の餘音存せることありとの義なり、三歎を三たび歎息すと解くは非なり、

【一手獨拍疾シト雖モ聲ナシ】（一手獨拍難疾無聲）君臣互に相須つて、國家の聲譽を揚ぐるに喩ふ、韓非子の語、

【逸書】 ぬけうせたる書物をいふ、歐陽修の日本刀歌に「——百篇今猶存」

【一醉千日】 六帖に「中山ニ酒アリ、飲ム者、一醉千日ナリ、玄石之ヲ飲ミ、千日ニシテ乃チ醒ム」

【一寸ノ光陰輕ンズベカラズ】 朱子の偶成の詩に「少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」とあり、詩の意は、少年は老い易くして學業は成就し難きものなり、されば一寸の光陰といへども徒に消費すべからず（以上起承二句）さて池塘春草に逍遙せし夢のまだ覺めやらぬに、早くも階前なる梧葉は、すでに秋風の聲を帶びぬと、光陰の過ぎ易きをいひて、學者を戒む（以上轉結）

【一世】 說文に「三十年ヲ——トナス」

【一成】 方十里の地をいふ、左傳哀元年に「有田——」

【一尺ノ布尚ホ縫フベシ】（尺布斗粟）を見よ、

【一刹那】「イチセチナ」ともいふ、梵語、極めて短き時にて、壯士一彈指の間に、六十刹那ありといふ、大藏法數に「梵語刹那華言一念、仁王護國經云、一念中有九十刹那、一刹那中有九百生滅云々」倶舍論に「時ノ極少ナル者ヲ刹那ト名ヅク」

【一錢ダニモ直セズ】 一錢の値もなしとの意にして、無能をそしる語、史記灌夫傳に「平生毀程不識不直一錢」

【一道】 一通に同じ、書の首尾全きを道また通といふ、後漢書崔實傳「政論一通」

【一簞ノ食、一瓢ノ飲】 簞は竹器、食は飯なり、少しばかりの飲食物なり、論語に「賢哉回也、一一一、一一一、在陋巷人不堪其憂回也不改其樂賢哉回也」また漢書貨殖傳に「顏淵簞食瓢飲、在於陋巷」

【一秩】 野客叢書に「十年ヲ以テ一一トス、ソノ說、白樂天集中ニ見ユ、詩ニイフ、年開第七秩屈指幾多人ト、コレ六十三ノ時ノ元日ノ詩ナリ、マタ曰ク、行開第八秩、可謂盡天年、註ニ、時俗七十以上ヲ謂テ、第八秩ヲ開クトナス、蓋シ十年ヲ以テ一一トナスノミ」

【一張一弛】 張は弦を張るなり、弛は弦をゆるぶるなり、民を使ふに、時ありて勞せしめ、時ありて息はしむるの義、禮記に「張而不弛文武弗能也、弛而不張文武弗爲也、一一一一文武之道也」と文武は周の文王武王なり、

【佚女】 なまめきてみだらなる美女をいふ、楚辭に「見有娀之一一」

【一通】（一道）また（一通）を見よ、

【五車】（五車ノ書）を見よ、

【一丁ヲ拔キ去ル】 一人の惡臣を除き去る義、一害を除去するにもいふ、宋史に「仁宗皇帝ノ時ニ、丁謂權ヲ擅ニシ、寇準（萊國公）ヲ雷州ニ貶ス、京師語リテ曰ク、天下ノ寧ヲ得ント欲セバ眼中ノ丁ヲ拔キ去レ（丁は釘なり、丁謂に喩ふ、丁謂を免官せしめよとなり）天下ノ好ヲ得ント欲セバ、寇老ヲ召スニ如カズト」

【一丁字ヲ識ラズ】（不識一丁字）一文字も知らざるをいふ、書言故事に「唐ノ張弘靖曰ク 天下無事、爾輩兩石ノ弓ヲ挽クハ、一丁字ヲ知ルニ如カズ」と、康熙字典ニ「續世說ヲ按ズルニ、一丁ヲ一个ニ作ル、篆文ハ、个ト丁ト相似タルニ因リテ傳寫スルトキ、譌リテ丁トナス」と、この說從ふべし、

【一定論】 一定不易の論なり、淮南子に「士有一定之論、女有不易之行」

【一朝一夕】 時間の短きにいふ、王陽明の文に「嗚呼其弊也、豈一一一一之故哉」

【一朝ノ忿】 「一時激發する所ろにて、理に中らざる忿なり、論語に「一朝之忿、忘其身、以及其親、非惑與」

【一擲乾坤ヲ賭ス】 賭は博雅に「奕取也」とあり、博奕の「カケモノ」にすること、天下を取るか、捨つるかの分目をいふ、韓愈の過鴻溝詩に「誰勸君王回馬首、眞成一擲賭乾坤」

【一敵國】 勢力强盛なる者を稱す、史記游俠傳に「天下騷動、宰相得之若得一一一」云（隱トシテ）を見よ、

【入テハ則チ法家拂士ナク、出デテハ則チ敵國外患ナキ者ハ國恒ニ亡ブ】 孟子の告子篇の下に出づ、曰く「入則無法家拂士、出則無敵國外患者國恒亡矣、然後知生於憂患而死於安樂也」法家とは、法度の世臣なり、拂士は、輔弼の賢士、

【一點紅】 妓女をいふ、書言故事に「壬齋詩話ニ云フ、青州ノ推官劉郛、謔ヲ好ム、嘗テ詩ヲ念フ、座上若有一一、斗筲之器成千鍾」とあり、一一一は、妓の名、斗筲は量の少きをいふ、情意歡洽して、飲むことの多きをいふ、

【一通】 一篇の如し、凡て文書の首尾全きを通といふ、曹植の書に「今往僕少小所著辭賦一一」

【一統】 統治して一に歸するなり、史記秦紀に「今海內陛下ノ神靈ニ賴リ、一一シテ皆郡縣トナル」

【一頭地ヲ出ス】 人より一段ぬき出るをいふ、宋史に「宋仁宗嘉祐二年、歐陽公知貢擧、試官梅聖俞、得蘇軾刑賞忠厚之至論、以示公、公驚喜以爲異人、欲以冠多士、疑門人曾子固所爲、乃寘第二選、復以春秋對義居第一、公曰、老夫當避此出一頭地」

【一德】 純一の德なり、書經に「惟尹躬暨湯、咸有一一」尹は伊尹なり、

【一斗ノ粟尚ホ舂クベシ】 少しの食も兄弟互に分ち食ふべきをいふ、漢書淮南王傳に「一斗粟尚可舂、一尺布尚可縫」

【一敗地ニ塗ル】 史記の高祖紀に「沛ノ父老、子弟ヲ率キテ共ニ沛ノ令ヲ殺シ、城門ヲ開キ劉季ヲ迎ヘテ、以テ沛ノ令ト爲サント欲ス、劉季曰ク、天下方ニ擾レ、諸侯竝ビ起ル、今將ヲ置クコト善カラザレバ、一敗塗地、吾敢テ自ラ愛スルニアラズ、恐クハ能薄ク父兄子弟ヲ完クスル能ハザランコヲ、此レ大事ナリ願クハ更ニ相推シテ、可ナル者ヲ擇ベ」と、註に「一敗地ニ塗ルトハ、一朝

ニ敗レテ、肝腦ヲシテ、地ニ塗レシムル義ナリ」

【鷸蚌ノ爭】 鷸は「カハセミ」なり、蚌は「ハマグリ」なり、鷸蚌相爭ひて、兩ながら、漁者に獲らる、以て兩ながら利を爭ひて、他によこどりせらるゝに喩ふ、戰國策に「趙且ニ燕ヲ伐タントス、蘇代、燕ノ爲メニ惠王ニ謂ツテ曰ク、今日臣來リテ易水ヲ過グ、蚌方ニ出デテ曝ス、而シテ鷸其ノ肉ヲ啄ム、蚌合シテ其ノ喙ヲ箝ム、鷸曰ク、今日雨フラズ 明日雨フラザレバ、即チ死蚌アラント、蚌亦鷸ニ謂ツテ曰ク、今日出デズ、明日出デザレハ、即チ死鷸アラント、兩者相捨ツルヲ肯ゼズ、漁者得テ之ヲ幷セ擒ニス、今趙且ニ燕ヲ伐タントス、燕趙久シク相支ヘ、以テ大衆ヲ敝ス、臣強秦ノ漁父タランコトヲ恐ルト」また鷸蚌相持すとは、兩ながら爭ひて放たざるをいふ、

【佚罰】 佚は失なり、政を失ふの罪にて、己を罪するなり、一解に、罰の當を失ふなりと、書の盤庚に「惟予一人、有ーーー」

【一發五豝】 一箭を發して、五豝を獲、是れ一發雙貫の意にして、獲る物の多きを示す辭なり、詩經の召南に「彼茁者葭、壹發五豝」茁は生出壯盛の貌なり 豝は牝豕なり、一解に、二歳の豕なり、また大豬、

【一髮千鈞ヲ引ク】 (一髮引千鈞)至りて危急なるを狀するなり、韓愈の與孟尚書書に「漢氏已來、群儒區々トシテ修補シ、百孔千瘡、隨ツテ亂レ、隨ツテ失ヒ、其ノ危キコト一髮千鈞ヲ引ク如シ」とあり、蓋し列子の仲尼篇に「髮引千鈞、勢至等也」の註に「髮ハ至弱ニシテ千鈞ハ至重ナリ、固ヨリ引クベカラズ、然レドモ其ノ髮ノ勢ヲ積ミテ、千鈞ト等シキニ至ルトキハ、亦以テ千鈞ヲ引クベキヲイフ」とあるを翻用す、

【一般】 「オシナベテ」「總ベテ」の義、邵康節の清夜吟に「月到天心處、風來水面時、ーー清意味、料知少人知」

【一斑】 ひとつの「マダラ」一部分の義に用ふ、一斑を見て全豹を知るなどと用ふ、書言故事に「晉ノ王獻之、年數歳ノ時、門生ノ樗蒲(スゴロク)スルヲ觀テ曰ク、南風競ハズト、門生曰ク、此ノ郎亦管中窺豹、時見ーート、獻之衣ヲ拂ヒテ去ル」とあり、見一斑とは全豹を窺ふこと能はずしてたゞ一斑點を見るをいふ、見る所ろの小なるに喩ふ、

【一飯ノ德】 德は恩惠の義、一度飯をふれまはれしめぐみ、少しばかりの恩をいふ、史記の范蔡傳に「一飯之德必償」

【一龍一豬】 幼き時は、さほど異ることなき兒童も、學問の有無によりて、甚しく賢愚の差を生ずるに喩ふ、韓退之に子あり符といふ、書を郡城の南に讀む、退之詩を作り之を勉めしむ、詩中に「兩家各生子、提孩巧相如、少長聚嬉戲、不殊同隊魚」(中略)三十骨骼成、乃ーーーー」の句あり、學問する者は壯年の後、神龍の變化あるが如く、不學の者は豬畜の變化なきが如き差あるに譬ふ、

【溢美ノ言】 「ホメスギノコトバ」なり、莊子の人閒世篇に「夫傳兩喜兩怒之言、天下之難者也、夫兩喜必多溢美之言、兩怒必多溢惡之言」とあり、溢は過ぐるなり、喜怒の言は、常に其の當に過ぐるをいふ、

【一貧一富乃チ交態ヲ知ル】 (一貴一賤)を見よ、

【一夫關ニ當レバ萬夫モ開クナシ】 極めて要害よき關所などをいふ、李白の蜀道難の句(李白)を見よ、

【一抔ノ土】 抔は手にて掬ふをいふ、少量の義なり、轉じて陵墓の義とす、漢書張釋之傳に「假令愚民長陵一抔ノ土ヲ取ラバ、陛下且ニ何ヲ以テ其レニ法ヲ加ヘントスル乎」と、一抔の土を取るとは、先帝の陵をあばくといふ婉語なり、また駱賓王の徐敬業のために作りし檄に「一抔土未乾、六尺孤安在」

【泉】 爾雅に「水ノ本ヲ源トイフ、源ヲ泉トイフ、正シク出ヅルヲ濫泉トイヒ、側出ヲ氾泉トイヒ、湧キ出ヅルヲ噴泉トイフ」と、說文に「泉ハ水原ナリ、水流レテ川ヲ成スノ形ニ象ル」と、禮記の禮運に「天降膏露、地出醴泉」と、漢の貳師將軍李廣利、大宛を征す、軍中水なし、乃ち劒を拔き山を刺せば、泉水湧出す、以て神助となせり(溫泉〈貪泉〈酒泉〈醴泉)を參看せよ、

【逸民】 逸は隱なり、遁なり、世を遁れて隱居せる民なり、論語に「舉ーーこまた「ーー伯夷・叔齊・虞仲云々」注に「ーートハ、節行超逸ノ人ナリ」と、漢書敍傳に「四皓遯秦、古之ーー」

【乙夜ノ覽】 天子の讀書せらるゝをいふ、乙夜は二更なり、則ち今の午後十時なり、漢舊儀に「五夜トハ、甲夜・乙夜・丙夜・丁夜・戊夜、衞士甲乙相傳ヘテ、五更ヲ盡ス」葉廷珪ノ海錄碎事に「唐ノ太宗曰ク、若シ甲夜事ヲ觀、乙夜書ヲ觀ザレバ何ヲ以テ人君ト爲サント」

【夷狄】 禮記の王制に「東方ヲ夷トイフ、被髮文身シ、火食セザル者アリ、南方ヲ蠻トイフ、題ニ彫リ(額に「ホリモノ」をする)趾ヲ交ヘテ火食セザル者アリ、西方ヲ戎トイフ、髮ヲ被リ皮ヲ衣テ粒食セザル者アリ、北方ヲ狄トイフ、羽毛ヲ衣、穴居シテ粒食セザル者ア

リ」

【銀杏】（銀杏）を見よ、

【熒斗】「ヒノシ」火斗に同じ、淮南子に「炮烙始于——」

【異等】特別に異りてすぐれたる義、漢書武帝紀に「吏民有茂才——」

【異同】異なる義、出師表に「陟罰臧否、不宜——」とあり 日知錄に曰く「異同異也、吳志孫皓傳注蕩——」如反掌、晉書王彬傳、江州當人强盛時、能立——、又曰、愛憎憎也、得失失也、利害害也、緩忽急也、成敗敗也、同異異也、贏縮縮也、古人之詞、寬緩不迫也」

【絲ヲ治メテ之ヲ棼ス】 棼は猶ほ紛の如し、絲を治むるの道は、和緩を以て先と爲す、若し之を棼すときは益〻亂れて治め難きをいふ、左傳隱四年に「聞以德和民、不聞以亂、以亂猶治絲而棼之也」

【絲ヲ牽キテ妻ヲ得タリ】 圓機活法に「唐ノ郭元振、少クシテ美ナリ、宰相張嘉貞納レテ壻トナサントシテ曰ク、吾ガ五女各〻姿色アリ、各ヲシテ一絲ヲ持セシム、幔前ニ子ヲシテ之ヲ牽カシメ、得タル者ヲ以テ婦トナサント、元振一紅絲ヲ牽キテ、第三女ヲ得タリ」

【懿德】懿は醇美なり、美くしき德をいふ、詩經の周頌に「我求——」說文には「懿ハ專一ニシテ美ナリ」

【絲ハ竹ニ如カズ、竹ハ肉ニ如カズ】（絲不如竹、竹不如肉）世說に「桓宣武、嘗テ孟萬年ニ問フ、伎ヲ聽クニ絲ハ竹ニ如カズ、竹ハ肉ニ如カザルハ何ソヤト、孟答ヘテ曰ク、漸ク自然ニ近ケレバナリト、一座咨嗟シタリキ」宣武は桓溫、萬年は孟嘉なり、肉とは人の口より出づる歌なり

【猗頓ノ富】 賈誼の過秦論に「材能中庸ニダニモ及バズ、仲尼、墨翟ノ賢、陶朱猗頓ノ富アルニアラズ」とあり、孔叢子に「猗頓ハ、魯ノ窮士ナリ、耕ストキハ常ニ飢エ、桑トルトキハ常ニ寒ユ、朱公ノ富ヲ聞キ、往イテ術ヲ問フ、朱公之ニ告ゲテ曰ク、子速ニ富マント欲セバ、當ニ五牸ヲ畜フベシト、是ニ於テ、乃チ河ニ適イテ大ニ牛羊ヲ猗氏ノ南ニ畜フ、十年ノ閒ニシテ、其ノ滋息計ルベカラズ、貲王公ニ擬ヘ、名ヲ天下ニ馳ス、以テ富ヲ猗氏ニ與ス、故ニ猗頓トイフ」とあり、文選の註に「猗頓ハ古ノ巨富人ナリ」（意必固我）を見よ、

【意毋ク必ナク固ナク我ナシ】

【淮南子】（——）を見よ、

【蝗ノ境ヲ出ヅル】 太平記卷三十八に見ゆ、後漢書列傳に「魯恭字ハ仲康、扶風平陵ノ人、肅宗ノ時、中牟ノ令ニ拜ス、專ラ德化ヲ以テ理トナシ刑法ニ任ゼズ、

郡國、螟、稼ヲ傷ケ犬牙界ニ緣ルモ、中牟ニ入ラズ」恭は後ちに大司徒となる、

【井ニ坐シテ天ヲ觀ル】 韓愈の原道に「老子之小仁義」非毀之也、其見者小也、坐井而觀天曰天小者非天小也」と、己が見る所ろ小にして、徒に聖人の道を小なりとするに喩ふ、尸子曰く「井中星ヲ視ル、視ル所ロハ數星ニ過ギズ」と、莊子の秋水に「是直ニ管ヲ用ヒテ天ヲ窺フナリ、亦小ナラズヤ」と、あると意同じ、老子小仁義」とは、老子に「大道廢有仁義」とある如き、その證とすべし、

【古ヲ道フ者之ヲ今ニ稽フ】 鹽鐵論に「道古者稽之今、言遠者合之近」徒らに古と遠とを說くも、之を今と近とに合せ考へざれば實際に迂遠にして益なしとの義、

【古ヲ好ム】 古の道を好むをいふ、漢書禮樂志に「魏文侯最爲好古」また櫂德輿の詩に「好古每開卷、居貧常閉門」

【古ヲ貴ビ今ヲ賤ム】 古代を貴び、現世を賤むをいふ、莊子に「尊古而卑今、學者之流也」また淮南子に「世俗之人、多尊古而賤今」

【古ヲ以テ鑑トナセバ以テ興替ヲ知ルベシ】（以古爲鑑、可以知興替）古の事を以て鏡とするときは、世のおこりかはる所以を知ることを得べしとの意、貞觀政要に見ゆ、唐の太宗の語、この句の下に「以人爲鑑可以明得失」とあり、鑑一に鏡に作る、

【古ノ學者ハ己ガ爲メニシ、今ノ學者ハ人ノ爲メニス】（古之學者爲己、今之學者爲人）論語、憲問篇に見ゆ、孔子の語、古の學者は念々たゞ己が身の爲めにし、學びて道を吾に得んと欲するなり、今の學者は念々たゞ人の爲めにせんとし、學びしことの人に知られんことを欲するなりとて心の淺ましさを歎きて、古今の學者の用心の異なるところを說示したまひしなり、胡敬齋曰く「學、己ノタメニセザレバ、萬卷ノ書ヲ讀ムモ、己ト干スルナシ、己ノタメニスレバ、則チ皆我ガ事ナリ」

【古ノ學者ハ道ニ渴ス】 沆瀣子に「古之學者渴道、其次渴名、今學者渴祿」渴とは渴する者の水を欲する如く、求むることの甚だ切なるをいふ、

【古ノ史ヤ道ヲ辨ズ】 中說の語「古之史也辨道、今之史也、耀文、古史は道德を明かにするを主とし、今の史は文辭を麗はしくすることを重んずといふ意、

【衣ニ勝ヘザルガ如シ】 體弱くして衣の重さにたへ

ざる如しとなり、禮記に「趙文子、退然如不勝衣」また荀子に「葉公子高、微小短瘠、行若將不勝其衣」また恐れつゝしむとの甚しきにもいふ、韓詩外傳に「昔者周公事文王、行無專制、事無由己、身若不勝衣」

【犬】 春秋考異に「狗ハ三月ニシテ生ル、陽ハ三ニ成ル故ニ狗各高サ三尺ナリ」格物論に「犬ハ家畜ナリ、吠ヲ以テ守ル（中略）猘ハ猛犬、獨ハ狂犬、宋促、韓獵ハ狡犬、獒ハ高サ八尺ナリ」蘇軾の上神宗皇帝書に「畜犬本以防姦、不以無姦而養、不吠之犬」

【狗猛クシテ酒酸シ】 姦臣事を用ふる者あるときは、國衰ふるに喩ふ、晏子春秋に「人酒ヲ酤ル者アリ、器ヲ爲クルコト甚タ潔清、表（カンバン）ヲ置クコト甚タ長シ、而シテ酒酸ナルマデ售レズ、之ヲ里人ニ其ノ故ヲ問フ、里人曰ク、公カ狗ノ猛ナル人器ヲ挈ゲテ入リ、且ニ公ノ酒ヲ酤ハントスレバ、狗迎ヘテ之ヲ噬ム、此レ酒ノ酸クシテ售レザル所以ナリ、夫レ國ニモ亦猛狗アリ、事ヲ用フル者是レナリ、道術アルノ士、萬乘ノ主ニ干メント欲ス、而シテ事ヲ用フル者、迎ヘテ之ヲ齕ム、之レ亦國ノ猛狗ナリト」この事は韓非子にも出づ、

【犬ハ善ク吠ユルヲ以テ良トナサズ】 （口ハ是レ人ヲ）を見よ、

【稻】 禮記の曲禮に「凡ソ宗廟ヲ祭ルノ禮ニヲ嘉蔬トイフ」詩經の豳風に「十月穫稻」李時珍の本草綱目に「古者專指糯爲稻、今粳糯通稱稻、粘者爲糯、不粘者爲粳、其種近百、各不同、其穀之光芒、長短、大細、其米之赤白紫烏堅鬆香否、皆因土產形色而異也、凡有早中晚三收、六七月收者爲早稻、八九月收者爲遲稻、十月收者爲晚稻、其晚白米爲第一也」

【夷ノ思フ所ロニアラズ】 （夷ノ思フ）を見よ、

【醫ノ九科】 大方脈・小方脈・傷寒科・婦人科・瘡瘍科・鍼灸科・眼科・口齒科・正骨科をいふ、

【豕】 格物論に「一ハ猪ノ總名ナリ」古今注に「一一名ハ長喙將軍トイフ（遼東ノ豕）を見よ、

【命長ケレバ辱多シ】 徒然草に見ゆ、莊子に「多男子則多畏、富則多事、壽則多辱、是三者非所以養德也」

【命ハ義ニ緣リテ輕シ】 命は、義の爲めには棄てゝも惜むこと無きをいふ、後漢書の朱穆傳に「情爲恩使、命緣義輕」

【命ハ鴻毛ヨリモ輕シ】 司馬遷の語に「人固有一死、死或重於泰山、或輕於鴻毛」とあるに本づく、それより「義ハ泰山ヨリ重ク、命ハ鴻毛ヨリ輕シ」ともいふ、鴻は

雁の一種「ハクテウ」「オホトリ」「ヒシクヒ」等の和名あり、

【命ハ風前ノ燭ノ如シ】 人生の無常に喩ふ、俱舍論の疏に「壽命猶如風前燈燭」また法苑珠林に「命如風中燈」

【井ノ中ノ蛙】 見るところの小なるに喩ふ、俗にいふ、世間見ずなり、莊子の秋水篇に「井蛙ニハ以テ海ヲ語ルベカラズ、虛ニ拘スレバナリ、夏蟲ニハ以テ氷ヲ語ルベカラズ、時ニ篤クレバナリ云々」また後漢書の馬援傳に「馬援謂隗囂曰、子陽井底蛙耳、而妄自尊大」

【異葩】 珍しき花をいふ、說文に「葩ハ華ナリ」とあり、五燈會元に「枯椿吐一一」

【醫ハ意ナリ】 因話錄に「許胤宗名醫、人問何不著書、曰、醫者意也、脈之深趣、不可言傳」

【帷幕】 「タレギヌ」と「マク」と、周禮の註に「在旁曰帷、在上曰幕」幕はおほふ義、

【帷薄修マラズ】 帷は幕なり、幔なり、薄は簾なり、自ら障蔽する所以なり、帷薄は、閨房なり、閨門の亂るゝをいふ、漢書賈誼傳に「坐汚穢淫亂男女亡別者、不曰汚穢、曰帷薄不修」

【醫ハ三世ナラザレバソノ藥ヲ服セズ】 君父の病には醫を擇ぶべし、即ち三代も續きて經驗を積みたる醫師の藥にあらざれば、服用すべからずとの意なり、されども醫師の良否はその人に存ずるものなれば、必ずしも三世と限りたるにあらず、兎に角經驗なき醫師の調藥は、用ふべからずとの戒なり、禮記の曲禮に「君有疾飲藥、臣先嘗之、親有疾飲藥、子先嘗之、醫不三世、不服其藥」とあり、小學外篇にも「伊川先生曰、病臥於牀委之庸醫、比之不慈不孝、事親者、亦不可不知醫」とあり、

【意馬心猿】 情意の馬や猿の如く馳せくるひて制し難きをいふ、安樂集に「諸凡夫、心如野馬、識劇猿猴、馳騁六塵、何曾停息」また趙州錄遺表に「心猿罷跳、意馬休馳」心地觀經にも「心ハ猿猴ノ如シ、五欲ノ樹ニ遊ンデ暫クモ住マラズ」

【衣ハ新ニ若クハナク、人ハ故ニ若クハナシ】 舊識の新知にまさるをいふ、晏子の語、晏子春秋に「衣莫若新、人莫若故」とあり、また後漢書に「竇玄、狀貌絕異、天子ソノ妻ヲ出サシメ、妻ハスニ公主ヲ以テス、妻悲怨シ、書及ビ歌ヲ寄セテ玄ニ與フ、時人憐レンデ之ヲ傳フ」と、ソノ詩ニ曰ク「煢々白兔、東走西顧（己の出されてなほ故夫を戀ふに喩ふ）衣不如新、人不如

「故」

【衣鉢】 「衣鉢ヲ」を見よ、

【倚馬之才】 文を作るに敏捷なるをいふ、唐書に「李白曰請試萬言倚馬可待」

【薔薇】 圓機活法に「——一名は牛勒、一名ハ牛棘、一名ハ刺紅、一名ハ薔薪、藤身ニシテ莖青ク、刺アリ、花白ク、或ハ紫、或ハ黄ナリ、春ニ連リ夏ニ接シ、清馥人ニ可ナリ」と、三柳軒雜識に「——ハ野客ナリ」と、群芳譜に「紛紅ノ者アリ、粉團ト名ヅク」と 香譜に「大食國薔薇花ノ露、五代ノ時、藩使十五瓶ヲ以テ獻貢ス」

【猗靡】 女色の麗しさを言ふ、阮籍の詩に「——情歡愛」

【骯髒】 骯は骯に作る、同じ、骨曲るなり、髒は脛の曲るなり、——は、猶ほ屈曲といふが如し、漢書枚乘傳に「其文——、曲隨其事」

【意必固我】 論語の子罕篇に「子絶四毋、意毋、必毋、固毋、我」聖人の心明々淨々私累なきを記するなり、絶は無の盡きたるなり、毋は無に同じ、禁止の辭にあらず、意は私意なり、必は期必なり、此事は必ず斯くせんと期するなり、夫子はこの必なく、唯義のまゝに從ふをいふ、固は執滯なり、事成りて後ちそれに執滯して移り動かざるをいふ、夫子はこの固なし、時とともに行ふをいふ、我は己を忘るゝ能はざるなり、夫子は彼我の界を立つることなきをいふ、朱子曰く「意ニ起リテ必ニ行ハレ、固ニ留リテ我ニ成ル、必ノ時ハ淺ク、固ノ時ハ長シ、意ハコレ始メ、我ハ是レ終リ、固必ハ中間ニ在リ、一節ハ一節ヨリ重キナリ」

【邑邑】 悒悒に同じ、心のむすぼれて、平かならざるをいふ、史記淮南王傳に「人生一世閒、安能——如此」

【倦倦】 耕しつゝ進み行く貌、莊子天地篇に「——乎耕而不顧」

【熠燿】 明定まらざる貌、螢の火なり、詩の豳風に「——宵行、不可畏也」傳に「——ハ燐ナリ」と、李陵詩に「——東南飛」一解に——ハ鮮明なりと、

【伊孚九】 名は海、莘野と號し、別に鴛川雲水伊人・桴鳩・也堂などと號す、孚九はその字なり、清の吳興の人にして南宗畫を善くす、我が享保年閒長崎に來る、清淡幽秀なる山水を畫きて名あり、是より先き足利時代より、北宗の畫我に傳はりしといへども、南宗の畫風は未だ傳らず、元祿中、物徂徠が李笠翁の芥子園畫傳を幕府に納めし後、漸くその畫風を賞するに至りしが、孚九の來朝するに及びて大いにその風を盛んならしめ、彭城石川・祇園南海・池大雅等相尋いで輩出

するに至れり、

【倚伏】 禍と福とは互に相倚り相伏して至るをいふ、史記賈生傳に「禍兮福所倚、福兮禍所伏、憂喜聚門兮、吉凶同域」

【異服】 「カハリタルキモノ」周禮に「禁——異言者」

【遺腹ノ子】 「ハラゴモリ」の子、父死して後ちに生れたる子なり、漢書李廣傳に「當戶有遺腹子陵、將兵擊胡」また遺孕ともいふ、輟耕錄に見ゆ、淮南子に「——子、不思其父、無貌于心也、不夢見像、無形于目也」

【邑、勝母ト名ツケテ曾子入ラズ】 說苑の說叢篇に見ゆ、曰く「邑名勝母、曾子不入、水名盜泉、孔子不飲、醜其聲也、母に勝つは不孝なり、故に入らず、盜泉の名を忌みて渴を忍びて飲まず、皆孝廉の心よりして自ら然るなり、淮南子說山訓には「曾子立孝不過勝母之閭、曾子立廉不飲盜泉、所謂養志者也」とありて盜泉を飲まざりし事も共に曾子の事となす、

【異物】 死者をいふ、吳質書に「今各逝、已爲——矣」

【云フニ足ラズ】 いふほどの價値なし、耶律楚材の句に「餘子紛々不足云」

【邑入】 采邑の租稅なり、史記孟嘗君傳に「爲孟嘗君收——」

【以聞】 上聞の義、戰國策に「不敢匿意隱情、——於左右」

【家給シ人足ル】 給も亦足なり、家々富み、人々しげく、世運隆昌なるをいふ、漢書貢禹傳に「天下家給人足、頌聲竝作」

【家ニ敵帚アリ、之ヲ享スル千金】 自ら見るの明なく、自分免許なるをいふ、敵帚は「ヤブレハヽキ」典論に里語を引いて曰く「家有敵帚、享之千金、斯不自見之患也」

【家貧シク親老ユレハ祿ヲ擇バスシテ仕フ】 (重キヲ負ヒ)を見よ、

【韋編三絕】 竹簡を綴ぢたる韋の、三たびも斷えたるは、披閱の頻繁なるに由る、抱朴子に「孔子讀易、——」

【家貧シケレバ良妻ヲ思フ】 史記の魏世家に「魏文侯李克ニ謂ツテ曰ク、先生嘗テ寡人ニ敎ヘテ曰ク、家貧則思良妻、國亂則思良相ト云々」

【詒謀】 子孫の爲めに、よみさ計を遺す義、詒は遺なり、貽と通ず(孫謀)を見よ、

【移木ノ信】 太平記卷五に見ゆ、帝範の下に「移木無欺」とあり、史記六十八卷に「商君立三丈之木於國都

市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令令行於民云々」

【韋孟】 漢の彭城の人、楚の元王の傅となる、元王の子孫、荒淫にして道に遵はず、孟、詩を作りて諷諫す、後ち遂に位を去り家を鄒に徙す、孟より賢に至るまで五世鄒魯の大儒たり、

【未ダ曾テ見ザルノ書ヲ讀ミ、未ダ曾テ到ラザルノ山水ヲ歴】 この二者は共にいふべからざる快事なりとす、五雜組に「讀未曾見之書歴未曾到之山水如獲至寶嘗異味一段奇快難以語人也」

【未ダ車ヲ下ラズシテ先ツ儒雅ヲ訪フ】 儒者を尊ぶ心の切なるなり、後漢書、儒林傳序に「光武中興、愛好經術、未及下車而先訪儒雅、採求闕文、補綴漏逸」

【未ダ之ヲ思ハザルナリ、夫レ何ノ遠キコトカ之レ有ラン】 (未之思也夫何遠之有) 論語子罕篇に出づ「唐棣之華、偏其反而、豈不思爾、室是遠而」とある逸詩を孔子の評せられたる語なり、即ち室の遠きを厭ふ如きは、未だ思ふことの切ならざる也、思だに深く至らば、何ぞ室の遠きを憚らんとの意なり

【未ダ匪躬ヲ顧ミルニ遑アラズ】 太平記卷九に見ゆ、易の蹇卦に「王臣蹇々匪躬之故」とあるに本づく(匪躬ノ節)を見よ、

【未ダ見ザルノ書】 (未見書) 未だ見たことなき書なり後漢書黄香傳に「年十二、博ク經術ニ通ズ、京師號シテ天下無雙、江夏黄童トイフ、初メ郎中ニ除セラル、肅宗香ニ詔シテ東觀ニ詣リ、未ダ見ザル所ロノ書ヲ讀マシム」北史の李鉉傳に「鉉、鄉里ニ文籍寡キヲ以テ京師ニ來游シ、未ダ見ザル所ロノ書ヲ讀ム」

【引】 文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ、唐以前ノ文章、未ダ引ト名ヅクル者アラズ(中略)唐以後始メテ此ノ體アリ、大略序ノ如クニシテ、而シテ稍短簡ト爲ス、蓋シ序ノ濫觴ナリ、其ノ引ト名ヅクル義ノ若キハ、安ニ臆說シ難シ云々」

【印】 釋名に「一ハ信ナリ、物ヲ封ジテ信ヲ示ス所以ナリ、亦イフ因ナリ、物ヲ封ジテ相因付スルナリ」と、說文ニ「執政持スルトコロノ信ナリ、タヾ天子ノヲ璽トイヒ、玉ヲ用フ、ソノ餘ノ王公卿大夫ハ、或ハ一トイヒ、或ハ章トイフ、金銀ヲ用フルニ非ザレバ、則チ銅鐵ヲ用フ、綬アリ、ソノ色同ジカラス、以テ尊卑貴賤ノ等ヲ辨ズ」と(印章)を見よ、

【殷】 夏の桀王貪虐、人民大いに怨望して叛する者あるに至る、時に諸侯に成湯といふ者あり、姓を子、名を天乙といふ、伊尹を相とし仁政を施し民心を收め、遂に兵を起して葛を攻め昆吾を滅し、凡そ十一征して殆ど全國の諸侯を服し、桀を南巢に放ちて帝位に卽き亳(河南省歸德府商邱縣)に都し國を商と號す、成湯の後ち凡そ五興五衰を經たり、湯の孫太甲暴戾にして祖父の遺法に遵はず、伊尹よりて太甲を桐宮に置くこと三年、太甲よくその過を悔いたりしかば、伊尹奉じて亳に復す、太甲德を修め政をつとめ、諸侯悉く歸し百姓安寧なり(一興)太甲より四傳して雍己に至り紀綱漸く紊れて諸侯また至らず(一衰)その弟太戊立ち伊陟・巫咸・臣扈等の賢人を用ひ、天下太平にして諸侯また來り從へり(二興)更に三傳して河亶甲の時に至りてまた衰へたりしが(二衰)祖乙の位に卽くに及びて巫賢を相とし紀綱また振ふ(三興)後ち陽甲の時に至り諸子相爭ひて、海内大に亂れ諸侯至らざるものありしが(三衰)その弟盤庚都を殷(河南省河南府偃師縣)に遷し、國號を殷と改め先王の政を修めしかば諸侯また來朝せり(四興)盤庚崩じてその弟小辛立ちしが、殷室また振はず(四衰)小辛より再傳して武丁に至り、甘盤・傅說の諸賢を用ひて殷室また興れり(五興)また五傳して武乙に至り都を朝歌(河南省衞輝府淇縣)に遷し、淫佚に耽りしかば殷室また衰へて竟に振ふ能はず(五衰)陵遲して帝辛に至る、帝辛名は受、諡して紂といふ、有蘇氏の女妲己を寵し稅を重くし刑を酷にし、庭池園臺を作りて長夜の飲をなす、庶兄微子・大臣箕子・比干(これを殷の三仁といふ)屢諫むれども聽かず、遂に比干を殺し、箕子を囚ふ、時に周の武王の勢甚だ盛にして諸侯を率ゐて來り征す、紂之と牧野に戰ひて敗死す、殷凡そ二十八世六百餘年にして亡びぬ、

【韻】 聲音の和するを一といふ、文心雕龍に「同聲相應謂之一」とあり、音聲のひびきをいふ、漢字はそのひびきによりて一百六一に類別す、即ち上平聲は東・冬・江・支・微・魚・虞・齊・佳・灰・眞・文・元・寒・刪の十五、下平聲は、先・蕭・肴・豪・歌・麻・陽・庚・青・蒸・尤・侵・覃・鹽・咸の十五、上聲は、董・腫・講・紙・尾・語・麌・薺・蟹・賄・軫・吻・阮・旱・潛・銑・篠・巧・皓・哿・馬・養・梗・迥・有・寢・感・儉・豏の二十九、去聲は、送・宋・絳・寘・未・御・遇・霽・泰・卦・隊・震・問・願・翰・諫・霰・嘯・效・號・箇・禡・漾・敬・徑・宥・沁・勘・豔・陷の三十、入聲は屋・沃・覺・質・物・月・曷・黠・屑・藥・陌・錫・職・緝・合・葉・洽の十七一なり、一をかく類別するは晉以後に係り、漢魏以

前は——をいふこと鮮し、

【姻姫】 壻の父を姻といひ、兩壻相謂つて姫といふ、姫一に亞に作る、相亞次する義、詩經に「瑣々姻亞、則無膴仕」釋名に「亞ハ一人ハ姉ヲ取リ、一人ハ妹ヲ取ル、相亞次スルナリ、マタ友壻トイフ、言フ心ハ、相親ミ友トスルナリ」

【淫哇】 みだりがはしき聲、またみだらなる音曲、哇は淫聲なり、揚子法言に「中正則雅、多哇則鄭」とあり、駱賓王の句に「弘茲雅奏、抑彼——」哇一に鞋に作る、同じ、

【喑啞叱咤】 喑啞は怒氣を懷くなり、叱咤は怒聲を發するなり、史記の項羽本紀に「————スレバ千人皆廢ス」

【般侑】 舊唐書に「——ハ陳郡ノ人、元和中累リニ太常博士トナル、時ニ回鶻和親ヲ請フ、朝廷方ニ兵ヲ用ヒ叛ヲ伐チ、費用百端ナリ、ソノ期ヲ緩クセント欲ス、乃チ宗正少卿李孝誠ヲ以テ使ヲ奉ジテ宣諭セシメ、侑ヲ以テ副トナス、侑謹重ニシテ節槩アリ、事ニ臨ミテ俊辯、既ニ虜廷ニ至ル、可汗初メ漢使ヲ待ツニ、盛ンニ兵甲ヲ陳シ、漢使ヲ臣トシ答拜セザラント欲ス、侑堅立シテ動カズ、宣諭シ畢ル、可汗ソノ倨ヲ責メ留メテ遣ラザラント欲ス、行ク者皆懼ル、侑曰ク、可汗ハ是レ漢家ノ子壻ナリ、坐シテ使臣ノ拜ヲ受ケント欲ス、是レ可汗ノ禮ヲ失スルナリ、使臣ノ倨ナルニアラザルナリト、可汗ソノ言ヲ憚リ、敢テ逼ラズ、侑使シテ還リ、虞部員外郎ニ拜ス」韓文に送般員外使回鶻序あり、

【隱憂】 隱は痛なり、痛み憂ふるなり、詩の邶風に「耿々不寐、如有——」

【淫佚】 男女の閉の謹まざること、漢書に「男女——」

【隱逸花】 菊の異名、周茂叔の愛蓮說に「菊花之隱逸者也」菊は春芳を競はず、群卉に後れて開く者なり、故に隱逸の士に比す、

【隱隱】 憂戚の貌「ウレヒイタム」荀子 儒效篇に「——兮其恐、人之不當也」また盛なる貌、司馬相如の上林賦に「滿々——」

【般般】 憂ふる貌、詩經の邶風柏舟に「憂心——」また盛なる貌、史記の蘇秦傳に「鞠鞠——若有三軍之衆」また雷の鳴りはためく音にも用ふ、

【般員外】 (般侑)を見よ、

【陰羽】 鶴の異名、藝林伐山に「易曰鳴鶴在陰、傳曰、鴻雁隨陽、故汲冢書目、鶴曰——、禹貢名鴈曰陽鳥」

の註に「鶴ハ陰ヲ愛シテ、陽ヲ惡ミ、鴈ハ陽ヲ愛シテ陰ヲ惡ム」

【飲羽】 箭の深く貫きて羽まで沒するをいふ、曹植の七啓に「不虛發、中必——」(熊渠虎)を見よ、

【霪雨】 韻會に「雨十日ニ過グル以往ヲ——トイフ」また玉篇に「霪ハ久シキ雨ナリ」淮南子修務訓に「禹沐浴——」

【堙鬱】 氣の愁ひ結ぼるゝをいふ、韓愈の原道に「爲之樂以宣其——」堙一に湮に作る、同じ、

【霪雨ニ沐浴シ扶風ニ櫛ル】 艱苦をしのびて、事に勤勞するをいふ、淮南子に「禹沐浴霪雨、櫛扶風、決江疏河、鑿龍門、闢伊闕、修彭蠡之防、乘四載、隨山栞木、平治水土、定千八百國」注に「扶風ハ疾風、栞ハ音刊、(風ニ櫛リ)を參看せよ、

【氤氳】 氣の盛なる貌、杜甫の句に「佳氣日——」また絪縕に通用す、

【絪縕】 天地の氣の蒸して交り合ふをいふ、易の繫辭傳に「天地——萬物化醇」本義に「——ハ交密ノ狀、醇ハ厚クシテ凝ルヲイフ」

【陰曀】 そら曇りて風ふく、劉基の句に「白日慘——」

【淫液】 聲音の連延して絶えざる貌、禮記の樂記に「咏歎之、——之」

【貧緣】 「ヨリツナガ」ル連絡なり、韓愈の詩に「靑壁無路難——」また人に物など贈り、それにとり入りて地位を得るにも用ふ、

【般浩】 字は淵源、東晉の人、識度清遠弱冠にして盛名あり、時人之を管葛(管仲・諸葛亮)に比す、その出處を伺ひて、興亡を卜す、曰く淵源出でずんば當に蒼生を如何すべきと、後ち揚豫等の州の都督となり、姚襄を伐ちて大に敗らる、桓溫浩が敗に因り、廢して庶人と爲さんと請ふ、朝廷初め浩を以て溫に抗せしむ、浩廢せらるゝに及びて、內外の大權一に溫に歸す、浩愁怨すといへども辭色に形はさず、嘗て空に書して咄々怪事の字を成す、或人溫に勸めて浩を尙書僕射たらしむ、溫書を以て之に告ぐ、浩欣然たり、答書に誤りあらんことを慮り、開閉すること十數度、竟に空函を達す、溫大に怒り、遂に之と絕つ 謫所に卒す、浩は老莊の學に精しく又易理に通ず、

【陰罔】 日かげの「ヲカ」朱熹の句に「竹柏翳——」

【淫巧】 度に過ぎたる巧みなる技藝をいふ、書經に「作奇技——以悅婦人」

【飲河滿腹】 (偃鼠河ニ飲ム)を見よ、

【殷鑑ハ遠カラズ】 鑑み戒むべき滅亡の例は、遠く古代に求めずとも、近く目前に在るの謂なり、詩經大雅に「殷鑑不遠、在夏后之世」

【引咎】 咎は「トガメ」また罪なり「トガメ」を己の身に引き受く、呉志に「權——責躬」

【尹吉甫】 房陵の人、周の宣王の内史なり、王卽位の初め、四夷周に畔き北狄の玁狁來りて京邑に迫る、尹吉甫王命を奉じて之を征し逐うて太原に至る、召穆公・方叔・仲山甫等と、宣王中興の業を佐けて力あり、子尹伯奇あり、

【飲泣】 司馬遷答任少卿書の字面、泣きて聲なきをいふ「スヽリナキ」

【慇懃ヲ通ズ】 慇懃は委曲の貌、また鄭重なる義、司馬遷の書に「僕與李陵未嘗銜杯接慇懃之歡」李白の詩に「惜別空慇懃」と通慇懃は、男女思慕の情を通ずるなり、漢書司馬相如傳に「相如乃使侍人重賜文君侍者通慇懃」文君は卓氏なり、通じて殷勤に作る、同じ、

【隱居】 世を遯れて自ら一身を善くするをいふ、論語に「——放言」

【因果】 因は因緣、果は果報をいふ、即ち原因結果なり、善き因には善き果あり、惡しき因には惡しき果あり、法華經の方便品に「如是因、如是緣、如是果、如是報」華嚴經に「舉果知因譬如蓮花方其吐花而果具蘂中」

【陰皇后】 後漢の光武の皇后（陰麗華ヲ）を見よ、

【隕獲】 困迫して志を失ふ貌、禮記の儒行に「不——於貧賤」

【檃括】 曲木を正す器なり、轉じて過失を正す義に用ふ、荀子に「枸木必將待——蒸矯然後直」枸は讀んで鉤と爲す、曲木なり、また良醫之門多病人、——之側多枉木」

【陰刑】 勢を割く刑、宮刑に同じ、漢書に「除去——害民者誅」

【陰敎】 女子の「ヲシヘ」晉書に「——洽于宮闈」

【引決】 覺悟を定むるをいふ、また自殺をいふ、司馬遷の報任安書に「及罪至網加不能——自裁」また曰く「且夫臧獲婢妾由能——」

【鸚哥】 鳥の名、印度地方に產す「アウム」の屬にして形小さく亦稍〻人語をまなぶ、羽の色赤綠紫黑等ありて最も美なり、種類多し、

【隱語】 謎をいふ、その意を隱し、人をして之を探求せしむる辭なり、史記滑稽傳に「齊威王之時喜隱」とある隱は、即ち隱語なり、また漢書東方朔傳に「有幸倡郭舍人問朔——」また委巷叢談に「古ノ所謂廋詞ハ即チ今ノ——ナリ、俗ニ之ヲ謎トイフ」

【咽喉ノ地】 人體に咽喉ある如く、緊要の地をいふ、戰國策に「韓天下之咽喉、魏天下之胸腹」

【陰山】 長城の外に在り、恒山の正北に當る、漢書に「有——、東西千餘里」

【陰事】 かくれたる事、秘密のこと、史記に「有能探得趙王之——者」また房事をいふ、周禮に「掌王之——陰令」

【淫祀】 邪神を祭るを言ふ、禮記の曲禮に「非其可祭而祭之名曰——、——無福」

【淫祠】 祭るべからざる、みだらなる神の「ヤシロ」唐書狄仁傑傳に「持節江南毀吳楚——千七百所、止留夏禹・吳太伯・季札・伍員四祠」

【淫辭】 放蕩の辭、みだらなる說なり、正しからざることば、孟子公孫丑に「——知其所陷」また「正人心熄邪說距詖行放——」文心雕龍に「——在曲、正譽焉生」

【蔭子】 父祖の功德の蔭によりて官を得たる者をいふ（蔭補）を見よ、

【韻士】 風流人をいふ、風韻ある士の義、

【飲至策勳】 戰より歸りて酒を飲み、勳勞を策に記するをいふ、左傳桓二年に「凡公行、告于宗廟、反行、飲至、舍爵策勳焉禮也」爵は飲酒の器なり、既に飲みて爵を置けば、則ち勳勞を策に書するは、速に有功を紀するなり、

【殷七七】 時節に關せずして花を開かしむる道士の名なり、續仙傳に「唐ノ潤州ノ鶴林寺ニ杜鵑花アリ高サ丈餘、春末毎ニ爛漫タリ、節使賓僚ヨリ一城ノ士庶ニ至ルマデ賞玩セザル者ナシ、或ハ三女子ノ紅裳艶粧共ニ花下ニ遊ブヲ見ル、俗ニ傳フ花神ナリト、周寶浙西ヲ鎭ス、道人——ニ謂ツテ曰ク、鶴林ノ花ハ、天下ノ奇絕ナリ 聞ク君能ク非時ニ花ヲ開カシムト、今重九將ニ近カラントス、君能ク此ノ花ヲ開カシメ、此ノ日ニ副ヘンカト 七七曰ク可ナリト、乃チ前二日鶴林寺中ニ宿ス、中夜女子來リ七七ニ謂ツテ曰ク、妾上玄ノ命ズル所ロト爲リ、下リテ此ノ花ヲ司ドル、今道者ト共ニ之ヲ開カシメント、來日晨起寺僧忽チ花漸ク蘂ヲ拆クヲ訝ル 九日ニ及ビ爛漫タルコト春ノ如シ、乃チ以テ聞ス、寶、一城ノ士庶ト咸之ニ驚キ、遊賞ス

ルコト復タ春閑ノ如シ」

【因襲】 従來のしきたりによる義、襲も亦因なり、劉歆の文に「無所ニ——ニ」

【殷賑】 にぎやか、富み足ること、賑は富なり、張衡の西京賦に「鄉邑——」

【印章】 漢官儀に「吏秩比二千石以上ハ銀印龜鈕、其ノ文ヲ章トイヒ、刻シテ某官之章トイフ、二百石以上ハ、銅印鼻鈕、其ノ文ヲ印トイヒ、刻シテ某官之印トイフ」

【飲章】 後漢書蔡邕傳の字面、註に「飲ハ猶ホ隱ノ如シ、今ノ匿名書ナリ」

【印綬】 綬は組なり、官人の帶ぶる印の環を承けつなぐ「ヒモ」なり、漢官儀に「綬長一尺二寸、十二月ニ法ル、廣三尺、天地人ニ法ル」とあり、史記に「佩其——ニ」

【因循】 舊慣を守りて遷らざるをいふ「グツ〳〵スル」漢書の循吏傳に「霍光秉政、承奢侈師旅之後、海内虛耗、光因循守職、無所改作」同書の百官表に「漢因循而不革」

【陰政】 後宮のまつりごと、内政に同じ、南史に「變理——ニ」

【隕星】 地におつる星、左傳に「隕石于宋五、——也」

【淫媟】 みだりにけがらはし、宋史に「多道市井——謔浪語ニ」

【引接】 佛經の語、彌陀佛の來迎して淨土に引導する義、

【殷湯夏臺ニ囚ハル】 殷の湯王は、夏の桀王を伐ちて之を亡し、代つて殷の國を肇めし人なり、初め桀王、諫者關龍逢を殺すや、湯人をして之を哭せしめたるに、桀怒りて湯を召し、之を夏臺(獄の名)に囚ふ、已にして釋さるゝを得、伊尹の助を得て桀を伐ちて之を南巢に放つ、諸侯湯を尊びて天子と爲せり(殷)を見よ、詳しくは史記を見よ、

【殷紂牧野ニ敗ル】 (殷紂敗牧野)太平記の序に見ゆ、殷の紂王は湯王の後、名は辛、紂は謚なり、謚法に「殘義損善曰紂」とあり、無道の君にて、周の武王に攻められ、牧野の地に戰ひて敗れ、殷は終に亡びぬ、詳しくは史記の殷本紀を見よ、

【陰柔物ヲ害ス】 うはべは、溫順に見せて、心のうちに人を害する小人をいふ、唐書に「李義甫、中書(官名)トナル、容貌溫恭ニシテ人ト語ルニ必ズ微笑ス、而カモ心ハ狡險忌刻ナリ、人、笑裡ニ刀アリト謂フ、又陰柔ニシテ物ヲ害スルヲ以テ之ヲ李猫ト謂フ」と、俗諺に猫を被るといふはこれに本づく、

【飲儲】 酒の「サカナ」類說に「下酒物、謂之——ニ」

【引重】 互に相牽引して尊重する義、漢書灌夫傳に「兩人相爲——」兩人は竇嬰、灌夫、

【隱慝】 慝はかくれたる惡事、左傳に「子是展氏有——焉」

【陰德ハ耳ノ鳴ルガ如シ、我ノミ知リテ人知ラズ、】 益軒の五常訓の仁の下に見ゆ、隋書に「李士謙開府ノ參軍タリ、家富ム、粟數千石ヲ出シテ以テ鄉人ニ貸ス、歲ノ歉ナルニ値フ、各欠戶ヲ召ビ、酒ヲ設ケ、券ヲ燒キテソノ償ヲ索メズ、來春又糧種ヲ出シ、分チテ貧乏ニ給ス、全活スル所ロ甚多シ、或人曰ク、子ノ陰德ハ大ナリト、士謙曰ク、陰德ハ耳鳴ノ如シ、己自ラ之ヲ聞クモ人知ル者ナシ、今、子スデニ之ヲ知ル、何ゾ陰德トナサント」後ち壽百歲に至り、子孫皆顯官となりぬ、事文類聚に「隋ノ李士謙躬節儉ニ處リ、每ニ賑施ヲ以テ務トス、仁心ノ感ズル所ロ、群犬子ヲ生ミテ交ゝ共ニ相乳ス」

【陰德陽報】 陰かに德を修め、人の爲めに善をなせば、天道に合ふに由りて、陽はなる報ありて、慶福を得るをいふ、賈誼新書に「孫叔敖嬰兒タルトキ、出遊シテ還リ、憂ヒテ食セズ、其ノ母其ノ故ヲ問フ、泣イテ對ヘテ曰ク、今日吾兩頭ノ蛇ヲ見ル、恐クハ死ヲ去ル日ナケント、母ノ曰ク、今蛇安クニカ在ルト、曰ク、吾聞ク兩頭ノ蛇ヲ見ル者ハ死スト、吾他人ノ又見ンコヲ恐レ、已ニ之ヲ埋メヌト、母ノ曰ク、憂フルコトナカレ、汝死セジ、吾之ヲ聞ク、陰德アル者ハ天報ユルニ福ヲ以テスト、人之ヲ聞キテ皆其ノ仁タルヲ喻ル、令尹トナルニ及ンデ、未ダ治メズシテ國人之ヲ信ズ」とあり、また淮南子に「有陰德者、必有陽報、有隱行者、必有昭名」說苑に「有陰德者必享其榮、以及其子孫」

【隱トシテ一敵國ノ若シ】 後漢書光武紀に「吳漢任軍、或戰不利、意氣自若、上歎曰、吳公差強人意、隱若一敵國矣」と、隱とは威重の貌、言ふこゝろは其の威重のすぐれたること一の敵國の如きなりと、一解に、隱は殷と通ず、盛なり、一人の威重殷盛なること、一の敵國の動かすべからざるが如しと、

【殷ノ湯夏臺ニ囚ハレ】 (殷湯夏臺)を見よ、

【殷ノ紂王姐己ニ迷フ】 太平記 卷四に見ゆ、紂王は暴虐の君なり、有蘇氏を伐つ、有蘇姐己を以て女す、寵あり、その言皆從ふ、賦稅を厚くし、大に土木を起し酒池肉林長夜の飲をなし、百姓怨望す、後遂に周の武王の爲めに亡ぼさる、

【隱微】 隱は暗處、微は細事なり、かくれて、ちさきこと、

中庸に「莫見乎隱、莫顯乎微」

【陰符】 兵書をいふ、戰國策に「蘇秦乃チ夜、書ヲ發キ、篋ヲ陳ヌル數十、太公ガ——ノ謀ヲ得、伏シテ之ヲ誦ス」とあり、陰符とは陰かに符節を爲して、以て主將の意を通じて、人をして之を知らしめざるなり、六韜に——篇あり、

【陰符經】 一卷、舊本に黃帝撰、太公・范蠡・鬼谷子・張良・諸葛亮・李筌註と題す、その書始めて李筌に出づるを以て黃魯直以下の諸人は筌の僞作となす、筌は唐人なり 少室山人と稱す 筌の言に曰く、——は黃帝の書なり、或は曰く、之を廣成子に授かると、或は曰く之を玄女に受くと、或は曰く、黃帝風后玉女と陰陽六甲を論じ、退いて自らその事を著はすと、陰は暗なり、符は合なり、天機暗に事機に合ふ、故に陰符といふと、また曰く筌嵩山の虎口巖の石室中に於てこの書を得、題して大魏眞君二年七月七日、道士冠謙之、藏之名山、用傳同好、と、その書すでに糜爛せり、筌鈔讀數十遍、竟にその義を曉らず、後ち驪山に於て老母に逢ひ、微旨を傳授し、之が註を作ると、大魏眞君は北魏の太武帝の道號なり、その說たる怪誕にして信ずべからず、胡應麟曰く、蘇秦が讀みし所ろの陰符は即ちこの書なり、書は本僞にあらず、之を黃帝に託するは則ち李筌の僞なり、筌この書を得て之に註し、驪山の老母に託してその說を神にせるなり云々、朱晦庵は之が致異を作りて曰く、河南の邵氏(雍)は以て戰國の時の書と爲し、程氏は以て商末に非ざれば則ち周末なりと爲す、古書に非ずと雖も、然れども道に深き者に非ざれば作ること能はずと、此の書漢志に著錄せず、隋志に太公陰符鈐錄一卷、また周書陰符九卷あり、皆兵家の部に入る、今此の書を觀るに全く道家の言なり、されば右二書とは別本なるべし、

【允文】 允は「マコト」なり、文德のまことに盛なること、詩經魯頌泮水篇に「允文允武、照格烈祖」

【尹文子】 一卷、周の尹文の撰するところなり、漢志の名家に、——一篇とあり、班固以て齊の宣王に說く、公孫龍に先だつと爲す、顏師古曰く、宋鈃と俱に稷下に游ぶと、山陽の仲長氏の序に、齊の宣王の時、稷下に居り、宋鈃・彭蒙・田駢と同じく公孫龍に學ぶと云ふは非なり、漢志に、明かに公孫龍に先だつと爲し、公孫龍子の開卷に、孔穿に諭すに、齊王尹文の問答を以てするときは、尹文は固より龍に學ぶ者に非ざるや彰かなり、莊子天下篇に、尹文田駢を以て並べ稱す、

史遷莊子を以て、齊宣梁惠と時を同くすと爲すときは、文は又周に先んずるも、周に後れず、提要に曰く、呂氏春秋に、尹文が齊の湣王と問答の事を載す、殆ど齊宣稷下の舊人にして、湣王の時に至るまで、猶ほ在りしならんかと、高似孫曰く、尹文の書は、大道(黃老)を言ひ、又名分を言ひ、又仁義禮樂法術權勢を言ふ、大略老子を學びて、申韓を祖ゆる者なり 莊子の言ふ所ろの「爲人太多、自爲太少」との術を以てすれば、又兼愛に近し、蓋し其の學駁なりと、提要にまた曰く、大旨治道を指陳するに自ら虛靜に處りて、萬事萬物一に其の實を綜核せんと欲す、故に其の言黃老申韓の閒に出入すと、この說、其の實を得たりと謂ふべし、この書、文簡勁にして明快、眞の古文辭なり、大抵文格理趣韓非子に類せり、

【蔭補】 父祖の資蔭を以て官に補せらるゝなり、通鑑の註に「蔭庇也、今人謂世資得官者爲蔭官、蓋取木爲喻、言能蔭庇其本根也」梅聖俞が、父の蔭を以て、大廟齋郎に補せられたる如し、歐陽修の梅聖俞詩集序に見ゆ、また唐書に「李德裕吉甫之子也、有司以——校書郎」

【陰木】 冬日、葉のおちざる木、松の類、

【淫奔】 男女媒を待たずして、私通するをいふ、周禮に「仲春之月、令會男女、奔者不禁、謂不必六禮備、非——也」

【院本】 淨瑠璃本をいふ、輟耕錄に「唐ニ傳奇アリ、宋ニ戲曲・唱諢・詞說アリ、金ニ——・雜劇・諸宮調アリ、——・雜劇其ノ實ハ一ナリ、國朝ハ、——・雜劇始メテ之ヲ一ニス」

【因明】 印度に行はるゝ五明學の一、宗因譬の三支作法を以て、邪正を考定する學科なり、翻譯名義集に「大論言五明者(中略)四——、考定正邪、研覈眞僞云々」所謂西洋の論理學に似たる學科なり、

【湮滅】 埋沒消滅するをいふ、謝惠連の祭古冢文に「銘誌——、姓字不傳」また湮は堙に作る、同じ、史記に「名堙滅不稱悲夫」

【陰陽】 貝原篤信の解に「陰陽ハ物トシテ之レアラザルコトナシ、一氣ノ流行ヲ陽トシ、收納ヲ陰トシ、長進ヲ陽トシ、消退ヲ陰トシ、溫熱ヲ陽トシ、凉寒ヲ陰トシ、品物ノ生長ヲ陽トシ、收藏ヲ陰トシ、春夏ヲ陽トシ、秋冬ヲ陰トシ、晝ヲ陽トシ、夜ヲ陰トシ、男ヲ陽トシ、女ヲ陰トシ、明ヲ陽トシ、暗ヲ陰トシ、生ヲ陽トシ、死ヲ陰トシ、剛ヲ陽トシ、柔ヲ陰トシ、仁ヲ陽トシ、義

ヲ陰トス」

【陰陽ヲ變理ス】 變は和なり、天地の道を和調する義にて、三公の職をいふ、書經に「立太師・太傅・太保、茲惟三公、論道經邦、變理陰陽、官不必備、惟其人」

【陰陽家】 天文曆數の理を究め、卜筮相地等の事をつかさどる者をいふ、漢書藝文志に「——者流、蓋出于羲和之官」わが國にも中古、中務省に陰陽寮あり、

【陰陽石】 子史精華に「夷陵有——、陰石常潤、陽石常燥、旱則鞭陰石、必雨、久雨則鞭陽石、則止」

【陰陽炭ト爲シ、萬物銅ト爲ス】 史記賈生傳に「且夫天地爲レ爐兮、造化爲レ工、陰陽爲レ炭兮、萬物爲レ銅」

【隱約】 その義、隱微にして、その言簡約なるをいふ、史記敍傳に「詩書——者、欲遂其志之思也」また——は痛む義、左傳昭二十五年の「隱民多取食焉」の註に「——窮困」とあり、

【霪霖】 「ナガアメ」爾雅釋天に「久雨之謂レ淫、淫謂之霖」左傳隱九年に「凡ソ雨三日ヨリ以往ヲ霖トナス」淫は霪に同じ、

【陰麗華ヲ娶ル】 事文類聚前集卷の二十に、後漢書の本紀を引きて「光武陰皇后南陽人、名麗華、初光武聞レ后美、心悅レ之、後至長安、見執金吾車騎、甚盛、因歎曰、仕官當レ作執金吾、娶妻當レ得陰麗華、即位立爲レ后」と、后恭儉にして仁孝、七歳にして父を喪ふ、已に數十年に至ると雖も、言及べば流涕せざるはなし、永平七年崩ず年六十、光烈と謚す、

【引路】 「ミチアンナイ」北夢瑣言に「有人引路、獲免崎嶇」

【尹和靖】 尹焞字は彦明、河南の人、程伊川に師事し德行を以て稱せらる、靖康元年召されて京師に至る、懇辭して歸る、號を和靖處士と賜ふ、平居嚴整舉止肅敬なり、一僧之を見て曰く、吾れ儒家の所謂周孔は如何なりしかを知らざれども、恐くは亦此の如くならんと、詳くは宋元學案卷の二十七を見よ、

【芋】 本草に「一名ハ土芝」爾雅翼に「芋ノ大ナル者、前漢コレヲ芋魁トイヒ、後漢之ヲ芋渠トイフ」本草に「六種アリ、曰ク、青芋・紫芋・白芋・眞芋・蓮禪芋・野芋」史記の貨殖傳に「蜀ノ卓氏ノ先ハ趙ノ人ナリ、秦趙ヲ破リ卓氏ヲ遷ス、卓氏夫妻輦ヲ推シテ行キ遷處ニ至リ、曰クコノ地狹薄ナリ、吾聞ク汝山ノ下沃野アリ、下ニ蹲鴟(芋の異名、形の似たるにより名つく)アリ、死ニ至ルモ饑エズ、民市ニ工ニシテ易賈スト、乃チ遠遷ヲ求ム、後チ富ミテ僮千人ニ至リ、田池射獵ノ樂、人君ニ擬ス」左太沖の蜀都賦にも蜀の物産を列敍して蹲鴟をも加へたり、

【慰問】 「ナグサメオトヅレル」後漢書に「帝使中黃門——倚門ノ望】 母が、他國に在る子の歸るを待ちわぶる情をいふ、戰國策に「王孫賈ノ母、賈ニ謂ツテ曰ク、汝朝ニ出デテ而シテ晚ニ來レバ、吾則チ門ニ倚リテ而シテ望ム、暮ニ出デテ而シテ還ラザレバ、吾則チ閭ニ倚リテ而シテ望ムト」閭ニ倚リ」を參看せよ、

【潤陽】 舅をいふ、詩經に「我送舅氏、日至——」とあるに本づく、南史の江祏傳に「江夏王寶玄恚劉暄曰、舅殊無——之情」

【苟シクモ金骨ノ相ナクバ、丹臺ノ名ヲ期シ難シ】 金骨の相とは、仙人の骨相をいふ、丹臺とは、神仙の住める宮の名、白氏文集一の諷諭に、夢仙と題して「神仙信有之、俗力非所營、苟無金骨相、不列丹臺名、徒傳辟穀法、虛受燒丹經、只自取勤苦、百年終不成」とあり、丹臺の名とは、列仙傳二に「紫陽眞人周季道、遇淡門子、乞長生訣、淡門子曰、子名在丹臺玉室之中、何憂不仙」とあるをいふ、

【夷愉】 夷は平なり、おだやかによろこぶ義、宋史李侗傳に「侗親ニ事ヘテ孝謹、仲兄性剛ニシテ忤フ「多シ、侗之ニ事ヘテ、其ノ歡心ヲ得タリ、閨門內外——肅穆人聲ナキガ若シ、而シテ衆事自ラ理マル」

【猗與】 歎美の言なり「アア」詩の周頌に「——漆沮」また與は歟に作る、東都賦に「猗歟緝熙、允懷多福」

【倚賴】 たのみとして、もたれよる義、後漢書の袁安傳に「袁安字ハ邵公、嚴重ニシテ威アリ、州里ニ敬セラル、肅宗ノ末、司空ト爲リ、司徒ニ遷ル、和帝ノ時薨ズ、初メ安、天子幼弱ニシテ外戚權ヲ擅ニスルヲ以テ、朝會進見シ、及ビ公卿ト國家ノ事ヲ言フ每ニ、未ダ曾テ噫嗚流涕セズンバアラズ、天子ヨリ大臣ニ及ブマデ、皆之ニ——ース」

【伊洛淵源錄】 十四卷、宋の朱熹撰す、周子以下程子に及ぶまでの交游門弟子の言行を記す、宋の道學の淵源を究めんとするものは必ず一讀すべし、和版あり、

【伊犁事件】 伊犁はもと伊列・伊麗・益離などと書し、また曲城・固爾札などともいふ、新疆識略に「伊犁ノ地、漢及ビ魏ニアリテハ烏孫トナシ、唐ニアリテハ西突厥トナシ、明ニ瓦剌トナス云々」とあり、さて清の同治中長髮賊の亂に方り、回敎徒亂を西域に起し、諸城を下す、敖罕の酋長も亦その機に乘じ、張格爾の子ブ

ズルクに兵を授け「ヤクブベク」を將として喀什噶爾に入らしめたり、ヤクブベク後ち自立して國政を整理し回教徒を破り、遂に新疆の大半を領有す、時に露國も西比利亞より兵を出してキルギス人を制馭し、進んで伊犂の地を占領せり、時に同治九年なり、清廷は左宗棠を陝甘總督となし新疆の回復を圖れり、宗棠連年兵を用ひて天山北路の諸城を復し進んで喀什噶爾を攻めしが、ヤクブベク敵すると能はずして自殺し、天山南路の諸城清兵の回復するところとなれり、清廷遂に伊犂の返還を露國に要求す、露國答へて曰く、若し清國にして境上の安全を保ち、且つ多年露國が伊犂を治めたる費用を償はゞその要求に應ぜんと、是に於て清廷は崇厚を露國に派して露國の委員と會商し、光緒五年に至りて約成る、之をリバジャ假條約十八條となす、中に清國より五百萬ルーブルを償ひ、且つテケス河の上流なる兩岸の地を露國に讓與するの文あり、清廷はこれにつきて物論を生じ、崇厚を以て權限を越えて條約を結べるものとなして獄に下し、遂に露國に向ひて條約の廢棄を要求せり、是に於て兩國互に兵備を修めて境上に臨みしが、清廷は更に曾紀澤(國藩の子)を全權大使となし、露都に至りて再度の談判を開かしめ、互に讓歩してホルゴース河以西の地を以て、テケス河岸の地に代へ、償金九百萬ルーブルを支出する等條約二十條を定めて、互に境上の兵を撤せり、之を伊犂事件となす、時に光緒七年なり、

【委吏】 政府の米倉を掌る役人、孟子に「孔子嘗爲ニ——吏一、會計當而已矣」

【意林】 五卷、唐の馬總編す、初め梁の庾仲容、周秦以來の諸家の雜記一百七家を取り、その要語を摘み名つけて子鈔といふ、總、その繁略中を失するを以て、また增損して以て是の書を成す、原本は殘闕して僅に七十一家を存す、毎家錄する所ろも數條に過ぎず、然れども今人未だ見ざる所ろの者十の七八なり、

【彝倫】 彝は常、倫は理なり、道なり、人の常に秉り守るべき倫理をいふ、書經の洪範に「我不知其——攸」敘」柳文の箕子碑に「序——」

【伊呂】 殷の太甲を輔けし伊尹と、周の武王の師となりし呂尚(太公望)とをいふ、これよりすぐれたる君主の輔佐を——儔といふ、漢書に「董仲舒、有王佐之才、雖——、無以加」

【倚閭】 (閭ニ倚リテ)を見よ、また倚廬と同義、親の喪に在るを、倚閭に居るといふ、禮記に「——ニ居ル、親ノ外ニ在ルヲ哀ミテナリ、苫ニ寢ネ塊ヲ枕ニスルハ親ノ土ニ在ルヲ哀ミテナリ」

【入ルヲ量ツテ出ルヲ爲ス】 禮記王制に「以三十年之通制國用量入以爲出」とあり、歐文の食貨志論にも「量其入而出之」

【海豚】 海獸の名、全身圓く肥えて長さ六七尺、黑くして毛なし、形鯨に似たり、頭の後に二つの孔ありて潮を噴く、皮厚くして脂多く、燈油とすべく、肉も食ふべし、

【威靈】 威稜に同じ、神威なり、吳志是儀傳に「宣揚德美、廣耀——」また晉書王濬傳に「憑賴——、幸而能濟」

【威稜】 漢書の武帝、李廣に報ずる書に「威稜憺乎鄰國」とあり、憺は動なり、神靈の威を稜といふ、稜威とも書く、同じ「ミイヅ」

【色】 女をいふ、佛祖三經に「佛曰、愛欲莫甚於色、色之爲欲、其大無外」と、毛詩の序の疏に「女ニ美色アレバ、男子之ヲ悅ブ、故ニ經文ニ通ジテ女ヲ色トイフ」戰國策、江乙が安陵君に說く語に「以色交者、華落而愛渝、以財交者、財盡而交絕」

【倚廬】 禮記の問喪に「成壙而躇、不敢入處、室居於——」倚は偏なり、側なり、喪ある者室を避けて側廬に居るなり、廬は粗屋なり「イホリ」

【色ヲ以テ聽ク】 藩翰譜の板倉重宗の條に見ゆ、大賚令の獄令に「凡察獄之官先備五聽」とあり、五聽とは辭聽・色聽・氣聽・耳聽・目聽をいふ、色聽は、其の顏色を觀るに直からざれば、赧然たりとあり、詳しくは令義解を見よ、

【色死灰ノ如シ】 死灰は火氣なき冷灰なり、以て生きたる色なきに喩ふ、莊子に「目茫然無見、色若死灰」

【異路同歸】 (路ヲ異ニシテ)を見よ、

【色厲ニシテ內荏ナリ】 論語の陽貨篇に「子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與」の註に「厲ハ威嚴ナリ、荏ハ柔弱ナリ、小人ハ細民ナリ、穿ハ壁ヲ穿ツ、踰ハ墻ヲ踰ユ、言フコヽロハ、其ノ實無クシテ名ヲ盜ミ、而シテ常ニ人ノ知ランコトヲ畏ルヽナリ」

【醫王】 藥師を斥す、また釋迦を稱して三界大醫王ともいふ、

【威王】 周の齊の君、嬀姓田氏、名は因齊、桓公の子なり王立つてより九年、政を卿大夫に委す、諸侯皆來り伐ち、國勢幾んど振はず、王卽ち卽墨の大夫を召して

之に語げて曰く、子の卽墨に居りしより、毀言日日に至る、然れども吾れ人をして卽墨を視察せしめしに、田野闢け、人民給し、官に事なく、東方寧し、是れ子が吾が左右に事へて以て助を求めざればなりと、之を萬家に封ず、阿の大夫を召して之に語げて曰く、子の阿を守りてより、譽言日日に至る、吾れ人をして阿を視察せしめしに、田野闢けず、人民貧餒す、趙、鄄を攻むれども子救はず、衞、薛陵を取れども子知らず、是れ子が幣を厚くして吾が左右に事へ、以て譽を求むればなりと、この日、阿の大夫と嘗て譽むる者とを幷せて之を煮る、群臣聳懼し、敢て飾詐するものなく、齊國大いに治り、諸侯敢て復兵を加へず、立つて三十六年にして卒す（齊魏賓ヲ）を參看せよ、

【頤和園】 清國皇室の遊苑なり、北京の西數里に萬壽山あり、元史に甕山といひ、山麓の湖を甕山湖と稱せしが清の乾隆十五年玉泉の水を疏して西湖に匯し、名を昆明池と改め、山を萬壽山と名つけ湖畔に清漪園を設く、今の西太后に至り、臺閣宮殿を改築し、名を——と賜ふ、西山の一勝槩なり、

格言七則

賞レ一以勸レ百、罰レ一以懲レ衆　（文中子）

一賞不レ可ニ以不レ信也、一罰不レ可ニ以不レ明也　（劉蕺新論）

一農不レ耕、民有ニ爲レ之飢者一、一女不レ織、民有ニ爲レ之寒者一　（管子）

一馬之奔、無ニ一毛而不レ動、一舟之覆、無ニ一物而不レ沈　（孔叢子）

一點失レ所、若ニ美人之痕一ニ目一、一畫失レ節如ニ壯士之折ニ肱一　（王右軍筆勢論）

一箇陰陽五行之氣、流ニ在天地中一、精英者爲レ人、淩滓者爲レ物、精英之中又精英者、爲レ聖、爲レ賢、精英中渣滓者、爲レ愚、爲ニ不肖一　（朱子語類）

去ニ一分奢侈一、便少ニ一分罪過一、省ニ一分經營一、便多ニ一分道義一　（從政遺規）

ウ

【禹】 姓は姒、名は文命顓頊の孫にして父を鯀といふ、帝堯の時、洪水天に滔る、堯能く水を治むる者を求む、群臣皆鯀を薦む、堯鯀を用ひて水を治めしむ、九年にして功用成らず、舜政を攝行するに及びて、鯀が水を治むる無狀を視て之を殛し、鯀の子禹を擧げて鯀の業を續がしむ、禹人と爲り敏給克く勤む、その仁親しむべく、その言信ずべし、聲は律となり、身は度となる、父が功成らずして誅を受けたるを傷み、身を勞し思を焦し、外に居ること十三年、家門を過ぐれども敢て入らず、衣食を薄くして孝を鬼神に致し、宮室を卑くして費を溝洫に致し、陸行には車に乘り、水行には船に乘り、泥行には橇に乘り山行には樏に乘り以て九州を開き九道を通じ、九澤を陂し、九山を度る、舜禹に玄圭を錫ひ以て成功を天下に告ぐ天下是に於て太だ平治す、舜の子商均不肖なり、舜乃ち禹を天に薦む、舜崩じて禹位に卽き、國を夏と號し、安邑（山西省解州夏縣）に都す、東巡して會稽に至りて崩ず、子啓賢なり、父に繼ぎて位に卽く、

【盂】 說文に「飯器也」とあり「ワン」「ハチ」の類、飲料をも入る、史記滑稽傳に「酒一——」揚子方言に「宋楚魏ノ閒ニテ盌ヲ——トイフ」

【竽】 樂器の名、笙の類、竹を用ひて作る、古の竽は三十六簧なりしが、近代は十九簧となる、形參差として鳥翼に象る、周禮春官に「笙師掌ル教ヘ吹ク——竽ヲ好ム」を參看せよ、

【鵡鷸】 「シマッドリ」北史に「倭人小環ヲ以テ——ノ項ニ掛ケ、水ニ入リ、魚ヲ捕ヘシメ、日ニ百餘頭ヲ得テ以テ食ニ充ツ」夔州圖經にも「——捕魚」

【羽衣】 「ハゴロモ」後漢書の李章傳の註に「——ハ鳥羽ヲ緝メテ以テ衣ト爲スナリ」

【烏有】 烏んぞ此の事有らんといふ義にて、無の字の意に用ふ——に歸すとは物が無くなりしをいふ、漢の司馬相如傳に「司馬相如字長卿、少時好讀書景帝時遊梁、乃著子虛賦、相如以子虛虛言也、爲楚稱、烏有先生者、烏有此事也、爲齊難、亡是公者、亡是人也、欲明天子之義、故虛藉此三人爲辭以推天子諸侯之苑囿、其卒章歸之於節儉、因以風諫」

【禹域】 漢土の異稱（禹跡）を見よ、

【有爲轉變】 佛教の語、有爲無常の萬法は、遷轉異變して暫くも住せずとの義、

【于于】 行く貌、韓愈の上宰相書に「——焉而來矣」また自得する貌、莊子應帝王に「其臥徐々、其覺——」

【鳥雲ノ陣】 鳥散じて、雲合する如く、聚散常無く、變化窮まり無き陣法をいふ、六韜の豹韜、鳥雲山兵篇に見ゆ、

【于役】 ゆきて役せらるゝなり、詩經に「君子——、不知其期」

【飢ヱタル者ハ食ヲ爲シ易シ】 孟子に「飢者易爲食、渴者易爲飲」の註に「飲食ヲ爲シ易シトハ、言フコヽロハ、飢渴ノ甚シキ、甘美ヲ待タザルナリ」俗諺「ヒモジイ時ノマヅイ物ナシ」に同じ、

【烏鳶ノ卵毀ラズシテ後ニ鳳凰集ル】 仁政のあまり、烏鳶の卵に至るまでみだりにやぶるとなきときは、鳳凰もその御世を慕ひて集り來るとなり、說苑に「烏鳶之卵不毀而後鳳凰集、誹謗之罪不誅而後良言進」

【魚】 格物論に「魚ハ鱗物ノ總名」史記の周本紀に「白魚躍入王舟中」の註に「馬融曰ク、魚者介鱗ノ物、兵ノ象ナリ」と、董仲舒の文に「臨淵羨魚不如退而結網」と、莊子に「與惠子遊于濠梁之上」莊子曰、儵魚出遊從容、是魚樂也、惠子曰、子非魚安知魚之樂也、莊子曰、子非我安知我不知魚之樂」淮南子に「欲致魚者、先通水、水積而魚聚」

【魚ヲ爭フ者ハ濡ル】 利を得んと爭ふ者は、苦を避けざるに喩へ、列子說符に「爭魚者濡、爭獸者趨、非樂之也」この語、說苑にも見ゆ、

【魚ヲ受クレバ祿ヲ失フ】 人の淸廉なるをいふ、事文類集別集性行部に「或人鄭國ノ宰相ニ魚ヲ餽リシニ、宰相辭シテ受ケズ、或人訝リ問ウテ曰ク、公、大ニ魚ヲ嗜マル、ニヨリ此ヲ餽ル、然ルニ魚ヲ受ケザルハ如何ト、答ヘテイフ、我ハ大ニ魚ヲ嗜ムガ故ニ受ケザルナリ、魚ヲ受クレバ祿ヲ失フ、以テ魚ヲ食フコト能ハズ受クルコトナクシテ祿ヲ得バ、終身大ニ魚ヲ食フコトヲ得ント」これ賄賂を受けて祿を失はんことを恐れてなり、

【魚ヲ得テ筌ヲ忘ル】 本を得れば、末をば忘るゝも可なりとの義（筌蹄）を見よ、

【宇ヲ同ジクシテ體ヲ異ニス】 萬物生を宇內に受くるは同じきも、其の形體は、異なりとの義、荀子に「萬物同宇而異體」

【魚ヲ烹ルニ煩シケレバ碎ク】 韓詩外傳に「烹魚煩則碎、治民煩則散」とあり、魚を烹るに、やたらにかきまぜれば、魚は碎ける如く、民を治むるに法度きびしく煩しければ、民は離散すとなり、

【魚ヲ以テ蠅ヲ驅ル】 驅逐の術を誤れるに喩ふ（肉ヲ以テ）を見よ

【竽ヲ好ムニ瑟ヲ鼓ス】 （好竽鼓瑟）竽は笛の類なり、書言故事に好む所ろに投ぜざるをいふと、韓文公答陳商書に「齊王竽ヲ好ム、仕ヲ齊ニ求ムル者アリ、瑟ヲ操リテ往ク、王ノ門ニ立ツ、三年入ルヲ得ズ、客曰ク、王竽ヲ好ム、而ルニ子ハ瑟ヲ鼓ク、瑟ハ工ト雖モ、王ノ好マザルヲ如何セン」とあり、

【魚戲レテ新荷動ク】 謝玄暉が遊東田詩中の句なり、文選卷の二十二に出づ「戚々苦レ無、悰、携手共行樂、尋レ雲陟累樹、隨レ山望菌閣、遠樹曖仟々、生煙紛漠々、魚戲新荷動、鳥散餘花落、不對芳春酒、還望青山郭」とあり

【魚ノ懸ルハ甘餌ニ由ル】 人は利のために死するに喩ふ、晉書の段灼傳に「臣聞魚懸由於甘餌、勇夫死於重報」

【魚ノ釜中ニ遊ブガ若シ】 （若魚遊釜中）生存すと雖も、久しからざるに喩ふ、綱鑑の漢順帝紀に「廣陵ノ賊張嬰曰ク、相聚リテ生ヲ偸ムモ、釜中ノ魚ノ遊ブガ若シ、其ノ久シカル可カラザルヲ知ルト」

【魚ハ江湖ニ相忘ル】 莊子の大宗師に「孔子曰、魚相忘於江湖、人相忘於道術」註に「各自ラ足リテ相忘ルヽ者、天下然ラザルハナシ、至人ハ常ニ足ル、故ニ常ニ忘ルヽナリ」

【烏喙】 烏の如き「クチバシ」烏は貪り汚らはしき鳥なり、故に人の貪婪なる相とす、尸子に「禹ハ長頸ニシテ面貌モ亦惡シ、天下從ヒテ之ヲ賢トスル者ハ、學ヲ好メバナリ」と、また烏頭といふ毒草の別名、戰國策に「饑人不食——、爲其充腹與饑死同患也」

【禹行舜趨】 舜や禹の如き、古聖人の威儀のみを修めて、其の實なきをいふ、荀子に「——而——、是子張氏之賤儒也」趨は疾行なり、

【烏號ノ弓】 前漢書の郊祀志に「黃帝、鼎成ル、龍アリ髯ヲ垂レテ下リ迎フ、黃帝上リ騎シテ弓ヲ墜ス、百姓乃チ其ノ弓ヲ抱イテ號ブ、因ツテ之ヲ名ツケテ烏號トイフ」また事類全書に「烏號ノ弓ハ、柘樹枝長ジ、而シテ烏集リテ將ニ飛バントス、枝烏ヲ彈ズ、烏乃チ號呼ス、柘ヲ以テ弓ト爲ス、因ツテ烏號ト名ヅク」

【羽客】 空中を飛行する仙人なり また羽人ともいふ、人道術を得たれば、身に羽を生ずといふ、山海經に「有

羽人之國、不死之民」また楚辭ニ「仰ニ——于丹丘ニ」

【宇下ニ在リ】 宇は簷下なり、在宇下は屋宇の下に在りとの義にて、近く逼るをいふ、左傳に「衛在君之宇下ニ」

【烏合ノ衆】 寄合勢にて、統一する所ろなきをいふ、文選の于寶の晉紀總論に「彼ノ劉淵ハ、離石ノ將兵ノ都尉ナリ、王彌ハ青州ノ散吏ナリ、蓋シ皆弓馬ノ士、驅走ノ人、凡庸ノ才ナリ、吳ノ先主諸葛孔明ノ能アルニアラザルナリ、新起ノ寇、烏合ノ衆ニシテ、吳蜀ノ敵ニアラザルナリ」また後漢書耿弇傳に「突騎ヲ發シテ烏合ノ衆ヲ蹴ジルハ、枯ヲ摧キ腐ヲ折クガ如キノミ」

【于歸】 女子の嫁するをいふ、詩經の周南の桃夭の篇に「桃之夭々灼々其華、之子于歸、宜其室家」とあるに本づく、之子は嫁する女子をいふ、歸は嫁する義なり一門の內、夫婦和合して皆宜しきを得んとなり 室家は夫婦をいふ、何玄子曰く「男ハ女ヲ以テ室トナシ、女ハ男ヲ以テ家トナス、左傳ニイフ女ニ家アリ、男ニ室アリ 孟子ニイフ丈夫生レテ之ガ爲メニ室アランコヲ願フ、女子生レテ之ガ爲メニ家アランコヲ願フト是ナリ」于は一解に往なりと、亦通ず、

【羽儀】 易の漸卦に「鴻漸于陸、其羽可用爲儀、吉」とあり、羽は鴻の用ひて進む所ろ 而して進むに漸あり故に其の羽は用ひて儀法と爲すべしとの義、また儀表となる義、韓愈の燕喜亭記に「智以謀之、仁以居之、吾知其去是而——於天朝也不遠矣」また天子の車前に、羽を負ひて侍衛するをも稱す、

【烏玉玦】 墨の異名、蘇軾の孫幸老寄墨詩に「近者唐夫子、遠致——」

【于喁】 籠かさなどの前者と後者とが互にかけ聲をするをいふ、莊子の齊物篇に「前者唱于而隨者唱喁」韻會に「喁は聲相和するなり」喁は禺に同じ、

【鶯】 支那の鶯はわが國の「ウグヒス」とは別種なれども、しばらくその典故の一斑を擧くれば、說文に「黃鸝ハ倉庚ナリ、鳴クトキハ即チ蠶生ズ 毛詩の疏に「黃鳥ハ黃鸝鸝ナリ、或ハ黃栗留トイフ、幽州ノ人之ヲ黃鶯ト謂フ、一名ハ倉庚、一名ハ商庚、一名ハ鵹黃、一名ハ楚雀、齊人之ヲ搏黍トイフ、椹ノ熟スル時ニ當リテ來リテ桑樹ニ在リ、皆節ニ應ジ時ニ趣クノ鳥ナリ、或ハ之ヲ黃袍トイフ」開元遺事に「明皇禁苑ノ中ニ於テ、黃鶯ヲ見テ呼ンデ金衣公子ト爲ス」詩經に「伐木丁々、鳥鳴嚶々、出自幽谷、遷于喬木」高隱外書に「戴顒春日雙柑斗酒ヲ携フ、人何クニ之クゾト問フ、曰ク往イテ黃鸝ノ聲ヲ听ク、コレ俗耳砭鍼、詩腸鼓吹」と(黃鸝)を參看せよ、

聞鶯　虞集

曉寒顧影惜金衣、著意聽時不敢啼、飛入柳陰深處去、數聲只許落花知、

【羽化】 化して仙と爲り、空中を飛行するをいふ、晉書許邁傳に「自後莫測所終、好道者皆謂——矣」赤壁賦に「——而登仙」

【烏獲ノ力】 古の大力ありし人なり 史記の秦本紀に「武王力アリテ戲ヲ好ム、力士任鄙、烏獲、孟說皆大官ニ至ル」

【迂闊】 迂遠に同じ「マハリドホシ」史記孟軻傳に「以爲迂遠而闊於事情」また漢書王吉傳に「以其言——不甚寵異」

【羽檄】 文體明辨に「按ズルニ、釋文ニ 檄ハ軍書ナリ、說文ニ 木簡(きふだ)ヲ以テ書ヲ爲リ 長サ尺二寸、用ヒテ以テ號召ス、若シ急アレバ、即チ雞羽ヲ插ミテ之ヲ遣ル、故ニ之ヲ——トイフ、言フコヽロハ、飛ブガ如ク疾キナリ」史記の陳豨傳に「吾以——徵天下兵」漢書の淮南王安の傳の註ニ「——ハ兵ヲ徵スノ書ナリ」

【宇縣】 宇は宇宙をいひ、縣は赤縣をいふ、漢土の異稱、史記秦紀に「大矣哉——之中 承順聖意」

【禹貢】 書經の篇名、夏書の首に在り、禹が洪水を治めて九州を開きたる顚末を記し、並にその山川 地質物產等の事に及ぶ(禹貢錐指)を參看せよ、

【烏公】 (烏重胤)を見よ、

【烏江】 今の安徽省和州の東北に在り、項羽が漢王に敗られて自刎せしところ、また黑龍江の別名にも用ふ、

【禹貢錐指】 二十卷、圖一卷、清の胡渭撰ぶ、禹貢の地理を說き、討論詳明、古を援き今を驗し、瞭然として指掌の如し、

【于公門ヲ高クス】 (于公高門)前漢書列傳卷の四十、于定國傳に「于定國字ハ曼倩、東海郯ノ人、其ノ父于公、縣ノ獄吏、郡ノ決曹トナリ、獄ヲ決スルニ平カナリ、文法ニ罹ル者、于公ノ決セシ所ロハ、皆恨ミズ、郡中之ガ爲メニ生ナガラニ祠ヲ立ツ 始メソノ閭門壞ル 父老方ニ共ニ之ヲ治メントス 于公謂ツテ曰ク 少シク門閭ヲ高大ニシ、駟馬高蓋ノ車ヲ容レシメヨ、我、獄ヲ治メテ隱德多シ 未ダ嘗テ寃スル所ロアラズ 子孫必ズ興ル者アラント 定國ニ至リ 宣帝ノ時、丞相ト爲リ 西平侯ニ封ゼラル、子ノ永ハ御史大夫トナル 文法とは

法律をいふ、

【于思】 多鬚の貌、左傳宣二年に「——————棄甲復來」一說に、白頭の貌と、また思の音シ

【兎】 格物論に「兎ハ鼠ノ形、尾匾彎ニシテ短ク、毛色褐、耳鋭ク、目卓ク 口缺ク、長鬚ニシテ、尻ニ九孔アリ、趺居ス、趫捷ニシテ善ク走ル、前足寸餘、後足數尺、行クトキハ則チ後足ニテ一躍數尺ス、或ハ謂フ、兎ニ雄無シ、月ヲ望ミ而シテ孕ム」と、韓愈の毛穎傳に「缺口ニシテ鬚長ク、八竅ニシテ趺居セリ、獨リソノ毛ヲ取リテ簡牘是レ資ク」典畧に「兎者明月之精」と、博物志に「兎望月而孕、口中吐子故謂之兎、兎吐也」また論衡に「兎舐毫而孕、及其生子、從口而出」(狡兎三窟)を見よ、

【牛】 格物論に「牛ハ大牲ナリ 數種アリ(中畧)黑キヲ犂トイヒ、純色ヲ犧牲トイフ(中畧)水牛ハ青色ナリ、子ヲ犢トイフ」書經の武成に「歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服」(黑牡丹)を見よ、

【雨師】 雨の神なり、周禮の風師雨師を祀るの注に「風師ハ箕ナリ、——ハ、畢ナリ」箕畢は星の名、淮南子に「令——灑道、使風伯掃塵」

【雨施】 雨の普く降る義、易の乾卦に「雲行雨施」

【牛ヲ食フノ氣】 幼にしてすぐれたる志氣あるをいふ、尸子に「虎豹之子、雖未成文、已有食牛之氣」また杜甫の詩に「小兒五歲氣呑牛、滿堂貴客皆回頭」

【烏瑟】 梵語——臘の畧、肉髻と譯す 佛の頂上に肉あり高く起りて髻の形をなすをいふ、三十二相の一なり、

【牛ニ汗シ棟ニ充ツ】 (汗牛充棟)を見よ、

【牛ニ對シテ琴ヲ彈ズ】 「愚人に向つて道理を說くも、了解すること能はざるに喩ふ、祖庭事苑に「魯ノ賢士公明儀、對牛彈琴、清角ノ操ヲ弄ス、牛食フコト故ノ如シ、牛ノ聞カザルニアラズ、耳ニ合ハザルナリ、轉ジテ蚊虻ノ聲、乳犢ノ鳴ヲ爲ス、乃チ尾ヲ掉カシ蹶蹄シテ、耳ヲ奮ヒテ而シテ聽ク、意ニ合フガ故ナリ」

【牛ノ痾ヲ搏ツモ、以テ蟣蝨ヲ破ル可カラズ】 (搏牛之痾不可以破蟣蝨)痾は「アブ」大にして外に在り、蟣蝨は「シラミ」小にして内に在り、故に手にて牛を擊てば、其の外に在りて大なる「アブ」を殺すべきも、其の内に在りて小なる「シラミ」を殺すと能はずとの意にて、外に在る敵に勝つも、内に在る敵をば破ること能はざるに喩ふ、史記項羽本紀に見ゆる語、

【烏集ノ交】 詐多くして、實なき交をいふ、管子に「——之——雖美不親」

【紆軫】 紆は屈曲、軫は隱痛、痛みて心の舒びざる義、紆鬱に同じ、楚辭九章に「心鬱結而——」

【羽觴】 酒杯なり、雀の形に依り、頸尾羽翼あり、班倢伃の賦に「酌——分銷憂」また陸子衡の詩に「——不可算」の註に「鳥羽ヲ觴ニ致シ、以テ急ニ飲ミ取ルナリ」李太白の春夜宴桃李園序に「飛——而醉月」

【羽觴波ニ隨フ】 (流觴曲水)を見よ、

【于襄陽】 (于頔)を見よ、

【烏鵲橋】 淮南子に「烏鵲捐河成橋度織女」烏鵲は「カサヽギ」「かさゝぎの渡せる橋」とはこれをいふ、

【烏鵲識ル】 淮南子に「烏鵲歲ノ多風ヲ識リ、喬木ヲ去リテ扶枝ニ巢クフ」扶は傍なり

【烏鵲南ストヤ詠ゼシ君】 魏の曹操を斥す、魏志に「太祖武皇帝、姓ハ曹、諱ハ操、字ハ孟德」即ち魏武帝の短歌行に「月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、無枝可依」とある詩をいふ、

【迂儒】 世の中の事情に通ぜざる學者、戴復古の句に「人道是——」

【羽書】 檄文に烏の羽をつけたるものにて、最も急を要するに用ふ、羽檄に同じ、杜甫の詩に「征西車馬——遲」

【烏絲欄】 黑き罫紙にて女子の艶書など書くに用ふ、李肇の國史補に「宋亳ノ閒、紙ニ界道ヲ織成スルアリ、之ヲ——トイフ」黃庭堅の句に「正圍紅袖寫烏絲」

【薄キ氷ヲ踏ムヨリモ危ク】 (薄氷)を見よ、

【禹跡】 漢土の異稱、禹域に同じ、昔、禹洪水を治め、九州の疆界を正せり、故にいふ、左傳に「茫々——、畫爲九州」

【迂叟】 世事にうときおやぢ、石林燕語に「司馬溫公少キヨリ——ト稱シ、迂書四十一篇ヲ著ハス」

【烏賊魚】 「イカ」身は小囊の如く、下に短き八足あつまり著き、別に二條の鬚の如きものありて長さ尺に過ぐ、皮は灰色にして斑あり、肉白し、體中に墨の如き汁を含み、また一枚の白くして形舟に似たる脆き骨あり、南越志に「——常ニ自ラ水上ニ浮ブ、烏見テ以爲ラク死セリト、便チ往キテ之ヲ啄メバ、乃チ卷キテ烏ヲ取ル故ニ名ツク」

【宇内】 尸子に「天地四方ヲ宇トイフ」史記の秦本紀に「包擧——」また「皇帝明德、經理——」過秦論に「振長策而馭——」

【有待】 他よりすることを待ち得て以て己の身を資するを謂ふ、故に施與を待ち供養を得て以て所須を行

じ得るをいふ「法華經科註に「初心——若得供養」所修事成」

【禹湯己ヲ罪シ、ソノ興ルヤ悖焉タリ】 左傳莊公十一年に「秋、宋ニ大水アリ、莊公弔セシメテ曰ク、天淫雨ヲ作シ粢盛ヲ害ス、若何ゾ弔セザランヤト 宋對ヘテ曰ク 孤實ニ不敬ニシテ天之ニ災ヲ降セリ、又以テ君ノ憂ヲナセリ、命ノ辱キヲ拜スト、臧文仲曰ク、宋ハ其レ興ランカ、禹湯罪己其興也悖焉、桀紂罪人其亡也忽焉云々」夏の禹王は出でて罪人を見れば、車を下りて泣き、殷の湯王は爾萬方有罪、在予一人といへり、これ己を罪するなり、悖は盛なる貌、一に勃に作る、臧文仲は魯の大夫、

【疑フラクハ是レ銀河ノ九天ヨリ落ツルカト】 天の川の天空より落ち來るかとうたがふ意なり(廬山ノ瀑)を見よ、

【宇宙】 天地をいふ、淮南子齊俗訓に「往古來今、謂之宙、四方上下謂之宇」尸子にも見ゆ、而るに學山錄には、此の解を的切ならずとして曰く「文選ノ靈光殿賦ノ註ニ天所覆爲宇、中所由爲宙、又答賓戲ノ註ニ、宇宙天地也トアルハ、頗勝ト爲スニ似タリ」

【雨中春樹萬人家】 (雲裏ノ)を見よ、

【内ニ省ミテ疚カラズ】 我が心に省みて、愧ぢおそるゝ所ろなきの意、論語に「内省不疚、夫何憂何懼」

【圩頂】 圩は岸なり、中のくぼみて低きなり、——は頂上のくぼむをいふ、史記孔子世家に「生而首上——」

【烏重胤】 唐の人、字は保君、承玭の子、元和五年四月軍功によりて河陽軍節度使御史大夫となり孟州を治し、處士石洪、溫造二人を任用す、韓愈送序を作りて之を送る、

【鬱伊】 心結ぼれて舒びざる貌、後漢書崔寔傳に「智士——於下」伊は噫と通ず、

【鬱悒】 心結ぼれて憂ある貌、司馬遷の報任少卿書に「是以獨——而誰與語」悒は心安からずして憂ふる義、邑に通じ用ふ、楚辭に「心鬱邑余侘傺兮」

【鬱鬱】 志を得ずして、氣のふさがる貌、史記淮陰侯傳に「吾亦欲東耳、安能——久居此乎」また漢書灌夫傳に「——不得志」また氣の盛んに積む貌、後漢書光武紀に「氣佳哉——葱々然」また樹木の盛んに茂る貌にも用ふ、鬱は俗字、

【鬱陶】 ものおもひ深くして、氣の伸びざるをいふ、書經の五子之歌に「——乎予心」註に「——ハ哀思也」また楚辭に「豈不——而思君兮」註に「——トハ、憤念蓄積

シテ胸臆ニ盈ツルナリ」また孟子離婁篇に「——思君爾」

【鬱鬯酒】 鬱も鬯も一種の香草なり、その汁を秬(黑き黍)に和して釀したる酒を——といふ、宗廟に奉り神を降すもの、單に鬯酒ともいふ、

【蔚藍ノ天】 濃き「アヰ」色の天をいふ、杜甫の詩に「上有蔚藍天」蔚は讀んで鬱と作す、韓駒の詩にも「水色天光共蔚藍」

【鬱林石】 唐書に「陸龜蒙世〻姑蘇ニ居ル、ソノ門ニ巨石アリ遠祖績、三國ノ時、吳ニ仕ヘテ鬱林太守トナリ、罷メ歸ルニ裝スルモノナク、船輕クシテ海ヲ越ユベカラズ、石ヲ取リ以テソノ船ヲ重クス、人ソノ廉ヲ稱シテ——ト號ス、世〻ソノ居ニ保ス云々」林鶴梁の文に「不敢比鬱林太守之清介」とあるは、この故事に本づく、

【尉繚子】 五卷、周の尉繚撰す、漢書藝文志兵家の部に、尉繚三十一篇あり、今の本は二十四篇なり、漢志に載するところと同書なるか、否かを知らず、篇中論ずるところ、多くは正に近く、戰國の權謀譎詐の術と頗る殊なり、故に張横渠も亦嘗て之に註せりといふ、全篇を通覽するに古兵家の要語格言を湊合して一篇の文字となすもの多きに居る、故に陡然として起り、詘然として止まるものあり、頭なく亦尾なきが如き者あり、然れども、上半を以て兵理心術を說き、下半を以て節制部伍を說き、然る後、古の善く兵を用ふる者は士卒の半を殺すとの一語を擧げて全篇を收結す、文脈貫通、起伏呼應せり、胡應麟曰く、——は孫武以下與に匹する者なし、戰國人の著作なること疑なしと、——は史記に傳なし、或はいふ魏人鬼谷子の弟子、夷山に隱る、魏の惠王の聘するところとなり、爲めに兵法二十四篇を陳ぶと、歸有光は魏人司馬錯となせども、何に據れるかを知らず、

【于定國】 字は曼倩、漢の東海郯の人、于公の子、于公獄を治むる陰德あり、閭門を高大にして駟馬の車を容るべからしむ、曰く吾が後世必ず興る者あらんと、定國宣帝の地節元年を以て廷尉となる、朝廷之を稱して曰く、張釋之廷尉となり天下寃民なし(決獄皆當を得るをいふ)于定國廷尉となり、民自ら以て寃とせずと(その寃平を知りて皆寃枉の慮なきをいふ)後ち御史大夫より黃霸に代りて丞相となる(于公門ヲ)を參看せよ、

【于頔】 舊唐書に「——字ハ允元、河南ノ人、貞元十四年

襄州ノ刺史トナリ、山南東道節度觀察使トナル、奏請從ハレザルナシ、是ニ於テ公然聚歛シ、意ヲ恣マヽニシテ虐殺シ、專ラ上ヲ凌ギ下ヲ威スヲ以テ務ト爲ス」韓文に與ニ于襄陽書あり、

【烏兎】 日月の異名、張衡靈憲の序に「日ハ太陽ノ精、積ミテ烏ノ象ヲ成ス、烏ハ陽ノ類、其ノ數奇ナリ、月ハ陰精ノ宗、積ミテ獸ノ象ヲ成ス、兎ハ陰ノ類、其ノ數耦ナリ」淮南子に「日中有ニ踆烏一」註に「踆ノ字ハ、獨リ蹲止シテ行カザルナリ、三足ノ烏ヲイフナリ」月中の兎の事は、離騷の天問に見ゆ(金烏(玉兎)を參看せよ

【烏頭白ク、馬、角ヲ生ズ】 (烏ノ頭白ク)を見よ、

【優曇華】 「ウドン」は梵語優曇鉢羅の畧にて瑞應の義なり、ーーーは天竺にありといふ樹の名、常に實ありて花無く、三千年にして始めて花ありといふ、若しこの樹に花あるときは、佛、世に出づといひ、また金輪王世に出づれば、此の花生ずともいひて世に稀なる事の譬とす、

【雲丼】 介の名、海底の石の閒に在り、殼は扁く圓く、して紫黑なり、外に黑き刺多く栗の毬の如し、故に海栗とも書く、一に海膽とも書く、腸を采りて「シホカラ」に製す、色は赤褐にして味美なり、

【禹ノ水ヲ治ムルハ水ノ道ナリ】 夏の禹王が洪水を治めたるは、水の高きより低きに流るゝ性に從ひて善く之を利導して治めたりとの意、禹の治水の事は、書經の禹貢に詳かなり、孟子に「白圭曰、丹之治水也、愈ル禹、孟子曰、子過矣、禹之治水、水之道也」

【優婆夷】 有髮のまゝにて佛道を修行するの女をいふ(優婆塞)を見よ、

【烏帽】 黑色の帽子、李商隱の句に「ーー逸人尋」

【優婆塞優婆夷】 俗體のまゝ佛の弟子となり、五戒を受けたる男子を優婆塞、また善男子といひ、同じく女子を優婆夷、また善女子といふ、名義集に「淨名疏云、此云ニ清淨士、清淨女、亦云ニ善宿男、善宿女、雖ニ有ニ居家、持ニ五戒一」

【有髮僧】 かみをたてたる僧をいふ、客越志に「寺屋盡傾、惟一ーーー在」

【烏飛兎走】 烏兎は日月なり、日月の速かに過ぐるをいふ、韓琮の詩に「金烏長飛、玉兎走、青髩長青古無有」(烏兎)を見よ、

【嫗伏孕鬻】 嫗伏は氣を以て卵を孵化するなり、孕は懷胎なり、鬻は生育なり、鳥獸の生育せるをいふ、禮記に「羽者ーー、毛者ーー」

【馬】 周禮に「凡ソ一八尺以上ヲ龍トナシ、七尺以上ヲ駣トナシ、六尺ヲ馬トナス」相馬經に「凡ソ馬ヲ相スルノ法、先ヅ三羸五駑ヲ除キテ、乃チソノ餘ヲ相ス、大頭小頸一羸ナリ、弱脊大腹二羸ナリ、小頸大蹄三羸ナリ、ソノ五駑ハ、大頭緩耳一駑ナリ、長頸不折二駑ナリ、短上長下三駑ナリ、大胳短脇四駑ナリ、淺髓薄髀五駑ナリ」魏の武帝の樂府に「老驥伏櫪、志在ニ千里一」史記滑稽傳に「相ニ馬失一之瘦、相ニ士失一之貧一」淮南子に「馬殊ニ毛而齊逸、玉異ニ色而均美一」(人閒萬事)を參看せよ、

【馬ヲ華山ノ陽ニ歸ス】 戰をやむること、尙書の武成に「歸ニ馬于華山之陽一、放ニ牛于桃林之野一、示ニ天下弗ニ服一」桃林は華山の東に在り、華陰縣の潼關といふ地なり、武王すでに殷に勝ち天下治まりしかば、牛馬を放歸して用ひざるを示すなり、

【馬疲レテ毛長シ】 朝野僉載に「人貧クシテ智短ク、馬疲毛長」とあり、人貧しければ、其の貧苦の爲めに智惠の鏡も曇り、馬疲るゝときは、肉落ちて毛のみ長くなるをいふ、

【馬、角ヲ生ズ】 (烏ノ頭白ク)を見よ、

【馬ニ水飼フ者、錢ヲ井ニ沈メテ通リケリ】 十訓抄第一に見ゆ、風俗通に「郝子廉、行イテ水ヲ飲ム毎ニ、常ニ一錢ヲ井中ニ投ズ」三輔決錄にも、これに類する事あり、參看せよ、

【馬ニ倚リテ待ツベシ】 人の文を作るの速かなるを羨ひなり、唐の李白の、與ニ韓荊州一書に「請日試ニ萬言一、倚ニ馬可レ待」萬言とは萬個の字なり、

【馬ノ進マザルナリ】 伴蒿蹊の「紫式部の碑文の補遺」に見ゆ(敢テ後レタルニアラズ)を見よ、

【海】 釋名に「海ハ晦ナリ、穢濁ヲ引クヲ主ル、ソノ水黑クシテ晦シ」博物志に「天地四方皆海水相通ズ、地ハソノ中ニ在リテ、蓋シ幾バクモナキナリ、七戎六蠻九夷八狄、形類同ジカラザルモ、之ヲ言ツテ四海トイフ、言フハ皆海ニ近ケレバナリ、四海ノ外皆復ニ海アリトイフ云々」文子に「古之善爲ニ君者一、法ニ海一、海無ニ爲成一、其大竅下以成ニ其廣一」孟子の盡心上に「孟子曰、孔子登ニ東山一而小ニ魯一、登ニ大山一而小ニ天下一、故觀ニ於海者一難ニ爲ニ水一、遊ニ聖人之門一者難ニ爲ニ言一」

【海波ヲ揚ゲズ】 成語考に「海不ニ揚一波、知ニ中國有ニ聖人一」の註に「周ノ成王ノ時、越裳氏來朝シテ曰ク、天ニ烈風淫雨ナク、海波ヲ揚ゲザル三年、中國聖人ノ出ルアルヲ知ル」

【海闊クシテ魚ノ躍ルニマカス】 古今詩話に「海闊從

魚躍ニ天空任ニ鳥飛ニ」大歴の詩僧元覽の句に「大海從ニ魚躍ニ長空任ニ鳥飛ニ」

【海漫漫トシテ邊ナシ云々】 太平記巻の二十六に見ゆ、これは白氏文集巻三海漫漫と題する詩に本づき書きたるなり、詩に曰く「海漫漫、直下無ニ底傍無ニ邊、雲濤煙浪最深處、人傳中有ニ三神山、山上多ニ生不死藥、服ニ之羽化爲ニ天仙、秦皇漢武信ニ此語、方士年年採ニ藥去、蓬萊今古但聞ニ名、煙水茫茫無ニ覓處、海漫漫、風浩浩、眼穿不ニ見蓬萊島、不ニ見ニ蓬萊、不ニ敢歸、童男卯女舟中老、徐福文成多ニ詐誕、上元太乙虛祈禱、君看驪山頂上茂陵頭、畢竟悲風吹ニ蔓艸、何況元々聖祖五千言、不ニ言ニ藥、不ニ言ニ仙、不ニ言ニ白日昇ニ青天ニ」題下に仙を求むるを戒むるなりと自註せり、太平記はこの詩を引きてやゝ事實を誤れり、そは太平記の文を見て知るべし、

【云爲】 易の繫辭に「變化——」變化は陰陽をいひ、云爲は人事をいふ、また言論と事爲との義、馬祖常飲酒の詩に「鼓ニ頰說ニ今古、證據稱ニ——」

【云云】 猶ほ如ニ斯如ニ斯といふが如し、史記の汲黯傳に「武帝曰吾欲ニ云云ニ」また文選の註に「辭多クシテ略シテ載スルコト能ハザルヲイフ」音便に「ウンヌン」といふ、また物の盛なる貌、莊子在宥篇に「萬物——」また衆語をいふ、史記の封禪書に見ゆ、

【沄沄】 轉じ流るゝ貌、杜甫の詩に「——逆素浪ニ」また楚辭に「窺ニ見兮溪閒ニ流水兮——」また沸き出る貌、揚雄の冀州箴に「冀土糜沸、——如ニ湯」

【雲影濤聲】 松の形と、松風とを形容す、王直方詩話に「宋石曼卿詩、影搖千尺龍蛇動、聲撼半空風雨寒、有ニ僧曰、不若ニ雲影亂鋪ニ地、濤聲寒在ニ空」

【雲烟過眼】 一時の「ナグサミ」にして、長く執著せざる義、東坡の寶繪堂記に「吾薄ニ富貴ニ而厚ニ於書ニ輕ニ死生ニ而重ニ畫ニ豈不ニ顚倒錯謬失ニ其本心ニ也哉、自ニ是不ニ復好ニ見可ニ喜者ニ雖ニ時復蓄ニ之、然爲ニ人取去、亦不ニ復惜ニ也、譬ニ之烟雲之過ニ眼百鳥之感ニ耳、豈不ニ欣然接ニ之、去而不ニ復念ニ也」

【芸閣】 書を藏する樓なり、龜蒙典略に「芸香辟ニ蠹ニ、故藏書臺稱ニ芸臺、閣稱ニ芸閣ニ」蠹は音ト書をくふ蟲なり成語考に「書室ヲ芸窓トイフ」禮記月令の註にも「書房毎以ニ芸香草ニ辟ニ蠹魚ニ、故名」爾雅に「仲冬之月、芸始生ニ」

【雲合霧集】 多く聚る義、史記淮陰侯傳に「天下之士、——、魚鱗襍遝、煙至風起」

【雲漢】 天河なり、箕斗二星の閒に在り、其の長さと天を竟ふ、詩經に「倬彼——、爲ニ章ニ于天ニ」倬は大なり、——の天に在りて、その文章を爲すは、天子の天下を治むるに、法度あるが如きをいふ、

【雲閒ノ陸士龍、日下ノ荀鳴鶴】 晉の陸雲字は士龍、荀隱字は鳴鶴と、未だ相識らず、嘗て張華の座に會す、華その遊に大才あるを以て謂つて曰く、今日相遇ふ、常談を爲すなかるべしと、雲因つて手を抗げて曰く、雲閒陸士龍と、隱曰く、日下荀鳴鶴と、

【雲臥】 高く臥するをいふ、鮑昭の詩に「——恣ニ天行ニ」

【雲鬟】 杜牧の阿房宮の賦に「綠雲ノ擾擾タルハ、曉鬟ヲ梳ルナリ」註に「宮人ノ梳粧ナリ、髻鬟折綰、雲髻整然タルハ、天外ノ綠雲ノ疊疊タル如キナリ」

【雲霓】 霓は蜺に同じ虹なり、孟子に「若ニ大旱之望ニ——」とあるは望みの切なるをいふ、

【蘊結】 蘊は積なり、思の積りて解けざる義、詩の檜風に「我心——」

【雲根】 石の異名、藝林伐山に「賈島ノ詩ニ、移ニ石動ニ雲根ニ、註ニ雲ハ石ヨリ生ズ、故ニ石ヲ名ヅケテ雲根トイフ」

【耘耔】 耘は草を去るなり、耔は苗の根につちかふなり、詩經に「今適ニ南畝ニ、或耘或耔」

【雲集霧散】 衆多往來の貌、班固の西都賦に「鳥則玄鶴白鷺(中略)皀鵰鴻鴈、朝發ニ河海ニ、夕宿ニ江漢ニ、沈浮往來、——」

【雲心月性】 淡泊無欲なる心をいふ、唐詩に「野客雲作心、高僧月爲ニ性ニ」

【醞藉】 心廣くしておだやかなる義、また包容するところあるなり、漢書薛德傳に「廣德爲ニ人溫雅有ニ——ニ」注に「寬博ニシテ餘リアルナリ」醞或は溫に作り、藉或は籍に作る、義同じ、

【雲仍】 遠孫をいふ、爾雅の釋親に「曾孫ノ子ヲ玄孫ト、玄孫ノ子ヲ來孫トナシ(往來の親あるをいふ)來孫ノ子ヲ昆孫トナシ(昆は後なり)昆孫ノ子ヲ仍孫トナシ(仍は重なり)仍孫ノ子ヲ雲孫トナス(輕遠にして浮雲の如きをいふ)」

【雲水】 行脚僧をいふ、虛堂錄に「尋常雲水家、或ハ凝リ或ハ流ル、初ヨリ固必無シ」の註に「雲水家トハ、僧家ヲイフ、凡ソ沙門ノ世ニ處スル、風雲流水ノ去住無心ナルガ如キ故ナリ」豐干禪師の詩に「一身如ニ——ニ、悠々任ニ去來ニ」

【雲水飛動】 山水畫の妙なるを稱していふ、朱景玄の畫譜に「王維輞川ノ圖ヲ畫クニ、山谷鬱盤シ、——

ス、意塵外ニ出デ、怪筆端ニ生ズ、自ラ詩ヲ題シテイフ、夙世謬ニ詞客、前身應ニ畫師ト」

【雲擾】 大に亂るゝをいふ、漢書敍傳に「天下——」

【芸窓】 讀書の室をいふ（芸閣）を見よ、

【蘊崇】 蘊は積なり、崇は聚なり、草などを積み聚むる義、左傳隱六年に「見惡如農夫之務去草焉、芟夷——之」蘊は一に蘊に作る、

【雲孫】（雲仍）また（仍孫）を見よ、

【芸臺】 續博物志に「芸香紙蠹魚ヲ避ク、故ニ藏書ノ臺ヲ——トイフ」芸閣に同じ、

【雲臺ノ二十二將】 事類全書に「後漢ノ顯宗、前世ノ功臣ヲ追感シテ、二十八將ヲ南宮ニ圖畫ス、鄧禹ニ始マリ耿純ニ終ハル、其ノ外マタ王常、李通、竇融、卓茂アリ、合セテ三十二人、惟ダ馬援ハ椒房（キサキ）ヲ以テノ故ニ、獨リ及バズ」三十二將は、鄧禹・馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿弇・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・堅鐔・馮異・王霸・朱祐・任光・祭遵・李忠・景丹・萬修・蓋延・邳彤・姚期・劉植・耿純・臧宮・馬武・劉隆・王常・李通・竇融・卓茂、

【運籌決勝】 駿臺談話「渡邊番」に見ゆ（籌策ヲ）を見よ、

【雲中ノ白鶴】 氣象の高尚なるに喩ふ、世說に「公孫度、邴原ヲ目スラク、所謂雲中ノ白鶴ナリ、燕雀ノ網ノ能ク羅スル所ニアラザルナリ」

【雲梯】 梯高くして雲に入るをいふ、戰國策に「爲——將以攻宋」（魯般ガ——）を見よ、また藻林に「仙人天ニ昇ルニ、雲ニ因リテ上ル、故ニ——トイフ」文選に「安事登——」また虎韜兵略篇に「視城中則有——飛樓」試驗に及第するを、足——を躡むともいふ、謝靈運の詩に「共登青雲梯」

【雲泥】 天地といふが如し、懸隔の甚しきをいふ、荀濟の詩に「——已殊路」また白樂天の詩にも「會面隔——」

【雲屯】 雲の如く多く聚るをいふ、陸機の詩に「胡馬如——、越嶺亦星羅」また李白の詩に「上皇騎馬若——」

【雲南通志】 三十卷、清の雲貴總督鄂爾泰等監修す、雲南は先に康熙三十年の舊志あれども、分類當を得ず、敍述亦繁簡宜しきを得ず、この編刪訂して較〻條理分明となれり、

【雲南萬里ノ軍、戶ニ三丁アリ一丁ヲ抽ク】 太平記卷九に見ゆ、白氏文集卷の三「新豐折臂翁」と題する詩中に「無何天寶大徵兵、戶有三丁一點一丁、點得驅將何處去、五月萬里雲南行」（新豐）を見よ、

【雲薨】 薨は「ムナガハラ」——は高く聳ゆる屋棟をいふ、宋之問の句に「——出萬家」

【縕袍表ナシ】 縕袍は「ヌノコ」なり、論語に「衣敝——」莊子に「曾子衛ニ居ル、縕袍無表、顏色腫噲、手足胼胝云々」

【雲物ヲ書ス】 雲物は氣色災變をいふ、左傳僖五年に「凡分至啓閉必書雲物爲備故也」分は春分秋分なり、至は冬至夏至なり、啓は立春立夏なり、閉は立秋立冬なり、妖祥を察して之を書するは、あらかじめ之が備をなさん爲めなり、

【運甓】 晉書に「陶侃、荊州ニ在ルトキ、朝ニ百甓ヲ齋外ニ運ビ、暮ニ齋內ニ運ブ、人ソノ故ヲ問フ、侃答ヘテ曰ク、吾方ニ力ヲ中原ニ致サントス、優逸スルトキハ、恐クハ事ニ堪ヘザラン」甓は甎なり「シキガハラ」

【雲夢八九ヲ呑ム】 心の極めて大なるを形容していふ、前漢司馬相如傳に、「呑若雲夢者八九於胸中」曾不蔕芥」雲夢は大なる澤の名、楚の七澤の一、方九百里ありといふ、

【雲霧ヲ披キ、青天ヲ覩ル】 初學記に、晉書樂廣傳を引きて「晉ノ衞瓘、樂廣ヲ見エ、諸子ニ謂ツテ曰ク、每ニ此人ヲ見ルニ、瑩然トシテ猶披雲霧覩青天」また徐幹の中論に「灼然若披雲而見日、霍然若開霧而觀天」とあるも、意は同じ、

【運用ノ妙ハ一心ニ存ズ】 兵法は死物に同じ、これを活用するの妙は、將たる者の一心に存ずるをいふ、宗澤、岳飛に謂つて曰く、爾の智勇材藝は、古の良將も過ぐる能はず、然れども野戰を好むは、萬全の計にあらずと、因つて之に授くるに、陣圖を以てす、飛曰く、陣して然る後に戰ふは、兵法の常なり、運用之妙存乎一心」と、澤その言を是とす、飛是に由りて名を知らる、

【蘊隆蟲蟲】 詩經に「旱既太甚、————」蘊は蓄なり、隆は盛なり、蟲蟲は、熱氣なり、暑熱甚しきをいふ、

【雲裏帝城雙鳳闕】 唐の王維の奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制に「渭水自縈秦塞曲、黃山舊繞漢宮斜、鑾輿迴出千門樹、閣道廻看上苑花、————、雨中春樹萬人家、爲乘陽氣行時令、不是宸遊玩物華」雲裏雨中の一聯眞に詩中に畫ありといふべし、結末の意規を頌に寓す、臣子立言の體宜しくまさに然るべし、沈歸愚曰く、應制の詩應にこの篇を以て第一となすべしと、

【雲林】（倪——）を見よ、また——は、臺灣彰化縣の東南約十二里に在る一市にて、要害の地、一に斗六とも稱

す、

【雲麓漫鈔】 十五卷、宋の趙彥衞撰す、書中、宋時の雜事を記する者、十の三、名物訓詁を考辨するもの十の七、自序に葉夢得の避暑錄話に敵すべしと謂へり、今その書を核考するに夢得の書に勝るに似たり、子部の雜家類に入る、

【雲和】 琴の異名、周禮の春官大司樂に「——之琴瑟」の註に「——ハ地名」とあり、琴を出す地名より轉じて琴の稱とす、王昌齡の句に「斜抱——深見月」

【梅】 杜甫の詩の註に「江邊ニ在ルヲ江梅トイヒ、嶺ニ在ルヲ嶺梅トイヒ、野ニ在ルヲ野梅トイヒ、官中ニ種ウルヲ官梅トイフ」陸凱の寄范曄梅花詩に「折梅逢驛使、寄與隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春」また成都古今記に「十一月有梅市」齊己の早梅の詩に「前村深雪裏、昨夜一枝開」(羅浮)(廣平ガ賦)(花魁)を參看せよ、

山園小梅　林逋

衆芳搖落獨暄妍、占盡風情向小園、疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏　霜禽欲下先偸眼、粉蝶如知合斷魂、幸有微吟可相狎、不須檀板共金樽、

梅花　高啓

瓊姿只合在瑤臺、誰向江南處處栽、雪滿山中高士臥、月明林下美人來、寒依疎影蕭蕭竹、春掩殘香漠漠苔、從去何郎無好詠、東風愁寂幾回開、

【紆餘】 委曲の義、迂回して直ならざる貌、上林賦に「——委蛇、經營乎其內」韓愈の進學解に「——爲、妍、卓犖爲傑」

【羽翼】 輔佐する義、六韜に「王者帥師、必有股肱——」以成神威」また管子に「桓公曰、寡人之有管仲、猶飛鴻有——也」また漢書張良傳に「——已成、難動矣」

【盂蘭盆】 翻譯名義集に「盂蘭ハ西域ノ語ノ轉、モト烏藍トイフ、此ニハ倒懸ヲ救フト翻ス、盆ハコレ食ヲ貯フルノ器ナリ、云々」また舊唐書に「代宗七月十五日內道場ニ於テ盂蘭盆ヲ造リ、飾ルニ金翠ヲ以テス、費ス所ロ百萬」俗に生靈祭といふ、百味の飲食を盆にそなへて、佛及び死者の靈に供へ、倒に懸けたらん如き苦患をも救ふべき義とす、我が國にては、齊明天皇の三年七月初めて法興寺にて——會を修せらる、「タママツリ」ともいふ、

【怨骨髓ニ入ル】 怨の極めて痛切なるをいふ、史記の秦紀に「繆公之怨此三人入於骨髓」

【瓜】 廣志に「凡ソ瓜ノ出ヅル所ハ、遼東・廬江・敦煌ノ種ヲ以テ美トナス」祭法に「夏祠秋祠皆瓜ヲ用フ」群芳譜に「黃瓜一名ハ胡瓜、絲瓜一名ハ天羅絮、冬瓜一名ハ水芝、一名ハ地芝」(瓜ニ及ブ)を見よ、

【瓜ヲ浮ベ李ヲ沉ム】 魏の文帝の與吳質書に「甘瓜ヲ淸泉ニ浮ベ、朱李ヲ寒水ニ沉ム」また夢華錄に「都人最モ三伏ヲ重ンジ、往往風亭水榭峻宇高樓、雪檻冰盤ニ浮瓜沉李」

【瓜ヲ投ジテ瓊ヲ得】 (瓜ヲ投ジテ)を見よ、

【瓜ニ灌ギ驩ヲ結ブ】 (灌瓜結驩)賈誼新書に「梁ノ大夫宋就、邊ノ令トナル、楚ト隣界ナリ、梁楚ノ邊亭皆瓜ヲ種ウ、梁亭ハ劬力シ、數〻灌ギ其ノ瓜美ナリ、楚人ハ希レニ灌ギ、其ノ瓜惡シ、楚ノ令、梁瓜ノ美ナルヲ以テ怒リ、因ツテ夜往キ梁ノ瓜ヲ搔ク、梁之ヲ覺リ、往キテ楚ノ瓜ニ報ゼント欲ス、宋就曰ク、是レ怨ヲ搆フル道ナリト、乃チ夜往キ竊ニ楚瓜ニ灌ガシム、楚人往ケバ即チ已ニ瓜ニ灌グ、伺ヒテ之ヲ察スレバ則チ梁人ナリ、楚ノ令大ニ悅ビ、因ツテ具サニ聞ス、楚王謝スルニ重幣ヲ以テス、故ニ梁楚ノ驩固シ」

【羽林】 もと星の名、天軍をつかさどること、史記の天官書に見ゆ、轉じて天子の宿衞を掌る武人の稱とす、漢書百官公卿表の師古の注に「——亦宿衞ノ官、ソノ羽ノ疾キガ如ク、林ノ多キガ如キヲ言フ」李白の詩に「——十二將、羅列應星文」と、わが國にても近衞府の唐名として用ふ、また近衞の大中少將の唐名ともす、

【羽林兒】 近衞の兵士なり、羽翼の疾く擊つが如く、林木の盛んに多きが如き義に取る、漢書武帝紀に「初置羽林騎、取從軍死事之子孫養羽林官、敎以五兵、號羽林孤兒」岑參の詩に「鳴弓掾甲——」

【羽鱗蓮互ノ物】 柳宗元の嶺南節度饗軍堂記に「——之——、沈泛醍盎之齊」周禮天官に「籠人掌取互物、以時籍魚鼈龜蜃凡蓮物」の注に「互トハ甲介アル者ヲイヒ、蓮トハ自ラ泥中ニ蓮伏スル者ヲイフ」また酒正は、五齊の名を辨ず、一泛齊、二醴齊、三盎齊、四醍齊、五沈齊也とあり、齊とは一定のまずめによりて釀したる酒なり、

【雨霖鈴ノ曲】 錦字箋に「唐ノ明皇蜀ニ幸シ、還リテ斜谷ニ入ル、霖雨旬ニ彌ル、棧道中ニ於テ鈴聲ト山雨ト相應ズルヲ聞キ、上感ジテ貴妃ヲ悼ム、因ツテソノ聲ヲ採リテ雨霖鈴ノ曲ヲ爲ル」

【傴僂】 脊のまがれる病、「セムシ」淮南子に「子求行年五十有四、而病——」また「セグクマル」貌、歐陽修の醉翁亭記に「——提携、相往來而不絕者、滁人遊也、傴僂、一音ロウ

【蔚山】 朝鮮の慶尙道に在り、河曲・蔚州・鶴城・火城・恭化・興麗等の別名あり、壬辰役に、加藤清正が、楊鎬に圍まれて、死守せし地を、我が國の記錄には——とすれど、明人韓人の記錄には沓島山とせり、島山は卽ち甑城にて、蔚山郡内に在り、——の本城を距ること遠からざれば、島山をも、邦人は一概に——といひしなるべし、

【漆】 葉は「ヌルデ」に似て鋸齒なし、夏、枝の梢に長き穗を出して黃白の小花開く、亦「ヌルデ」の花に似たり、實は圓く扁く大さ一分許、黃褐なり、煮て上品なる蠟を得、この樹の脂を「ウルシ」とす、物をぬるに用ふ、書經の禹貢に「厥貢——絲」、淮南子に「漆不厭黑、粉不厭白」また「漆有用而割、膏以明自煎」

【愁ヲ忘ルトイヘド】 酒のことなり、徒然草に見ゆ、東方朔傳に「銷憂莫若酒」また古樂府に「何以忘憂唯有杜康」杜康は人名、善く酒を造る、故に酒の異名とす、陶淵明の雜詩に「汎此忘憂物、遠我遺世情」とあり、忘憂物とは、卽ち酒をいふ、また掃愁箒は、酒の異名なり、

【有漏】 佛經の語、世俗の凡夫の稱、色界・无色界の一切の煩惱を——といふ、金剛經註に「終是——之因而无解脫之理」と見え、大藏法數に「因果不亡曰有卽色界无色界見思煩惱也、謂衆生因此煩惱不能出離色无色界故名——」有は業の後生に續生せしむべきものをいひ、漏は住の義とす、凡夫留められて住するなり、

【胡亂】 諺草に「ウロン」は唐音なり、また胡說亂道はもと中華の俗語なり、みだりがはしきことをいふと、

格言七則

運轉無已、天地密移（列子）

雲蓋之高、墜者折脊碎腦、而蚊蝱適足以斃一（淮南子）

馬駿輿則君子不安、輿人駿政則君子不安（荀子）

馬雖多逸足、而不閑輿、則不爲良馬、人雖有美質、而不習道、則不爲君子（徐幹治家論）

魚乘水、鳥乘風、草木乘於時（說苑）

魚可使之吞鉤、虎使之入陷、蓋貪有所利也（化書）

觀於海者、難爲水、遊於聖人之門者、難爲言（孟子）

エ

【英偉】 偉は奇なり、大なり、——はすぐれたるをいふ、またその人をいふ、晉書に「夫——大賢、多出于山澤」

【英雄吾殼中ニ入ル】 摭言に「唐ノ太宗私ニ端門（殿名）ニ幸ス、進士ノ縱行シテ出ヅルヲ見テ、喜ンデ曰ク、天下英雄入吾殼中ト」その意は英雄をして無事に苦み不平を鳴らさしめざるために進士のむつかしき試驗を設け、一生受驗のために心力をつくさしめんとす、この大宗の計は英雄を籠絡して我が術中に入れたるものなり、殼は弓を引きしぼる義、入吾殼中は、射てわが手に入るなり、孟子に「羿之教人射、必志於殼」

【塋域】 說文に「墓ナリ」と、葬地をいふ、柳宗元の書に「不敢望歸掃——、退托先人之廬以盡餘齒」

【榮位勢利譬ヘバ寄客ノ如シ】 抱朴子に「榮位勢利、譬如寄客、既非常物、其去不可得留」

【央央】 あざやかなる貌、詩の小雅に「白旆——」また聲の和らげる貌にもいふ、詩經に「和鈴——」

【泄泄】 怠緩悅從の貌「ユルヤカ」詩の大雅に「天之方蹶、無然——」孟子に「——猶沓々也」また舒徐（オモムロ）の貌、詩の邶風に「——其羽」傳に「飛ンデソノ羽ヲ鼓スルコト——然タルナリ」と、泄の字漏らす義のときは音セツ

【營營】 「アクセク」と往來奔走する貌、詩の小雅に「——青蠅」また列子に「安知——而求生非惑乎」

【曀曀】 說文に「陰リテ風フク也」詩經に「——其陰」

【瀯瀯】 水の清く流るる貌、またその聲、柳宗元の遊記に「——之聲與耳謀」

【纓ヲ絕ツ】（絕纓）を見よ、

【英ヲ含ミ華ヲ咀フ】 文字の眼目の處、涵泳咀嚼し、書味をして胸中に存ぜしむるをいふ、咀は含味なり、韓愈の進學解に「沈浸醲郁、含英咀華、作爲文章、其書滿家」

【嬰孩】 「ミドリゴ」孩は生れて少しく月を經て笑ひ得る頃となりしをいふ、老子に「若嬰兒之未孩」顏氏家訓に「教婦初來、教兒——」

【影駭響震】 影を見て驚き、響を聞きて震ふは、驚き懼るゝの甚しきをいふ、答賓戲に「使見之者影駭、聞之者響——」

【郢客ノ陽春ヲ楚ニ唱フル】 駿臺雜話に見ゆ（陽春白

雪)を見よ、

【詠歸】 山林の勝地などに遊び、詠歌しつゝ歸るをいふ(浴沂)を見よ、

【影響】 書經の大禹謨に「禹曰惠迪吉、從逆凶、惟影響」の註に「惠ハ順フナリ、迪ハ道ナリ、逆ハ道ニ反ク者ナリ、迪ニ惠ヒ、逆ニ從フトハ、善ニ順ヒ、惡ニ從フト言フガ如シ、禹ノイフ、天道畏ルベシ、吉凶ノ善惡ニ應ズルコト、猶ホ影響ノ形聲ヨリ出ヅルガ如キナリ」漢書の江充傳に「下之應上、猶影響也」の註に「影ノ形ニ隨ヒ、響ノ聲ニ應ズルガ如シ」

【盈虛】 盈は滿つるなり、虛はかけて空しきなり、月などにいふ、易の豐の彖傳に「日中則昃、月盈則食、天地——與時消息」また莊子の秋水篇に「消息——終則有始」前赤壁の賦にも「——者如彼、而卒莫消長也」

【營窟】 穴處なり、地高ければ穴をほり、地卑くければ、その土を營壘して、窟となすなり、禮記の禮運に「冬則居——、夏則居橧巢」また孟子に「下者爲巢、上者爲——」

【盈科】 科は坎(アナ)なり、穴一ぱいに滿つるをいふ、孟子に「原泉混々、不舍晝夜、——而後進」

【榮華】 アル者ハ必ズ愁悴アリ】 榮枯盛衰は自然の理數なるをいふ、文子に「有榮華者、必有憔悴、有羅紈者、必有麻蒯」

【榮啓期】 (三樂)を見よ、

【永訣】 永く別るゝなり、死別をいふ、唐書李勣傳に「生死——」また江淹の別賦に「誰能摸暫離之狀、寫——之情者乎」

【永言】 歌謠なり、書經の舜典に「詩言志、歌永言」とあるに本づく、註に「已ニ言ニ形ルヽ聲ハ、必ズ長短ノ節アリ、故ニ歌永言トイフ」

【寃言】 讒言(タワコト)なり、左傳哀二十四年に「往歲克敵、今又勝都、天幸多矣、又焉能進、是——也」註に「寃ハ過ナリ」疏に「僞リテ信ナラザルナリ」

【英悟】 秀でてさとき義、舊唐書に「上仁愛——、得之天然」

【榮枯】 さかゆると、かるゝと、轉じて盛衰の義とす、李賀の嘲少年詩に「——遞轉急如箭」

【穎悟】 いとけなくしてさときこと、晉書に「幼而——」

【永巷】 後宮の獄の名、三輔黃圖に「——ハ宮中ノ長巷、宮女ノ罪アル者ヲ幽閉ス、武帝ノ時、改メテ掖庭トナシ獄ヲ置ク」列女傳に「周宣姜后、脫簪珥、待罪——」史記范雎傳に「詳爲不知——」而人其中」また漢書外戚傳に「恐其作亂、幽之——」

【衛宏】 字は敬仲、漢の東海泗の人、仕へて議郎となる、少くして嘗て九江の謝曼卿に從ひ毛詩を受け、詩序を作る、後ち更に古文尚書を杜林に受け訓旨を作る、時に濟南の徐巡、宏に師事し、亦儒を以て顯る、是に由りて古學大に興る、宏又漢舊儀四篇を作り西京の雜事を載す、

【影國】 影の形に從ふが如き意にて、屬國の義、藝林伐山に「——猶曰附庸」

【睿藻】 天子の御製をいふ、奏記に「——清新」

【英作】 詩文などのすぐれたるをいふ、傑作に同じ、文心雕龍に「高祖大風、鴻鵠之歌、亦天縱之——也」

【營作】 家などをいとなみ作ること、史記に「——朝宮」築作に同じ、

【映山紅】 「ツヽジ」なり、花木考に「山躑躅一名——」

【嬰兒】 釋名に「人始生曰——、胸前曰嬰、抱之嬰前乳養之、故曰嬰」また一解に女に嬰といひ、男に孩といふと、戰國策に「張儀說韓王曰、夫秦卒之與山東之卒也、猶烏獲之與——也」

【景從】 影の形に於ける如くにつき從ふをいふ、賈誼の文に「天下雲會響應、贏糧而——」

【瀛洲】 三神山の一(蓬萊)を見よ

【嬰兒ノ常ニ病ムハ飽ニ傷ムナリ】 潛夫論に「嬰兒常病、傷于飽也、貴臣常禍傷于寵也、哺乳多則生癰病、富貴而致驕疾」保嬰論に、若し小兒の安を要せば、須らく三分の飢と寒とを帶ぶべし、此れ攝生の要なり、終身之を守りて可なりとあると、その說似たり、

【嬰城】 城を守るをいふ、戰國策に「許鄢陵——、上蔡召陵不往來也」嬰は繞なり、城を以て自ら嬰繞して之を守るなり、

【贏勝シテ履蹻ス】 賈人は贏利を得るも、尙ほ草履をはく義にして、大功に報ゆるに、薄賞を以てするに喩ふ、韓非子に「臣罷四國之兵、而王乃與臣五乘、此其稱功猶贏勝而履蹻」

【嬰守】 籠城するをいふ(嬰城)を見よ、

【榮瘁】 瘁は病みつかるゝなる、榮枯と同じく、盛衰の義に用ふ、

【衞生】 その生を衞護し、性命を全うするをいふ、文選に「——自有經」

【衞青】 字は仲卿、漢の平陽の人本姓は鄭氏、武帝の時太中大夫に拜す、屢〻兵に將として匈奴を伐ち大功を立て長平侯に封ぜらる、因にいふ、明に又——あり、華

亭の人、山東備倭都指揮たり、

【睿聖文武皇帝】 韓愈の論佛骨表に見ゆ、唐書憲宗紀に「元和三年正月癸巳、群臣尊號ヲ上ツリテ、——ーートイヒ、大赦ス云々」さればこの號は、憲宗に限りて用ひ、妄に他の帝王に用ふべきにあらず、

【詠雪ノ才】 人の娘の才あるを稱していふ、晉書に「晉謝奕女字道韞、聰識有ル才辯、叔父謝安、嘗テ内集、俄而下雪、安曰、何所似、安兄子朗曰、撒鹽空中、差可擬、道韞曰、未若柳絮因風起」金壁故事、または世說にも見ゆ、内集は家族の宴をいふ、

【穎川ノ水ニ耳ヲ洗ヒシ賢人】 (許由巢父)を見よ、

【映帶】 「ウツリアフ」王羲之の蘭亭集序に「ーーーー左右」

【影堂】 先人の位牌を置く所なり、古今注に「廟ハ貌ナリ 先人ノ容貌ヲ彷彿スル所以ナリ、庶人ハ則チ影堂ヲ立ツ云々」

【郢斲】 人に詩文などの添削を求むるを、ーーを賜はらんことを望むといひ、又郢斧を乞ふともいふ、莊子に「郢人ニ鼻端ニ堊アリ、蠅ノ翼ノ如シ、匠ヲシテ之ヲ斲ラシム、匠斤ヲ運シ風ヲ成シ、ソノ堊ヲ斲リ盡ス、而シテ鼻傷カズ」とあり、郢は楚の都なり、その手際の見事なるを以て人の添削を敬する辭とす、

【穎脫】 穎は禾芒、鋭尖突然として出づ、故にーーといふ、說文に「脫ハ突也」とあり、賢士の衆中に秀出するに喩ふ、史記平原君列傳に「平原君曰ク、夫レ賢士ノ世ニ處スルヤ、譬ヘバ錐ノ囊中ニ處ルガ若シ、ソノ末立ドコロニ見ハル(中略)毛遂曰ク、臣乃チ今日囊中ニ處ランコトヲ請フノミ、遂ヲシテ蚤ク囊中ニ處ルヲ得シメバ、乃チーーシテ出デン、特ニソノ末ノ見ハルヽノミニアラザルナリト」一解に穎の字、木に從ひ頃に從ふ、錐柄なりと、されば錐の柄をあはせて脫出するの義なり、

【詠歎】 聲を長くして歎ずるなり、禮記に「ーーーーー之淫液之」また韓愈の聽琴詩序に「追三代之遺音、想舞雩之ーーこ」

【睿智】 易の繫辭上傳に「古之聰明ーー、神武而不殺者矣」七書の李衞公問對の直解に「聰明ーーハ聖ノ四德ナリ、聰ハ聞カザルトコロナシ 明ハ見ザルトコロナシ、睿ハ通ゼザルトコロナシ、智ハ知ラザルトコロナシ、變化測ラレザルヲ神トイヒ、禍亂ヲ戡定スルヲ武トイフ」

【裔冑】 左傳の襄十四年に「是四嶽之ーーー也」の註に「裔ハ遠、冑ハ後ナリ」裔は衣裾なり、故に子孫の義に用ゝ、

【英哲】 すぐれてさとし、またその人をいふ、魏都賦に「ーーー雄豪、佐命帝室」賢哲・才哲・穎哲皆睿ニ同じ、

【睿哲】 すぐれてさとし、またその人をいふ、睿は物事に通じて深く明かなる義、唐書に「克生ーーー、蔣我休明」雋哲・俊哲・英哲皆睿ニ同じ、

【榮塗】 塗は官途の途に同じ、ーーは榮譽なる「ミチ」眞德秀の句に「ーー足趨走」

【羸縢履蹻】 縢は「ヌカバキ」蹻は「ワラグツ」また屐なりとも解す「ヌカバキ」をはき、草屐をはくこと、戰國策に「資用絕、去秦而歸、ーーーーー、負書擔囊、形容枯槁、面目黧黑、狀有愧色」

【衞ノ懿公ガ鶴】 太平記卷の一に見ゆ、衞は國の名、史記衞世家に「懿公位ニ即キテ鶴ヲ好ミ、淫樂奢侈ナリ、九年ニ、翟、衞ヲ伐ツ、懿公兵ヲ發セント欲スレドモ、兵或ハ畔ク、大臣言ツテ曰ク、君鶴ヲ好ム、鶴ヲシテ翟ヲ擊タシムベシト、翟是ニ於テ遂ニ入リテ懿公ヲ殺セリ」正義に曰く「左傳閔二年ニイフ、衞ノ懿公鶴ヲ好ミ、鶴軒ニ乘ル者アリ、狄衞ヲ伐チシトキ、將ニ戰ハントスル、國人甲ヲ受クル者皆曰ク、鶴ヲ使ヘ、鶴ハ實ニ祿位アリ、余焉ゾ能ク戰ハンヤト」鶴を愛するの極、軒に乘せて伴ひたるなり、軒は大夫の乘る車、

【衞ノ共姜】 詩の國風柏舟の詩の序に「柏舟ハ、共姜自ラ誓フナリ、衞ノ世子共伯蚤死ス、ソノ妻義ヲ守ル、父母奪ヒテ之ヲ嫁セント欲ス、誓ツテ許サズ、故ニ是ノ詩ヲ作リテ以テ之ヲ絕ツ」詩に曰く「汎彼柏舟、在彼中河、髧彼兩髦、實維我儀、之死矢靡它、母也天只、不諒人只、云々」

【衞ノ武公行年九十五云々】 駿臺雜話の「年にはつかし」に見ゆ、國語の楚語に、楚の左史倚相が子亹を誡めたる語の中に「昔衞武公、年九十有五矣、猶箴儆於國曰、自卿以下、至於師長士、苟在朝者、無謂我老耄而舍我、必恭恪於朝、朝夕以交戒我、聞一二之言、必誦志而納之、以訓道我(中略)於是乎作懿戒以自儆也」韋昭の註に「懿戒ハ大雅抑ノ篇ナリ、懿讀ンデ抑トイフ」武公は僖公の子、共伯の弟、武公和なり、

【曳白】 紙筆を手にして、終に文章の成らざるをいふ、事類全書に「唐玄宗朝、選人入等者、六十四人、上召面試之、張奭手持紙、終日不成一字、時人謂之ーーこれは選擧の事を司る苗晉卿といふ者、御史中丞張倚に阿りて、その子奭を第一とせしが、玄宗之を華萼樓に覆試するに及び、奭一字を成すと能はざりしなり、

【曳尾】 (尾ヲ塗中)を見よ、

【英布】 漢の六安の人、少時客あり之を相して曰く、當に刑せられて王たるべしと、年壯に及び法に坐して黥せらる、因つて姓を改めて黥といふ、秦末兵を以て項梁に屬す、項羽封じて九江王となす、後ち漢の高祖に歸し、淮南王に封ぜらる、

【郢斧ヲ乞フ】 人に詩文などの添削を乞ふをいふ（郢斲）を見よ、

【英物】 傑出せる人を稱す、晉書桓溫傳に「生未期、溫嶠見之曰、此兒有奇骨、可試使啼及聞其聲、曰、眞——也」未期とは、一周歲ならざるなり、

【容謨】 さとき、「ハカリゴト」帝王のに用ふ、柳宗元の賀雨表に「——潛運、甘雨遂周」

【英邁】 邁は超えすぐるゝ義、——はまさりすぐるゝをいふ、宋史に「高明——」

【衞滿】 周の燕の人、秦末中原多故なり、滿、兵を起し朝鮮を擊破し、國王箕準を逐ひ、遂に自立して王となり、王險城に都す、再傳して孫右渠に至りて國滅ぶ、

【盈滿ノ咎】 物事十分にすぐるときは、かへりて禍を生ずるをいふ、後漢書に「吾門戶殖財日久、——之——、道家所忌」

【榮名ヲ貌トス】 榮名を以て、容貌の飾とする義、史記游俠傳に「諺曰人貌榮名、豈有既乎」顏貌は衰落の時あれども、榮名を以て貌とするときは、その譽盡くるなきをいふ

【瓔珞】 （——）を見よ、

【榮利】 榮達と利益とをいふ、魏書に「範性恬靜樂道、淡于——」

【嬴劉之閒】 秦漢の際なり、嬴は秦の姓、劉は漢の姓なり、韓文の唐故相權公墓碑に見ゆ、

【翳薈】 草木の蔽ひしげりたる貌、潘岳射雉賦の字面、また謝靈運の句に「修竹蔵薈以——」

【天閼】 壅閼に同じ、壅ぎ止むる義、莊子に「莫之——者」（雍閼）を見よ、

【天夭】 少好の貌「ワカクウツクシ」詩の周南に「桃之——、灼々其華」また色愉ぶ貌、論語に「子之燕居申々如也、——如也」

【杳杳】 深冥の貌「ハルカニヲグラシ」張衡の思玄賦に「日——而西匿」

【陶陶】 和樂の貌、詩の王風に「君子——、左執翿」翿は舞者の持つ所ろ、羽葆幢なり「ハタホコ」また陽氣盛なる貌、楚辭に「——孟夏兮、草木莽莽」また隨行の貌、禮の祭義に「——遂々、如將復入然」

【搖搖】 搖は動なり、——は心憂ひておちつかざる貌、詩經の王風に「中心——」また不安の貌とも說く、

【繇役】 「エダチ」「ブヤクニデル」漢書に「周室既衰、——橫作、繇は一に傜また徭に作る、同じ、

【幼ヲ慈ミ孤ヲ邮ム】 いとけなき者をめぐみ、父なき孤兒をあはれむ義（窮ヲ通ジ）を見よ、

【幼艾】 少艾に同じ、容色美好の少年をいふ、戰國策に「王不以予工、乃與——」

【要害】 類書纂要に「地形險固我ニ在リテハ要トナリ、敵ニ於テハ害ト爲ル」と、史記始皇本紀に「因河爲津、據億丈之城臨不測之谿、以爲固、良將勁弩守要害之處、信臣精卒陳利兵而誰何」

【搖撼】 ゆりうごかす、宋史に「多起邪說、以——在位」

【妖姬】 「ウツクシクナマメキタルヒメ」陳後主の句に「——臉似花含露」

【窈糾】 窈は幽遠なり、糾は愁結なり、詩の陳風に「舒——一兮」

【要會】 計算をいふ、月計を要といひ、歲計を會といふ、周禮に「聽出入比其——」

【姚黃】 牡丹の中にて第一の名品（花王）を見よ、

【夭矯】 飛び騰る貌、郭璞の賦に「吸翠霞而——」

【要結】 約束を結ぶこと、左傳に「——好命」

【妖妍】 「ナマメキテウツクシ」顧野王の句に「齊倡趙女盡——」

【要言】 要は約なり、左傳に「實與隨人——」また要を得たる言をいふ、世說に「管公明曰、善易者不論易、何平叔含笑曰、可謂——不煩」

【妖鉉】 字は寶之、宋の合肥の人、太平興國中の進士、右司諫京東轉運使に歷任す、後ち事に坐して連州に貶せらる、鉉文辭敏麗、文集二十卷あり、また唐人の文章を採り、文粹百卷を編す、

【夭昏札瘥】 （札瘥）を見よ、

【要塞】 塞は塞に同じ、邊界の「トリデ」なり、禮記の月令に「孟冬備邊境完——」

【夭札】 早死をいふ、短折を夭と爲し、天死を札と爲す、左傳昭二年に「癘疾不降、民不——」

【姚察】 字は伯審、隋の武康の人、父僧坦は梁の太醫正たり、察幼にして至性あり、六歲書萬餘卷を誦し、學業に勵精す、十二能く文を屬す、後ち隋に仕へて祕書丞となり、梁陳二史を修す、子の思廉唐に仕へて名臣となる、

【要斬】 要は腰なり、こしのところをきりたつ刑、周禮

の註に「斬以鈇鉞、若今――也」

【姚姒】（上姚姒ニ）を見よ、

【要囚】 囚人の罪を吟味して定むるをいふ、書の康誥に「――服念五六日、至于旬時、丕蔽要囚」蔽は斷なり、定なり、また「――殄戮多罪」

【窯匠】 窯は窰に同じ、瓦を燒く「カマド」――は「ヤキモノシ」會典に見ゆ、窯戸に同じ、

【繇戍】 繇は傜に通ず、役なり、戍は守なり、邊疆を守る者、漢書高祖紀に「復勿――」復とは賦役を除く義、

【姚思廉】 察の子、萬年縣に徙る、初め隋に仕へ、代王の侍讀となる、唐兵城に入る、府僚皆奔忙す、獨り思廉泰然として聲を厲して曰く、唐公義兵を起す、もと王室を安んずるに在り、汝等宜しく禮なかるべからずと、衆却きて階下に布列す、帝之を義として曰く、仁者の勇なりと、後ち弘文館學士となり、魏徵と同じく梁陳書を撰す、

【妖星】「ワザハヒ」星なり、漢書晉義に「妖星ヲ孛星・彗星・長星・欃槍トイフ」

【夭折】「ワカジニ」一解に、いまだ結婚する年頃に至らずして死するを折といふと、吳志に「顏回有上智之才、而――」

【窈然】 深く遙かにしてをぐらき貌、列子に「――無際、天道自會、漠然無分、天道自運」また蘇軾の詩に「猶喜見諸郎、――清且深」

【窅然】 憂ふる貌、悵然に同じ、莊子の逍遙遊に「――喪其天下焉」

【姚鼐】 字は姬傳、桐城の人、乾隆癸未の進士、禮部郎中に官す、書に工に、古文に長ず、惜抱軒集あり、

【瑤臺】 月の異名、離騷に「望――之偃蹇兮、見有娀之佚女」また李白の詩に「若非群玉山頭見、會向――月下逢」また玉にて飾り成せる「ウテナ」殷の紂王の作りしところなりといふ、淮南子本經訓に「紂爲璇室――」

【天桃ノ春ヲ傷ル粧】 太平記卷一に見ゆ、詩の周南に「桃之夭々、灼灼其華」夭々は少壯の貌、桃の木の少壯を以て婦人容色の盛なるに喩ふ、たゞ春を傷るとは義通じ難し、誤字なるべし、

【瑤池】 穆天子傳に「觴西王母於――之上」魏元忠の詩に「寒風生玉樹、涼月下――」

【窈窕】 幽閒なり、幽閒貞靜の德を具ふる義、詩經の周南に「――淑女、君子好逑」淑は善なり、歸去來の辭に「既――以尋壑」とあるは幽閒の境を稱せしなり、

【腰纏】 財布の類なり、小說に「有客言志、一願爲揚州刺史、一願多貲財、一願騎鶴上昇、其一人曰、願腰纏十萬貫、騎鶴上揚州」

【妖ハ德ニ勝タズ】 不祥の事ありとも、德を修むるときは、消滅して害をなさゞるをいふ、史記の殷本紀に「帝太戊、立ツ、伊陟相タリ、亳ニ祥アリ、桑穀共ニ朝ニ生ズ、一暮ニシテ大サ拱ナリ、帝太戊懼レ、伊陟ニ問フ、伊陟曰ク臣聞ク、妖不勝德ト、帝ノ政、其レ闕クルアルカ、帝其レ德ヲ修メヨ、太戊之ニ從フ、而シテ祥桑枯死シ去ル」とあり、祥は妖怪なり、二木合生するは、不恭の罰なり、穀は卽ち今の楮樹なり、兩手を合せ圍むを拱といふ、

【要服】（五服）を見よ、

【幼眇】 精微なり、漢書元帝紀贊に「窮極――」師古は讀んで要妙となす、また窈窕の義、幽深なり、漢武帝の賦に「惟――之相羊」

【要眇】 好き貌、眇は妙に通ず、楚辭に「美――兮宜修」

【幺麽】 微小をいふ、班彪の王命論に「又況――、尙不及數子而欲闚奸天位者虖」

【妖冶】 なまめきて美なるをいふ、謝惠連の詩に「鄙生無文章、西施整――、胡爲空耿介、悲哉君志瓊」

【姚冶容】 姚冶は、妖冶に同じ、妖美の容色をいふ、荀子に「姚冶之容、鄭衞之音、使人心淫」

【瑤林瓊樹】 人品の高潔なるを稱していふ（風塵表）を見よ、

【要領】 要は腰なり、衣の腰、領は、漢音はレイ、衣領「エリ」なり、凡そ衣を持つ者は、必ず腰と領とを執る、それよりして事の主要の義とす、漢書張騫傳に「騫從月氏至大夏、竟不能得月氏――」月氏大夏は、竝に西域の國名、

【腰領ヲ屬ス】 屬は連なり、腰斬、頸きりの刑を免かるゝをいふ、管子に「幸以獲生、以屬腰領、臣之祿也」

【曜靈】 日をいふ、楚辭の天問に「角宿未旦、――安藏」

【要路】 類書纂要に「要路トハ、當路顯要ノ官ナリ、好官ヲ稱シテ――ニ登ルトイフ」

【慧遠法師】 祖庭事苑に「遠法師雁門人、年二十一、聞道安講般若、豁然大悟、乃嘆曰、儒道九流皆糠粃爾、遂與弟惠持、投簪落髮、常以大法爲己任、後之廬山西林之側、山神鬪地運木建寺居之、於是謹律之侶、絕塵之客、不期而至、所謂雷次宗等一十八人、同修淨土、影迹不至塵俗、每送客、以虎溪爲界、年八十三、順寂于寺」慧遠廬山に精舍を營み、隱居の奇士、劉遺民・雷次

宗等及び沙門千餘人と白蓮社を結び、彌陀の像前に立誓して淨土に生ぜんことを期す、陶淵明・謝靈運等或は道を問ひ、或は交を求む、前後山に在ること、三十年、匡山集あり世に行はる、

【慧可】 達磨尊者の嗣法なり、故に二祖と號す、初めの名は神光、北魏の人、達磨嵩山の少林寺に在り、神光往きて道を請ふ、時に正光二年十二月九日にして、天大に雪ふる、達磨面せず、神光堅く庭中に立ちて明を待つ、積雪膝を過ぐ、達磨感じてその請を許し誨勵を加へ、名を——と改む、後ち終にその衣鉢を受くるに至れり、

【回向】 佛經の語、讀經して亡靈の菩提を念ずるをいふ、即ち我が誦經等の功德を回して、彼の亡者に向はしむる義、止觀に「回二衆善一向二菩提一」

【易】 易は卜筮の書なり、而して義理これに寓す、上世伏羲の卦畫を作るや、以て民用を濟ふ、固より卜筮の爲めにして設けしにはあらず、而るに後世その理義を推衍して遂に卜筮の用となすに至る、その卜筮の書たるを以て秦火に免かるゝを得たるなり、さて孔子の雅言せしところは詩書執禮のみ、易を尊びて五經の首に置くは、後世理氣をいふ者の爲すところにして、決して古意にあらざるなり、易の成りしは一人一代にあらず、傳へいふ、伏羲始めて八卦を畫し、因つて之を重ねて六十四卦となす、三代に及びて是を三易となす、夏には連山といひ、殷には歸藏といひ、周には周易といふ、周の文王卦辭を作り、周公又爻辭を作る、周禮に「大卜掌三易之法」とあり、後世に至り、連山歸藏はその傳を失ひ、獨り周易を傳ふ、孔子周易によりて十翼を作る、これ所謂易は四聖に成る者なり、この孔子十翼を作ることは、史記の孔子世家に出づ、然れども宋の歐陽修等之を疑ひ、孔子の作にあらずとなす、蓋し史記に據れば孔子易を好み韋編三たび絶ゆとあり、而れどもその平生門弟子と論ずる所ろ、一も易に及ぶ者なし、論語二十篇中、たゞ「假我數年、以學易、可以無大過矣」の一語あるのみ、且孔子の學統を受くる者、子思孟子の如きも、その書亦絶えて易を說く者なし、故に易四聖に成るの說は、固より徵とするに足らずとするなり、さて十三經に列するは、魏の王弼、晉の韓康伯の注にて、唐の孔穎達の正義なり、また易を讀むには、程伊川の易傳、朱晦菴の本義をも參考すべし、欽定周易折中は新古の易說を折中せしものにて善本なり、淸の惠棟の周易述、發明の說あり互

見すべし、漢志に、易經十二篇とありて、師古曰く、上下經及十翼、故に十二篇なりと、後漢の費直、彖象文言を以て卦中に參入してより、陳元及鄭玄の輩、費氏を學びて、十二篇の易遂に亡し、王弼に至りて、古の編次大に亂る、宋の呂東萊之を嘆じ十二篇の古に復せり、而るに明朝に至り、易傳復亂れたれば、易經は宋時の古本に據るを可とす、なほ左に物徂徠の經子史要覽を抄して參考に供ふ、曰く「易ハ六十四卦、三百八十四爻ニ、文王周公ノ辭アリ、易ヲ學ブハ、陰陽變化ノ道ヲ知ランガ爲メナリ、易ハ變易ノ義ニテ、往來變化ノ名ナリ、抑天地開闢シテヨリ、陰陽ノ二氣往來變化スルコト暫モヤマズ、往來ハ晝夜寒暑ノ如キヲ云ヒ、變化ハ生成榮枯ノ如キ是レナリ、又易ニ數アリ、數トハ物ノ命數ナリ、君子易ヲ學ベバ、命ヲ知リ數ヲ知リ時ヲ知ル故惑フコトナシ、蓍ヲ取リ卦ヲ立テ筮スレバ、事ノ吉凶見エテ疑ヲ決スルコト、卜筮ヲステヽ更ニ他術ナシ、コレヲ今日ノ瑣碎ナルコトニ用ヒタルハ心得チガヘルナリ、天下國家ノ事ニ預リテ、其用重シ、君子之ヲ學ベバ、心ノ疑慮除キ、淸潔ニナリ、動轉スルコトヤミテ靜ニナリ、陰陽變化ノ理ニ達シタルヿニナル、故ニ禮記ニ絜靜精微易之敎也ト云ヒ、繫辭傳ニ聖人以此洗心トイヘリ、莊子ニ易以道陰陽ト、皆易ノ至極ナル言ナリ、君子四術ヲ學ビ成ツテ、易ヲ學ブトキハ、陰陽變化ノ理ヲ知リテ、事ニ惑ハズ、故ニ六經ノ中ニ入レリ、上下經ハ、文王周公ノ辭ナリ、十傳ハ孔子之ヲ述作シ玉フナリ、魏ノ王弼コレヲ注セリ、半ニシテ卒ス、韓康伯之ヲ嗣作セリ、易ノ諸注多シト雖モ、未ダ其旨ヲ得ズ、程カ易傳朱子ノ諸論ハ區々トシテ用フルニ足ラズ」

【益友】 論語に「孔子曰益者三友、損者三友、直ヲ友トシ諒ヲ友トシ、多聞ヲ友トスルハ益ナリ、便辟ヲ友トシ、善柔ヲ友トシ、便佞ヲ友トスルハ損ナリ」註に「直ヲ友トスルトキハ、其ノ過ヲ聞ク、諒ヲ友トスルトキハ、誠ニ進ム、多聞ヲ友トスルトキハ明ニ進ム、便ハ習熟ナリ、便辟ハ威儀ニ習ヒテ直ナラザルヲイヒ、善柔ハ媚說ニ工ニシテ諒ナラザルヲイヒ、便佞ハ口語ニ習ヒテ、聞見ノ實無キヲイフ、三ツノ者損益正ニ相反スルナリ」

【役役】 力を勞する貌、莊子の齊物論に「終身——而不見其成功」

【奕奕】 大いなる貌、詩經大雅に——梁山、維禹甸之」また美しき貌、同魯頌に「新廟——」また憂ふる貌、同小

雅に「未見君子、憂心——」また光のかゞやく貌、北齊書に「眼光——、數步射人」

【腋氣】「ワキガ」典籍便覽に「——一名狐臭マタ猪狗臭ト名ツク」(狐臭)を見よ、

【繹騷】詩の大雅に「徐方——」繹は連絡なり、騷は擾動なり、引き續きて騷がしきなり、

【易簀】簀は簀なり、禮記檀弓の字面、學德ある人の死をいふ(簀ヲ易フ)を見よ、

【嶧山ノ碑】文體明辨に「秦漢以來、始メテ石ニ刻スルヲ謂ツテ碑トイフ、ソレ蓋シ李斯嶧山ノ刻ニ始マルノミ」

【奕秋】古の「ゴ」の名人、孟子の告子上篇に「——通國之善奕者也」

【弈者】「ゴウチ」左傳に「——舉棋不定」基工・基客・棋師・基家・基處士皆同じ、

【益者三樂】論語季氏篇に「————損者三樂、樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友、益矣、樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損矣」三樂の樂は、五敎の反にて「コノム」なり、節は撙節の義にて、程よくして過不及なきなり、人人好む所ろによりて益損を生ずるものなれば、好む所ろは愼まざるべからずとの旨なり、

【易巳ニ東ス】圓機活法に「田何、易ヲ丁寬ニ授ク、寬學成リテ東ニ歸ル、何門人ニ謂ツテ曰ク、易巳東矣」

【奕世】奕は累なり、累世に同じ、國語に「——戴德」奕の字と異り、

【掖庭】宮旁の舍なり、天子の後宮なる室をいふ、また後宮の獄をいふ、漢書百官公卿表に「武帝更名永巷曰——」

【役夫】使役せらるゝ男、轉じて賤むべき者の稱、左傳に「呼——宜君王之欲殺女而立職也」

【醳兵】酒食もて兵士をねぎらふ義(兵ニ醳ス)を見よ、

【掖門】宮殿の正門の兩旁に在る小門を左右——といふ、人の兩腋の如きなり、漢書天文志に出づ、

【驛路ノ鈴聲】驛夫のならす鈴の聲なり、唐の杜荀鶴の詩に「漁舟火影寒燒浪、————夜過山」元經世大典に「凡ソ文書往來ノ卒、革帶ヲ腰ニシ、懸鈴手槍ヲ帶ビ、襆襆ヲ挾ミ、文書ヲモタラシ以テ行ク、夜ハ則チ火炬ヲ持ス、道狹ケレバ、車馬ノ者負荷ノ者、鈴ヲ聞クトキハ則チ遙ニコレヲ旁ニ避ク、夕ハ亦以テ虎狼不若ヲ驚カス云々」大明會典にも「晝夜ヲ分ツコトナク鈴ヲ鳴ラシテ走遞ス、前鋪鈴ヲ聞ケバ、鋪司預メ鋪ヲ出デテ交收ス」

【慧思】南北朝の時の名僧、姓は李氏、魏の南豫州武津の人、年十五にして出家し、人事を謝絕して專ら法華を誦し、日に唯一食するのみ、竟に法華三昧を得たり、漸くにして名聲四方に馳す、齊朝の祚衰ふるに及び、南嶽に入る、九仙觀の道士之を忌み、陳帝に誣奏するに、北僧來りて齊の爲めに閒諜すといふを以てす、帝召し見てその誣なるを知り、道士を誅せんとす、——之を救解し、僧衆の給侍たらしむ、その山に歸らんとする時、帝餞するに殊禮を用ひ大禪師とす、大建九年六月寂す、年六十三、著すところ數種世に行はる、

【會者定離】相會する者は必定また別るゝことあるをいふ、會必有離といふと同義なり、遺敎經に「世皆無常、會必有離」

【惠崇ガ煙雨ノ圖】太平記卷二十四に見ゆ、惠崇は宋の畫僧、錦繡萬花谷に「惠崇建陽人、工畫鵝雁鷗鷺、尤工小景、善爲寒汀煙渚蕭條虛曠之象」

【柯ハ青銅ノ如ク根ハ石ノ如シ】杜甫の古柏行に「孔明廟前有老柏、柯如青銅根如石、霜皮溜雨四十圍、黛色參天二千尺」成都記に「諸葛公ノ廟前ニ雙大柏アリ、古峭愛スベシ」

【越在】越は遠なり、さすらひて遠きに居るをいふ、左傳に「君不撫社稷、——他竟」また寡君失守社稷、——草莽」

【喝死】喝は、あつけにあたる、——は、あつけにあたりて死するなり、漢書武帝紀に「夏大旱、民多——」

【越日】翌日なり、列子に「——謁見王」

【謁スル毎ニ更僕トナル】邵氏聞見錄に「宋ノ韓億、李若谷未ダ第セザル時、俱ニ貧シ、途ヲ同ジウシテ試ニ京師ニ赴ク、共ニ氈一席一アリ、之ヲ割分シ、謁スル毎ニ更僕トナル、後ニ二人皆第ニ登リ仕ヘテ參政ニ至リキ」

【越俎ノ罪】(越俎之罪)己の分を越えて、人の權內にたちいる罪をいふ、莊子の逍遙遊篇に「庖人庖ヲ治メズト雖モ、尸祝樽俎ヲ越エテ、而シテ之ニ代ラズ」尸は、カタシロ」

【越女齊姬】越と齊とは古より美女を產す、枚乘七發に「越女侍前、齊姬奉後、往來游讌、縱恣於曲房隱閉之中、是甘飴毒藥、戲猛獸之爪牙也」女色は性命を伐り亡すところの恐るべきものなりとの戒、

【越鳥南枝ニ巢フ】故鄉の忘れ難きをいふ、文選の古詩に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」の註に「胡馬ハ北ヨリ出デ、越鳥ハ南ヨリ來ル、北風ニ依望シ、南枝ニ巢宿シ

テ、皆舊國ヲ思フ」

【越王勾踐】 周の敬王の二十六年、吳王夫差、越を夫椒に敗る、——餘兵を以て會稽山に棲む、請ひて己は臣となり、妻は妾とならんと、夫差の臣、子胥いふ、不可なりと、太宰伯嚭、越の賂を受け、夫差に說きて越を赦さしむ、勾踐國に反り、膽を坐臥に懸け、即ち膽を仰ぎ之を嘗めて曰く、汝會稽の恥を忘れたるかと、國政を擧げて大夫種に屬し、而して范蠡と兵を治し、吳を謀るを事とす、太宰嚭胥を譖す、謀の用ひられざるを恥ぢて怨望すと、夫差乃ち子胥に屬鏤の劍を賜ふ、子胥其の家人に告げて曰く、必ず吾が墓に檟を樹ゑよ、檟は材とすべきなり、吾が目を抉りて東門に懸けよ、以て越兵の吳を滅すを觀んと、乃ち自到す、夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以てして之を江に投ず、吳人之を憫み、祠を江上に立て、命じて胥山といふ、

越十年生聚し、十年敎訓す、周の元王の四年越吳を伐つ、吳三たび戰ひて三たび北く、夫差姑蘇に上る、亦成を越に請ふ、范蠡可かず、夫差曰く、吾れ以て子胥を見る無しと、幎冒を爲りて乃ち死す、

【越王臺】 越王勾踐の築さし臺の名、唐の竇鞏の南遊感興の詩に「傷心欲問前朝事、惟見江流去不回、日暮東風春草綠、鷓鴣飛上——」とあり、謝疊山の評に「此詩四句無限意思、非巧心妙手不能摸寫」また李白の越中懷古に「越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今唯有鷓鴣飛」この二詩異曲同工といふべし、

【穢土】 佛敎の語、けがれたる世界、また穢國ともいふ、淨土に對していふ、即ち娑婆世界をいふ、

【淮南子】 二十一卷、漢の淮南王劉安撰す、漢書藝文志雜家に、淮南內二十一篇とあるは是れなり、之を鴻烈と名づくるは、蓋し當時贊美の稱なり、漢書の傳に「淮南王安ハ人ト爲リ書ヲ好ミ琴ヲ鼓ス、陰德ヲ行ヒ百姓ヲ拊循シ、名譽ヲ流カント欲シ、賓客方術ノ士、數千人ヲ招致シ內書二十一篇ヲ作爲ス云々」とあり、高誘の舊序に「道德ヲ講論シ、仁義ヲ總統シテコノ書ヲ著ス、ソノ旨老子ニ近ク淡泊無爲、虛ヲフミ靜ヲ守リ、經道ニ出入ス云々」高誘の註善し、

【慧能】 唐の高僧、禪家の第六祖なり、姓は盧氏、南海新興の人、三歲にして父を喪ふ、長ずるに及びて家益貧し、採薪賣鬻して母を養ふ、後ち五祖弘忍に從ひ、遂にその衣鉢を受く、憲宗元和十年敕して大鑑禪師と諡す、

【衣鉢ヲ傳フ】 (傳衣鉢)佛家の語、傳統の義、傳燈錄に「初祖達摩、奉佛衣來東土、得道者付之、以爲眞印、至六祖大鑑、乃置其衣而無傳焉」また語錄に「五祖弘忍、以法寶及所傳袈裟付六祖慧能」とあり、法寶とは、鉢・盂・錫杖なり、轉じて佛法に限らず、弟子が師の法を傳授するをいふ、邵氏聞見錄に「范質進士ニ擧ゲラル、主文(試驗官)和凝ソノ才ヲ愛シテ第十三ノ登弟トナス、質ニ謂ツテ曰ク君ニ老夫ノ衣鉢ヲ傳ヘント欲スト、未ダ幾バクナラズ、和入リテ相トナル、後チ質モ亦相ニ拜セリ」

【醉ヒテ泥ノ如シ】 大醉のさま(泥醉)を見よ、

【曄煜】 盛なる貌、班固の東都賦に「管弦——」

【曄曄】 盛なる貌、漢書敍傳に「世宗——、思弘祖業」また光明の義、

【醉フコトヲ惡ミテ酒ヲ强フ】 (惡醉强酒)孟子に「惡死亡而樂不仁、是猶惡濕而居下也」

【葉適】 字は正則、宋の永嘉の人、淳熙中進士に登り、文學を以て當世に推重せられ、つねに經濟を以て自負す、官實謨閣學士に至り、卒して忠定と諡す、著すところ、水心集等あり、通志の氏族略に葉氏は舊音は攝後世は木葉の葉と同音なりと、

【笑ノ中ノ刀】 夫木集に、衣笠內大臣の歌に「何事を思ひけりとも知られしな、笑の中にも刀やはなき」笑中ニ刀を見よ、

【鴛鴦ノ契】 鴛鴦は「ヲシドリ」鴛は雄、鴦は雌なり、雌雄相離れず、人其の一を得れば、一は相思ひて死すといふ、故に匹鳥といひ、夫妻の相親むに比す、格物論に「鴛鴦ハ文禽ナリ、鳧ニ似テ毛ニ五采アリ」列異傳に「宋康王埋韓憑夫妻、宿夕文梓生、有鴛鴦雌雄各一、恒棲樹上、晨夕交頸、音聲感人」李白の詩に「玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦」また韓偓の詩に「有時閒弄筆、亦畫兩鴛鴦」また李白の句に「猶羨鴛鴦偶」

【袁安】 字は邵公、漢の汝南の人、孝廉に擧げられ、陰平長任城令に除す、所在吏人畏れて之を愛す、河南尹となる、政嚴明と號す、三公となる、漢室中ごろ微に、外戚彊盛なり、朝廷の士、皆——に倚賴して以て重をなす、錄異傳に「大雪地ニ積ム丈餘、洛陽ノ人自ラ出デテ按行ス、安ガ僵臥スルヲ見ル、問フ何ヲ以テ出デザルト、安曰ク、大雪人皆饑ウ、人ニ宜シカラズト、令以テ孝廉ニ擧グ」(倚賴)を見よ、

【宴安ハ酖毒】 左傳閔元年に「諸夏親暱不可弃也、——不可懷也」宴安の禍を以て、酖毒に比するな

り、宴一に燕に作る、酒宴して樂むをいふ、

【奄有】 おほひたもつ義、說文に「奄は覆ナリ、大ニシテ餘リアルナリ、大申ニ从フ、申ハ展ナリ」詩の周頌に「——四方」また書經にも「——四海」

【愆尤】 「トガアヤマチ」李白の句に「自古多——」

【怨尤】 怨みて人をとがむるなり、論語に「不怨天、不尤人」また淮南子に「——充胸、思心盡亡」思は思慕の義、何遜の詩に「方圓既齟齬、貧賤豈——」

【猨狖】 猨は猴の屬、臂長くして善く物に攀援す、故に字援の省に從ふ、和名「テナガザル」狖は「ヲナガザル」一說に黑猿なりと、淮南子に「——失木而擒於狐狸」非其處也」

【奄尹】 宦官なり、寺人に同じ、禁邑月令問答に「——ハ內官ナリ、宮室ヲ主ドリ、宮中ニ出入ス」奄は閹に作る同じ、漢書敍傳に「閹尹之呰」註に「官人ノ閹トナルモノヲイフ、ソノ精氣奄閉シテ洩レザルヲイフ」一解に、門を奄ひ閉づることを主るをいふと(閹人)を參看せよ、

【奄奄】 奄は精氣の閉ぢおさまる義、——は息のたえ〳〵なる貌、李密の陳情表に「氣息——」

【淵淵】 鼓の聲、詩の小雅に「代鼓——」また靜深の貌にも用ふ、

【燕婉】 美人なり、詩の邶風に「——之求、得此戚施」

【燕燕】 安息の貌、詩の小雅に「或——居息」——は、宴々に同じ、

【焰焰滅セズンバ、炎炎ヲ若何セン】 (焰焰不滅炎炎若何)禍患は微細の時に防がずんば、增長しては奈何ともし難きに喩ふ、家語に見ゆ、この下に「涓涓不塞終爲江河」とあり(綿綿ヲ)參看せよ、

【燄燄】 火の盛んに燃ゆる貌、書の洛誥に「無若火始——厥攸灼敍弗其絕」

【轅ヲ北ニシテ將ニ楚ニ適カントス】 楚は南方の國なり、楚にゆかんとして車のながえを北方に向くるは、志と行と背馳するに喩ふ、白居易の詩に「欲望鳳來百獸舞、何異北轅將適楚」また戰國策に「猶至楚而北行也」また荀子に「猶欲之楚而北求之也」とあるも同じ、

【轅下】 轅は車のながえ柄なり、——は車の長柄の下の義、轉じて人の部下となるに用ふ、語林に「我輩皆出其——」

【袁凱】 字は景文、明の華亭の人、元末に府吏となる、博學にして才氣あり、議論飈發、往々座人を屈す、洪武中徵されて御史に拜す、病を以て免歸す、その詩は、杜甫に則ると雖も、未だ其の變化を極めず、只七言絕句は

尤も神に入る、その京師得家書の詩に曰く「江水三千里、家書十五行、行行無別語、只道早還鄉」と、沈德潛評して天籟といへり、

【遠交近攻】 遠邦に親み、近國を伐つをいふ、史記范雎傳に「不如遠交而近攻、得寸則王之寸也、得尺亦王之尺也」

【轅下ノ駒】 車の「ナガエ」の下につながれたる駒の義、書言故事に「局促シテ振ハザル、轅下ノ駒ノ如シ」漢ノ武帝鄭當時ヲ怒リテ曰ク、公、平生數〻魏其武安ノ長短ヲ言フ、今日廷論局促シテ、轅下ノ駒ニ效フ」の註に「駒ハ二歲ノ馬ナリ、駒ノ力小ナリ、車ヲ牽キテ動カズ、武帝鄭當時ヲ怒リテ曰ク、公、平生數〻二人ノ過ヲ言フ、今日對面廷論、何ゾ局促シテ辯論伸ビズシテ、轅下ノ駒ニ效フカト」轅は「ナガエ」その端の橫木を衡といひ、牛馬に駕す、

【烟霞ノ痼疾】 深く山水を愛するをいふ、唐の田遊岩、箕山に隱る、高宗嵩山に幸し、親らその門に至る、遊岩野服して出でて拜す、帝曰く、先生此れ佳なるかと、答へて曰く、臣は所謂泉石膏肓、——者也と、心上を膏といひ、胸膈下を肓といふ、皆藥力の及び難きところ、痼疾は久しくこりかたまりて治すべからざる疾をいふ、

【炎漢】 漢の世をいふ、漢は、火德を以て王たるが故にいふ、

【鹽汗】 汗なり、汗は鹹さが故にいふ、淮南子に「——交流、喘息薄喉」

【燕頷虎頭】 後漢書班超傳に「相者曰ク、生ハ——飛ビテ肉ヲ食フ、此レ萬里侯ノ相ナリト」

【淵鑑類函】 四百五十卷、康熙四十九年敕を奉じて撰す、體例は明の兪安期の唐類函(二百卷)に本づき、諸書を博採し、益すに唐宋元明の詩文事蹟を以てす、その卷數は太平御覽(千卷)の半に及ばざれども、細行密字篇頁繁重なれば載するところの材料は太平御覽より多きこと三の一、實に古今類書の淵海なり、

【阽危】 危に臨む義、漢書の食貨志に「安有爲天下——者、若是而上不驚者」と、また墜んと欲するの意と解す、

【延企】 首をのべ、足をつまだて、遠望する義、曹植の句に「登高丘以——」

【緣起】 俗に神社佛寺の由來を記するを——といふ、——はもと、因緣生起の義なり、因と緣と相憑じて萬法の生起するをいふ、楞伽經第二に「佛說——」

【爰居】 鳥の名、國語の魯語に「海鳥曰ー、止於魯東門之外三日」爾雅の疏に「大馬駒ノ如シ、一名ハ雜縣」

【宴居】 宴は安なり、燕居に同じ、

【燕居】 猶ほ安息の如し、閑暇無事の時をいふ、論語述而に「子之ーー申申如也、夭夭如也」申申は其の容舒やかなる貌、夭夭はその色愉ばしさなり、

【袁宏】 晉の人、字は彥伯、環の從孫、少より逸才あり、謝安の輩之を重んず、累官して東陽郡の太守に至る、著すところ詠史の詩及び東征等の賦あり、時の盛傳するところとなる、

【圓光】 佛菩薩等の頭首に於ける常光なり、觀无量壽經に「項有ーー、而各百千由旬」飜譯名義集に「釋迦世尊ーー一尋、阿彌陀佛光明無量」

【烟火中ノ人】 木食水飲などする仙人に對して、火食する俗人を稱す、

【捐館】 諸侯などの死をいふ、史記蘇秦傳に「奉陽君捐館舍」とあるに本づく、捐は棄なり、住みたる「ヤカタ」をすてゝ他界する義、范睢傳にも「君卒然捐館舍」

【閹官】 內廷の小吏をいふ、宮門の開閉を掌る賤者、また君主に近侍せる小吏なり、後漢書に「所與居者惟ーー而已」(宦官)を見よ、

【寃刑】 むじつの罪にて刑せらるゝをいふ、漢書に「獄亡ーー、邑亡盜賊」

【偃月】 額の骨のさま、貴女の骨相なり、戰國策に「眉目準額權衡犀角ーー彼乃帝王之后、非諸侯之姬也」犀角は首の骨、彼は中山の陰姬を斥す、また後漢書梁后紀に「此所謂日角ーー、相之極貴、臣所未嘗見也」

【淵源】 事の本原をいふ、班固の典引に「斟酌道德之ーーこまた殷浩の字、

【偃蹇】 驕傲なり、おごる貌、左傳哀六年に「彼皆ーー、將棄子之命」また高き貌、離騷に「望瑤臺之ーー分」また衆盛の貌、離騷に「何瓊佩之ーー分」また舞ふ貌、楚辭九歌に「靈ーー分姣服」靈は巫をいふ、

【鳶肩】 肩のあがりそばだてるをいふ、國語の晉語に「叔魚生、其母視之曰、是虎目豕喙、ーー而牛腹」また後漢書に「梁冀爲人、ーー豺目」註に「ーー上竦也」

【淵源出デズンバ當ニ蒼生ヲ如何スベキ(殷浩)を見よ、

【袁彥道】 博奕をいふ、晉書の列傳に「袁耽、字ハ彥道、陽夏ノ人、少クシテ才氣アリ、倜儻不羈、士類ノ爲メニ稱セラル、桓溫少キ時、博徒ト遊ビ、資產俱ニ盡キ、尙ホ負進アリ、自ラ振フノ方ヲ思フモ、出ス所ロヲ知ルナシ、濟ヲ耽ニ求メント欲ス、而ルニ耽、艱ニ在リ、試ニ以テ告グ、耽略難色ナシ、遂ニ服ヲ變ジ、布帽ヲ懷ニシ、溫ニ隨ヒテ債主ト戲ス、耽素ヨリ藝名アリ、債者之ヲ聞イテ、而シテ相識ラズ、之ニ謂ツテ曰ク、卿ハ袁彥道ヲ作スコトヲ辨ゼザルベシト、遂ニ局ニ就ク、俄頃ニシテ、十萬一擲、直チニ百萬ニ上ボル」とあり、艱に在りとは、喪に在るをいふ、

【淵乎】 深くして測るべからざる貌、老子に「道冲而用之、或不盈、ーー似萬物之宗」資治通鑑の黃憲潛德の條の論贊に「ーーー似道」

【轅固】 漢の齊の人、詩を治む、景帝の時、博士となり、廉直を以て淸河王の太傅に拜す、疾を以て免せらる、武帝立ち復賢良を以て徵さる、諸儒多く嫉み毀り、固の老衰せるをいふ、罷めて之を歸す、時に年已に九十餘なり、公孫弘亦徵さる、目を仄てて固に事ふ、固曰く、公孫子、正學を務めて以て言へ、曲學して以て世に阿る母れと、齊の詩を以て顯はるゝ者は、皆固の弟子なり、

【猿猴】 格物論に「猿ハ猴ニ似テ大ナリ、或ハ黃ニ、或ハ黑シ、前臂長シ、土石ヲ踐マズ、身輕クシテ、善ク木ニ緣ル、天氣晴明ナルトキハ長嘯シ、霧雨昏晴ナルトキハ聲ナシ云云」荊州記に「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」抱朴子に「周ノ穆王南征シ、一軍盡ク化ス、君子ハ化シテ猿トナリ鶴トナリ、小人ハ化シテ沙蟲トナル」淮南子に「楚王、養由基ヲシテ猿ヲ射セシム、始メテ弓ヲ調シテ、猿、樹ヲ攀シテ號哭ス」また同書に「置猨檻中則與豚同、非不捷巧也、無所肆其能也」朝三暮四を參看せよ、

【猿猴月ヲ取ル】 猿猴取月)慾の爲めに命をすつるに喩ふ、僧祇律に「佛、諸ノ比丘ニ告グ、過去世ノ時、波良奈城ニ、五百ノ猿猴アリ、樹下ニ井有ルヲ見ル、井ノ中ニ月ヲ見テ、共ニ樹ノ枝ヲ執リ、手尾相接シテ井ニ入リテ月ヲ取ル、枝折レテ一齊ニ死ス」夫木集に土御門院の歌を載せて「月影に命をかふる猿よりも沈みはてぬる我身なりけり」

【圓坐】 「クルマザ」マトヰ(團坐)に同じ、晉書阮咸傳に「大盆盛酒ーー大酌」

【緣坐】 「マキソヘ」書經の疏に「殷周以後、其罪或相ーー」

【淵叢】 淵は魚のあつまる處、叢は獸のあつまる處なり、故に物の多く聚まる所をーーといふ書經に「爲天下逋逃主、萃ーー」叢一に藪に作る、同じ、

【圜鑿方枘】 圓鑿は圓き孔なり、方枘は四角なる柄なり、相合はざるに喩ふ、楚辭の宋玉の九辨篇に「圜鑿而方枘兮、吾固知其鉏鋙而難入」また史記の孟荀列傳

に「持方枘欲内圜鑿、其能入乎」とある註に「戰國ノ時、仲尼孟軻仁義ヲ以テ、世主ヲ干ス、猶ホ方枘圜鑿ノ如ク然リ」とあり、圜は圓に同じ、

【袁粲】 字は景倩、幼にして孤、好みて書を讀む、長ずるに及びて風操あり、嘗て妙德先生傳を著す、宋に仕へ左僕射に至り、出でて石頭城を鎮し、劉僧靜のために殺さる、子の最、身を以て父を衞りて俱に死す、粲最に語りて曰く、我れは忠臣たるを失はず、汝は孝子たるを失はずと、

【鉛槧】 槧は說文に「牘、樸ナリ」鉛を以て樸に書す、猶ほ筆紙と言ふが如し、故に文筆に從ふを、——に從ふといふ、揚雄の書に「懷鉛題槧」一說に槧はしらげ削りたる板にて文字を記するに用ふと、西京雜記に「揚雄懷鉛提槧從諸計吏、訪殊方絕域之語、作方言」

【遠山ノ眉】 うつくしき眉をいふ、西京雜記に「卓文君姣好、眉色不加黛如望遠山」また趙飛燕外傳に、飛燕妹合德爲薄眉、號遠山黛」

【怨咨】 咨は「ナゲク」——ハ「ウラミナゲク」書經の君牙に「夏暑雨、小民惟曰——」

【閼氏】 漢書韓王信傳に「乃使人厚遺——」また史記匈奴傳の註によれば、——は、匈奴の后の號、胭脂の義、胭脂は婦人の採りて、顏色を裝ふ者、故に義を之に取るといふ、

【偃師】 傀儡(デク)なり、列子に「周穆王時、巧人有——者、爲木人、能歌舞、此傀儡之巧至也」また地名、漢書地理志に「河南郡——般湯所都」

【崦嵫】 日の入る所ろの山の名、山海經に「鳥鼠同穴山西南曰——下有虞泉、日所入處」屈原の離騷に「吾令羲和弭節兮、望——而勿迫」註に「日ヲシテ入ラシムルナキナリ」

【燕支】 一に焉支につくる、紅色を取る草の名、古今注に「——西方土人以染紅」また臙脂にも通じ用ふ、また焉支は山の名、史記匈奴傳に見ゆ、

【臙脂】 婦人の假粧に用ひる「ベニ」なり、正字通に「臙脂以紅藍花汁凝脂爲之、燕國所出、後人用爲口脂」胭脂に作る、同じ、

【鹽豉】 味噌または「ナットウ」の類、史記貨殖傳に「——千合」

【鹽州受降城】 白氏文集三の卷に見ゆ、漢の太初元年に築く、匈奴殺を好みて國を伐つ、故に左大都尉漢に降らんと欲すれども、路遠くしてならず、是に於て、漢をして城を築かしぬ、己れ匈奴の君を殺し逃げ入らん事を約せり、漢即ち此の城を築き、受降城と名つく、東中西の三城ありといふ、

【燕子花】 「カキツバタ」葉は「ハナアヤメ」に似て大きく、色淡し、花實共に亦相似て肥大なり、花は紫色なるを常とすれども、白・淺紅等種々あり、夏の半を盛りとす、俗に杜若を「カキツバタ」と訓むは誤りなり、二十四孝の淨瑠璃に「似たりや、似たりや、あやめ、かきつばた」

【袁氏世範】 (世範)を見よ、

【燕室】 燕は安なり息なり、休息の閒をいふ、

【沿襲】 襲は因なり、前例に因り循ふをいふ、禮記に「五帝殊ニ時、不相沿樂、三王異世、不相襲禮」

【閹人】 男兒の勢を去り精氣の掩閉せる者、宮中に仕ふる宦官をいふ、後漢書宦官傳に「中興之初、宦官悉用——、不復雜調他士」

【圓寂】 天竺にて般涅槃といふ、翻して——いふ、眞如法性の覺をいふ、僧の死を稱す、

【燕雀安ンゾ鴻鵠ノ志ヲ知ランヤ】 小人は、英雄の心を知らざるに喩ふ、史記の陳涉世家に「陳涉少キ時、嘗テ人ト傭耕ス、耕ヲ輟メテ壟上ニ之キ、悵恨スルコト久之シテ曰ク、苟モ富貴ナラバ、相忘ルルコト無ケント、傭者笑ッテ應ヘテ曰ク、若傭耕ヲ爲ス、何ゾ富貴ナラント、陳涉太息シテ曰ク嗟呼、燕雀安知鴻鵠之志哉ト」鴻は雁より大にして毛色純白に、頸長く肉美なり「ヒシクヒ」鶴は水鳥、雁より大にして羽毛白く「ツヤ」あり「オホトリ」「ハクテウ」

【閻若璩】 字は百詩、清の太原の人、徙りて山陽に居る、年二十にして尙書を讀み、古文二十五篇に至り、即ちその僞を疑ひ、沈潛すること三十四年、古文尙書疏證八卷を作り以て之を辨ず、反復釐剔、以て千古の大疑を祛る、又地理の學に精しく、四書釋地を著す、地理人名物類訓詁、典制及び經義旁參互證、貫通する所ろ多し、康熙四十三年卒す、年六十九、著すところ、右二書の外に、潛邱劄記・日知錄補正等あり、

【燕雀鳳ヲ生ゼズ】 つまらぬ人によき子は出來ずとの喩、周易參同契に「燕雀不生鳳、狐兎不乳馬」

【鹽車ノ憾】 身の不遇(ふしあはせ)をうらむ義、賈誼の屈原を弔ふ賦に「驥垂兩耳、服鹽車兮」千里の名馬も、駑馬と同じく鹽をはこぶ車をひくとなり、

【槐】 「エニス」の轉訛、木の高さ數丈に至り、葉は排列して藤の葉に似て細く、微白毛あり、夏秋の交、花開く、豆の花に似て白く、やや黃を帶ぶ、後ちに莢をむすぶ、周禮に「三槐ハ三公ノ位ナリ」

【淹恤】 淹は久留なり、恤は憂なり 左傳に「君——在外十二年矣」また「天禍魯國、君——在外」

【燕出】 天子のしのびのみゆき、書敍指南に「天子ノ私行ヲ——トイフ」

【猿狙】 狙も猴の屬、——は「マシラ」莊子に「取——而衣以周公之服」漢書王嘉傳に「多言——之害」

【緣飾】 衣服の領緣あるが如くに、文飾をなすをいふ、漢書公孫弘傳に「——以儒術」

【燕子樓】 妾宅をいふ、書言故事に「唐元和中、張建封鎭武寧、眄々者、徐之奇色、建封納之於燕子樓、後又爲起新樓焉、建封薨、眄々誓不他適」の註に「武寧ハ鎭ノ名、徐州ヲ治ム」奇色はすぐれたる美貌、白氏文集十五卷に——三首竝序あり、參看せよ

【袁隨園】 (袁枚)を見よ、

【遠水ハ近火ヲ救ハズ】 諺に「遠キ親類ヨリ近キ鄰」といへると同意、寶鑑に「遠水難救近火、遠親不如近隣」韓非子に「人ヲ越ニ假リテ、溺子ヲ救フ、越人善ク游クト雖モ、子必生キズ、火ヲ失シテ水ヲ海ニ取ル、海水多シト雖モ、火必ス滅エズ、遠水ハ近火ヲ救ハザレバナリ」

【袁桓】 字は機仲、建安の人、禮部に試みられ、詞賦第一たり、溫州判官に調せらる、淳熙中編修官となり、國史を分修す、故相章惇の家、爲めにその傳を潤飾せんことを求む、桓曰く、吾は史官たり、法、惡を隱さず、寧ろ鄉人に負くとも、天下後世の公議に負くべからずと、時の相趙雄歎して曰く、古の良史に愧づるなしと、後ち右文殿修撰を以て江陵府に知たり、著すところ易傳解義等の書あり、

【燕石】 似て非なる者に喩ふ(魚目——)を見よ、

【掩苒】 奄冉と同じ、吹き靡かすなり、柳宗元の袁家渴記に「毎風自四山而下、振動大木、——衆草」明の高青邱の詩に「芙蓉澤國瀰漫雨、禾黍田疇奄冉風」

【淵潛】 ふかくひそむ、揚雄の句に「懿神龍之——」

【蜿蟺】 蟠る貌、魯靈光殿賦に「虬龍騰驤以——」

【嫣然】 巧笑の態なり、宋玉の好色賦に「——一笑」

【闇然】 深く自ら閉藏する貌、孟子に「——媚於世也者、是鄉愿也」

【偃鼠河ニ飲ムモ、滿腹ニ過ギズ】 人の性分は、自ら定りあるものなれば、各〻其の分に安んずへしとの喩なり、莊子の逍遙遊篇に「鷦鷯深林ニ巢クフモ、一枝ニ過ギズ、偃鼠飲河、不過滿腹」とあり、言ふこゝろは、偃鼠(どぶねずみ)大河に水を飲むと雖も、腹一ぱいよりは飲めず、鷦鷯(みそさゝい)何ほど深き林に巢くふとも、一枝より外は、不用なりとの意、卓氏漢林に「鷦鷯一枝偃鼠滿腹ハ、其ノ以テ自ラ足ルアルヲイフナリ」

【鉛刀ノ一割】 鉛を以て刀となすも尙ほ一割すべし、然れども再び用ふべからず、東觀漢紀に「班超上疏曰、臣乘聖漢威神、冀効鉛刀一割之用」また貞觀政要に「君子小過蓋白玉之微瑕、小人小善、乃鉛刀之一割」有るたけの力を盡して、再び用ふる能はざるに喩ふ、

【延佇】 延は長なり、佇は久しく立つ貌、久しく立ちて望む義「タヾズミトヾマル」楚辭に「——乎吾將反」また「結幽蘭以——」

【怨女】 夫なくして、空しく怨を抱く者をいふ、孟子に「內無——、外無曠夫」曠は空なり妻なき夫をいふ、

【圓通大士】 觀世音の別名、

【鹽鐵論】 十二卷、漢の桓寬撰す、鹽鐵の制は、武帝の時桑弘羊等の行ふ所ろにして民の苦むところたり、昭帝繼ぎて立つに及び、郡國擧ぐる所ろの賢良文學の士、桑弘羊等と、鹽鐵榷酤の事を辯難す、凡そ六十篇、論ずるところは食貨の政に係る、而るに諸史皆この書を儒家に列するは、蓋し古の儒者は、先王の道を述べて經世の實用に資するを主とす、必ずしも心を言ひ性を言ふを以て貴しとせざればなり、伊藤仁齋が殊にこの書を稱揚せしも、その經世の益あるを以てなり、

【閹奴】 閹人に同じ、古は宮門の開閉をつかさどり、又は君主に近侍せる「コモノ」は、宮刑にかゝりし人を用ひたるなり、唐書の顏眞卿傳に「李希烈使——等害眞卿」閹豎ともいふ、同じ、

【圓頭方足】 人の體を形容していふ、淮南子に「頭之圓也、象天、足之方也、象地」

【怨毒】 うらみの甚しきなり、漢書佞幸傳に「立自疑爲長毀譖、常——長」立は王立、長は淳于長、

【炎ニシテ附キ寒ニシテ棄ツ】 勢さかんなる時は、寄りつき、衰ふるときは、棄てゝ顧みざる義にて、人情の薄さをいふ、柳文の宋清傳に「吾觀今之交乎人者、炎而附寒而棄」また鶴林玉露に漢の翟公と、唐の李適之との故事を引きて「蓋炎而附、寒而棄從古然矣」と歎息せり、

【燕ノ幕上ニ巢クフガ如シ】 (猶燕ノ)を見よ、

【蒼馬】 風鈴なり、芸窓私志に「元帝薄玉龍數十枚ヲ作リ、縷線ヲ以テ蒼外ニ懸ケ——ト名ツク、夜中風ニヨリテ相擊ツ、之ヲ聽クニ、竹ト異ナルナシ、民閉之ニナラフ、龍ヲ用フル能ハズ、什駿ヲ以テ代フ、今ノ鐵馬ハ、ソノ遺製ナリ」蒼は檐に同じ、

【袁枚】 字は子才、簡齋と號す、清の錢塘の人、乾隆三年召されて博學鴻詞に試みらる、翌年進士、江甯知縣に官す、年甫めて四十、遂に意を仕官に絶ち、隨園を江寧小倉山下に闢き、詩文を以て自ら樂む、嘉慶二年十一月卒す、年八十二、隨園詩文集・小倉山房集・隨園詩話等の著あり(赤壁)を參看せよ、

【鹽梅】 よきほどに味のかげんをする義、書經の說命に「若作和羹、爾惟ーー」の註に「羹ハ鹽梅ニアラザレハ和セズ、人君美質アリト雖モ、必ズ賢人ヲ得テ、輔ケ導キテ、乃チ能ク德ヲ成ス、羹ヲ作ル者、鹽過グルトキハ鹹ク、梅過グルトキハ酸シ、鹽梅、中ヲ得テ、然シテ後ニ羹ヲ成ス、臣ノ君ニ於ケル、當ニ柔ヲ以テ剛ヲ濟ヒ、左右規正シテ、以テ其ノ德ヲ成スベシ」と、俗に味を調ふるを「アンバイ」といふは、此に本づく、この故事により政事などを料理するにも用ふ、

【延袤】 延は横、袤は縱なり、東西を延といひ、南北を袤といふ、史記蒙恬傳に「ーー萬餘里」

【猨臂】 臂の長さこと猿に似たるをいふ、漢書李廣傳に「爲人ーー、其善射亦天性也」

【鳶尾】 草の名(ーー)を見よ、

【怨府】 怨の聚まる所なり、左傳昭十二年に「吾不爲怨府」また國語に「無大功而欲大祿、皆ーー也」

【演武】 武藝を「ケイコ」する、明の顧其思攬薤遺言に「皇城內、有小敎場、以備ーーー」

【閻浮提金】 梵語に閻浮は樹の名、提は洲なり、佛書にこの洲の上に閻浮樹の林あり、林中に河あり、河底に金砂あり、これをーーーーと名づけ極めて佳品なりといふ、因つて勝金國などの義譯字あり、また閻浮提は佛經に須彌山の南に當りてこの世界の稱とす、一に南贍部洲ともいふ、略して閻浮ともいふ、

【淵謨】 深き「ハカリゴト」立謨に同じ、後漢書寇恂傳贊に「元侯ーー」

【圓木警枕】 書言故事に「苦學シテ寐ルコトヲ忘ル、ヲーーーートイフ、宋ノ司馬溫公、圓木ヲ以テ警枕ヲツクル、纔カニ睡レバ則チ枕轉ジテ覺ム、乃チマタ起キテ書ヲ讀ム」

【閻魔】 一に餤摩と書き、或は閻羅ともいふ(梵語の閻摩羅の下略、或は中略)漢に靜息或は遮止と譯す、能く造惡者の不善業を止むる意なり、佛經に、地獄の王にて亡者の魄を司りて、その行事を賞罰すといふ、

【燕毛】 祭事終りて燕飲するとき、毛髮の色にて長幼を別ち、坐次を定むるなり、中庸に「ーー所以序齒也」齒は年數なり、

【遠昧】 遠方に產するうまき物、尸子に「珍怪ーー」

【轅門】 陣門に同じ、周禮天官掌舍の註に「王者外ニ出ヅル片ハ、車ヲツラネテ藩トシ、車ヲ仰ケ、轅ヲ以テ相向ハシメテ門ヲ表ス、故ニーーートイフ」史記の項羽紀に「召見諸侯將入ーーー」また杜甫の詩に「孤雲隨殺氣、飛鳥避ーーー」

【遠墅】 墅は說文に「郊外ナリ」ーーは遠村に同じ、王維の註に「孤鶯吟ーーー、野杏發山郵」墅は又「シモヤシキ」(別館)の義に用ふるときは音ショ別墅の如し、

【艶冶】 なまめきて美なり、庾肩吾の句に「少婦多ーーー」

【厭飫】 厭は饜に同じ、飫は飽なり、人饜飽するときは、食を欲せず、よりて疎んじ遠ざくる意とす、楚辭に「時ーーー而不用兮、且隱伏而遠身」また心に滿足する義にも用ふ、

【灩澦】 太平記四の卷に「路經ーーー云々」と見ゆ、ーーは水の名、瞿唐峽の口に在り、詩は杜少陵集第十卷に出づ、將赴荆南云々といふ題なり

【婉容】 婉は順なり、柔らかなる容貌、禮記の祭義に「孝子之有深愛者、必有和氣、有和氣者必有愉色、有愉色者、必有ーーー」

【燕翼ノ謀】 駿臺雜話「直諫は一番槍より難し」に見ゆ、後嗣の謀をいふ、詩の大雅文王有聲篇に「詒厥孫謀、以燕翼子」とあるに本づく、詒は遺、燕は安、翼は敬なり、武王の謀、その孫に及べば、子以て事なくして安きをいふ、子は成王なり、

【閻縗】 (閻魔)を見よ、

【延攬】 人を延き招きて其の心を收攬する義、後漢書鄧禹傳に「方今之計、莫如ーーー英雄務悅民心立高祖之業、救萬民之命」と攬は擥に同じ、

【烟嵐】 嵐は山氣の蒸しうるほへるをいふ「カスミ」の如きもの、ーーは烟や山の氣をいふ、賈島の句に「ーー沒遠村」

【淹留】 淹は久しく留まるなり、ーーは久しく滯留する義、楚辭九辨に「塞ーーー而無成」また戰國策に「莊辛謂楚王曰、臣請避於趙ーーー以觀之」

【鶩溜】 「ノキ」よりおつる「シタヽリ」王褒の句に「ーー俯危松」軒溜と義同じ、

【厭離穢土】 佛經の語、娑婆世界の痛苦を厭惡して、出離せんとする義、往生要集に「總有十門、分爲三卷、一ーーーー、二欣求淨土」

【閻立本】 唐の畫家なり、讓の弟、總章の初、右相に拜

し、後ち中書令に改め、爵博陵男に封ぜらる、善く古今の故實、中州の人物を圖繪す、嘗て詔を受けて太宗の眞容を寫し、又秦府十八學士・凌煙閣功臣等の圖を寫し、悉く前古に輝映す、時人妙と稱す、書を善くし文學あり、太宗、侍臣と舟を春苑池に泛べ、異鳥の波上に容與たるを見て之を悅び、坐者に詔して詩を賦せしめ、立本を召して之を狀せしむ、閣外皆畫師と呼ぶ、立本時にすでに主爵郎中たり、池左に俯伏し、丹粉を研吮し、坐者を望みて羞悵流汗す、歸りてその子を戒めて曰く、吾れ少くして書を讀む、文辭儕輩に減ぜず、今畫名を以て厮役と等しうせらる、汝が曹愼んで畫を習ふ毋れと、然れども自ら罷むる能はず、既に政を輔くるに及びて、宰相の器なし、同時、姜恪戰功を以て左相に擢でらる、時に左相宜・威沙漠・右相馳譽丹青の嘲あり、咸亨中卒す、文貞と謚す（以上畫史彙傳に由る）（名下ニ）を參看せよ、

【宛陵集】 六十卷、附錄一卷宋の梅堯臣撰す原本は尙ほ外集十卷あり、今すでに散佚し、別に附錄一卷を增す、歐陽修始め詩文の格を變ずるや、修を佐けて文格を變ずる者は、尹洙・蘇舜卿なり、修を佐けて詩格を變ずるものは堯臣なり、その詩、外槁にして內腴、善く之を學ばざれば、則ち枯淡にして味なきに至る、故に蘇黃嶋起の後、その派を傳ふるもの差稀なり、

【遠慮無ケレバ必ズ近憂アリ】 論語衞靈公篇に「子曰、無遠慮、必有近憂」とあり、凡そ人皆たゞ眼前の安きを見て、輕々しく事をなすときは、必ず旦夕に迫るの憂生ずるをいふ、

【婉孌】 婉は少き貌、孌は好き貌、少年の美好なる者をいふ「ミメヨシ」詩の曹風に「婉兮孌兮總角卯兮」卯は兩角の貌なり、晉書に「昔伯瑜之——兮」

格言四則

察盈虛、故得而不喜、失而不憂（莊子）

見盈丈之尾、則知非跂尺之軀、尋仞之牙、則知非膚寸之口（抱朴子）

越劍性利、非勢礪而不銹、人性誠慧、非積學而不成（劉勰新論）

鉛黛所以飾容、而盼倩生乎淑姿、文采所以飾言、而辯麗本乎性情（文心雕龍）

オヲ

【老イテハ子ニ從フ】 この諺は、儀禮に「婦人有三從之義、無專一之道、故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從長子、故父者子之天也、夫者妻之天也」とあるに本づく、

【老イテハ當ニ益ス壯ナルベシ】 後漢書馬援傳に「少有大志、嘗謂賓客曰、丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯」

【於邑】 煩悶し愁苦する義「モダエウレフ」史記刺客傳に「大呼天者三、卒——悲哀而死、政之旁」政は聶政、

【翁媼】 翁は老いたる男、媼は老いたる女、また老父母をもいふ、蘇軾の句に「菽水媚——」

【甕牖】 「カメ」の口をまどにするをいふ、いぶせき住居の義、莊子に「原憲、環堵ノ室ニ居リ、桑ヲ樞ト爲シ、而シテ甕ヲ牖ト爲ス」禮記にも「蓬戶——」とあり

【翁鬱】 草木の盛んに茂る貌、また雲・霧などの盛んに積む貌にもいふ、魏の文帝の句に「瞻玄雲之——」

【謳歌】 德を稱詠して、これに歸嚮する意なり、孟子に「——者不——堯之子而——舜」とあるに本づく、

【應化】 機に臨みて事を處するために本體をあらためこれに應用すべき異體を出すをいふ、則ち眞より出でたる假體をいふ、西域記に「降迹——爲一老夫」

【應鐘】 十二律の一 また陰曆十月の異稱（十二律）を見よ、

【應接暇アラズ】 山水の景勝多きにいふ、劉義慶の世說に「王子敬云、從山陰道上行、山川自相映發、使人應接不暇、若秋冬之際、尤難爲懷」齋藤拙堂の下岐蘇川記に「交替去來、不暇應接」とあるは蓋しこれに本づく、

【翁仲】 石像又は銅像をいふ、水經に「鄗南千秋亭壇廟東、枕道有兩石翁仲、南北相對」また魏志に「明帝景初二年、鑄銅人二列於司馬門外、號曰——」黃山谷の詩に「往者不可言、古柏守——」書言故事に「塚閒石人曰——」

【滃渤】 雲霧などの氣のさかんに出る貌、郭璞の江賦に「氣——以霧杳」また柳宗元の句にも「氛霧——」

【應門ノ僮】 僮は、ワラハ」の召使なり、取次の「メシツカヒ」をいふ李密の陳情表に「內無應門五尺之僮」

【歐陽修】 字は永叔、晚に六一居士と號す、宋の廬陵の人、仁宗に事へ諫院に知たり、時に杜衍・富弼・韓琦・范仲淹等、政を執り、共に弊政を革めんと欲す、夏竦等

悅ばず、朋黨の論を爲り善類を去らんと欲す、修之を憂ひ、朋黨論を上り、以て邪說を破り、帝を感悟せしむ、奸黨修を忌み、滁州に貶す、その後ち朝に還り、貢舉を知す、痛く時文を抑へ、險怪奇澀の文を爲る者は、輙ち黜く、而して大儒程顥・張載の如き、文才蘇軾・蘇轍・曾鞏の如き、俱に進士の第に中る、是れより場屋の習一變し、宋の文章炳然として古に復す、官を累ねて兵部尚書に至り、後ち太子少師を以て致仕し、熙寧五年薨ず、文忠と謚す、著すところ新唐書・五代史記・集古錄、歐陽文忠公集・六一詩話等あり、

【歐陽修ノ母】 畜德錄に、鄭夫人歐陽修母也、爲贈崇國公妻、崇公舉進士、再任推官卒、修甫四歲、貧自力於衣食供修學、授之書、常雪夜撥寒灰、畫字以教、居恒泣告修曰、而父廉而好施與、吾不及事舅姑、然知汝父之能養也、吾歸於汝父、免喪踰年矣、每祭、必涕泣、或御酒肉、必涕泣、以不及養爲恨、始以爲新免於喪、適然耳、乃其後常然、至終身、亦莫不然、以此知汝父之能養也、汝父爲吏、嘗夜視刑書、屢歎曰、我常求其生而不得、爲可哀耳、回顧乳母抱汝立於傍、指而言曰、吾命宜早夭、恐不及見兒之立也、當以吾語告之、以是知汝父之將有後也、於是修感泣奮學、至舉進士、儉薄依舊、尋以直諫貶、夫人言笑自若曰、貧賤素也、汝必安之、修卒以忠正爲賢相、累封母越國太夫人、

【歐陽詢】 字は信本、唐の臨湘の人、幼にして敏悟人に絕す、書を讀む每に、輙ち數行同く盡く、遂に經史を博貫す、隋に仕へて太常博士となる、唐の高祖の微なりし時、數〻與に遊ぶ、既に位に卽きて累官して給事中となる、詢、初は王羲之の書に倣ふ、後ち遒勁は之に過ぐ、その尺牘傳ふるところ、人以て法となす、貞觀の初、太子の率更令・弘文館學士を歷、渤海男に封ぜらる、卒する年八十五、子の通また書を能くし、父と名を齊うす大小歐陽體と號す、

【甕裡ノ醯雞】 醯雞は甕の中の蟣蠓(サシ)をいふ、莊子の田子方篇に「孔子老聃ニ見エ、出デテ以テ顏回ニ告ゲテ曰ク、丘ノ道ニ於ケルヤ、其レ猶ホ醯雞ノ如キカ、夫子ノ吾ガ覆ヲ發ク微クンバ、吾レ天地ノ大全ヲ知ラザルナリ」成語考に「甕裡ノ醯雞ハ安ンゾ廣見アラン」と、世閒知らずの小人に喻ふ、

【應龍】 翼ある龍、廣雅に「鱗アルヲ蛟龍トイヒ、翼アルヲ——トイヒ、角アルヲ虬龍トイヒ、角ナキヲ螭龍トイヒ、未ダ天ニ升ラザルヲ蟠龍トイフ」

【甌窶滿簒汙邪滿車】 甌窶は高地、狹小の區、汙邪は下地の田なり、高下の田地、みな收穫多くして、簒に滿ち車に滿つるをいふ、史記滑稽傳に「今者臣從東方來、見道傍有穰田者、操一豚蹄・酒一盂而祝曰、——、五穀蕃熟、穰々滿家、臣見其所持者狹而所欲者奢、簒は籠なり、穰は一本に穰に作る、田の爲めに福穰を求むるなり、

【嗚咽】 むせび悲む義、張協の七命に「孀老爲之——」

【尾ヲ搖シ憐ヲ乞フ】 (搖尾乞憐)人の卑屈にして媚を呈すること、狗の所爲の如くなるに喻ふ、韓愈の與韋舍人書に「若俛首帖耳、搖尾而乞憐者、非我志也」司馬遷の與任安書に「猛虎深山ニ在レバ、百獸震恐ス、檻穽ニ在ルニ及ビテハ、尾ヲ搖シ食ヲ求ム」

【尾ヲ塗中ニ曳ク】 神龜は、死して貴ばるゝよりも、生きて其の尾を泥中に曳くことの心安きを喜ぶ、以て仕官して爵祿の束縛を受けんよりは、寧ろ貧賤にして、故鄕に安居するに如かざるに喻ふ、莊子の秋水篇に「莊子濮水ニ釣ス、楚王大夫二人ニ往イテ先ンゼシメテ曰ク、願クハ竟內ヲ以テ累ハサント、莊子竿ヲ持シ顧ミズシテ曰ク、吾レ聞ク楚ニ神龜アリ、死シテ已ニ三千歲ナリ、王巾笥ニシテ而シテ之ヲ廟堂ノ上ニ藏ム、此ノ龜タルヤ、寧ロ其ノ死シテ骨ヲ留メテ而シテ貴バルルヲ爲ルカ、寧ロ其ノ生キテ而シテ尾ヲ塗中ニ曳カンカト、二大夫曰ク、寧ロ生キテ而シテ曳尾於塗中ト、莊子曰ク、往ケ、吾將ニ尾ヲ塗中ニ曳カントス」とあるに本づく、塗は泥なり、

【尾大イナレバ掉ハズ】 (尾大ナレバ)を見よ、

【岡】 說文に「山脊ナリ」詩經の周南に「陟彼高——」また小さき山をいふ、小雅に「如——如陵」

【屋宇ヲ褌衣トナス】 晉書に「劉伶放達、情ヲ酒ニ肆ニシ、出ヅル每ニ、人ヲシテ鍤ヲ荷ヒ、之ニ隨ハシメテ曰ク、死セバ便チ我ヲ埋メヨト、或ハ衣ヲ脫シ裸トナリ、屋中ニ在リ、人見テ之ヲ詰レバ、伶曰ク、我ハ天地ヲ以テ棟宇トナシ、屋宇ヲ褌衣トナス、諸君何スレゾ我ガ褌中ニ入ルト」褌衣は「シタオビ」

【屋烏ノ愛】 (屋烏之愛)その人を愛して、その物に及ぼす義、說苑貴德篇に「武王克殷、召太公而問曰、將奈其士衆何、太公對曰、臣聞愛其人者、兼屋上之烏、憎其人者、惡其餘胥」餘胥は僮僕なり、韓詩外傳にも見ゆ、諺に「坊主ガ憎ケリヤ袈裟マデ憎イ」と云ふ、蓋しこの語を翻案したるなり、この語、六韜には、周公の語とせり、

【屋下ニ屋ヲ架ス】 無益の言論編述をなすをいふ、事文類聚に「王隱論ズ、揚雄ノ太玄、妙ト雖モ益ニアラザルナリ、古人之ヲ屋下架屋ト謂フ、庾仲初、楊都ノ賦ヲ作ル、庾亮親族ノ儂(トモガラ)ナルヲ以テ、大ニ名價ヲ爲シテ曰ク、二京ヲ三ニシ、三都ヲ四ニスベシト、謝太傅曰ク、此ハ是レ屋下ニ屋ヲ架スルナリ、事事擬學ヲ免レズ」

【屋七星ノ如シ】 屋の破るゝこと甚しきをいふ、雲仙雜記に「鄭廣文、屋室破漏、下ヨリ之ヲ望メバ竅七星ノ如シ」

【屋漏ニ愧ヂズ】 屋漏は室の西北隅なり、人なき隱微の閒と雖も、獨を愼みて鬼神に愧ぢざるをいふ、詩經に「相在爾室、尙不愧于屋漏(君子ハ屋漏)を參看せよ、

【汚垢】 「ケガレ」「アカ」儀禮の注に「湯沐所以洗去ー」

【行同ジク能偶ス】 (行同能偶)を見よ、

【行ヒテ餘力アレバ則チ以テ文ヲ學ブ】 論語學而篇に「子曰弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文」人の弟子たる者は、その職事を務め行ひて、なほ餘力あらば、詩書六經の文を學ぶべしとの義、

【傲ハ長ズベカラズ】 禮記の曲禮に「傲不可長、欲不可縱、志不可滿、樂不可極」とあり、傲とは自らほこりて人を侮るをいふ、もと敖に作る、欲とは飮食男女の欲なり、志とは心に願ふ事なり、縱は從に作る、同じ、

【驕ハ物ノ盈テルナリ、老ハ數ノ終ナリ】 十訓抄第二に見ゆ(囚宅ノ)を見よ、

【興ルハ實ニ德ニ在リ】 張載の劍閣の銘に「興實在德、險亦難恃」

【奢ル者ハ心嘗ニ貧シ】 奢を好む者は心に足ることを知らず、故に心つねに貧しといふ、嘗は常に通ず、譚子化書に「奢者心嘗貧、儉者心嘗富」

【驕ル者久シカラズ】 平家物語に見ゆ、老子に「自敖者不長」林希逸の註に「不長不可久也」とあるに本づく、

【斅ハ學ブノ半】 (斅學半)人に敎ふるも亦、わが學を助くるの功は、その學ぶ所ろの半に居るとの義一解に、道のその躬に積もる者は、體の立ちたるなり、學を人に敎ふるは、用の行はるゝなり、體用を兼ね、內外を合して而る後に聖學全うすべし、故に始の自ら學ぶも學なり、終の人を敎ふるも亦學なりと、書の說命に「惟ー念終始典于學厥德修罔覺」禮記の學記にも此の語を引けり、

【敎ヘザルノ民ヲ以テ戰フ】 太平記卷二十二に見ゆ、論語子路篇に「子曰、以不敎民戰、是謂棄之」とあるに本づく、平日敎へざる民を用ひて戰はしむるは、民を棄てゝ死せしむるに同じさ義、

【誨ヘテ倦マズ】 (人ヲ誨ヘテ)を見よ、

【敎ノ民ヲ化スルヤ命ズルヨリモ深シ】 史記の商君列傳に「敎之化民也、深於命、民之効上也、捷於令」

【圹者】 「サクワン」泥工なり、一に圹人ともいふ、韓文に、——王承福傳あり、左傳襄三十一年に「圹人以時塓館宮室」注に「圹人ハ、塗者ナリ」とあり、塗者・塗工・仰塗・泥工・壜匠皆同じ、

【和尙】 梵語鄔波遮迦の轉にて、力出顯と譯す、師之力生長法身、また近誦と譯す、弟子常近受經而誦、佛家にて師の義とす、或は僧位とす、大——は法印に同じく、——は法眼に同じ、

【汚俗】 正しからざる風俗「キタナキナラハシ」書經に「舊染——」

【洿池】 くぼめる地にたまりたる水「タメイケ」孟子に「數罟不入——」

【嘔噱】 嘔は「ムセブ」廣韻に、——は笑ひて止まざるなり、漢書班固敍傳に「談笑大噱」

【乙夜ノ覽】 (乙夜ノ)を見よ、

【於菟】 虎をいふ、左傳の宣四年に「楚人謂乳穀、謂虎於菟、故命之曰鬬穀於菟」とあり、令尹子文は楚の大夫、姓は鬬名は穀於菟なり、乳虎と名つくるは、至猛の義に取る、

【頤ヲ解ク】 (解頤)人をして笑ひて止む能はざらしむるをいふ、漢書の匡衡傳に曰く「衡說詩、解人頤」頤は「オトガヒ」なり、俗に「アゴヲハヅス」といふ、

【頤ヲ、ハナチテ笑フ】 十訓抄第一に見ゆ、甚しく笑ふこと、前の(頤ヲ解ク)に同じ、

【汙瀆】 小さき渠なり、賈誼の弔屈原賦に「彼尋常之ー—兮、豈能容吞舟之魚」また瀆は濁なり、——はけがれにごれる水をいふ、莊子に「我寧遊戲於——之中」

【鬼ノ爲メニ笑ハル】 事文類聚に「宋ノ劉伯龍、位九卿郡守ヲ歷テ、貧窶尤モ甚シ、常ニ家ニ在リテ、慨然タリ、將ニ什一ノ方ヲ營マントス、一鬼傍ニ在ツテ掌ヲ撫デテ大ニ笑フ、伯龍歎ジテ曰ク、貧窮固ニ命アリ、乃チ復タ爲メ鬼所笑ト、遂ニ止ム」とあり、鬼能く命を知る、伯龍の命、終に貧を免る可からず、故に鬼其の利を營

むの徒勞なることを笑ふなり、

【斧ヲ揭ゲテ淵ニ入ル】 物を用ふるにその所を得ざるに喩ふ、淮南子に「以其所修而遊不用之鄉、猶樹荷山上、畜火井中、操釣上山、揭斧入淵」

【各其ノ類ニ從フ】 (各從其類)萬物皆同氣同類のもの互に相從ふをいふ、諺に「類を以て聚る」といふが如し、易の乾卦に「同聲相應、同氣相求、水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩、本乎天者親上、本於地者親下、則——也」また荀子の勸學篇に「施薪若一、火就燥也、平地若一、水就濕也、草木疇生、禽獸群、物——也」

【斧ニテ佛骨ヲ碎ク】 五代史、趙鳳傳に「僧アリ西域ニ遊ビ佛牙ヲ得テ以テ明宗ニ獻ズ、以テ大臣ニ示ス、鳳イフ世ニ傳フ、佛ハ水火モ傷クル能ハズト、請フ其ノ眞僞ヲ驗セント、因テ斧ヲ以テ之ヲ斫ル、手ニ應ジテ而シテ碎ク、是時ニ方リ、宮中ノ施物已ニ數千ニ及ブ、鳳ガ之ヲ碎クニ因リテ乃チ止ム」

【己ヲ屈ス】 己の守るところのみさをを折りかゞめて人に從ふをいふ、孔叢子に「與屈己以富貴、不若抗志以貧賤、屈己則制於人、抗志則不愧於道」

【己ヲ虛ウス】 (虛己)任俠列傳に、「人ト爲リ淳粹愷悌、己を虛ウシテ足ラザルガ如ク、恭敬ニシテ畏ルヽ有ルガ如シ、其ノ德ヲ修メ義ヲ履ム、皆沉默シテ酒行ス」

【己ガ善ヲ恃ミテ人ノ仁ニ服セザル勿レ】 皮日休の耳箴に「勿恃己善、不服人仁、勿矜己藝、不敬人文」

【己ガ長ニ伐ラズ】 (不伐己長)北齊書の陸卬傳に「不說人短、——」崔子玉の座右銘に「無道人之短、無說己之長」

【己達セント欲シテ人ヲ達セシム】 己の遂げ達せんと欲しては人をも遂げ達せしむる義、論語雍也篇に「夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人」己この心あり、流出して自然に人に及び、人と己との閒なきは仁者の心なり、

【己ニ克チテ禮ニ復ル】 論語に「顏淵問仁、子曰、克己復禮爲仁」の註に「仁トハ本心ノ全德、克ハ勝ツナリ、己ハ身ノ私欲ヲイフ、復ハ反ルナリ、禮トハ天理ノ節文ナリ、仁ヲ爲ルハ、其ノ心ノ德ヲ全クスル所以ナリ、蓋シ心ノ全德、天理ニアラザルナシ、而モ亦人欲ニ壞レザルコト能ハズ、故ニ仁ヲ爲ル者ハ、必ズ以テ私欲ニ勝チテ禮ニ復ルコト有ルトキハ、則チ事皆天理ニシテ、本心ノ德復タ我ニ全シ」

【己ニ如カザル者ヲ友トスルナカレ】 (無友不如己者)論語學而篇に見ゆ、孔子の語、友は仁を輔くる所以なれば、己より劣れる者に交るも、些の益をも受くることなし、故にいふ、

【己ノ欲セザル所ロハ、人ニ施ス勿レ】 己が欲し望まざることは、人も亦欲し望まぬものなれば、己が欲せぬ所ろの事は、他人に施し及ぼすこと勿れとの義、論語顏淵篇に「仲弓問仁、子曰、出門如見大賓、使民如承大祭、己所不欲、勿施於人、在邦無怨、在家無怨、仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語」

【終ヲ愼ムコト、始ノ如クナレバ、則チ敗事ナシ】 すべての事は、幾んど成らんとする際に、敗るゝものなり、終を愼むこと、始の如くして、始より終に至るまで、油斷せざれば、敗事なしとの義、老子に「民之從事、常於幾成而敗之、愼終如始、則無敗事」

【御鬚ノ塵ヲ拂フ】 (鬚ヲ拂フ)を見よ、

【汗鰻】 漢の高五王傳に「——宗廟」の注に「汗ハ血ナリ、塗染スルナリ」と、血にてけがす、

【多ク年所ヲ歷タリ】 (多歷年所)多く年數を經たるをいふ、所は助語、書經に「配天——」また張衡の西京賦に「——二百餘期」

【覆ヒテ外ナキハ天ノ德ナリ】 (覆而無外、天之德也)太平記の序に見ゆ、孝經注に「夫覆而無外者、天也、其德無不在焉、載而無棄者、地也、其物莫不殖焉」とあるに本つきて、君をば天に比し、臣をば地に譬へたるなり、

【恩ヲ百姓ニ結ビ、禮ヲ鄰國ニ修ム】 孔叢子に「結恩百姓、修禮鄰國」國を治むる者、この言を實行せば、國家は長へに隆なるべし、

【溫溫】 寬緩和柔なり、「ユルヤカニ、オトナシ」詩の大雅に「——恭人、維德之基」

【恩假】 假は暇に同じ、休暇をめぐみ賜はるをいふ、宋史に「蒙賜——」

【音耗】 音信をいふ(息耗)を見よ、

【溫恭】 溫和にして恭遜なるをいふ、弟子職に「先生施教弟子是則、——自虛、所受是極」

【恩光】 春暖に逢ひて雨露の恩を蒙るをいふ、黃山谷の詩に「桃李終不言、朝露借——」また君主の恩を受くるにも用ふ、王惲の詩に「百年蓬巷開圭竇、一日——照士林」

【溫克】 詩の小雅に「人之齊聖、飲酒——」醉ふと雖も、猶ほ蘊藉自ら持して含容し、酒の爲めに困せざるをいふ、溫は蘊に通ず

【溫故知新】 (故ヲ溫ネテ)を見よ、

【溫造】（溫處士）を見よ、

【溫史】資治通鑑をいふ、司馬溫公の著なればなり、

【溫柔】おだやかに、やはらかなる義、禮記經解に「——敦厚詩敎也」

【溫柔鄉】あたたかくやはらかなるさとの義、また美人或は花柳の巷などの稱、銷金窩、———などと用ふ、錦字箋に「合德入宮、帝大悅、以輔屬體無所不廉、謂之———、曰吾老是鄉矣、不能效武帝更求白雲鄉也」

【醞藉】醞一音ウンその醞釀の如くなるをいひ、藉は憑藉する所ろあるなり、漢書薛廣德傳に「廣德爲人溫雅有———」と、その寬博重厚なるをいふ、醞或は溫に作る同じ、一解には——は包容する所ろあるをいふ、

【醞釀】よく和調する義、淮南子に「相嘔咁——、而成育萬物」

【溫書】「サラヘヨミ」復習すると、會典に「遇——日免」

【溫授新書】

【溫處士】唐書溫大雅の傳に「名ハ造、字ハ簡興、王屋山ニ隱ル、人ソノ居ヲ號シテ、處士墅ト曰フ、張建封ノ節度參謀ト爲リ、幽州ニ使シ、復去ツテ東都ニ隱ル、烏重胤奏シテ幕府ニ置ク」詳しくは本傳を見よ、韓退之に送——赴河陽軍序あり、參看せよ、

【溫凊】父母に事ふるの禮、溫は冬日あたゝめてその寒を禦ぎ、凊は夏日すゞしくして涼を致すをいふ（定省溫凊）を見よ、

【溫泉】博物志に「凡水源有石硫黃、其泉則溫（驪山ノ）」を見よ、

【溫玉ノ如シ】（溫如玉）君子の德の美なるに喩ふ、性の純粹なるを溫といふ、詩の秦風に「溫其如玉」また禮記に「子貢問於孔子曰、敢問、君子貴玉而賤珉者何也、爲玉之寡而珉之多歟、孔子曰、非爲珉之多故賤之也、玉之寡故貴之也、夫昔比德以玉焉、詩云言念君子溫其如玉」

【溫庭筠】字は飛卿、唐の幷州の人、彥博の裔孫、少くして敏悟、辭章に工なり、李商隱と遊び稱せられ、溫李と號す、賦を作るに八たび手を叉して八韻成る、然れども行に薄く、多く側體艷曲を作る、數〻擧げらるれども、第せず、後ち上書して方山尉を授けらる、

【音ト政ト通ズ】太平記卷十三に見ゆ、禮の樂記に「治世之音、安以樂、其政和、亂世之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困、聲音之道與政通矣」とあるに本づく、

【穩婆】一に穩媼ともいふ「トリアゲババ」をいふ、鄉談正音に「鄉曰生婆、正曰———」坐婆、收生婆など、皆同じ、

【溫八叉】（八叉手）また（溫庭筠）を見よ、

【恩甚シケレバ怨生ズ】亢倉子に「恩甚則怨生、愛多則憎至」

【溫和】「オダヤカ」宋史に「性——、頗能延譽時儁」また氣候のあたゝかなる義、漢書に「地——田美」

【重キヲ負ヒ遠キヲ涉レバ地ヲ擇バズシテ休フ】孔子家語致思篇に「子路孔子ニ見エテ曰ク、負重涉遠不擇地而休、家貧親老不擇祿而仕」また說苑の建本篇にも見ゆ、文少しく異れり、

【思內ニ在レバ必ズ外ニアラハル】（思有於內、必形於外）淳于髡の語、大學に「誠於中、形於外」とあるも同じ、平兼盛の歌に「忍ぶれど色に出にけりわが戀は、物やおもふと人のとふまで」

【思ヲ覃クス】（覃、思）思を深くめぐらす義、漢書揚雄傳に「大潭思渾天」師古曰く「潭ハ深ナリ」と、潭覃同じ、

【思疆リナシ】（思無疆）思ふことの深廣にして、窮りなきをいふ、詩經に「——レ——思馬斯臧」臧は善なり、

【思ヒテ服セザル亡シ】（亡思不服）德を慕ひ思ひて、歸服せざるなき義、詩經に「自東自西自南自北、——

——レ——」とまた漢書平帝紀に「方外百蠻、———」

【思半ニ過グ】（思過半）思考して自ら得る所ろ多きをいふ、易の繫辭に「知者、觀其彖辭、則———矣」

【思邪ナシ】誠心にして、曲がる所ろなきなり、詩經に「思無邪、思馬斯征」とあり、また論語に「子曰詩三百、一言以蔽之曰、思無邪」詩は三百十一篇あり、三百といふは、大數を擧ぐるなり、

【思フコト其ノ位ヲ出デズ】處る所ろの分を踰えざるをいふ、易の艮卦に「君子思不出其位」註に「物各ヽソノ所ヲ得テ、天下ノ理得ルナリ」

【虞カラザル譽】（不虞譽）その行、譽を致すに足らずして、偶然得たる譽をいふ、孟子に「有不虞之譽有求全之毀」

【親】父母をいふ、孝經に「夫孝始事于親、賈島の句に「携妻去養親」また曹植の句に「綵衣以娛親」また廣く姻戚血屬の者をいふ「ミヨリ」六親は父母兄弟妻子をいふ、東觀漢記に「南陽帝鄉多近親」の近親は近き「ミヨリ」禮記に所以勸親親也」は「ミヨリ」の者を親む義、後者の塲合には、シンと音讀するを可とす、

【親ヲ愛スル者ハ、敢テ人ヲ惡マズ】孝經に「愛親者不敢惡於人、敬親者不敢慢於人」

【親ヲ寧ンズ】（寧親）兩親を安んずる義、揚雄の語に「孝莫大於寧」親、歐陽修の文に送田畫秀才寧親萬州序あり、八家文に見ゆ、

【汙萊】萊は草穢なり、——は荒蕪の義、卑き所は、水たまり、高き所は草萊となるをいふ、詩の小雅に「田卒——」

【汙吏】心きたなく、よこしまなる役人、孟子に「暴君——、必慢其經界」

【汙隆】説文に「汙ハ衰下ナリ、凹ナリ、隆ハ起ナリ、盛衰の義、檀弓に道隆從隆、道汙從汙」の註に「隆アリ殺アリ、進退禮ノ如クス」とあり、汙は窊に作る、同じ、

格言九則

正レ己而不レ求二於人一則無レ怨（禮記）

修レ己而不レ責レ人則免二于難一（左傳）

敎本乎君子、小人被二其澤一、利本乎小人、君子享二其功一（文子）

慮不二先定一不レ可二以應一卒、兵不二先辨一不レ可二以勝一敵（史記仲尼弟子列傳）

瘖者不レ言、聾者不レ聞、豈獨形骸、哉、心志亦有レ之（淮南子）

行合趣同、千里相從行、行不レ合趣不レ同對レ門不二相通一（同上）

殺レ重而馬羸、難二造父一不レ能二以致一遠、車輕馬良、難二中工一可レ使二追速一（同上）

凡爲レ文以レ意爲レ主、以レ氣爲レ輔、以二詞采章句一爲二之兵衛一（杜牧語）

凡學之道、嚴レ師爲レ難、師嚴、然後道尊、道尊然後民知レ敬レ學（禮記）

カ

【蚊】「ボウフリ」の羽化したる蟲、聞見錄に「歐陽公イフ、予憎蒼蠅賦ヲ作ル、蠅憎ムベシ、マタ蚊子ノ遠キヨリシテ嚶喝シ來リテ人ヲ咬ムニ堪ヘザルナリ」と、東坡志林に「湖州蚊多シ、ソノ中豹脚ノ者アリ、尤モ毒アリ」と、黃山谷の詩に「半夜蚊雷起、西風爲解紛」と、莊子に「蚊蝱膚ヲ嗜セバ、則チ通宵寢ネラレズ」と、古今注に「蚊ヲ呼ビテ黎民トナス」と、漢の中山靖王曰く「衆响漂山、聚蚊成雷」と、莊子に「以蚊負山、言不勝任也」と（蚊ヲ驅ラズ）を見よ、淸の黃中堅の詠蚊詩に「斗室何來豹脚蚊、殷如雷鼓聚如雲、無多一點英雄血、閑到衰年忍付君」

【笳】廣韻に「北方ノ人、蘆葉ヲ卷キテ吹クヲ一トイフ」かなしき聲するによりて悲笳ともいふ、杜甫の詩に「胡笳在樓上、哀怨不堪聞」

邊上聞笳　杜牧

何處吹笳薄暮天、寒垣高鳥沒狼煙、遊人一聽頭堪白、蘇武爭禁十九年、

【夏】禹は姓を姒、名を文命といふ、舜の禪を受けて、夏の始祖となり、都を安邑（山西省解州）に定む、禹洪水を治めて艱苦を嘗めたりしかば、奢を去り儉を主とし宮室を卑くし飲食を非くし、人民を休養せり、禹崩じてその子啓立つ、啓崩じて子太康立つ、太康盤遊を好み洛水の表に畋して久しく反らざりしかば、有窮の后羿之を河に拒ぎ、その弟仲康を立てゝ諸政を專にす、後ち仲康崩じて子相立ち都を商邱（河南省歸德府商邱縣）に移したりしが、羿遂に自立して帝位に上れり、すでにしてその嬖臣寒浞また羿を逐ひて自立し、帝相を弑せり、帝相の后は有仍國君の女なり、時に姙めるあり、有仍に走りて少康を生む、少康長じて舊臣靡と共に寒浞を亡し、遂に禹の舊蹟に復せり、蓋し帝相の位を失ひしより此に至るまで四十餘年なりといふ、少康の子王杼の時、三壽の國（山東省莫州府維縣）を征し、夏の勢稍盛なりしが後ち十一傳して帝履癸（桀と謚す）に至り貪虐にして、勇力あり、有施氏の女末喜を寵し、宮室を作り園池を營み、日夜酒色に耽りしかば、人民大いに怨望するに至り、終に成湯のために南巢に放たれて國亡ぶ、夏は凡そ十七世四百餘年を經たり、

【鵞】 格物論に「ーニ蒼白ノ二色アリ、綠眼黄喙紅掌ナリ」と、爾雅に「一名ハ舒雁、今江東ノ人、之ヲ鴨ト呼ブ、善ク鬪フ、好ミテ蛇ヲ啖フ、溪毒多キ處、此ヲ養ヒ以テ之ヲ辟ク」と、晉書に「王羲之、性ーヲ愛ス、山陰一道士アリ好ーヲ養フ、羲之往イテコレヲ觀テ、意甚ダ悅ビ、固ク之ヲ市ンコトヲ求ム、道士イフ、我ガ爲メニ道德經ヲ寫サバ當ニ群ヲ擧ゲテ相贈ルベキノミト、羲之寫シ畢リテ、ーヲ籠ニシテ歸リキ」

【何晏】 字は平叔、三國の時の宛の人、進の孫、魏の公主に尙す、姿容に美なり、少くして才の秀でたるを以て名を知らる、曹爽引きて散騎侍郎と爲す、侍中尙書に遷り、爵列侯を賜ふ、晏、夏侯玄等と、競うて淸談をなし、天下の士大夫之を慕ひ、遂に流風を成して復制すべからず、

【戒】 文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ云フ、戒ハ警勅ノ辭ナリ、字モト誡ニ作ル、文既ニ箴アリテ、而シテ又戒アレバ、則チ戒ハ箴ノ別名ナルカ、淮南子ニ、堯ノ戒ヲ載セテ曰ク、戰戰慄慄日謹一日、人莫レ躓於山、而躓於垤ト、漢ノ杜篤ニ至リテ、遂ニ女戒ヲ作ル、而シテ後世之ニ因ル」

【解】 文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ、解ハ釋ナリ、人疑アルニ因リテ、之ヲ解釋スルナリ、揚雄始メテ解嘲ヲ作リ、世遂ニ之ニ倣フ、其ノ文疑惑ヲ辨釋シ、紛難ヲ解剝スルヲ以テ主ト爲ス、論說議辨ト蓋シ相通ズ」

【父安】 父は治なり、おさまりてやすらか、史記に「諸夏ーー」

【介意】 介は「サシハサム」ーーは、こゝろに挾みもつ義にて、氣にかけると、後漢書に「所亡少々、何足ーレーー」

【解頤】 (頤ヲ解ク)を見よ、

【嘉猷】 猷は道なり、謀なり、ーーはよきはかりごと、書經の君陳に「爾有嘉謀ーー、則入告爾后于內、爾乃順之于外、曰斯謀斯猷、惟我后之德」

【咳嬰】 咳は小兒の初めて笑ふをいふ 孩に作る、同じ、嬰は「ミドリゴ」ーーは二三歲の幼兒をいふ、史記扁鵲傳に「不可以告ーーー之兒」

【海翁鷗ヲ好ム】 列子に「海上ノ人、鷗鳥ヲ好ム者アリ、每旦鷗鳥ニ從ヒテ遊ブ、鷗至る百數、ソノ父曰ク、取リ來レ、吾玩バント、明日海上ニ之クニ、鷗舞ウテ下ラザリキ」と、人機心あるときは、鳥類もそれを知りて近づかざるものなりとの義、李商隱の大倉箴にも「海翁忘レ機、鷗鳥不レ飛、海翁易レ慮、鷗鳥飛去」機心とは、心中の一念纔かに動くをいふ、

【害ヲ賈フ】 (賈害)自ら禍を賈ふをいふ、左傳の桓十年に「虞叔玉アリ、虞公コレヲ求ム、獻ゼズ、既ニシテ之ヲ悔ユ、曰ク、周ノ諺ニ之アリ、匹夫罪ナシ、璧ヲ懷ケバ其レ罪ト、吾焉ゾ此ヲ用ヒテ、其レ以テ害ヲ賈ンヤト、乃チ之ヲ獻ズ」とあり、虞叔は虞公の弟、賈は賈なり、

【骸ヲ乞フ】 (乞骸)致仕するをいふ、歐陽修の詩に「何時乞ー殘骸」(骸骨)を見よ、

【凱歌】 凱一に愷に作る、軍樂なり、司馬法に「得意則愷歌示喜也」戰勝ち得意にして還るときに、奏するに、愷歌を以てするは、喜を示すなり、成語考に「戰勝ッテ而シテ回ル、之ヲ凱旋トイフ」禁邑の禮志に「黃帝岐伯ヲシテ軍樂ーーヲ作ラシム」「カチイクサノウタ」

【介介】 心明かにして、世と容れざる貌 猶ほ耿耿の如し、後漢書馬援傳に「ーーー獨惡是耳」

【偕偕】 强く壯なる貌、詩經の小雅に「ーー士子、朝夕從事」

【喈喈】 鳥の和ぎ鳴く聲の遠くきこゆるをいふ、詩經の周南に「黃鳥于飛、集于灌木、其鳴ーー」一說に鳳凰の鳴聲をいふと、また鐘鼓の聲の淸くとゝなう貌、詩經の小雅に「鼓鐘ーー」

【皚皚】 說文に「霜雪ノ白キヲイフ」と、漢の劉歆の遂初賦に「漂積雪之ーー」杜甫の晚晴詩に「崖沈谷沒白ーーー」皚は一音キ義同じ、

【海函】 函は讀んで含に同じ、廣く含容する義、答賓戲に「函之如海、養之如春」また函は涵に作る、義同じ、物を容るることの極めて廣き義、王僧孺の句に「陛下海涵」成語考に「人ノ包容ヲ望ムヲ、海涵トイフ」

【解顏】 (顏ヲ解ク)を見よ、

【崖岸】 水のがけの高きところをいふ、轉じてきはだちて他に異なりたる行をいふ、また高ぶり傲る義にも用ふ、唐書に「鄭群天性和樂(中略)不爲ーー崭絕之行」一解にーーは物に和せざるをいふと、

【開基】 佛寺を創開する義、またその人をもいふ、開山に同じ、景福殿賦に「儲天地以ーー、竝列宿而作制」

【諧謔】 「オドケル」諧は言語の意淺くして世俗にかなひ、聞きておもしろく感ずる義、謔は戲言なり、晉書の顧愷之傳に「愷之好ーーー、人多愛狎之」

【介居】 介在に同じ、左傳襄九年に「天禍鄭國、使ーーー二大國之閒」また介は特なり、たすけなくして獨り居る義、史記張耳陳餘傳に「獨ーーー河北」

【開卷益アリ】 (卷ヲ開ケバ)を見よ

【蓋棺事定マル】（人事棺ヲ）を見よ、

【開結二經】無量義經を、法華開經といひ、普賢觀經を法華結經といふ、

【改元】元年を改むる義、事物紀原に「史記ノ秦ノ本紀ニ曰、惠文王十四年、更爲元年（中略）改元之始、由秦惠王也」

【開眼】佛家にて、佛像落成の時に行ふ式、

【開元】基を開く義、東都賦に「夫大漢之開元也、奮布衣以登帝位」

【戒嚴】凡そ強敵將に至らんとして備を設くるを——といひ、敵退きて備を弛ぶるを餘嚴といふと正字通に見ゆ、嚴も亦きびしく戒むる義、唐書に「京師——

【解嚴】「ヨウジン」をやむると、正字通に「敵退稍弛備曰——」

【開元天寶遺事】四卷、五代の王仁裕撰す、仁裕初め蜀に仕へて翰林學士となる、蜀の亡後、長安に寓し、民間に傳ふるところの唐の玄宗の時の遺事記を得て、この書を作る、凡そ一百五十九條、洪邁の容齋隨筆に、その實を失する者四事を摭したれども、この書固より小說家の言、一一責むるに事實を以てすべからず、

【開元禮】百五十八卷、唐の蕭樞著す、開元は唐の玄宗の年號、

【海賈】「フナアキウド」舶商に同じ、草木子に「嘗聞——云、南海時有海人出、形如僧人」

【開講】講義はじめ、南史の臧盾傳に「大通五年、帝幸同泰寺——」

【邂逅】不意にてあふこと、詩の鄭風に「野有蔓草、零露漙兮、有美一人、清揚婉兮、——相遇、適我願兮」註に「漙ハ露多キ貌、清揚ハ眉目ノ閒、婉然トシテ美ナリ、——トハ、期セズシテ會スルナリ」

【解骨】解體に同じ、人人離れ叛くをいふ、國語に「忠臣——」

【骸骨ヲ乞フ】老臣の辭職を乞ふをいふ、既に老いて無用の人なるを以て、骸骨に喩ふ、史記の項羽紀に「范增大ニ怒ツテ曰ク、天下ノ事大定矣、君王自爲之、願賜骸骨歸卒伍」とあり、書言故事に、骸骨を乞ふとは、致仕を乞ふなり、骸骨をして歸つて鄉土に葬らしむるなり、また趙充國傳に「充國乞骸骨、賜安車駟馬黃金六十斤、罷就第」

【解語ノ花】美人を稱する詞なり、天寶遺事に「唐ノ太液池ニ、千葉ノ白蓮開ク、明皇妃子ト共ニ賞ス、妃子ヲ指シテ左右ニ謂ツテ曰ク、何ゾ此ノ解語ノ花ニ如カンヤト」明皇は玄宗にして、妃子は楊貴妃なり、

【解菜】「精進オトシ」なり、野客叢書に「今人久茹素、而其親若隣、設酒肴之具、以相煖熱、名曰開葷、於理合曰——、此風已見六朝云々」

【睚眥ノ怨】目を張りて忤ひ視る所ろの少しの怨、史記范雎傳に「一飯之德必償、睚眥之怨必報」また漢書杜欽傳に「信其邪辭報——」睚眥は眦に同じ、マナジリ」

【海參】俗に煎海鼠と書く「ナマコ」の腸を去りて、煮て乾したるもの、再び水に浸して煮て食ふ、一名「ホシコ」

【改竄】竄も改め易ふる義、——は、詩文などの字句を改め易ふるをいふ、韓愈の詩に「潰墨竄古文」晉書に「無所——」

【崖山】廣東省新會縣の南、海灣中に在り、奇石山と相對立し相扉の如く、潮汐の出る所なり、故に鎭戍あり、張世傑おもへらく、天險扼して以て自ら固うすべしと、帝を奉じて移り駐まり、戰敗れて宋亡ぶ、

【海參威】浦鹽斯德を支那にて呼ぶ名、亞細亞魯西亞の要港にして朝鮮との國境に在り、原語の意は東海王の義なりといふ、冬期は嚴寒にして毎年氷結すると三月に及ぶといふ、

【戒指】「ユビワ」なり、俗に金銀を用ひ環となし指間に貫く之を——といふ、按ずるに詩の註に、古、后妃群妾禮を以て君に進御す、女史其の月日を書し、之を授くるに環を以てし、以て之を進退す、子を生む月辰は、金環を以て之を退け、御に當る者は、銀環を以て之を進め左手に著く、既に御する者は右手に著す、また之を手記といふ、事大小と無く、記するに成法を以てす、則ち——手記の名、其の來る久し、

【海市】水蒸氣の作用によりて城市山川人物等を空中に現出せしむるをいふ、三齊略記に「海上ノ蜃氣、時ニ樓臺ヲ結ブヲ——ト名ヅク」（蜃氣樓）を見よ、

【開士】菩薩をいふ、開は達なり、明なり、士は士夫なり、釋氏要覽に「經中多呼菩薩爲——」祖庭事苑に「應法師云梵語菩薩此言——、謂以法開導之士」

【解縉】字は大紳、明の吉水の人、幼にして穎悟人に絕す、洪武中進士に擧げられ、選ばれて庶吉士となる、嘗て翰林學士となる、凡そ大制作、成その手に出で、毎に密議に預る、後ち出でて廣西參議となり獄に卒す、平生義を重んじ利を輕んじ、喜んで士類を引拔す、襟宇闊略、詩文を爲るに、皆豪放にして、草書尤も精絕なり、

【海若】 海の神をいふ、楚辭に「令——舞馮夷」莊子秋水篇に「河伯向若歎」の註に「若ハ——ヲイフ、海神ナリ」

【海澨】 海の水際をいふ、澨の字、水際をいふとさは音ゼッを正とす、江淹の擬古詩に「且汎桂水湖、映月遊——」

【蓋世ノ氣】 氣象たかくして、一世を蓋ふをいふ、史記の項羽本紀に「項王乃チ悲歌慷慨シテ、自ラ詩ヲ爲リテ曰ク、力拔山氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」文選の夏侯湛の、東方朔畫賛にも「雄節邁倫、高氣蓋世」

【海嘯】 宋史五行志に出づ「ソナミ」なり、泊宅編に「海溢、マター——トイフ」

【介石】 類書纂要に「介石トハ、自ラ守ルノ固ヲイフ、其ノ介ナルコ石ノ如シ」と、易の豫の卦に「六二介于石」とあるに本づく、介は堅確の義、

【開說】 申しあぐる義、啓白に同じ、史記曹相國世家に「終莫得——」

【剴切】 剴も亦切なり、適切にして懇ろに、よく當はまるなり、唐書魏徵傳に「徵展盡底蘊、無所隱、凡二百餘奏、無不剴切當帝心者」

【抗辭】 「ヒゼン」以て外忠の微なる者に喩ふ、國語に「今王非越是隣、而齊魯以爲憂、夫齊魯皆諸侯、——也」

【開船】 「フナデ」星槎勝覽に「自大倉劉家港——」俗の出帆の義なり、發船ともいふ、開舟に同じ、

【慨然】 いきどほりなげく貌、慷慨のさま、また志の成らざるを歎ずる貌、後漢書に「——恥、在厮役」また憂ひ悼む貌「ウレタム」

【凱旋】 凱は戰勝の時に奏する樂なり、周禮に「令奏凱樂」また「カチドキ」をあげて歡呼する義、劉克莊の詩に「六軍張、凱聲如雷」——は戰勝ちて凱歌を唱へて旋るをいふ、柳宗元の文に「——獻清廟、蘇軾の代張方平諫用兵書に「陛下可得而知者、——捷奏、拜表稱賀、赫然耳目之觀」(凱歌)を參看せよ

【解組】 官を退く義、組は印綬なり、官を退けば印綬を解くが故なり、

【海岱】 舜の十二牧の一を置きたる地、書經の禹貢に「——惟青州」とあり、即ち今の山東省の地方をいふ、

【解體】 人人離れ叛くをいふ、左傳に「四方諸侯、其誰不——」

【駭態】 駭は癡なり、——は、愚かなる狀をいふ、

【海帶菜】 琉球國志略に「——一名ハ昆布、海中ニ生

【海內知己ヲ存ズ】 (天涯比隣)を見よ、

【海棠】 李贊皇集に「花木海ヲ以テ名ヅクル者ハ、悉ク海上ヨリ來ル——是レナリ」王禹偁百花譜を作り、——を以て花中の神仙と爲す、また群芳譜に「——ニ四種アリ、貼梗・垂絲・西府・木瓜ナリ、蜀ニ盛ンニシテ秦中之ニ次グ、其ノ花甚ダ豐ニ、其ノ枝甚ダ柔カナリ、之ヲ望ムニ、綽約トシテ處女ノ如シ、其ノ色アリ香ナキヲ以テノ故ニ、唐ノ相賈耽、花譜ヲ著ハシ、以テ花中ノ神仙ト爲ス」唐の楊妃傳に「明皇嘗召楊貴妃、妃被酒新起、帝曰、此乃——花睡未足耳」

海棠

東風嫋々汎崇光、香霧霏霏月轉廊、只恐夜深花睡去、高燒銀燭照紅粧、

蘇軾

【海道ニ閉關ス】 (閉關海道)胡澹菴の封事の句、閉關は、漢書王莽傳の注に「猶言崎嶇展轉也」とあり、宋史高宗紀に、建炎三年十一月壬午、定議航海避兵、己丑御樓船、次定海縣、四年正月甲辰朔、御海、碇海中、己未金人陷相州、乘勝破定海、以舟師來襲御舟、張公裕以大舶擊退之、甲子泊溫州港口」とあり、

【海棠睡未ダ足ラズ】 美人の睡の足らざるを稱していふ、楊妃傳に「明皇沈香亭ニ登リ、楊妃ヲ召ス、妃酒ヲ被リテ新タニ起キタリ、力士從侍兒ニ命ジ、扶掖シテ至ラシム、明皇笑ッテ曰ク、此レ眞ニ海棠睡未ダ足ラザルナリト」

【咳唾自ラ珠ヲナス】 咳は欬に同じ「シハブキ」「セキ」唾は「ツバキ」咳唾も自ら珠玉をなすは、勢力のさかんなるに喩ふ、また轉じては詩文の才に富める人を稱するの語、即ち錦心繡腸の人は「ツバキ」すら珠と化すとの義にて、金玉の名句をたやすく吐き出すに喩ふ、趙壹の刺世疾邪賦に「勢家多所宜、咳唾自成珠」また李白の詩に「咳唾落九天、隨風生珠玉」また咳唾は人の談話にたとふ、漢の張奐傳に「一惠咳唾」

【開拓】 土地をひらくと、李嶠の句に「欲——宅北、更起新第」恢拓に作るも同じ、

【海獺】 「ウミヲソ」「アジカ」虞衡志に「——生海中、似獺而大、毛著水不濡」

【介冑】 「ヨロヒ」「カブト」史記に「——之士」とあるは、甲冑をつけたるよき兵士をいふ、

【介冑蟣蝨ヲ生ズ】 (介蟲生蟣蝨)蝨は、「シラミ」蟣は「シラミ」の子、この語は漢書嚴安傳に見ゆ、戰亂久しさにわたる義、韓非子にも、甲冑生蟣蝨、鴦雀處帷幄」

【海澨】 澨は澄に同じ、福建省漳州府に屬する縣の名、顧祖禹の讀史方輿紀要に「嘉靖三十年建靖海館於此、爲海寇焚掠、因築土堡爲防禦計、未幾倭入寇、姦民乘機盤踞云々」とあり、古來屢〻海賊の禍に逢ひし地なり、

【介弟】 「弟ゴサマ」の義、介は大なり、貴寵の大弟をいふ、左傳の襄二十六年に「寡君之貴介弟也」

【解酲】 酒の未だ醒めざるを醒といふ「フツカヨヒ」——は宿酲を解きさます義、晉書劉伶傳に「一飲一斛、五斗——」

【孩提】 二三歲の幼兒、孩笑を知りて提げまたは抱くべき者、孟子盡心上に「——之童、無不知愛其親也」孩は小兒の初めて笑ふことを解するをいふ、

【凱弟】 愷悌に同じ、樂易の義「ヤハラギタノシム」詩經に「——君子、民之父母」

【海豚】 (——)を見よ、

【艾年】 禮記の曲禮に「五十曰艾」艾は「ヨモギ」なり、髮の色蒼白にして艾の如きをいふ、

【介馬】 馬をよろふ、左傳成二年に「不——而馳之」また甲を衣たる馬、蘇洵の送石昌言引に「——數萬騎」

【該博】 該は兼ね備はるなり、すべての事にかねてひろく通ずる義、搜神記に「經書靡不——」

【開闢】 天地始めて開けて、人物の生ぜし時をいふ、揚雄の劇秦美新に「——已來、未之聞也」

【凱風】 南風なり、凱は和なり、よく萬物を長養する者なり、詩經の衞風に「——自南吹彼棘心」それより恩澤を被ることにも、——吹と用ふ、

【開物成務】 開物とは、人の未だ知得せざる所ろを開發するをいひ、成務とは、人の爲さんと欲する所ろを成して之を全うするをいふ、易の繫辭に「夫易開物成務、冒天下之道、如斯而已者也」

【解紛】 (紛ヲ解ク)を見よ、

【崖壁】 きりたてたる如き岸をいふ、始興記に「——千仞、猿狖不能攀」

【開寶通禮】 二百卷、宋の劉溫叟著す、開寶は、宋の太祖の年號、

【偕老同穴】 生きては共に老い、死しては穴を同じくして葬らるゝ義、夫婦の契をいふ、詩の邶風に「執子之手、與子偕老」また鄘風に「君子偕老」とあり、君子は夫なり、また王風に「穀則異室、死則同穴」穀は生なり、穴は「ツカアナ」をいふ、また——は海中に生ずる貝の名、

【偕樂】 衆人と共に樂む義、孟子の梁惠王上篇に「古之人與民偕樂、故能樂也」水戸の公園を——園と名づくるも此の義に取れるなり、

【解纜】 (纜ヲ解ク)を見よ、

【介立】 孤立してたすけなき貌、揚子方言に「介ハ特ナリ、物ノ耦ナキヲ特トイヒ、獸ノ耦ナキヲ介トイフ」夏侯湛の句に「似孤臣之——」

【薤露】 葬を送る時にうたふ歌なり(挽歌)を見よ、

【綱維】 「オホヅナ」綱紀に同じ、法度の義、史記淮陰侯傳に「秦之綱絕而維弛」

【孝友】 善く父母に事ふるを孝といひ、兄弟に善きを友といふ、詩經に「侯誰在矣、張中——」

【縞衣綦巾】 縞は白色の衣、綦は蒼艾色の巾、——は女服のいやしきもの、己の妻の貧陋なるを斥していふ、詩の鄭風に「出其東門、有女如雲、雖則如雲、匪我思存、——、聊樂我員」

【膏雨】 時に應じて百穀を生長せしむる好き雨をいふ、左傳襄十九年に「小國之仰大國也、如百穀之仰——也」

【衡宇】 木を横へたる「ノキ」また粗末なる家、陶淵明の歸去來辭に「乃瞻——載欣載奔」

【項羽ガ山ヲ拔ク力】 (四面楚歌)を見よ、

【好雨時節ヲ知ル】 よき春雨が時をたがへずして降るをいふ、杜甫の春夜喜雨に「好雨知時節當春乃發生、隨風潛入夜、潤物細無聲、野徑雲俱黑、江船火獨明、曉看紅濕處、花重錦官城」三四の二句春雨の神を傳出して妙、

【交易】 互市なり、易の繫辭に「日中爲市致天下之民、聚天下之貨、——而退」また往來の義、公羊傳に「——爲言」

【哽咽】 むせび泣くこと、嗚咽に同じ、劉琨の句に「揮手長相謝、——不能言」

【槁ヲ折キ落ヲ振フ】 枯木を摧き、落葉を拂ふが如く、事の甚だ易きをいふ、淮南子に「劉項興義兵、隨而定、若折槁振落」槁は枯なり、

【亢ヲ批キ虛ヲ擣ク】 敵の相抗するを排批し、敵の空虛を衝きて擊つをいふ、史記孫臏傳に「批亢擣虛形格勢禁、則自爲解耳」

【聱牙】 難文讀むに堪へざるをいふ、韓文の進學解に「周誥殷盤佶屈聱牙」文字難澁の貌、聱とは語聽こえず、牙とは齒正しからず、衆と合はざるをいふ、

【耿介】 剛正の貌、節を執り度を守るなり、俗に「ヘンク

ッ」といふに近し、宋玉の九辨に「獨——而不隨兮」

【沆瀣】 海の氣、一に北方夜半の氣、また露氣をいふ、楚辭に「餐六氣飲——兮」また東方朔七諫に「含——以長生」

【梗概】 梗は略なり、——は大畧なり、大抵の義、東京賦に「粗爲賓言其——如此」

【慷慨】 激昂の意、いきどほりなげく貌、後漢書齊武王縯傳に「性剛毅——」

【交交】 鳥の飛びかふ貌、詩の秦風に「——黄鳥、止于棘」

【行行】 剛健の貌、論語に「子路——如也」

【抗行】 行迹の極めて高きをいふ、楚辭に「堯舜之——兮、瞭冥冥而薄天」

【抗衡】 抗は敵なり、對なり、衡は車軛なり「クビキ」とて、車の轅の端の横木にて、牛の頸につくるもの、兩衡相對して下らざる義、史記陸賈傳に「欲以區々之越與天子——爲敵國」

【杲杲】 日の光の明かなる貌、詩經の衞風に「——出日」

【浩浩】 廣大の貌、中庸に「——其天」また大水の貌、書の舜典に「——滔天」

【昂昂】 志行の高きをいふ、また馬のいさみ行く貌、楚辭に「寧——若千里之駒乎」また高く擧がる貌、晉書に「——然若野鶴之在鷄群」

【耿耿】 心安からざる貌、詩經の衞風に「——不寐」一說に、——は小明、心存ずるところありて忘るゝ能はざるの貌と、

【硜硜】 小石の堅確なる貌、よりて小人の「コセック」貌にいふ、論語に「言必信、行必果、——然小人哉」

【皓皓】 皓は白なり、明なり、揚子淵騫篇に「明星——」また潔白なり、詩經の唐風に「揚之水、白石——」

【皡皡】 廣大自得の貌、孟子に「王者之民、——如也」俗に皡皡に作るは非なり

【囂囂】 自得無欲の貌、孟子に「人知之亦——、不知亦——」また「カマビスシキ」義にも用ふ、莊子に「天下何其——也」詩の小雅に「讒口——」鄭箋に「衆多ノ貌」註に「猶ホ嗷々ノ如シ」

【嗷嗷】 衆の愁ふる聲、漢書陳湯傳に「下至衆庶、——苦之」整に作るも同じ、詩の小雅に「鴻雁于飛、哀鳴——」また呼ぶ聲、楚辭に「聲——以寂寥兮」

【皜皜乎トシテ尚フベカラズ】 鴉皜は潔白の貌、光輝潔白之に加ふべき者なきをいふ、孟子に「江漢以濯之、秋陽以暴之、皜々乎不可尚已」

【悻悻然】 もとり怒る貌、孟子に「——見於其面」とあり、很怒の貌

【嘐嘐然】 志大にして言大なる貌、孟子に「其志——」また嘐々は雞鳴をいふ、廣韻に「詩云、雞鳴——」

【墝埆】 (磽确ノ地)を見よ、

【高閣ニ束ヌ】 「タナ」の上に束ねて用ひざる義、晉書庾翼の傳に「殷浩才名冠世、庾翼弗之重、每語人曰、此輩宜束之高閣、俟天下太平、然後議其仕耳」とあり、又韓愈の詩に「春秋三傳束高閣、獨抱遺經究終始」この閣は、禮記七十有閣の閣にて、棚板なり、

【磽确ノ地】 あれたる地をいふ、類書纂要に「——ハ、堅硬瘠薄ノ石地ナリ」史記三王世家に「燕地墝埆」、——は墝埆に同じ、

【轇轕】 猶ほ交加の如し、枝の入りまじりて「マキック」貌、柳宗元の袁家渴記に「有異卉類合歡而蔓生——水石」一に膠葛に作る、同じ、また轇轕は驅馳の貌、揚雄の羽獵賦に「縱横——」また雜亂の貌、或は長遠の貌とも解く、楚辭に「騎——以雜亂兮」

【鏗戛】 禮記の樂記に「鐘聲鏗」とあり、疏に「金石ノ聲ノ鏗鏗然タルヲイフ」とあり、戛は玉などを摩り擊つをいふ、書經の益稷に「戛擊鳴球」とあり、——は金石の清く鳴る聲をいふ、轉じては詩賦の格調の高きにもいふ、戛は戛の俗字、

【好下物】 よき「サケノサカナ」なり(下物)を見よ、

【行閒】 軍中といふが如し、漢書衞青傳に「青幸得以肺腑待罪——」

【浩瀚】 廣大なる貌、文心雕龍の事類篇に「載籍——」

【皓旰】 光の盛んなる貌、楚辭に「曳彗星之——兮」また王延壽の魯靈光殿賦に「皓皓旰旰」

【虓闞】 虓は說文に「虎鳴ナリ」と、また虎の自ら怒るなりとも解す、闞も虎の聲、また奮怒の貌、轉じて勇猛の將士どもの烈しき威勢をいふ、詩の大雅に「進厥虎臣、闞如虓虎」また漢書敍傳に「七雄——」七雄とは戰國の七雄なり、

【傲岸】 圭角ありかど〳〵しく、物におごりて屈せざるをいふ、李白の句に「崔生何——」

【告歸】 暇を乞ひ家に歸るをいふ、史記高祖紀に「高祖爲亭長時、常——之田」

【高棊】 「ゴ」をうつことの上手なるをいふ、劉基の句に「死中求活是——」

【綱紀】 詩の大雅に「之綱之紀、燕及朋友」の註に「燕ハ安ナリ、朋友ハ諸臣ヲ謂フナリ、言フコヽロハ、人君能

ク四方ニ綱紀シテ、臣下之ニ賴リテ以テ安シ」と、また揚子法言に「君子爲ル國ノ張ル其ノ一一ヲ」とあり、綱は張なり、紀は理なり、大なる者を綱と爲し、小なる者を紀となす、羅網の紀綱ありて、萬目張るが若く、國家を張皇經理するに用ふ、白虎通に「君臣、父子、夫婦ヲ三綱トイヒ、諸父、兄弟、族人、諸舅、師長、朋友、ヲ六紀トイフ」と見ゆ、

【剛毅】 剛は堅強不屈なり、毅は堅強耐忍なり、論語に「子曰ク一一木訥、近ク仁」

【好逑】 逑は匹なり、仇なり、善き配偶をいふ、詩の周南に「窈窕淑女、君子ノ一一」

【康熙、乾隆ノ制度文物】 康熙は清の聖祖の年號、乾隆は高宗の年號、聖祖は豪邁仁厚の君にして、世宗は英明剛毅に、高宗は雄材大略の王なり、かく明君相繼ぎ、三世百三十餘年にわたりしかば、清朝の基礎は全くこゝに定まれり、その制度文物の概畧を述ぶれば、

官制 明にならひて、內閣に大學士(四人)協辦大學士(二人)ありて機務を贊理す、吏・戶・禮・兵・刑・工の六部には、各尙書を置きてその政令を總掌す、都察院には左右都御使ありて百官を糾劾し、寃枉を辨理す、通政使司には、通政使ありて內外の章奏を通達す、また宗人府・內務府・詹事府・翰林院・國子監・及び太理・太常・光祿・太僕・鴻臚の諸寺あり、世宗の朝に、軍機處を新設し、大學士及び六部の尙書より擇びて軍機大臣となし軍國の大事を處分す、また理藩院を設けて內外蒙古・回疆・及び西藏の政令を掌らしむ、地方には總督ありて、一省若くは二三省における文武の大政を統轄す、巡撫は一省の軍務を統べ、民治を監督す、布政使は一省の財賦を掌り、按察使は一省の刑獄を治す、また知府・知州・知縣ありて地方の政治を分理せしむること、略〻明制に同じ、但京官に滿人漢人を並用することは、明制になきところにして、元の蒙古人を諸官の長とせしと相似たり、

兵制 八旗綠旗の制を設く、八旗は正黃・鑲黃・正白・鑲白・正紅・鑲紅・正藍・鑲藍となし、更に滿州八旗・蒙古八旗・漢軍八旗の三種に別つ、皆世襲の兵なり、京を守る者を禁旅八旗といひ、地方を守る者を駐防八旗といふ、每旗に、都統・副都統あり、綠旗は、明の亡後に漢人を編制したる者にて各省に駐防す、その數六十餘萬あり、總督巡撫の節制の下にありて、提督總兵これを指揮す、

租稅 明に同じく夏稅・秋糧の法による、納稅の期は前後兩期に分てども、各省その期限を同じうせず、稅率も地の遠近肥瘠によりて異り、丁賦は明と同じく成丁及び未成丁貧戶富戶の別によりて課す、また耗羨と稱して、地稅の額外に課するものあり、雜賦には、鹽課・茶課・蘆課・漁課・典商稅・行牙稅・契稅・鋪稅・牛馬稅等種類甚だ多し、

學制 明にならひ、京師に國子學を設け、府に府學、州に州學、縣に縣學を設けて大に學術を奬勵し、聖祖及び高宗の如きは親ら博覽多識にして文學を好み、儒臣を尙びしかば、碩學鴻儒輩出し、編纂の事業盛んに行はる、

編纂の書 聖祖の朝に編纂せられたるは、淵鑑類函(四百五十卷)康熙字典(四十二卷)佩文韻府(四百四十四卷)子史精華(百六十卷)全唐詩(九百卷)全金詩(七十卷)四朝詩(三百十二卷)歷代賦彙(百八十四卷)等を首とす、高宗の世には、大清一統志(五百卷)大清會典(百卷)皇朝文獻通考(二百六十六卷)皇朝通典(百卷)皇朝通志(二百卷)明史(三百三十六卷)三禮義疏(百七十八卷)四庫全書提要(百二十卷)通鑑輯覽(百二十卷)等を宗とす、

選擧 鄕試・會試・殿試の別あり、三年每に行ふ、鄕試會試には、四書五經及び詩律策論を試み、殿試には、策問を試む、殿試に及第せしものを三分し一等は三名を限りて一甲と稱し(第一を狀元、第二を榜眼、第三を探花と稱すること宋元明に同じ)進士及第を賜ひ、二等を二甲とし進士出身を賜ひ、三等を三甲とし、同進士出身を賜ふ(狀元は翰林院修撰に、榜眼・探花は翰林院編修に、その他は翰林院庶吉士或は候補知縣等に除せらる)

【高議シテ及ブベカラザルハ卑論ノ功有ルニ若カズ】 高尙なる議論をして、企て及ぶべからざるは、卑近なる言の實行あるに若かざる義、說苑に「猛獸狐疑、不若蜂蠆之致毒也、高議而不可及、不若卑論之有功也」

【巧僞ハ拙誠ニ如カズ】 巧に「イツハル」は、拙くして誠なるに如かざる義、說苑の說叢篇に「智而用私、不如愚而用公、故曰、巧僞不如拙誠」

【剛毅木訥ハ仁ニ近シ】 論語に「子曰剛毅木訥近仁」の註に「木ハ質樸、訥ハ遲鈍、四ツノ者ハ質ノ仁ニ近キ者ナリ」また曰く「剛毅ナルトキハ、物欲ニ屈セズ、木訥ナルトキハ、外馳ニ至ラズ、故ニ仁ニ近シ」とあり、

【行薩】 「ユキダフレ」路傍にてうゑじにせしもの、道殣に同じ、顏延之の句に「覩ル一一于水隅」

【孝經】 この書の作者は諸説あれども、司馬溫公が「孔子與曾子論孝、而門人筆之謂之孝經」といへるを可とす、古文今文の二種あり、古文は恐くは僞書なるべし、參考書には、○古文——孔氏傳一卷附宋本古文——一卷(漢孔安國撰と題せり)○孝經正義三卷唐玄宗御註、宋邢昺疏)○古文——指解一卷(宋司馬光撰)○孝經刊誤一卷宋朱熹撰、古文——を改定す)○御註——一卷(清の順治十三年世祖章皇帝御撰)○御纂——集註一卷(雍正五年世宗憲皇帝御撰)

【郊墟】 墟は丘なり「ヲカ」——は野や「ヲカ」をいふ、韓愈の符讀書城南の詩に「新涼入——、燈火稍可親」とあり、一解に墟は「アト」——は郊野のむなしき跡をいふと、

【行具】 旅裝なり、戰國策に「急約車爲——」

【康衢】 街巷なり、四達を衢といひ、五達を康といふ、列子に「堯治天下五十年、微服游于——、聞童兒謠」また史記孟軻傳に「開第康莊之衢」莊は六達なり、

【高臥】 世を遁れて心を高尙にする義、晉書謝安傳に「屢違朝旨——東山」

【狡獪】 わるがしこし、史記の註に「謂小兒多詐——爲無賴」

【高會】 盛會に同じ、漢書高祖紀に「收羽美人貨賄置酒——」羽は項羽、

【樹會】 讒をあはせ構へられて、罪に遇ふ義、阮瑀爲曹公與孫權書に「實爲佞人所——也」

【香火院】 菩提所をいふ、西湖志に「淨敎院蔡貴妃——」

【耿光大烈】 耿光は盛德をいひ、大烈は大業をいふ、書の立政に「以覲文王之耿光、以揭武王之大烈」文王には、德を稱し、武王には、業を稱するは各その盛なる者につきていふ、

【膏肓ノ病】 不治の難症をいふ(病膏肓)と(二豎)とを見よ、

【狡猾】 狡は獪、猾は賊なり、奸智をいふ、荀子非十二子篇に「可謂訞怪——之人矣」また漢書陳湯傳に「弘農太守張匡、坐贓百萬以上——不道」訞は妖に同じ、

【膏火自ラ煎ス】 才器あるものは、かへつてそれが爲めに禍を受くるに喩ふ、莊子に「山木自寇也、——也、桂可食、故伐之、漆可用、故割之、人皆知有用之用、而莫知無用之用也」

【行官】 使人をいふ、通鑑の注に「節鎭州府、皆牙官アリ、——アリ、牙官ハ牙前ノ驅使ニ供シ、——ハ之ヲシテ行役シテ四方ニ出デシム」

【交驩】 驩は歡に通ず、交りて驩心を得る義、漢書の陸賈傳に「吾何不——大尉深相結」

【絳灌】 絳侯周勃及び灌嬰をいふ、周勃は沛の人、高祖に仕へ、軍に從ひ項羽の兵を敗る、文帝立つに及び、食邑萬戶を賜はり、丞相に進む、灌嬰は、睢陽の販繒者なり、中涓を以て高祖に仕ふ、文帝の世遂に丞相に遷る、二人はたゞ武のみにて、文學を解せざりき、故に晉書劉元海載記に「幼好學、中略、無不綜覽、嘗謂同門生曰、吾每觀書傳、常鄙隨陸無武——無文、道由人弘、一物之不知者、固君子之所恥也、二生遇高皇而不能建封侯之業、兩公屬太宗而不能開庠序之美、惜哉」

【高啓】 字は季迪、明の長洲の人、博學にして詩に工なり、吳淞江の青邱に居る、よつて青邱と號す、明初吳下に詩人多し、青邱その冠たり、楊基・張羽・徐賁と四傑と稱せらる、洪武の初に、召して元史を修せしめ、戶部侍郎に擢てらる、その後、作る所ろの文、帝の怒に觸れ、市に腰斬せらる、時に年三十九、趙翼その詩を評して曰く「高青邱才氣超邁、音節響亮、宗派唐人、而自出新意、一涉筆即有博大昌明氣象、亦關有明一代文運、論者推爲開國詩人第一、信不虛也云々」(大全集)を見よ、

【交戟】 守衞の者をいふ、漢書劉向傳に「今佞邪與賢臣、並——之內」

【好潔】 「キレイズキ」潔癖・潔疾 皆同じ、左傳に「邾莊公卞急而——」

【豪傑ノ士】 才德衆に過ぐる者をいふ、孟子に「若夫——之——、雖無文王猶興」淮南子に「智百人ニ過グルヲ豪トイフ」白虎通には「萬人ニ賢レルヲ傑トイフ」

【伉俠】 猶ほ任俠の如し、伉は健なり、抗なり、直なり、「ヲトコダテ」漢書朱博傳に「——好交」

【巧言】 たくみに飾りて實なき言、詩の小雅に「……如簧、顏之厚矣」の傳に「言ヲ出ス虛僞ニシテ慙ヅルヲ知ラズ」と、論語に「——令色鮮矣仁」

【効驗】 結果の現れたる義「シルシ」漢書賈誼傳に「是非其明効大驗邪」

【羹獻】 說文に「宗廟ニ犬ヲ——ト名ヅク、犬ノ肥エタル者、以テ之ヲ獻ズ」とあり「アツモノ」にして進むるをいふ、禮記の曲禮に「凡祭宗廟之禮、犬曰——」

【好堅樹】 智度論に「譬如有樹名爲好堅、是樹在地中百歲、枝葉具足、一日出生高百丈、是樹出已欲求大樹以蔭其身、此時林中有神、語——言、世中無大汝

者、諸樹皆當レ在ニ汝蔭中一、佛亦如レ是云云」一說に、——は栴檀樹なりと、

【高軒寵過】 貴人の來臨を辱うせしにいふ、軒は大夫の乘る車なり、高軒に乘りて過訪の寵を蒙るとの義、唐書に「李賀七歲文ヲ能クス、韓愈・皇甫湜・之ニ過ル、李賀、高軒過ヲ作リテ曰ク、華裾織レ翠青如レ葱、金環壓レ轡搖玲瓏」

【巧言令色】 巧は拙の反、上手にすることなり、令は善なり、言辭を巧にし、顏色をほどよくして人の氣に入るやうに務むる者は、これ皆外貌の飾のみにて、質の美は反りてなき者なり、書經に「無レ以ニ——一——便辟側媚」また論語に「——鮮矣仁」とあるは、外貌のみを飾る者は、仁といふ本心の德は絕えて無しとの義、

【好古】 (古ヲ好ム)を見よ、

【行伍】 軍の隊伍の名、二十五人を行となし、五人を伍となす、揚雄の賦に「曲隊堅重、各案ニ——一」また必ずしもこの人員に限らずして、軍列の稱とす、

【槁梧】 琴なり、莊子に「據ニ——一而瞑」注に「琴ニ據リテ睡ルナリ」と、梧は梧桐、琴材に用ふ、風俗通に「梧桐生ニ澤陽山巖石之上、采ニ東南孫枝一爲レ琴、聲淸雅」

【槁項】 槁は枯なり、項は「ウナジ」首痩せて肉なきをいふ、莊子に「——黃馘者、商之所レ短也」商は曹商、

【高勾麗】 朝鮮の昔の國名、東明王(名ハ朱蒙)國を建てて、より七百五年、第二十八代寶藏王に至りて亡ぶ、我が紀元一千三百二十八年に當れり、當時朝鮮は、——新羅・百濟の三國鼎立せしが、新羅之を一統して二百餘年にして亡び、高麗之に代り、次に李旦高麗に代りて今の朝鮮國を建てたり、

【高克恭】 元の人、巴西集に「——字ハ彥敬、房山ト號ス、官大夫刑部尙書タリ、好ンデ墨竹ヲ作ル、妙處文湖州ニ減ゼズ、山水ハ初メ米氏父子ヲ學ブ、後チ乃チ李成・董源・巨然ノ法ヲ用フ、造詣精絕殁後遺墨ヲ購フ者、一紙率ネ千百緡」江亭集に「高尙書ノ山水、人家多ク之レアリ、珍藏什襲ソノ價甚ダ高シ、大元能畫者ノ第一タリ、靑山白雲甚ダ遠致アリ」文湖州は文同、

【巧妻】 かしこき妻、五雜組に「唐伯虎ノ詩、駿馬每ニ馱ニ癡漢一走、——常伴ニ抽夫一眠、世閒多少不平事、不レ會作レ天莫作レ天ト、諺詞ト雖モ、亦激スルアルノ言ナリ」とあり、

【交際】 孟子に「萬章問ウテ曰ク、交際ハ何ノ心ゾト、孟子曰ク、恭ナリ」とある註に「際ハ接ナリ、交際ハ、人禮儀幣帛ヲ以テ、相交接スルヲイフナリ」

【咬菜】 「マズキ」ものを食ふをいふ、朱子の小學に「汪信民嘗テ言フ、人常咬ニ得菜根一則百事可レ做ト、胡康侯之ヲ聞イテ節ヲ擊ツテ歎賞ス」と、朱子曰ク「學者須ラク常ニ志士溝壑ニ在ルヲ忘レザルヲ以テ念トナスベシ、則チ道義重クシテ、生死ヲ計較スルノ心輕シ、況ヤ衣食外物至微末事、得ザルモ未ダ必ズシモ便チ死セズ、亦何ゾ義ヲ犯シ、分ヲ犯シ、心ヲ役シ、志ヲ役シ營營以テ之ヲ求ムルヲ用ヒンヤ、某今人ヲ觀ルニ、榮根ヲ咬ム能ハザルニ因ツテ、其ノ本心ヲ失フ者衆シ、戒メザルベケンヤ」

【荇菜】 和名「アサザ」爾雅の郭注に「水中ニ叢生ス、葉圓クシテ莖端ニ在リ、長短ハ水ノ深淺ニ隨フ、江東ニテハ之ヲ食フ」とあり、一名は接余、本草に曰く「——一名ハ鳧葵、一名ハ水葵、一名ハ水鏡草」と、詩の周南に「參差——、左右流之」杜甫の詩に「水荇牽風翠帶長」

【高柴】 衛人、孔子の弟子、足影を履まず、啓蟄殺さず、方長折らず、親の喪に服し、泣血三年未だ嘗て齒を見はさず、難を避けて行くに、徑せず竇せず、孔子稱して愚となす、その人と爲り智足らずして厚きこと餘りあるを著すなり、後世共城侯に封ぜらる、

【高材疾足】 材智高く、足のすぐれてはやき義、智勇相兼ぬる人をいふ、史記に「帝詔捕ニ蒯徹一至曰、秦失ニ其鹿一、天下共逐ニ——者先得レ之、當時臣獨知ニ韓信一、非ニ知ニ陛下一也、天下欲レ爲ニ陛下一所レ爲者甚衆、力不レ能耳、又可ニ盡烹一邪、帝赦レ之」とあり、蒯徹は韓信に勸め、高祖に叛きて自立して王たらしめんとせし人なり、鹿とは天下に喩ふ、

【好相】 「ヨキニンサウ」晉書の羊祜傳に「嘗遊ニ汝水之濱一、遇ニ父老一、謂レ之曰、孺子有ニ——一」

【康莊】 爾雅に「道路ノ五達セルヲ康トイヒ、六達セルヲ莊トイフ」と、轉じて往來多き大路のちまたに用ふ、史記に「爲ニ列第——之衢一」

【骯髒】 骯一に抗に作る、高亢婞直の貌、唐詩に「——在ニ風塵一」また後漢書に「趙壹歌曰伊優北堂上、——倚ニ門邊一」と、伊優は屈曲佞媚の貌、北堂は親の居る所、亢直の者は、棄てられて門邊に倚るとなり、

【鏗鏘】 金石の聲なり、一に曰く樂聲なりと、禮記に「君子之聽レ音、非ニ聽レ其——一而已也、彼亦有レ所レ告レ之也」

【顥蒼】 顥は天邊の氣なり、——は天をいふ、班固の答賓戲に「超ニ忽荒一而躆ニ——一」躆は行なり、顥は一本に昊に作る、

【庚桑楚】 周の楚の人、老子の徒、亢倉子三卷を撰ぶ、

【耗散】 へりてちる、唐書に「至是益——」

【衡山】 五嶽の一、湖南省の洞庭湖の南に在り、周禮に「荆州之鎮曰——」山海經に「一名ハ岣嶁」書の舜典の「至于南岳」の注に「南岳ハ——」とあり、衡山記に、——ハ南岳ナリ、黄帝ニ至リ、乃チ灊霍二山ヲ以テ副トナス」と、荆州記に「——ニ三峯アリ、一ヲ紫蓋トイヒ、一ヲ石菌トイヒ、一ヲ芙蓉峯トイフ、最モ竦傑トナス、清霽ノ朝ニ非ルヨリハ、見ルベカラズ」と、また——ハ明の文徴明の號、

【衡山ノ雲ヲ開ク】 (能ク衡山ノ)を見よ、

【高山流水】 錦字箋に「伯牙琴ヲ鼓ス、志——ニ在レバ、鍾子期皆能ク之ヲ知ル、子期死シテ伯牙絃ヲ絶ツ、音ヲ知ル者ナキヲ以テナリ」と(知音)を見よ、

【行止】 德行の義に用ふる俗語、外史檮杌に「鄭奕教子文選、其兄曰、莫學沈謝嘲風弄月汙人——」

【孝子】 善く親につかふるを孝といふ、親孝行の子をいふ、また親の服ある子をいふ、禮記に「祭稱孝子孝孫」の疏に「虞ヨリ以前ハ凶祭、哀ト稱ス、卒哭ヨリ以後ハ、吉祭、孝ト稱ス」とあり、哀子は忌中の子をいふ、

【更始】 革新の義「アラタニハジム」禮記に「其在天地之中者、莫不——焉」

【好事】 言を造り、事を生ずるを喜ぶ義、モノズキ、孟子に「好事者爲之也」

【槁死】 槁は枯なり、——は枯死に同じ、木などのたちかれとなるをいふ、

【篙師】 篙は舟を行る「サヲ」——は舟をこぐ人、舟子をいふ、陸深谿山餘話に「——柁工」とあり(梢子)を參考せよ、

【嚆矢】 嚆矢は鳴鏑なり、古代軍陣には、最初に嚆矢を發し、それより戰爭を始むるを例とす、故に事の始の義とす、莊子の在宥篇に「焉知曾史之不爲桀跖——」也、故曰、絶聖棄知而天下大治」とあり、曾は曾參、史は史鰌をいふ、即ち曾史が、桀跖の利用する所となるをいふ、

【鏗爾】 金石のからりと響きわたる聲、また琴瑟の聲、論語に「鼓瑟希——」

【高士奇】 字は澹人、瓶廬と號し、また江村と號す、淸の錢塘の人、諸生より大學に入る、能書を以て旨に稱ひ、詹事府錄事を授けられ、詹事に歷陞す、號を竹窓と賜ひ、禮部侍郎を加へられ、卒して文恪と諡せらる、鑒賞に精しく收藏に富む、輯むるところの江村銷夏錄、世

に盛行せり、著すところ江村全集あり、

【好時侯】 紙の異名、文房四譜に「華陰楮知白、字守玄、亦曰——」

【行尸走肉】 無用の人をいふ、拾遺記に「任末曰ク、人學バザル者ハ存スト雖モ、乃チ行尸走肉ナリ」の註に「死尸ニシテ能ク行キ、死肉ニシテ能ク走ルガ如シ」とあり、成語考に「謭劣ニシテ能ナシ、之ヲ——ト謂フ」と、謭は淺なり、

【剛日】 甲・丙・戊・庚・壬に屬する日なり、この五日は陽なればなり、禮記の曲禮に「外事以——」

【膠漆ノ交】 交情の堅きこと、膠と漆との、固著して相離れざるが如きをいふ、史記の魯鄒列傳に「此二人ノ者ハ、心ニ感ジ、行ニ合ヒテ、膠漆ヨリモ親シ」とまた漢書の鄒陽傳に「堅如膠漆」陳雷を參看せよ、

【孝子匱カラズ】 匱は乏なり、竭なり、孝子の親に事ふる、至誠にして乏竭の時なきをいふ、詩の大雅に「孝子不匱、永錫爾類」類は善なり、一解に類は朋類なり、孝子は孤立せず、朋類相聚まる義にて、論語の「德不孤必有隣」の意なりと、

【香餌ノ下ニハ必ズ死魚アリ】 利のために釣られて死を致すに喩ふ、三略に「軍讖曰、香餌之下、必有死魚、重賞之下必有勇夫」

【孝子ハ日ヲ愛ム】 孝子は親のながく存生せざるを思ひ、孝養して、これ日も足らざる如くす、故に愛日といふ、揚子法言に「事父母自不足者其舜乎、不可得而久者、事親之謂也、孝子愛日」

【好事ハ門ヲ出デズ、惡事ハ千里ニ行ク】 (好事不出門、惡事行千里)北夢瑣言卷六に見ゆ、よき事は、門より外へあらはれ難く、惡事は、千里の遠きにも馳せゆきて隱れなしとの義、

【行神】 「ミチヲマモルカミ」野客叢書に「漢ノ臨江王傳ノ註ニ黄帝ノ子纍、遠遊ヲ好ミ、道ニ死ス、故ニ後人以テ——トナス」

【行人】 賓客の接待を掌る官、周禮秋官に「大——ハ、大賓ノ禮及ビ大客ノ儀ヲ掌リ以テ諸侯ヲ親ム、マタ小——ハ、邦國賓客ノ禮籍ヲ掌リ以テ四方ノ使者ヲ待ツ」と、論語憲問に「——子羽修飾之」

【佼人】 美人なり、詩經に「——僚兮」僚は好き貌、

【幸甚】 「アリガタシ」しあはせ甚し、史記の晉世家に「二子頓首曰、————」文選の李陵が答蘇武書に「榮問休暢、————」また貞觀政要に「陛下能知此言、天下——」

【蓑人】「ワラニンギヤウ」をいふ、鶴林玉露に「畢再遇、夜——數千ヲ縛シ、衣スルニ甲冑ヲ以テシ、旂幟戈矛ヲ持シ、儼立シテ行ヲ成サシム」

【鮫人ノ室】述異記に「南海ノ中ニ、鮫人ノ室アリ、水居魚ノ如シ、機織ヲ廢セズ、其ノ眼、泣ケバ則チ珠ヲ出ス」と、海賦にも「其垠則有天琛・水怪・鮫人之室」

【好尚】好みたふとぶ義、曹植の書に「人各有——」

【高尚】氣象の「ケダカキ」をいふ、易の蠱の卦に「不事王侯、高尚其事」の傳に「賢人君子時ニ遇ハズシテ、高潔自ラ守リテ、世務ニ累ハサレザルヲイフ、古ノ人之ヲ行フ者アリ、伊尹・太公望ノ始メ、曾子子思ノ徒是レナリ」

【浩湯】水の廣く流るゝ貌、范仲淹の岳陽樓記に「浩々湯々、横無際涯」

【浩穰】浩は大なり、穰は盛なり、人衆の多きをいふ、漢書の張敞傳に「長安中浩穰、於三輔尤爲劇」

【膏壤】膏は「アブラ」壤は「トチ」——は、あぶらけありて肥えたる地なり、史記に「——殖穀」

【翺翔】猶ほ逍遙の如し、遊戯の貌「トビマハル」鳥の飛んで翼を上下するを翺といひ、翼を張りて動かざるを翔といふ、詩經の鄭風に「河上乎——」また莊子に「我騰躍而上不過數仞而下、——蓬蒿之閒」一解に、翺は「ツバサ」をのばして飛び、翔はまはり飛ぶをいふと、

【高蹤】蹤は跡なり、高尚なる行をいふ、前漢揚雄傳に「躡三皇之——」

【絳樹青琴】共に支那古代の美人の名、遊仙窟に見ゆ、

【校書】藝妓をいふ、事文類聚に「元微之、元和中ニ蜀ニ使ス、籍妓薛陶才色アリ、能ク文ヲ屬シ詩ヲ賦ス、府公嚴司空之ヲ知ツテ陶ヲ遣ハシテ往イテ侍セシム、微之以テ——トナス、後チニ翰林ニ登ル、詩ヲ以テ寄セテ曰ク、錦江滑膩峨眉秀、化出文君與薛陶、言語巧偸鸚鵡舌、文章分得鳳凰毛、紛紛詞客皆停筆、箇箇公侯欲夢刀、別後相思隔煙水、菖蒲花發五雲高、又嘗テ辟サレテ校書ト爲ル、之ニ詩ヲ贈ツテ曰ク、萬里橋邊薛校書、枇杷花下閉門居、洛陽才子知多少、管領春風盡不知、マタ善造薛陶牋」

【高春】午後四時頃なり、淮南子に「日至淵隅曰——、晡時、至連石、曰下春、晡後」と、柳宗元の詩に「空齋不語坐——」

【行色】たびだつ「ケシキ」をいふ(車馬)を見よ、

【交綏】兩軍互に退くをいふ「アヒビキ」左傳文十二年の「乃皆出戰——」の註に「古名退軍爲綏」と、一說に、綏は却なりと

【幸生】徼幸して生ける義、國語に「國斯無刑、媮居——」また荀子に「朝無幸位、民無——」

【高棲】俗事をすてゝ、志を高くし、しづかに生活すること、棲は栖に同じ

【高靑邱】(高啓)を見よ、

【好生ノ德】仁愛にして殺傷せざる德をいふ、書經に「好生之德、洽于民心、茲以不犯于有司」

【巧笑】巧は好なり、よく媚び笑ふ義、詩の衞風に「——倩兮、美目盼兮」

【巧笑倩タリ美目盼タリ】詩經の衞風、碩人に「螓首蛾眉巧笑倩兮、美目盼兮」註に「倩ハ口輔(くちがまち)ノ美ナルナリ盼ハ目ノ黑白分明ナルヲイフ」

【好消息】「キツソウ」吉語に同じ「ヨキタヨリ」舊唐書崔元暐傳「兒子從宦、有人來云、貧乏不能存、此是——」

【考績】「イサヲ」の優劣を考へ定むること、書經に「三載考績、三考黜陟幽明、庶績咸熙」

【衡石書ヲ程ル】史記秦の本紀に「始皇剛戾自用、事無大小、皆決於上、以衡石量書、日夜有程、不中程不得休息」とあり、衡は稱衡をいひ、石は稱錘をいふ、百二十斤を石といふ、

【浩然】盛大流行の貌、また水の流れて止むべからざるが如き意、孟子に「我善養吾——之氣」また「——有歸志」

【皓然】白き貌、後漢書に「五月霜雪——」

【浩然ノ氣】浩然は盛大流行の貌、氣は即ち所謂體に充つる者、本自ら浩然たるなり、孟子公孫丑上に「我レ善ク吾ガ浩然ノ氣ヲ養フ、敢テ問フ、何ヲカ浩然ノ氣ト謂フ、曰ク言ヒ難キナリ、其ノ氣タルヤ、至大至剛直ヲ以テ養ヒテ害ナキトキハ、則チ天地ノ閒ニ塞ガル」とあり、言ひ難しとは蓋し其の心に獨り得る所ろにして、形聲の驗なし、未だ言語を以て形容し易からざる者あるなり、至大は、初より限量なし、至剛は、屈み撓むべからず、蓋し天地の正氣にして、人の得て以て生ずる者なり、

【高漸離】史記の荆軻傳に「荆軻至燕、愛燕之善擊筑者——飲於燕市、——擊筑、荆軻和而歌、相樂也、後荆軻奉太子丹命、刺秦始皇、不果而死、始皇召見——、惜其善擊筑、赦之、乃矐其目、使擊筑、未嘗不稱善、稍益近之、——乃以鉛置筑中、復進得近、舉筑扑之、不中、於是遂殺之」

【縞素】 白色の喪服をいふ、漢書高帝紀に「寡人親爲發喪、兵皆——」

【喉塞】 いきがふさがる「ムセブ」北史に「——涕泗交流」

【梗塞】 ふさがる、秦觀の句に「道途——」

【高足ノ弟子】 優等の門人をいふ、世說に「鄭玄、馬融ノ門下ニ在リ、三年相見ユルヲ得ズ、高足ノ弟子傳授スルノミ」箋註に「高足ハ本傳ニ高業ニ作ル」

【高蹈】 遠く行くなり、左傳哀二十一年に「使我——」また官を去つて身を潔くするをいふ、張協の七命に「嘉遯龍盤、翫世——」

【浩蕩】 廣く大いなる貌、轉じて志の放まゝなるにいふ、楚辭に「心飛揚兮——」

【豪宕】 心あらく大にして、常度に超ゆるをいふ、跌宕または疎宕に同じ、金史に「性——不拘細行」

【膏澤】 恩惠を施すこと、膏の物を澤す如く、あまねく達するをいふ、西都賦に「——洽乎黎庶」

【豪奪】 强ひて物をうばひ取る、漢書食貨志に「大賈富家、不得——吾民」

【高致】 致は旨なり、旨意の高尚なるをいふ、晉書嵇康傳に「呂安服嵇康——、毎一相思、千里命駕」

【降衷】 性を賦すといふが如し 衷は、かたよらざる中心をいふ、書の湯誥に「惟皇上帝降衷于下民」一解に、衷は善なりと、國語に「今天降衷於吳、齊師受服」

【膠柱】 (柱ニ膠シテ)を見よ、

【巧遲ハ拙速ニ如カズ】 (巧遲不如拙速) 巧ならんことを欲して遲疑するは、拙しと雖も速に決行するに如かずとの義、晉書譙王承傳に「兵聞拙速、不聞工遲」また孫子に「兵聞拙速、未覩巧之久也」とあるは、皆同じ、

【藁砧】 ——は砆なり、今の打柴石なり、借りて夫をいふ、古樂府に「——今何在、山上復有山(山上又山は出字なり 夫の外に出るをいふ)何當大刀頭(刀頭に、環あり、音を借りていふ、何の時かまさに還るべきと問ふなり)破鏡飛上天(破鏡は半邊の月の如し、半月にして當に歸るべしとなり)」

【囂塵】 わづらはしき塵俗の事なり、文選に「——自茲隔」また繁華にしてやかましき義、左傳に「湫隘——、不可以居」

【絳帳】 師の席をいふ、後漢書の馬融傳に「馬融字ハ季長、世通儒タリ、諸生千數ヲ教養ス、達生任性ニシテ、儒者ノ節ニ拘セズ、常ニ高堂ニ坐シテ——ヲ施シ、前ハ生徒ニ授ケ、後ハ女樂ヲ列ス、弟子次ヲ以テ相傳フ其ノ室ニ入ル者アル鮮シ」とあり、絳は紅色なり、紅紗の帳を座の後に設く、前は帳前なり、生徒業を其の前に受く、後は帳後なり、女子樂を其の後に奏するなり、師に呈する書に、某先生絳帳下と書くは是に本づく、

【較著】 明白の義、史記伯夷傳に「此其尤大彰明——者也」

【豪豬】 野豬の一種、遼史に「帝獵顏山、適——伏叢莽、帝射中之」山海經に「——狀如豚而白、毛大如笄而黑端」

【孝弟】 善く父母に事ふるを孝といひ、善く兄に事ふるを弟といふ、論語に「——而好犯上者鮮矣」

【考亭書院】 圓機活法に「宋ノ朱熹、建陽縣ノ西ニ於テ、——ヲ建テ、四書ノ註脚ヲ集メ、開來繼往、南州闕里、滄州勝槩等ノ牌榜アリ、子孫衣冠ヲ世襲シ、以テ士大夫ヲ迎ヘ拜謁ス、有司二丁ノ祭祀ヲ設ケテ、之ヲ存ズ、

【高適】 字は達夫、滄州の人、唐の玄宗の時、有道の科に擧げられ、官諫議大夫に至る、氣を負ひ敢言し、權近目を側つ、出でて蜀彭刺史となりて卒す、適節義を尚び、功名を以て自ら許す、政寬簡をたふとび、人之を便とす、年五十にして始めて詩をつくり、即ち工なり、一篇出る毎に、好事者輙ち傳布す、

【更迭】 迭は佚に通ず、互に入りかはること、史記十二諸侯年表に「四國佚興、更爲伯主」四國は齊・楚・秦・晉、

【昊天】 夏の天をいふ、昊は氣の皓旰なるをいふ、元氣の博大なる貌、爾雅に「夏爲——」詩の小雅に「浩々——」また單に天といふ義にも用ふ、周禮春官大宗伯に「以禋祀祀——」

【耗斁】 敗亡といふが如し、詩經大雅に「——下土」斁は敗なり、

【狡童】 狡獪なる小兒をいふ「コスキコドモ」詩の鄭風に「不見子充、乃見——」

【鼇頭】 及第者中第一の成績を得たるをいふ、類書纂要に「狀元ニ中ルヲ賀シテ巍占——トイフ」と、また書物の本文の上に標記する義に用ふれども、未だ其の名を命くるの、其の義に稱ふや否やを知らず、疑ふらくは是れ明末清初の俗學者の稱せし所ろか、

【行同能偶】 行同は行迹相同じさなり、能偶は、才能對偶するなり、漢書の食貨志に「——則別之以射、然後爵命焉」

【狡兎三窟】 身を托するの地三ありて、僅によく安心

して生を保つことを得るに喩ふ、戰國策に「馮煖曰、——有ッ——、僅得免ニ其死一耳、今有ッ一窟、未得ッ高枕而臥ニ也、請爲ニ君復鑿ニ二窟一」

【狡兎死シテ走狗烹ラル】（狡兎死走狗烹）事あれば用ひられ、事なければ罪せらるるに喩ふ、史記の越世家に「范蠡大夫種ニ書ヲ遺リテ曰ク、蜚鳥盡キテ良弓藏メラレ、狡兎死シテ走狗烹ラル、越王人トナリ、長頸鳥喙與ニ患難ヲ共ニスベク、與ニ樂ヲ共ニスベカラズ、子何ゾ去ラザルト」蜚は飛に同じ、又淮陰侯傳に「狡兎死シテ走狗烹ラレ、高鳥盡キテ良弓藏メラレ、敵國破レテ謀臣亡ブ、天下已ニ定マル、我レ固ヨリ當ニ烹ラルベシ」とあり、狡兎死すとは敵國の亡びたるに喩へ、走狗烹らるとは、味方の謀臣殺さるゝに喩ふ、

【鄉ニ入ッテハ鄉ニ從フ】 俚諺なり、曲禮に「禮從ッ宜、使從ッ俗」また曰く「入ッ竟而問ッ禁、入ッ國而問ッ俗」などあるに本づく、竟は境なり、

【羹ニ懲リタル者ハ虀ヲ吹ク】（懲於羹者、而吹虀分）楚辭に見ゆ、羹（アツモノ）を「すすり」て熱に中れば、冷たき虀（アエモノ）を見ても恐れて之を吹くは、懲戒に過ぐるに喩ふるなり、

【行年】「トシバヘ」「トシゴロ」年輩に同じ、國語に「——五十矣」註に行は歷なり、

【降年】 天より受けたる「イノチ」稟命に同じ、蔡邕の郭有道碑文に「——不永、民斯悲悼」

【毫芒】 微細の義、淮南子に「析毫剖芒、不可爲內」

【巧發奇中】 時に應じて巧に言を發し、偶〻適中する所ろあるをいふ、漢書郊祀志に「少君資好方、善爲——少君は李少君、方は方術をいふ、

【耕ハ當ニ奴ニ問フベク、織ハ當ニ婢ニ問フベシ】（耕當ッ問ッ奴、織當ッ問ッ婢）宋書に「虞滑臺ニ據ル、宋ノ太祖、北伐セント欲ス、沈慶之固ク諫ムレドモ、可カズ、丹陽尹徐湛之・吏部尚書江湛、竝ビニ座ニ在リ、上湛之等ヲシテ難ゼシム、慶之曰ク、國ヲ理ムルハ、譬ヘバ家ヲ理ムル如シ、耕ハ當ニ奴ニ問フベク、織ハ當ニ婢ニ問フベシ、且ツ陛下今國ヲ伐ツノ兵ヲ興サント欲シ、而シテ白面ノ書生輩ト之ヲ謀ル、何ニ由リテ其ノ事ヲ濟サント上乃チ大ニ笑フ」

【考槃】「隱居して樂むなり、詩の衞風に「考槃在ッ澗、碩人之寬獨寐寤言、永矢弗諼」の註に「考ハ成ナリ、槃ハ盤桓ノ意、其ノ隱處ノ室ヲ成スヲイフナリ」と、一說に、考は扣（タヽク）なり、槃は器の名、蓋し之をたゝきて、以て歌を節す、盆を鼓し、缶を拊つの樂を爲すが如きなりと、山、水を夾むを澗といふ、碩は大、寬は廣、永は長、矢は誓、諼は忘なり、詩人、賢者の閒に隱居し、碩大寬廣にして、戚戚の意無く、獨り寐ね、寤めて自ら言ふにも、此の樂を忘れずと心に誓ふを美むるなり、書言故事に「身ヲ遁レ世ヲ避ケテ、自ラ其ノ志ヲ成スヲ考槃トイフ」

【膏ハ明ヲ以テ自ラ焚カル】「アブラ」は明かなるが故にやかる、以て人は才智あるが故に災を招くに喩ふ、（翠ハ羽）を見よ、

【考妣】 亡父を考といひ、亡母を妣といふ、爾雅に「父爲ッ考、母爲ッ妣」禮記に「生ケルヲ、父・母・妻トイヒ、死セルヲ考・妣・嬪トイフ」とあり、註に「嬪トハ、婦人ノ美稱、嬪ハナホ賓ノ如キナリ、夫賓ノ如ク敬スルナリ」

【皐比】 虎皮なり、左傳莊十年に「蒙ッ——而先犯ッ之」杜註に「——ハ虎皮」とあり、また講席の義となす、朱子の張載銘に「勇撤ッ——」

【行祕書】 書言故事に「記聞多キヲ——トイフ、唐ノ太宗嘗ヲ出行ス、有司副書ヲ載セテ以テ從ハント請フ、上ノ曰ク、須ヒズ、虞世南在リ、此レ——ナリ」とある註に「副書ハ秘書ノ副本、從ハ隨ナリ、天子秘書閣ヲ置キテ書ヲ藏ス、言フコヽロハ、虞世南記聞多キコト、秘書閣ノ藏スル所ロ多キガ若シ、ソノ世南ガ隨ヒテ行クハ、猶ホ秘閣能ク行クガ若シトナリ」

【效顰】（顰ニ效フ）を見よ、

【剛愎】 剛慢很愎なり、戾りて自ら用ふるをいふ左傳に「其佐先縠、——不仁、未肯用ッ命」

【巧婦鳥】「ミソサザイ」鷦鷯に同じ、古名「ササギ」巢を深山の崖の樹枝に懸けてつくる、人の髮、馬の尾毛、麻等にて、蘆の花を綴り、その形巾幾の如く極めて巧緻なり、故に巧婦鳥の名あり形雀に似て小さく、身は灰色に黑と褐との細斑あり、種類多し、

【稟舟ヲ盪カス】 太平記卷二十二に見ゆ、史記の夏本紀の正義に「寒浞其ノ君羿ヲ殺シ、自立シテ帝トナリ羿ノ室ニ因リテ、奡及ビ豷ヲ生ム、奡多力ニシテ能ク陸地ニ舟ヲ行ル、羿ノ臣靡トイフ者、寒浞ヲ殺シ少康ヲ立テ、奡ヲ滅ス」詳しくは右の本文を見よ、

【首ヲ搔ク】 物事の心に叶はぬをいふ、詩經の靜女篇に「愛而不ッ見、搔ッ首踟躕」

【香癖】 香をすき好むくせ、洞天墨錄に「朱萬初、本墨妙又兼ッ——」

【高斷】 字は千里、唐の懿宗の時、朱叔明に事へ、司馬となる、二鵶竝び飛ぶあり、曰く我まさに貴からんには、

當に之に中るべしと、一發して二鵰を貫く、衆大に驚き、落鵰侍御と號す、

【郊保】 保は小城をいふ、——は郭外の小城なり、左傳に「焚我——」

【莢牧】 莢は乾さたる芻草なり「マクサ」を收めて牛羊を牧ふをいふ、漢書溝洫志に「盡河堧棄地民——其中耳」

【槁木死灰】 形は槁木の如く、靜かにして働かず、心は死灰の如く、一念も動かさざるをいふ、莊子の齊物論に「形ハ固ヨリ槁木ノ如クナラシムベク、而シテ心ハ固ヨリ死灰ノ如クナラシムベキ乎」とあり、淮南子にも「形如槁木、心若死灰」とあり、成語考に「絶エテ情欲無キ、之ヲ——トイフ」槁は枯に同じ、

【更僕スルモ末ダ終スベカラズ】 (僕ヲ更フルモ)を見よ、

【高明ノ家ハ鬼ソノ室ヲ瞰フ】 (鬼瞰ノ)を見よ、

【蒿目】 蒿は亂なり、目を亂して視るをいふ、一解に、蒿は「ヨモギ」塵にまみれ易きにより、君子の眼を塵中に昧くするに喩ふと、莊子駢拇に「今之君子、——而憂世之患」

【衡門】 「カブキモン」書言故事に「謙言居陋巷棲遲」

——」と、詩の陳風——篇に「——之下、可以棲遲」とあり、——は木を横へて門とするなり、賤者の居なり、棲遲は游息なり、——は淺陋なりと雖も、亦以て分に安んじて隱居游息すべしとの義なり、

【沈瀁】 瀁は古文の漾の字、——は廣大の貌、左思の吳都賦に「頌溶——」また江淹の詩に「飄飄可終年、——安是非」

【桁楊】 木の足に在るを械といふ、大械を桁といふ、——は刑械を加へらるゝ者をいふ、莊子在宥篇に「——者相推也、刑戮者相望也」

【行藥】 服したる藥を體にめぐらすために散歩するをいふ、唐詩鼓吹に「陸龜蒙ノ詩ニ、更擬結茅臨水次、偶因——到村前」の註に「鮑明遠——至城西橋」ノ詩アリ、服藥ノ後行イテ以テ之ヲ宣導スルヲ言フナリ」

【膏腴ノ地】 漢書の灌夫傳に「治宅甲諸第田園極膏腴」の註に「膏腴ハ肥厚ノ處ヲイフ」成語考に「美田ヲ——ノ田トイフ」

【行潦】 路上の源なき水なり「タマリミヅ」詩の大雅に「泂酌彼——」また孟子に「河海之於——類也」

【郊勞】 郭外まで出迎して犒ふをいふ、禮記に「大夫——」

【行李】 使人をいふ、左傳の襄八年に「不使一介行李告于寡君」の註に「行李ハ行人ナリ」とあり、李一に理に作る、李理は共に吏の字の義なり、後世誤りて旅人の荷物を斥していふに至れり、

【蒿里】 墓地をいふ、漢書武五子傳に「——召兮都門閟」また葬を送る時に、うたふ曲の名(挽歌)を見よ、

【毫釐】 毫は兎毫なり、十毫を釐とす、度の最も短き稱、漢書律曆志に「度長短者不失——」また東方朔傳に「正其本萬事理失之——差以千里」

【毫釐ノ差千里ノ謬ヲ致ス】 (之ヲ毫釐ニ失スレバ)を見よ、

【膏粱】 膏は肥えたる肉、粱は美穀なり、孟子に「詩云、既醉以酒既飽以德言乎飽仁義也所以不願人之——之味也」

【膏粱ノ性】 肥肉美穀を食ふ者は、おほむね驕り「ホシイマヽ」なる者多し、故にその性正し難きをいふ、國語に「——之難正也」

【蛟龍雲雨ヲ得バ終ニ池中ノ物ニアラズ】 英雄時に逢はゞ必ず卓然として爲すことあるに喩ふ、吳志に「周瑜曰、劉備非久屈爲人用者恐蛟龍得雲雨終非池中物」と、また管子に「蛟龍得水而神可立也、虎豹託幽而威可載也」とあるは、人主は民を得てその威立ち、宮中に深居すれば、人その勢を畏るゝに喩ふ、

【亢龍ノ悔】 亢龍は尊貴を極むる者に喩ふ、尊貴を極めて戒慎せざれば、敗亡の悔あるの義、易の乾卦に「亢龍有悔」正義に「上九ハ、亢陽ノ至大ニシテ極盛ナルナリ故ニ亢龍トイフ」史記禁澤傳に「易曰、亢龍有悔、此言上而不能下信而不能詘往而不能自返也」また旱をも亢龍といふ、

【伉儷】 配耦「ツレアヒ」なり、文選の註に「伉ハ敵ナリ、儷ハ偶ナリ、夫婦相敵偶スルヲ謂フ」と、左傳の昭二年に見ゆる字面、

【抗禮】 對等の禮をいふ、漢書貨殖傳に「子貢聘享諸侯所至國君無不分庭與之——」また抗一に亢に作る、禮記に「臣莫敢與君亢禮也」

【號令】 制號命令なり、書の冏命に「發號施令罔有不臧」また禮記に「發號出令而民說」また號び呼びて指令する義、國語に「——於三軍」

【剛戾自ラ用フ】 剛愎にして暴戾、自らオ智を用ひて、人の說を容れざるをいふ、史記秦紀に「始皇爲人天性——」

【藜藜含糗】 藜(アカザ)を「アツモノ」にし、糗(ホシイヒ)

を含む義にて、粗食をいふ、聖主得賢臣頌に「——者、不足與論太牢之滋味」

【校獵】 校は木にて遮り、禽獸の逃ぐるをふせぎとむる義、即ち埒をしつらへ、禽獸の逃路をふせぎて獵り取るをいふ、漢書成帝記に「從胡客大——」

【孝廉】 孝とは善く父母に事ふるをいひ、廉とは清潔にして、廉隅ある者をいふ、廉隅とは守る所ろある義、節操をいふ、漢書武帝紀に「初メテ郡國ヲシテ——各一人ヲ舉ゲシム」と、これよりして漢時代の徵士の科名となる、

【香奩體】 奩は匳に作る、同じ、香を入るゝ器なり、一に曰く、鏡匣なりと、要するに美人の妝具を藏する「ハコ」を香奩といふ、唐の韓偓好んで美人の事を詠ず、その詩をあつめたるを香奩集といふ、これによりてその種の詩を——といふ、

【膏露】 禮記に「天降——」とあり、甘露に同じ、鶡冠子に「聖人ノ德、上、太清ニ及ビ、下、太寧ニ及ビ、中、萬靈ニ及ベバ、則チ——下ル」

【香爐峰ノ雪ハ、簾ヲ撥ゲテ看ル】 白氏文集十六に「香爐峯下新ト山居、艸堂初成」と題する詩の一首に「日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒、遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看、匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官、心泰身寧是歸處、故鄉可獨在長安」とあり、一本に鐘を泉に、可を何に作る、今は唐宋詩醇載する所ろに從ふ、香爐峯は、後漢書の註に「廬山ハ潯陽ノ南ニ在リ、東南ニ香鑪山アリ、ソノ上氛氳、香烟ノ如シ」と、遺愛寺は白居易の廬山艸堂記に「匡廬奇秀甲天下山、山北峯曰香爐峯、峯北寺曰遺愛寺、介峯寺閒、其境勝絕、又甲廬山」とあり匡廬は、廬山の別名、周の世、匡裕といふ仙人、この山に廬せしにより名つく（廬山ノ瀑）を參看せよ、

【牙營】 牙旗を立てたる軍營にて、大將軍の居る本營をいふ（牙城）を參看せよ、

【瑕ヲ匿シ垢ヲ含ム】 度量廣大にして、能く物を容れ、恥を忍びて爭はざる義、左傳宣十五年に「川澤納汚、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也」とあり、川澤は汚濁を受け、山藪は毒惡を藏くし、美玉の質と雖も亦或は瑕穢を藏する如く、國君は垢恥を忍ぶべしとの意、小惡は大德を損せざるに喩ふ、

【蚊ヲ驅ラズ】 孝子傳に「吳猛少クシテ孝行アリ、夏日常ニ蚊ヲ驅ラズ、其ノ去ツテ親ヲ噬マンコトヲ懼ルレバナリ」

【柯ヲ伐リ柯ヲ伐ル、其ノ則遠カラズ】 （伐柯伐柯、其則不遠）詩經豳風に見ゆる語、柯は斧の柄なり、斧の柄を作るに標準とすべき則は、別に遠きに求むるを要せず、現に執る所ろの斧の柄がその則となるをいふ、國語にも「先人有言、伐柯者、其則不遠、今君王不斷、其忘會稽之事乎」

【柯ヲ伐ルソノ規遠カラズ】 太平記卷四に見ゆ、前の（柯ヲ伐リ柯ヲ伐ル）を見よ、

【蚊ヲ殺スニハ其ノ馬ヲ擊タズ】 太平記卷十九に見ゆ、馬は牛に改むべし（牛ノ蝨ヲ搏ツ）を見よ、

【蚊ヲシテ山ヲ負ハシム】 （使蚊負山）重任に任へざるに喩ふ、莊子の秋水篇に「知是非ノ竟ヲ知ラズシテ、而シテ猶ホ莊子ノ言ヲ觀ント欲ス、是レ蚊ヲシテ山ヲ負ヒ、商蚷ヲシテ河ニ馳セシムルガ如キナリ、必ズ任ニ勝ヘズ」

【呵呵】 から〳〵と笑ふ貌、集韻に「博雅ニイフ、——ハ笑ナリ」閭丘胤の寒山詩序に「撫掌——大笑」

【峨峨】 高き貌、劉向九歎に「冠浮雲之——」一說に、この時は音ギまた儀容の高潔なる貌、詩の大雅に「奉璋——」とあるは、圭璋を執り、祭を助くる者の儀容——然として高きをいふ、

【娥娥】 美人の貌「ウツクシ」沈佺期の句に「天上——紅粉席」

【瓦解】 瓦の解散する如く、はなればなれに分裂する義（土崩——）を見よ、

【家誡ヲ屏風ニ書ス】 事文類聚續集卷の十一に「房玄齡諸子ノ驕侈ニシテ勢ニ席リ人ヲ凌ガンコトヲ恐レ、乃チ古今ノ家誡ヲ集メテ屏風ニ書シテ曰ク、意ヲ此ニ留ムレバ、以テ躬ヲ保ツニ足ラント」

【河海ニ挹ムガゴトシ】 盡きざるに喩ふ、管子に「此所謂用若挹於河海」また戰國策に「髡者賢者之疇也、玉求士於髡、若挹水於河、而取火於燧也」髡は淳于髡、

【河海ハ細流ヲ擇バズ】 （河海不擇細流）度量の廣大なるに喩ふ、戰國策の李斯の上書に「臣聞ク、地廣ケレバ粟多ク、國大ナレバ人衆ク、兵彊ケレバ、即チ士勇ムト、是ヲ以テ太山ハ土壤ヲ讓ラズ、故ニ能ク其ノ大ヲ成ス、河海ハ細流ヲ擇バズ、故ニ能ク其ノ深ヲ就ス、王者ハ衆庶ヲ却ケズ、故ニ能ク其ノ德ヲ明カニス」とあり、海は多くの小流を汚と爲さずして、悉く之を受くる故に深く、山はすこしの壤をも捨てざる故に大となるをいふ、

【下交】 貴人が、賤者に交るをいふ、史記信陵君傳に「信

陵君之接ニ巖穴ノ隱者ニ、不ル恥ニ——ヲ、有リ以也」

【嘉穀】 穀は粗豆にもるもの「サカナ」——は「ヨキサカナ」詩經に「彼有ニ旨酒、又有ニ——ニ」

【嘉肴アリト雖モ 食ハザレバ其ノ旨キヲ知ラズ】 (雖有ニ嘉肴ニ、不レ食ハ不レ知ニ其旨)聖人の至道ありとも、學ばざれば、その善きを知らざるに喩ふ、禮記の學記に、この句の下に「雖有ニ至道ニ、不レ學ニ、不レ知ニ其善ニ」とあり、

【嘉樂】 樂は說文に「五聲八音ノ總名」とあり、——は正しき聲律にかなへる音樂、左傳に「——ニ不ニ夜合ニ」

【雅樂】 正しき音樂、孟子に「惡ニ鄭聲ニ、恐ニ其亂ニ——ニ也」

【下學上達】 下、人事を學び盡して、上、天理を發明して上達するをいふ、論語憲問篇に「子曰、不レ怨ニ天ニ、不レ尤ニ人ニ、下學而上達、知レ我者其天乎」

【鏡】 器物論に「鏡ノ言タル景ナリ、光景アルヲイフナリ、物ヲ照ス所以ノ物、精銅ヲ用ヒテ之ヲ鑄ル、又鑑トモイフ、蓋シ人ハ自ラ見ルニ短シ、必ズ須ラク此ヲ假リテ面ヲ觀ルベシ云云」西京雜記に「秦ノ始皇方鏡アリ、心膽ヲ照シ見ル、凡ソ女子邪心アル者、之ヲ照セバ、即チ膽張リ心動ク」と、六帖に「魏武帝ニ菱花鏡アリ」と、淮南子に「明鏡ノ始メ型スルヤ、朦然タリ、之ニ粉スルニ、玄錫ヲ以テシ、之ヲ摩スルニ、白旃ヲ以テスルニ及ンデ、鬚眉髮毛得テ察スベシ」と、後漢書朱穆傳の注に「武王鏡ノ銘ニ曰ク、以レ鏡自照者、見ニ形容ニ、以レ人自照者見ニ吉凶ニ」

【河漢ノ言】 (其ノ言ヲ河漢ニス)を見よ、

【柹】 酉陽雜俎に「柹樹ニ七絕アリ、一ニ壽、二ニ陰多シ、三ニ鳥巢ナシ、四ニ蟲ナシ、五ニ霜葉翫ブベシ、六ニ嘉實、七ニ、落葉肥大ナリ」と、秘傳花鏡に「柹朱果也、葉似ニ山茶ニ、而厚大、四月開ニ黃白小花ニ、結實青綠、九月微黃、即摘、少藏數日、即便紅熟、甜美可ニ啖ニ、但未[illegible]藏、將[illegible]木瓜三兩枚、雜ニ於生柹籃中ニ、數日、或以ニ榠[illegible]能去レ澁、古云、柹有ニ七絕ニ、一樹多レ壽、二、葉多レ陰[illegible]巢、四、少ニ蟲蠹ニ、五、霜葉可レ玩、六、嘉實可レ餐、七、落葉肥[illegible]可ニ以臨レ書、如冬閉核種、待レ長移レ栽、不レ若春後用ニ椑柹ニ接、或取ニ好枝、於ニ輭棗根上ニ接更妙、大凡柹接三次過、則核全無矣、蓋柹之種類不一、有ニ紅柹・烏柹・黃柹・八稜・方蒂等名ニ也、木有レ文而根最固、俗謂ニ之柹盤ニ、別有ニ一種椑柹ニ、葉上有レ毛、實皆青黑、最不レ堪レ食、止可ニ收作ニ柹漆ニ、八月閉用ニ椑柹ニ擣碎、每ニ柹一升ニ、用ニ水半升ニ、釀ニ四五時、搾ニ取漆ニ、乾ニ、添ニ水再取ニ、傘扇全類ニ、此漆ニ糊成也、

【賈逵】 字は景伯漢の平陵の人、倜儻にして大節あり、明帝の時拜して侍中となる、和帝の時に至り、内は帷幄に備はり、兼て祕書を領し、甚だ信用せられ、著すところ、經傳義詁及び、論難百餘萬言あり、學者之を宗とし、稱して通儒となす、因にいふ、三國の時また——あり、字は梁道、魏の文帝の時豫州の刺史となりて名聲あり、

【賈誼】 漢の洛陽の人、文帝の時河南の守吳公之を薦む、文帝召して博士と爲す、時に年二十餘、一歲中に超遷して大中大夫に至る、誼正朔を改め禮樂を興さんことを請ふ、絳灌等之を毀つを以て、出されて長沙王の太傅となる、誼すでに貶せられ、湘水をわたるに及びて賦を作りて屈原を弔す、詞意沈鬱、俗を疾み世を傷むと甚し、蓋し屈を弔するは、乃ち自ら慰むる所以なり、後ち復召されて、帝に宣室に謁す、帝鬼神の事を問ふ、夜半に至りて覺えず席を前めて傾聽す、すでにして梁の懷王の太傅となり、治安策を上る、論者以て國體に通達すと爲す、居ること數年、懷王馬より墮ちて死す、誼自らその傅となりて無狀なりしを悔い哭泣すること歲餘にして亦死す、年三十三、

【遐棄】 遠ざけて見すてる、詩經の召南に「既見ニ君子ニ、不ニ我ニ——ニ」

【嘉卉】 よき草木をいふ、卉は草の總名、また草木の總名にも用ふ、詩經の小雅に「山有ニ——ニ」

【牙旗】 天子または大將の旗(牙城)を見よ、

【何休】 字は邵公、漢の任城、樊の人、質朴吶口にして雅思あり、六經を精研し世儒及ぶ者なし、嘗て公羊墨守・左氏膏肓・穀梁廢疾を作る、北新城長に除し、大に講舍を作し、生徒數百を聚む、朝夕往いて講を勸め、儒化大いに行はる、

【河九里ヲ潤ス】 (河潤)を見よ、

【燕子花】 (燕子花)を見よ、

【佳境】 好處をいふ(漸ク佳境)を見よ、

【涯有ルヲ以テ涯無キニ隨フ】 限りある生命を以て、限りなき知を求めんとするの難きをいふ、莊子の養生主篇に「吾生也有ニ涯ニ、而知也無ニ涯ニ、以ニ有ニ涯隨ニ無涯ニ、殆已」郭註に「限有ルノ性ヲ以テ、極無キノ知ヲ尋ヌ、安ンゾ得テ困シマザランヤ」

【角】 徐廣車復儀に「——ハ前世ノ載セザルトコロ、或ハイフモト北方ニ出ヅ、以テ中國ノ馬ヲ驚スナリ」或はいふ黃帝の時、玄女請うて角二十四を製し以て衆を警しむと、李益の詩に「邊霜昨夜墮ニ關榆ニ、吹レ角當レ城片月孤」

【下愚】 至りて昏愚なる者をいふ、論語に「上知與ニ——ニ」

不移」

【嶽父】 妻の父をいふ、嶽は泰山なり、歐陽修の說に「泰山ニ丈人峰アリ、故ニイフ」と、一に嶽丈・また嶽父、また嶽公ともいふ、

【學ヲ爲スニハ生ヲ治ムルヲ以テ本ト爲ス】 (爲學以治生爲本)劉氏人譜に「許魯齋嘗テイフ、學ヲ爲スニハ生ヲ治ムルヲ以テ本ト爲スト、此ノ言出デテ、甚ダ世ノ譏議スル所ロト爲レリ、後人當ニ善ク其ノ意ヲ會シ、人ニ利ヲ謀ルコトヲ敎フルニアラザルコトヲ知ルベキナリ、貧窮ノ、人ヲ累ハスコト甚シ、古今來之ガ爲メニ節ヲ敗リ名ヲ喪ハザル者、幾人カ有ル、學者ハ須ラク是レ勤ニ習ヒ勞ニ服シテ、撙節儉約シ、遊手遊食シテ、以テ仰事俯畜、依賴スル所ロナキヲ致サシムルコト勿カルベキノミ、昔司馬溫公相ト爲リシトキ、每ニ士大夫ノ私計足ルヤ否ヤヲ詢フ、人怪ミテ之ヲ問フ、公ノ曰ク、倘シ衣食足ラズンバ、安ゾ肯テ朝廷ノ爲メニシテ、去就ヲ輕ンゼンヤト、正ニ是レ此ノ意見ニ同ジ」(許衡)を參看せよ、

【學ヲ廢スルコト機ヲ斷ツガ如シ】 (廢學如斷機)劉向の列女傳ニ「孟子既ニ學ンデ而シテ歸ルニ及ンデ、孟母學ノ至ル所ロヲ問フ、孟子曰ク、自若タリト、孟母刀ヲ以テ其ノ織ヲ斷チテ曰ク、子ノ學ヲ廢スルハ、吾ガ斯ノ織ヲ斷ツガ若キナリト、孟子懼レ旦夕勤學シテ息マズ、子思ニ師トシ事ヘテ、遂ニ名儒ト爲リヌ」

【學ヲ以テ愚ヲ愈ス】 學問に由りて知識を進め、己の愚蒙を發く意、說苑に「人皆知以食愈饑、莫知以學愈愚」

【學海】 揚子法言に「百川學海至海、丘陵學山不至山」百川は晝夜息むことなく流る、故につひに海に至る、丘陵は止まりて進まず、故に山を成すに至らず、以て學もつとむれば成り、自らかざりてつとめざれば成らざるに喩ふ、

【學校】 孟子に「設爲庠序學校、以敎之、庠者養也、校者敎也、序者射也、夏曰校、殷曰序、周曰庠、學則三代共之、皆所以明人倫也」註に「庠ハ老ヲ養フヲ以テ義ト爲ス、校ハ、民ヲ敎フルヲ以テ義トナス、序ハ射ヲ習ハスヲ以テ義ト爲ス、皆鄉學ナリ、學ハ國學ナリ、共之トハ、異名無クシテ、三代共ニ之ヲ學トイフナリ、倫ハ序ナリ、父子親有リ、君臣義有リ、夫婦別有リ、長幼序有リ、朋友信有リ、此レ人ノ大倫ナリ」とあり、わが國にて或る一箇の學舍に、何々學校と連用すれども、そは熟せず、

【嶽降】 嶽は山の高くして尊きもの、——は貴人の生誕をいふ、詩經に「維嶽降神、生甫及申」とあるに本づく、

【格格】 鳥の聲を形容する語、荆楚歲時記に「有鳥如烏、先鷄而鳴、架架——」

【赫赫】 顯盛の貌、また威名の光顯なるをいふ、詩經に「——南仲、玁狁于襄、襄は攘なり、また旱氣の甚しきにもいふ、詩の大雅に「——炎炎」

【諮諮】 敎令することの嚴なるなり、禮の玉藻に「戎容——」

【閣閣】 蛙の聲のやかましきをいふ、韓愈の詩に「蛙黽鳴無謂、——祇亂人」この詩は、羣言の道を害するに喩へたるなり、

【頷頷】 あしきことをなして休息することなきをいふ、書の益稷に「慢遊是好、傲虐是作、無晝夜——」註に「惡ヲホシイマヽニシテ休息スルコトナリ」

【瀸瀸】 水の流るゝ聲、說文に「瀸ハ水裂去スルナリ」揚子方言に「激水ナリ」韓愈の藍田廳壁記に「水——循除鳴」

【諤諤】 是非を直言するをいふ、史記商君傳に「千人之諾諾、不如一士之——」(千羊ノ皮)を見よ、また夫を諫むる妻を——婦といふ、枚乘傳に「夫無——之婦、士無——之友、其亡可立而待」

【赫赫ノ功】 赫赫は、顯盛の貌、世に顯耀する功名なり、荀子に「無惛惛之志者、無——之——」また韓愈の文に「高材多戚戚之窮、盛位無赫赫之光」

【樂勝テバ則チ流ル】 音樂が禮に勝つときは、流れて不敬となる義(禮勝テバ)を見よ、

【客氣】 血氣の假勇にして、眞の勇にあらず、左傳定八年に「陽虎曰、盡——也」

【郭熙】 圖繪寶鑑に「——河陽溫縣人、善山水寒林、宗李成法、得烟雲出沒峯巒隱顯之妙」

【赫戲】 光明の貌、屈原離騷に「陟陞皇之——分」皇は皇天をいふ、

【學規】 學校の「オキテ」朱熹に、白鹿洞書院——あり

【樂毅】 周の靈壽の人、羊の後なり、魏より燕に之く、燕の昭王以て亞卿となす、齊を伐ちて七十餘城を下す後ち惠王の疑ふ所ろとなり、趙に奔る、趙之を觀津に封じ、望諸君と號す、

【鸞鳩鵬ヲ笑フ】 (鸞鳩笑鵬)鸞鳩は「ジユズカケバト」といふ小禽にして鵬は大鳥なり、以て小人が、偉人の行爲を笑ふに喩ふ、莊子の逍遙遊篇に「鵬ノ南冥ニ徙

ルヤ、水擊三千里、扶搖ニ搏チテ、而シテ上ボル者、九萬里、去ルニ六月ヲ以テ息フ者ナリ、蜩ト鷽鳩ト之ヲ笑ヒテ曰ク、我レ決起シテ飛ンデ楡枋ニ搶ル、時ニ則チ至ラズシテ而シテ地ニ控スルノミ、奚ゾ之ノ九萬里ニシテ、而シテ南スルヲ以テセン」

【恪勤】 恪は「ツヽシム」勤は「ツトムル」誠實につとむる義、國語に「朝夕ーー、守以惇德奉以忠信」

【鱷魚ノ暴ヲ馴ス】 (馴鱷魚之暴)蘇軾の潮州韓文公廟碑の句、唐書韓愈傳に「初公至潮、問民疾苦、皆曰、惡谿有鱷魚、食民產、且盡、數日公令其屬秦濟以一羊一豚投谿水而祝之、其夕有暴風震雷起湫水中、數日水盡涸、西徙六十里、自是潮州無鱷魚患」鱷魚の文は八家文に出づ、

【権會】 権は、他人を禁じて己れ獨り之を專にするをいひ、會は賣買兩者の價を平會する義、ーーは即ち賣買兩者の閒にはさまり、其の價を平かならしめ、以て其の利を占め、他人の之を爲すを禁ずるをいふ、漢書景十三王傳に「趙王擅權使使即縣爲賈人ーーと會一に僧に作る、

【隔靴搔痒】 (靴ヲ隔テ)を見よ、

【権管ノ利】 権は其の利を專らにして官に入らしむる義、管は幹なり、商估の事に干與し、獨り專らその利を得て官に入るゝをいふ、漢書車千秋傳に「桑弘羊爲御史大夫八年、自以爲國家興ーーー之利」

【客卿】 他の國より來りて卿相の位になれる者、史記に「拜范雎爲ーーー」

【郝經】 元の陵川の人、父思溫、河南を避けて魯山に之く、金亡び順天に徙る、家貧しく晝は則ち薪米を負ひ養をなし、暮は則ち書を讀む、居る五年、守帥張柔賈輔の知るところとなり、延いて上客となす、世祖の潛邸に在るや、經を召して經國安民の道を諮ふ、條して數十事を上る、大に悅び遂に王府に留まる、位に即くに及び翰林侍讀學士となり、國信使に充てられ宋に使し、留められて屈せず、居ること十六年にして歸る、文集數百卷を著す、

【権酤】 官府の酒を專賣して、其の利益を獨占する義、漢書武帝紀に「初権酒酤」また漢書昭帝紀に「罷鹽鐵ーーー」註に「武帝時、以國用不足、縣官悉自賣鹽鐵酤酒、昭帝不與天下爭利、故能之」

【覺寤】 醒め悟らしむる義、國語に「ーー王心」

【確乎トシテ拔クベカラズ】 堅固にして、移易すべからざるをいふ、易經に「確乎其不可拔」

【客恨】 他鄉に客となり居るうらみ、

【客作】 傭工なり、漢書匡衡傳に「衡乃與其ーー」輟耕錄に「今人傭工ノ者ヲ指テーートイフ」

【搭殺】 搭は擊なり、魏志任城王傳に「手搭猛獸」とあり、ーーは「テウチ」にする義、後漢書光武紀に「叱奴下車因ーーー之」

【學士】 ひろく學者の義として用ふ、また官職の名(翰林)を見よ、

【鶴氅】 つるの羽毛にてつくりたる「タゴロモ」晉書に「王恭字孝伯、清操過人、美姿儀、中暑晉被ーー裘、涉雪而行、或窺見曰、此眞神仙中人也」

【矍鑠】 書言故事に「老健者ヲ稱シテ矍鑠タル哉トイフ」とあり、後漢書光武紀に「馬援年六十二、請擊武陵五溪蠻夷、曰、臣尙能披甲上馬、光武令試之、援據鞍顧盼、以示可用、帝曰、矍鑠哉是翁也」註に「ーーハ、輕健ノ貌」

【角黍】 「チマキ」風土記に「五月五日菰葉ヲ以テ黏米ヲ裹ミ煮熟ス、之ヲーートイフ、以テ陰陽相包裹シ、赤ダ分散セザルニ象ル」と、書言故事に「今ノ俗之ヲ粽子トイフ、唐ノ天寶中宮中五日ニ、粉團ーーヲ作ル」

【學殖】 左傳昭八年に「夫學殖也、不殖將落」の杜註に「殖ハ生長ナリ、學ノ德ニ進ムコトハ、農ノ苗ヲ殖ウルニ、日ニ新ニ月ニ益スガ如クスルヲイフ」(墨莊)を參看せよ、

【樂正子春足ヲ傷ク】 禮記に「樂正子春堂ヲ下ルトキ誤リテ足ヲ傷ク、數月マデ出デズ、猶憂フル色アリ、門人問ヒテ曰ク、夫子ノ足既ニ瘳エタリ、猶ホ憂フル色アルハ何ゾヤト、樂正子春曰ク、善キ哉汝ガ問、夫レ父母全ウシテ之ヲ生ミ、子全ウシテ之ヲ歸ス、故ニ君子ハ頃歩ノ閒モ、敢テ孝ヲ忘レザルナリ、今予孝ノ道ヲ忘ル、是ヲ以テ之ヲ憂フルナリト」

【客星帝座ヲ犯ス】 卑しき士が至尊を犯すをいふ、後漢書に「嚴光字ハ子陵、少時光武ト師ヲ同ウシテ學ベリ、光武ノ帝位ニ即クヤ、子陵姓名ヲ變ジ、澤中ニ釣シテ世ヲノガレリ、光武子陵ノ澤畔ニ釣セルコトヲ聞キ、安車玄纁ヲ備ヘテ帝都ニ招ケリ、子陵已ニ帝宮ニ至リ、光武共ニ臥シ、足ヲ以テ帝ノ腹ニ加フ、太史急ニ奏シテ曰ク、客星帝座ヲ犯スコト急ナリト、帝笑ツテ曰ク、朕故人嚴子陵ト共ニ臥セルノミト、子陵後ニ富春山中ニ隱レテ世ヲ終ハリヌ」

【角逐】 角は勝負を競ふなり、爭ひて馳逐する義、戰國策に「駕犀首而驂馬服、與秦ーー」犀首は魏の相、公

孫衍の號、馬服は趙の將、馬服君趙奢をいふ、

【角觝】 事物紀原に「今ノ相撲ナリ、漢武故事ニ曰ク、——ハ昔、六國ノ時ニ造ル所ロト 史記ニ 秦ノ二世甘泉宮ニ在リテ ——ヲ作シ樂シム」と、註に「戰國ノ時、增ス武ヲ講ズ、以テ戲樂ヲ爲シテ相誇リ、其ノ材力ヲ角ベシメテ、以テ相觝鬬シ、兩兩相當ラシムルナリ、漢ノ武帝之ヲ好ム」と、漢書の武帝紀に「元封三年爲角抵戲」とあり、角は校なり競なり、觝は當なり、一に抵に作る、

【涸轍ノ鮒魚】 急迫して死に逼るに喩ふ(轍鮒ノ)を見よ、

【赫怒】 さかんに怒るなり、詩の大雅に「王赫斯怒」

【下愚ノ性移ルベカラズ】 (上知ト下愚ト)を見よ、

【學ハ及バザルガ如クスルモ猶ホ之ヲ失ハンコトヲ恐ル】 孔子の語、論語泰伯篇に「學如不及、猶恐失之」とあり、人の學を爲すは、日に勉めて一刻の閒斷もなく、追へども及ばざるが如く、力のあらん限り進み往くべし、かくしてもその心は猶ほ或は之を失ひて竟に追ひ及ぶこと能はざるを恐るゝ如くせよ、かく功と心とを用ひなば、學の成ること必せりとの意、

【學ハ牛毛ノ如ク、成ルハ麟角ノ如シ】 (學者如牛毛、成者如麟角)太平御覽にいふ、蔣子方、機論の語なりと、學に志す者は、牛毛の如く多きも、成業する者は麒麟の角の如く稀なりとの意、

【攫搏】 脚を以て之を取るを攫といひ、翼を以て之を擊つを搏といふ、禮の儒行に「鷙蟲——」

【學ハ須ラク靜ナルベシ】 (學須靜)蜀志に「諸葛孔明ノ其ノ子ニ與ヘタル書ニ、學ハ須ラク靜ナルベク、才ハ須ラク學ブベシ、學ニ非レバ以テ才ヲ廣ムルコトナク、靜ニ非ザレバ以テ學ヲ成スコトナシ、慆慢ナルトキハ精ヲ研クコト能ハズ、險躁ナルトキハ性ヲ理ムルコト能ハズ、年ハ時ト共ニ馳セ、意ハ歲ト共ニ去リテ、遂ニ枯落トナリテ、窮廬ニ悲歎スルモ、將復何ゾ及バン」

【岳飛】 宋の高宗の時の忠臣字は鵬擧、湯陰の人、少くして氣節を負ひ、左氏春秋孫吳の兵法を好み、誓ふに盡忠報國を以てす、初め河南河北諸州の招討使を授けられ、少保に轉ず、志恢復を圖る、兵を用ふるに能く寡を以て衆に敵す、屢〻强敵を破り未だ嘗て一敗せず、大業成るに垂んとして、秦檜の爲めに害せらる、後ち鄂王に追封せられ、武穆と謚せらる、五子皆賢なり、

【閣筆】 (筆ヲ閣ク)を見よ、

【樂府】 漢書禮樂志に「武帝郊祀ノ禮ヲ定メ、樂府ヲ立テ、李延年ヲ以テ協律都尉トナシ、司馬相如等ノ作レル詩賦ヲ采リ、律呂ヲ論ジテ八音ノ調ニ和ス」これ樂府の始めなり、この事、哀帝の時に至りて罷む、後世その調に倣ひて作りたる詩をも樂府といふ、邦讀はガフ

【嶽父】 類書纂要に「——嶽公・丈人・嶽翁ハ並ニ妻ノ父ヲ稱スルナリ、泰山ハ五岳ノ長ト爲ス、ソノ上ニ丈人峯アリ、故ニ妻ノ父ヲ泰山マター——ト爲ス」

【格物致知】 格は究なり、————は物の道理を究めつくしてわが知を致しきはむるをいふ、大學に「致知在格物、又物格而後知至」

【格物入門】 七卷、米人丁韙良著す、淸の同治七年仲春、徐繼畬の序あり、一卷は水學、二卷は氣學、三卷は火學、四卷は電學、五卷は力學、六卷は化學、七卷は算學を說述す、皆西洋の理化學を漢譯せしものなり、著者は耶蘇敎の宣敎師として支那に航し、傳道太だ力む、支那語に精通し漢文を善くす、著すところ、別に天道溯源あり、明治十八九年の頃わが邦にも來りしことあり

【岳武穆】 宋の忠臣、岳飛、謚して武穆といふ(岳飛)を見よ、

【岳牧】 四岳十二牧なり、後世の公卿諸侯の如し、書經に「唐虞稽古、建官維百、內有百揆四岳、外有州牧侯伯」また史記伯夷傳に「舜禹之閒、——咸薦」

【家君】 類書纂要に「自ラ父ヲ稱シテ家父・——家大人・家尊・家嚴・老父ト曰フ」

【革命】 王者の興る、命を天に受く、故に世を易ふるを革命といふ、易の革の卦に「天地革而四時成、湯武革命、順乎天而應乎人、革之時大矣哉」書經にも「殷革夏時」

【革面】 (小人面ヲ)を見よ、

【膃目】 膃は燻なり、馬屎をくすべて明を失はしむるをいふ、史記刺客傳に「乃膃其目、使擊筑」

【學問】 習ひたづぬる義、學は效なり、問は訊なり、事を效ひてその理を覺り、道をたづねて、その惑を解くをいふ、易經に「君子學以集之、問以辨之」また孟子に「他日未嘗——、好馳馬試劍」

【岳陽樓】 唐書に「岳州巴陵郡ハ、江南西道ニ屬ス、岳州ハ、天岳山ノ陽ニ在リ、故ニ岳陽ト名ヅク」風土記に「岳陽樓ハ城西ノ門樓ナリ、下洞庭ヲ瞰シ、景物寬闊ナリ」と、范仲淹に——記あり、杜甫の詩に「昔聞洞庭水、今上——、吳楚東南拆、乾坤日夜浮、親朋無一字、老

病有孤舟、戎馬關山北、憑軒涕泗流」

【鶴翼ノ陣】（魚鱗——）を見よ、

【鶴林玉露】 十六卷、宋の羅大經（字ハ景綸廬陵ノ人）撰す、その體例、詩話・語錄・小說の閒に在り、大抵議論に詳にして、考證に畧なり、和版あり世に行はる、

【隱レタルヨリ見ハルヽハ無シ】 中庸に「莫レ見レ乎隱、莫レ顯、乎微、故君子愼其獨也」の註に「隱ハ暗處ナリ、微ハ細事ナリ、獨トハ人ノ知ラザル所ロニシテ、己レ獨リ知ル所ロノ地ナリ、言フコヽロハ、幽暗ノ中、細微ノ事、跡未ダ形ハレズト雖モ、幾ハ則チスデニ動ク 人知ラズト雖モ、己レ獨リ之ヲ知ル、則チ是レ天下ノ事、著見明顯ナルコト、此ニ過ギタル者有ルコトナシ云々」

【鶴列】 陳列ヲイフ、莊子徐無鬼に「無盛——於麗譙之閒」また柳宗元の文に「踐山跨海、堅其——」

【荷花】 「ハチス」爾雅に「荷ハ芙蕖ナリ、ソノ莖ハ茄、ソノ葉ハ荷、ソノ華ハ菡萏、ソノ實ハ蓮、ソノ根ハ藕」注に「別ニ芙蓉ト名ヅク、江東ニ荷トイフ」格物叢話に「一重臺ノ者アリ、雙頭ノ者アリ、世人指シテ以テ瑞トナス、マタ曉ハ朝日ニ起キ、夜ハ低ク水ニ入ル者アリ目ケテ睡蓮トイフ」三柳軒雜識に「蓮ヲ淨客トナス」曹子建の詩に「朱華冒綠池」（愛蓮ノ）を見よ、

【牙儈】 「スアヒ」「ナカガイ」「サイトリ」賣買のなかだちをして利を取る者をいふ、品字箋に「儈ハ會ナリ、——ハ齒牙ヲ以テ市中ノ交易ヲ會合スルモノ」

【嘉禾ノ瑞】 事文類聚前集卷の十九に、東觀漢記を引さて「光武生時、有嘉禾一莖九穗、縣境大熟、因名秀」

【下官不職】 下官は卑稱なり、不職は職務に耐へざる義、漢書賈誼傳に「坐罷軟不勝任者、不謂罷軟、曰——」

【夏珪】 宋の錢塘の人、杭州志「——字ハ禹玉、寧宗ノ朝、畫院ニ待詔タリ、金帶ヲ賜フ、院人中、畫山水ハ李唐ヨリ以下ソノ右ニ出ヅル者ナシ」

【夏畦】 夏日畦を治むるに勞する人をいふ、孟子に「脅肩諂笑、病于——」

【俄頃】 「シバシ」の閒をいふ、郭璞の江賦に「倏忽數百、千里——」

【家雞ヲ輕ンジテ、野雉ヲ愛ス】 書言故事に「常ヲ厭ヒ新ヲ喜ブヲイフ」と、法書苑に「庾翼、草隸ヲ善クス、王羲之ト名ヲ齊クス、而ルニ內外羲之ヲ宗尙ス、翼不平ナリ、人ニ與ヘテイフ、見輩乃輕家雞愛野雉」と「南史には雉を鶩に作る、

【何景明】 字は仲默、明の信陽の人、弘治十五年の進士、官は陝西提學副使に至る、嘉靖の初、年三十九にて卒す、景明性耿介にして節義を尙び榮利を鄙み李夢陽と同じく國士の風あり、初め二人詩文を以て相得て甚だ歡びしも、名を成せるの後は互に相誣排するに至れり、蓋し夢陽は才力富贍なれども、摸倣を主とし景明は才力彼に遜るも剏造を主として、その天分各〻同じからざるに由る、

【影ヲ搏ツ】 人の陰影を搏つことは得べからざるをいふ、漢書主父偃傳に「匈奴獸聚而鳥散、從之如搏影」また管子に「善者之爲兵也、使敵若據虛如搏影」

【影ヲ畏レ迹ヲ惡ム】 淸靜以て眞を養ふことを知らず、徒に物の爲めに累はさるゝを惡む義、莊子に「甚矣子之難悟也、人有畏影惡迹而去之走者、舉足愈數、而迹愈多、走愈疾而影不離身、自以爲尙遲、疾走不休、絕力而死、不知處陰以休影、處靜以息迹、愚亦甚矣」また枚乘の書に「人性有畏其影而惡其迹者、卻背而走、迹愈多影愈疾、不知就陰而止、影滅迹絕」

【夏桀南巢ニ走ル】 太平記の序に見ゆ、夏の桀王、名は履癸、桀は諡なり、諡法に賊人多殺曰桀とあり、この王の殘虐なりしこと知るべし、南巢は地名、尙書に「成湯伐桀放於南巢」とあり、史記には走鳴條に作る、鳴條は南夷の名、

【下弦】 故事成語考に「下弦ハ月其ノ半ヲ缺クヲイフ、廿二三ニ係ル」と陰曆の廿二三日頃の月をいふ、

【家嚴】 書言故事に「子、父ヲ稱シテ——トイフ」易經に「家人有嚴君焉、乃父之謂也」嚴君とは尊嚴にする所ろの君長の義、

【夏后氏】 禹始め西羌に長ず、夏伯に封ぜらる、故に國を夏と號す、后は、白虎通に「揖讓ヲ以テ君ニ受ク、故ニ后ト稱ス」とあり、安邑に都す、

【架槽】 木の「カケヒ」なり、三才圖會に「——ハ木架水槽ナリ、閒〻聚落アリ、水ヲ去ルコト既ニ遠ケレバ、各家力ヲ共ニシテ、木槽ヲ造リ、遞ニ相嵌接ス、高下ニ限ラズ、水ヲ引イテ至ル、モシ泉源頗ル高ク、水性趨リ下ルトキハ、則チ引キ易キナリ云云」筧は竹の「カケヒ」

【遐想】 遐は遠なり、遠く隔りたる人をはるかに思ひやる義、張登傳に「夢結——」

【河朔ノ飲】 初學記に「光祿大夫劉松、北、袁紹ガ軍ヲ鎭シ、紹ガ子弟ト日ニ宴飲ヲ共ニス、常ニ三伏ノ際ヲ以テ、晝夜酣飲シ、極醉以テ一時ノ暑ヲ避ク故ニ河朔ニ避暑ノ飲アリ」

【鵲】 説文に「—ハ太歳ノ在ル所ロヲ知ル」と、博物志に「鵲巣ハ、口ヲ開キテ太歳ニ背ク、此レ才智ニ非ズ、自然ニ任ズルナリ」と、格物論に「人鵲ノ噪グヲ聞クトキハ即チ喜アリ」と、淮南子に「烏鵲河ヲ塡メ橋ヲ成シテ以テ織女ヲ渡ス」と、魏の武帝短歌行に「月明星稀、烏鵲南飛、遶レ樹三匝、無枝可依」雜記に「陸賈曰乾鵲噪而行人至」

【賈山】 漢の潁川の人、書記を渉獵す、孝文の時、上書して治亂の道を言ふ、秦を借りて喩となし、名つけて至言といふ、

【嫁賚】 「ヨメイリノシタク」東軒筆錄に「爲吾女管辦——」

【賢キ人モ萬慮ニ一失アリ云云】 十訓抄第三に見ゆ史記淮陰侯傳に「廣武君曰、智者千慮、必有一失、愚者千慮、必有一得、故狂夫之言、聖人擇焉」とあるによれり、

【賈似道】 宋の理宗に仕へ、右丞相兼樞密使と爲る、度宗立つに及び、似道定策の功あるを以て、帝特に之を優禮し、師臣といひ名いはず、朝臣皆稱して周公と爲す、咸淳六年八月似道に詔して、十日一たび入朝し、入朝して拜せざらしむ、第を西湖の葛嶺に賜ふ、時に蒙古の兵、襄樊を圍むこと急なるも、似道日に葛嶺に坐し、樓臺を起し、淫樂を肆にす、邊事を言ふものあれば、輒ち貶斥す、恭宗の德祐元年、似道罪あり免せられ、尋て循州に放たれ、その家を籍せらる、似道配所に於て會稽縣ノ尉の鄭虎臣に殺さる、

【家什】 食器家具の類をすべいふ、史記の五帝紀の註に「什物謂常用者其數非一、故云什」

【下車】 初めて任に到るをいふ、後漢の劉寵會稽の守たり、召されて將作大匠となる、山陰縣に五六の老叟、人ごとに百錢を齎らし寵に送つて曰く、明府の——以來、狗夜吠へず、民吏を見ず、今聞く當に遷りて棄て去るべしと、故に自ら持ち來つて送るなりと、唐の李白南昌の宰たり、去思碑を立てゝ云ふ、未だ車を下らず、人之を懼る、既に車を下る、人之を悅ぶと、

【下座】 平民の入りて學ぶ學校、禮記に「養焦老于——」

【佳城】 人の墓地を稱す、書言故事に「漢滕公駕至東都門、馬悲鳴不レ進、命掘之、得石椁、有科斗書云、佳城鬱鬱、三千年見白日、吁嗟滕公居此室、公嘆曰、天乎吾死、其安此乎、後葬其地、滕公即夏侯嬰也」

【家釀】 自家にてかもしたる酒、世說に「劉惔曰、見何次道飲、使人欲傾——」

【嘉釀】 佳釀に同じ、よき酒なり、范成大の句に「瓦盆—灌愁城」

【牙城】 本丸なり、主將の居るところ、唐書に「率左右登——」封氏見聞錄に「古掌武備者、象猛獸以牙爪衛、故軍前旗曰牙旗」と見ゆ、牙城の牙またこの義なり、一解に、天子又は將軍のたつる旗は、その竿上に、象の牙のかざりありと、

【下種】 「タネヲオロス」致富奇書に「—核宜排、子宜撒」

【河潤】 人の恩澤を受けたるを、河潤を蒙るといふ、莊子の列禦寇篇に「河潤九里、澤及三族」とあり、人能く恩を以て、遠く人に及ぼすは、河水能く兩旁九里の地を潤ほすが如し、澤は恩澤なり、三族は父母妻の族をいふ、また德政のあまねく行はるゝをも九里河潤といふ、後漢書に「郭伋、弘農ノ太守ニ遷ル、光武之ヲ勞シテ曰ク、賢能太守、京師ヲ去ルコト遠カラズ、河潤九里、冀クハ京師モ竝ニ其ノ福ヲ蒙ラント」

【雅馴】 文品の正しく熟せるをいふ、史記五帝紀の贊に「學者多稱五帝、尚矣、然尚書獨載堯以來、而百家言黃帝、其文不雅馴、薦紳先生難言之」とあり、正義に「馴ハ訓ナリ、百家ノ言皆典雅ノ訓ニ非ザルヲ謂フ」と、亦一說とすべし、

【家書】 やどもとよりの手紙、明の袁凱の詩に「江水三千里、——十五行」(——萬金)を見よ、

【下春】 午後五時頃なり(高春)を見よ、

【下乘】 駑馬なり、陳琳の書に「園囿之凡鳥、外厩之——」

【家乘】 家の記錄をいふ、老學菴筆記に「黃魯直有日記、謂之——」

【雅頌】 雅は大小雅なり、周室、西都豐鎬に居る時の詩なり、國君は小雅を用ひ、天子は大雅を用ふ、頌は、詩譜の序に「頌之言容、天子之德、光被四表、格于上下、無不覆燾、無不持載、此之謂容、於是和樂興焉、頌聲乃作」朱子曰く「雅ハ正ナリ、正樂ノ歌ナリ、小雅ハ燕饗ノ樂ナリ、大雅ハ朝會ノ樂ナリ、頌ハ宗廟ノ樂歌ナリ」

【稼穡】 正韻に「之ヲ種ウルヲ稼トイヒ、之ヲ歛ムルヲ穡トイフ」書經の洪範に「土爰——」

【家書萬金ニ抵ッ】 事文類聚別集二十六卷に「王鎬久在沙場、一日偶得家書、曰、抵得萬金耳」杜甫の詩に「燧火連三月、家書抵萬金」(國破レテ)を見よ、

【霞】 河圖に「崑崙山ニ五色ノ水アリ、赤水ノ氣、上リ蒸シテ霞トナル」韋應物の句に「餘霞明遠川」

【風】 正韻に「風ハ以テ萬物ヲ動スナリ」と、河圖に「風ハ

天地ノ使ナリ」と、元命苞に「天地怒リテ風トナル」と、爾雅に「暴風ノ上ヨリ下ルヲ頹トイヒ、下ヨリ上ルヲ飈トイヒ、亦扶搖トモイフ、回風ヲ飄トイヒ、日出デテ而シテ風フクヲ暴トイヒ、陰リテ風吹クヲ曀トイヒ、風吹キテ土ヲ雨ラスヲ霾トイヒ、春晴レテ而シテ風フクヲ光風・和風トイフ（中略）物ヲ吹イテ聲アルヲ籟トイヒ、終日風フクヲ終風トイフ」風俗通に「猛風ヲ颶トイヒ、凉風ヲ飈トイフ云云」莊子に「大塊噫氣其名曰風」呂氏春秋に「風師曰飛廉」杜牧の句に「清風來ル故人ニ」

【賈生】（賈誼）を見よ、

【下世】死をいふ、管子に「吾君ーー」曹植の詩に「秦穆先ーー、三臣皆自殘」

【家聲】家の譽をいふ、司馬遷の書に「李陵既生降類其ーーニ」

【河清ヲ俟ツ】俟は待なり、黄河は水常に濁り、千歳に一たび清むと傳ふ、之を俟つは殆ど望みなきの謂なり、左傳に「周詩有之曰、俟河之清人壽幾何」

【苛政ハ虎ヨリモ猛シ】苛は煩なり、細なり、苛政は苛酷なる政なり、苛政の下に在りて、朝夕愁苦するは、寧ろ虎の害にあひて、速に死するに如かずとの意、禮記の檀弓に「小子識之苛政猛於虎也」と、孔子の語、

【風枝ヲ鳴サズ】（五風十雨）を見よ、

【風ヲ吸フ】神仙の粒食を絶つ者をいふ、莊子に「吸風飲露」

【風斯ニ下ニ在リ】書言故事に「高キニ升ルヲ言ヒテ、風斯在下トイフ」と、莊子に「風ノ積ム厚カラザレバ、則チ其ノ大翼ヲ負フヤ力ナシ、故ニ九萬里ナレバ、則チ風斯ニ下ニ在リ」の註に「鳥翼ハ惟ダ鵬翼ヲ極大ト爲ス、莊子言フ、水若シ之ヲ積ム厚カラザレバ、則チ大舟ヲ負フ能ハズ、風ノ大翼ヲ負フ能ハザルハ、水ノ厚ク積ム能ハザルガ如シ、故ニ九萬里ノ高キニ上レバ則チ風ノ上ニ在ルナリト」

【風蕭蕭トシテ易水寒シ】史記に「燕ノ太子丹、荆軻ヲ易水ノ上ニ送ル荆軻起チテ壽ヲ爲シ歌ヒテ曰ク、風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還」ト、高漸離筑ヲ擊チ之ヲ和シ壯聲ヲ爲セバ則チ士髮冠ヲ衝キ、哀聲ヲ爲セバ則チ士皆淚ヲ流ス」

【風ニ櫛リ雨ニ沐フ】櫛は髮を梳るなり、沐は髮を洗ふなり、風雨にさらされて勞苦を極むるをいふ、莊子天下篇に「昔者禹之湮洪水、決江河、而通四夷九州也、腓無胈、脛無毛、沐甚雨、櫛疾風、置萬國」と、唐書に

「文皇帝櫛風沐雨、冒鋒鏑、以定天下」成語考に「沐雨櫛風ハ、風塵ノ勞ヲイフ」と、（霈雨ニ沐浴シ）を參看せよ、

【風ニ順ヒテ呼ブ】勢に乘じて事をなせば、功を收むること容易にして、且速かなるの意、荀子勸學篇に「順風而呼、聲非加疾而聞者彰也」また史記游俠傳に「比如順風而呼、聲非加疾其勢激也」

【何涉】宋の南奔の人、晝夜刻苦して書を讀む、六經百家より山經地志醫卜の術に及ぶまで學ばざる所ろなし、一たび目を過ぐれば終身忘れず、進士に擧げられ合州に知たり、司封員外郎に遷る、涉長厚にして操行あり、未だ嘗て人の過惡を談ぜず、著すところ春秋本旨・廬江集七十卷あり、

【牙籤】象牙にて作りたる「フダ」をいふ、舊唐書の經籍志に「甲乙丙丁ノ四部、甲ノ經書ハ赤ーー、乙ノ史書ハ綠ーー、丙ノ子書ハ碧ーー、丁ノ集書ハ白ーー」とあり、書言故事に「人ノ書多キヲ稱シテーー萬軸トイフ」と、韓詩に「鄴侯家多書、架插三萬軸、一一懸ーー、新若手未觸」

【夏楚】鞭撻して訓ふるをいふ、禮記の學記に「ーーニ物、收其威也」と、夏は榎に同じ、山楸木なり、楚は荆なり、榎は形圓く、楚は形方なり、この二物を以て朴となし、以て子弟の怠忽する者を警めて、其の威儀を收斂せしむるなり、書經にも「朴作敎刑」

【下走】卓氏藻林に「自ラ謙シテ趨走ノ役トイフ」と、阮籍の書に「辟書始下、ーー爲首」

【何遜】字は仲言、東海郯の人、梁の法曹水部員外郎となる、揚州の廨宇に梅あり盛開す、遜常にその下に吟咏す、後ち洛陽に居り、梅を思ひて得ず、再び揚州に任ぜんことを請ふ、之に從ふ、既に至れば、適花盛んに發す、大に東閣を開きて文士を延き、嘯傲して日を終ふ、

【家尊】人の父をたふとびていふ、晉書列傳に「謝安問王獻之曰、君何如ーーニ」また自ら父を稱してもいふ、

【下第】落第また落榜に同じ、唐書に「李郃曰ク、劉蕡ハーーシ、我曹ハ登科ス、能ク厚顏ナルコト無カランヤ」

【夏臺】獄の名、周に國土、殷に羑里、夏に鈞臺、秦に囹圄と曰ふ、史記夏本紀に「桀召湯囚之ーーニ」

【家大人】自ら父を稱していふ（家君）を見よ、

【賈島】字は浪仙、唐の范陽の人なり、初め僧となり、無本と號せしが、その詩文を善くするを以て、韓愈の知る所ろとなり、還俗し進士に擧げられ長江の簿となり、榎は形圓く、楚は形方なり、この二物を以て朴となし、以て子弟の怠忽する者を警めて、其の威儀を收斂せしむるなり、書經にも「朴作敎刑」

る、その詩を作るに苦吟すること甚し、長江集十卷小集三卷あり、

【肩ヲ脅カス】 豎ゝ竦つるなり「コビヘツラフ」貌孟子に、「脅肩諂笑、病于夏畦」史記呉王濞傳に「脅肩累足、猶惧不見釋」

【堅キ氷ハ霜ヲ踏ムヨリ至ル】 神皇正統記に出づ（霜ヲ履ミ堅氷至ル）を見よ、

【旁ニ人ナキガ若シ】（旁若無人）横著にして、眼中人なしをいふ、世說に「王猛華山ニ隱居シテ佐世ノ念ヲ懷ク、桓溫關ニ入ル、猛縕袍ヲ被テ之ニ詣ル、面リ當世ノ事ヲ談ズ、蝨ヲ捫ツテ而シテ言フ、旁ニ人無キガ若シ、溫察シテ而シテ之ヲ異トス」

【加持】 眞言にて修する佛力護念を禱る呪法なり、眞言要記に「加諸佛大悲來加、行者持行者信心以感佛因」祕藏記に「加者諸佛護念、持者我自行」

【勝ヲ千里ノ外ニ決ス】（籌策ヲ帷幄）を見よ、

【賀知章】 字は季眞、唐の永興の人、祕書監となる、開元中侍郎に遷り集賢學士を兼ぬ、晩年に四明狂客と號す、天寶の初、乞ひて田里に歸り道士となる、詔して鏡湖剡川の一曲を賜ふ、

【下陳】 陳は列なり、猶ほ下列といふが如し、戰國策に「狗馬實外廐、美人充ーーー」晏子春秋に「願得充數乎ーーー」文選の注に「ーーーハ後列也」

【下塵ヲ承ケン】 後陣に居るの義、人趨れは塵起る、戰ふにも亦塵起る、下方に居て塵を承くるは、敢て對せざるをいふ、戰國策に「蔽甲鈍兵、願承下塵」

【割愛】 めでかはゆがる心をさきて去る義、徐堅の句に「ーレー遠和親」

【褐ヲ被テ玉ヲ懷ク】（被褐懷玉）褐は賤者の服なり、毛を織りて作る、褐を被るとは、外を飾らざるに喩へ、玉を懷くとは、內に德あるに喩ふ、即ち聖人は德、高けれども、世に知られんことを求めざるに喩ふ、老子に「我ヲ知ル者、希ナレバ、則チ我ナル者貴シ、是ヲ以テ聖人ハ褐ヲ被テ玉ヲ懷ク」とあり、

【轄ヲ投ズ】（投轄）客を抑留するの切なるをいふ、漢書に「陳遵大會スル每ニ、賓客堂ニ滿ツ、輒チ門ヲ閉ヂ、車轄ヲ取リ、井中ニ投ジ 急アリト雖モ去ルコトヲ得ズ」と、轄は轂を貫きたる軸の端に在る「クサビ」にて、車の解脫を制するもの、成語考に「投轄于井、漢陳遵留客之心誠」

【褐ヲ釋ク】（釋褐）褐は毛布、賤者の衣なり、粗服を釋き、官服を著くる義にて、仕宦の義とす、揚雄の解嘲に「或

【釋褐而傳】

【渴仰】 渴者の水を慕ふが如く、その人を仰ぎ慕ふをいふ、法華經壽量品に「心懷戀慕、渴仰於佛」

【葛裘】（裘葛）を見よ、

【割據】 土地を分ち取りて據り守るをいふ、漢書敍傳に「席卷三秦、ーーー河山」

【鶡冠子】 三卷、著者不詳、班固曰く「楚人深山ニ居リ、鶡（ヤマドリ）ヲ以テ冠トスル者ノ撰ムトコロ」と、その說頗る黃老刑名を雜ゆれども、大旨は道德に原本す、陸佃の註あり、佃は北宋の人、埤雅を著す、

【羯鼓】 樂器の名、文獻通考に「ーーハ龜茲・高昌・疎勒・天竺部ノ樂ナリ、狀漆桶ノ如ク、下承クルニ牙牀ヲ以テス、兩杖ヲ以テ之ヲ擊ツ」と、通典には「兩頭俱ニ擊ツ、羯中ヨリ出ヅルヲ以テーート號ス、亦之ヲ兩杖鼓トイフ」

【喝采】 稱美なり、西廂記の註に「喝采ハ北人ノ鄉語、羨稱ノ意」とあり、馬臻の詩に「新腔翻得梨園譜、喜入王孫ーーー聲」

【渴シテ井ヲ穿ツ】 盜をつかまへて、繩をなふと同じ、說苑に「譬之猶渴而穿井、臨難而鑄兵、雖疾從而不及也」また晏子春秋にも類語あり、

【瞎兒】 瞎子ともいふ、一目盲する兒をいふ、晉書に「符洪孫生無一目、洪曰、吾聞ーーー一淚信乎」

【合從連衡】 從は縱なり、縱を合する義、衡は橫なり、橫に連ぬる義、合從は、蘇秦六國を說き、同盟して秦に當るなり、連衡は、張儀六國を說きて、秦と連合せしむるなり、前者は六國の爲めにし後者は秦の爲めにす、史記の孟軻傳に「天下方務於ーーーーー以攻伐爲賢」

【渴スレドモ盜泉ノ水ヲ飲マズ】 如何なる困苦にあひても、不義はせずといふ喩、陸機の猛虎行に「渴不飲盜泉水、熱不息惡木陰」とあり、其の名の醜さを嫌ふに由る、說苑の說叢篇に「邑、勝母ト名ヅケテ曾子入ラズ、水盜泉ト名ヅケテ孔子飲マズ、其聲ヲ醜クンデナリ」とあり、母に勝つは不孝なり、故に入らず、

【喝道】 喝は聲をはげしくして叱るなり、ーーは「サキバラヒ」李義山の雜纂、殺風景の條に「松閒ーーー」

【葛藤】 みだれもつるゝをいふ、出曜經に「其有衆生墮愛網者、必敗正道、猶如葛藤纏樹樹枯」また轉用して、語言をいふとあり、范成大の詩に「三十年來共ーー、如今運社冷如氷」

【割烹】 肉を切りて烹るをいふ、孟子に「伊尹以ーーー要湯有諸」

【渇筆】「カスリガキ」升庵集に「唐ノ徐浩、張九齡ガ司徒ノ告身ヲ書スルニ——多シ、——ハ筆枯レテ墨ナキナリ、書家ニ在リテ難シトナス」

【勝ッ者ノ用フル所ロハ敗者ノ棋】 器は一なれども、用ふる者の巧拙に由りて利鈍の差を致すに喩ふ、顧璨の文に「勝者所用敗者之棋也、興國所用、亡國之臣也」

【桂ヲ折ル】 太平記卷十二に見ゆ、試驗に及第するをいふ、晉書列傳に「郤詵字廣基、舉賢良、對策上第也、武帝問曰、卿自以爲如何、詵曰、猶桂林一枝崑山片玉、帝笑」とあるに本づく、

【糧ヲ捨テ舟ヲ沈ムル謀】 太平記卷九に見ゆ、史記項羽本紀に「項羽遣當陽君蒲將軍、將卒二萬渡河救鉅鹿、戰少利、陳餘復請兵、項羽乃悉引兵渡河、皆沈船破釜甑燒廬舍、持三日糧以示士卒必死、無一還心、至是至則圍王離、與秦軍遇九戰、絶其甬道、大破之、殺蘇角」とあるをいふ、

【瑕殄セズ】 瑕疵ありとして、棄て絶たざるをいふ、書經に「不汝瑕殄」

【蛾トイフ蟲】 太平記卷二に見ゆ、韻會に「蛾善拂燈火、夜飛謂之飛蛾、一名慕光」また黃山谷の詩に「飄如赴燭蛾」

【家僮】 家の召使の者をすべて稱す、史記の貨殖傳に「卓王孫——八百人」また漢書衞靑傳に「與主——衞媼通」の注に「僮ハ婢女ノ總稱ナリ」

【河東ノ獅吼】 夫の妻を畏るゝをそしる語、成語考に「河東ノ獅吼ハ男子ノ妻ヲ畏ルゝヲ譏ルナリ」と、書言故事に「東坡黃岡ニ謫居シテ、陳季常ト遊ビ、自ラ以テ參禪ノ學ニ飽ク、季常ノ妻柳氏性悍ナリ、客至レバ忽チ詈罵ノ聲ヲ聞ク、坡詩ヲ作リテ之ニ戲レテ曰ク、誰似龍邱居士賢、談空說有夜不眠、忽聞河東獅子吼、拄杖落手心忙然ト」

【家督】 長子をいふ、家事を督する義なり、史記の越世家に「家有長子、曰家督」わが國にて家督相續といふは、これによりて轉訛せしならん、

【嘉遯】 隱遁の義に合ふものなり、易經に「——貞吉、以正志也」

【鼎】 器用百歸に「ーハ五味ヲ調スルノ器ナリ、三足兩耳、耳ハ之ヲ鉉トイフ、銅鐵モテ之ヲ爲ル、ソノ種類ニハ、鑊アリ、鼒アリ、鬲アリ、鬵アリ、鼐ハ鼎ノ絶ダ大ナルモノ、鑊ハ大口、鬲ハ、款足ノモノ、鬵ハ上ヲ大ニシテ下ヲ小ニス云云」漢の武帝の時、汾陰に寶鼎を得て元を元鼎と改む、圓機活法に「黃帝首山ノ銅ヲ采リ、鼎ヲ鑄テ成ル、上ニ龍アリ、胡髯ヲ垂レ、黃帝ヲ迎ヘテ上升ス、因ッテソノ處ヲ名ツケテ鼎湖トイフ」と、韓愈の句に「龍紋萬斛鼎、筆力可獨扛」

【鼎足ヲ折リ公ノ餗ヲ覆ス】 餗は鼎の「ナカミ」なり、鼎足を折るときは、公上に供すべき「ナカミ」を覆す、以て三公の位に、小人を用ふるときは、其の任に堪へずして、國家を覆すに喩ふ、易の鼎卦に「鼎折足覆公餗」とあり、また漢書鮑宣傳に「三公鼎足承君、一足不任、則覆亂美實」と、義同じ、

【鼎ヲ扛グ】 (扛鼎)を見よ

【鼎ヲ定ム】 帝都を定むる義(鼎ヲ定ム)を見よ、

【鼎ノ輕重ヲ問フ】 (問鼎之輕重)鼎は、天子の寶物なり、大小輕重を問ふべき者にあらず、然るに之を問ふは、帝位を奪はんと欲するの意あるなり、左傳の宣三年に「楚子陸渾ノ戎ヲ伐ッテ遂ニ洛ニ至リ、兵ヲ周ノ疆ニ觀ス、定王、王孫滿ヲシテ楚子ヲ勞ハシム、楚子鼎ノ大小輕重ヲ問フ、對ヘテ曰ク、德ニアリ、鼎ニアラズ(中畧)德ノ休明ナレバ、小ト雖モ重シ、其ノ姦回昏亂ナレバ、大ト雖モ輕シ、天ノ明德ニ祚スル、底止スル所ロアリ、成王鼎ヲ郟鄏ニ定メテ、世ヲトスル三十、年ヲトスル七百、天ノ命ズル所ロナリ、周德衰ヘタリト雖モ、天命未ダ改メズ、鼎ノ輕重未ダ問フベカラズト」

【鼎ノ中ナル一切ノ肉】 一端を見て全體を推知し得るに喻ふ(一臠ノ肉ヲ)を見よ、

【蟹】 抱朴子に「山中無鵰公子者——也」と、蟹譜に「俗出師下碧之際、忽見——、則呼爲橫行介士、以櫂安衆」と、蓋しその堅を披、鋭を執るの象に取るなり、また蟹兵の語ありといふ、晉の畢卓人に謂つて曰く「左手ニ蟹螯ヲ持シ、右手ニ酒盃ヲ持シ、酒船ノ中ニ拍浮セバ、便チ一生ヲ樂マシムルニ足ルト」

【彼ノ黎離離】 黎は「キビ」苗は蘆に似て高さ丈餘、穗は墨色にして實は圓し、離離は垂るゝ貌、詩經の王風の黎離篇の句、周すでに東遷して後、大夫行役して、故都の宗廟宮室を過ぐれば、盡く墟となりて禾黎の離離たるを見、徬徨して去ること能はざる感を詠ぜしなり、

【夫ノ人ノ子ヲ賊フ】 論語の先進に「子路使子羔爲費宰、子曰、賊夫人之子」とあり、賊は害なり、夫人之子とは、子羔を指す、費は數ゝ叛く所ろの强邑なり、子羔の性質美なりと雖も、其の學問未だ習熟せざる故、俄に彼の强邑の民を治めしむれば、必ず乖僻して宜き